

たとえばこんな緑谷出久

知ったか豆腐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕のヒーローアカデミアの主人公、緑谷出久は“無個性”だ。無個性ってことは、好き勝手に妄想してもいいよね？

そんな考えから作った短編集です。

2017／8／17

短編から連載に変更しました。

2018／1／9

『いづく1／2』独立化

目次

いづくヒロイン

いづくヒロイン? | 1

いづくヒロイン | その2 | 5

いづくヒロイン | その3 | 9

いづくヒロイン | その4 | 14

いづくヒロイン | その5 | 18

いづくヒロイン | その6 | 22

いづく魔性

いづくヒロイン | 亜種 魔■??女 | 28

いづく魔性天女 | その2 | 32

いづく魔性天女 | その3 | 36

いづくアンラッキー

いづくアンラッキー | 45

いづくアンラッキー | その2 | 51

いづくアンラッキー | その3 (前編) | 58

いづくアンラッキー | その3 (後編) | 64

いづくアンラッキー | その4 (前編) | 68

いづくアンラッキー | その4 (後編) | 74

いづくバトラー

いづくバトラー (前編) | 78

いづくバトラー (後編) | 84

いづくバトラー | その2 (前編) | 90

いづくバトラー | その2 (後編) | 98

いづくバトラー | extra | 104

いづくメイド

バトラー亜種 いづくメイド

いづくメイド その2

いづくメイド その3

いづくメイド その4

いづくメイド その5

たとえばこんな緑谷兄妹(サーヴァンツ)

いづくオンライン

いづくオンライン

いづくオンライン(小ネタ)

いづくオンライン その2(コラボ企画)

いづくオンライン その3

いづくオンライン その4

いづくオンライン 小ネタ その2(もしも主任がデスゲームを始

めたら)

いづくオンライン その5

いづくオンライン その6

いづくオンライン 小ネタその3

いづくオンライン 小ネタその4

いづくオンライン 小ネタその5

いづくオンライン その7前編

いづくオンライン その7後編

いづくオンライン その8

いづく恋愛追跡

いづく恋・愛・追・跡

248

241

232

223

218

207

202

195

192

189

180

174

165

161

156

145

134

130

124

115

108

いづく恋・愛・追・跡 その2	252
いづく功夫	
いづく功夫H	260
いづく功夫H その2 (小ネタ)	269
いづく功夫H その3 (USJ編)	275
いづくギミー	
いづくギミー	285
いづくギミー その2	292
その他	
いづくキャット	301
いづくラツキーボーイ	305
いづくラツキー&アンラツキー	309
いづくラビット	313
いづくDハート	321
たとえばこんな解説集	326
新連載予告 いづくK	336
いづくブレス	339
いづくマジカル	346
いづく戦争	354
いづく戦争 結果発表	359
いづくDM (いづく功夫亜種)	368
最新話	
いづくH/C	377

いづくヒロイン
いづくヒロイン？

人は生まれながらに平等ではない。

　　齡4歳にして緑谷出久が知った現実だ。

　　世界総人口の約8割が何らかの特異体質となった超人社会において、それらの特殊能力は「個性」と呼ばれ、当たり前のもものとして存在している。

　　個性が前提となった社会では、生まれ持った個性によって人生の成功が約束されている場合も少なくない。

　　緑谷出久もその例にもれず、大変有益な個性に恵まれた。

　　いや、恵まれ過ぎたかも……

「緑谷くん、お昼一緒に食べよー!」

「あ、私も！ お弁当作ってきたから味見してほしいな」

「アタシはお菓子作って来たぜ！ デザートにどう？」

　　女子に囲まれ、次々とお昼のお誘いを受ける出久。

「あ、う、うん。ありがとうみんな」

　　女子たちの勢いに押されてか、オドオドした様子で返事をする。

　　頬を少し赤く染めて小さく答える姿に小動物てきな可愛さを感じて、女子たちから黄色い声があがる。

　　こんな風景は昼ごろになると毎日見られる折寺中学校の名物的な何かである。

　　女子たちに割り込むように男子も出久に声をかける。

「緑谷あ、今度の土曜日空いてるか？ 遊びに行こうぜー、海とか!」

「海！ いいねえ。緑谷が行くなら俺もいくぜ!」

「オラもオラも！ 乗るしかない、このビックウエーブに」

「海だけにつてか？ やかましいわ! あ、ワイもいくで?」

　　男子たちからも熱烈な遊びの誘いがかけられる。

「えっと、たしか予定はなかったと思うけど……」

「おっしや！ じゃあ決まりだな」

遊びに行く予定が決まり、男子たちから歓声上がる。

こんな感じで次々と遊びに誘われるため、出久のスケジュールに何も無い日は存在しないと言っている。

ちなみに、出久に話しかけてくるのはクラスメイトだけでなく、同学年の生徒に先輩と幅広い層から声をかけられる。

まさに学校の人気者。

誰からももてはやされて手厚い扱いをされる出久だが、その内心はというと――

『うう、みんなの目が怖い。弁当やお菓子里に変なものは入ってないといいんだけど。』

前はチョコレートの中に血が入ってたし、飲み物の中に睡眠剤とかどっから手に入れたのか媚薬まがいなものとかあったもんなあ……

ギリギリほかの人が気が付いて止めてくれたけど、あれはホラーだよ!!』

『海かあ……不安だ。夏服になってちよつと腕とか露出が増えただけなのにわいせつ被害が今月でもう10件。まして水着なんかになつたら……』

僕、襲われないよね？ 痴漢どころの騒ぎじゃなくなる気がするよ

!!』

戦々恐々としていた。

この不安は正しい。なぜって、周りの声をよく聞いてみれば、

「イズきゅん、食べてくれるかな？ むしろアタシがイズきゅんを食べたい……」

「イズクたんの水着……ハア、ハア」

「ちよつと困ってる顔も可愛くて、イイ……」

危ない発言が聞こえてくる。

これもそれも、出久の個性が原因である。

緑谷出久。個性：〃人を惹きつける個性〃

母親の〃物を引きつける個性〃が微妙に変異して遺伝した結果、発現した個性。

男女を問わず、些細な動作やしぐさすら人を惹きつける魔性の個性である。

吐息一つに心がざわつき、視線を向けられれば動悸が早くなる。指の動き一つに心が奪われ、座る姿すら魅力に映る。

立っているだけでも人を魅了するこの個性は、厄介なことにオンオフの利かないパッシブな個性だ。

恐ろしいことに出久の成長と共に強力になって来ており、特に二次性徴がみられる中学からはそれが加速。

こうした欲望全開、下心満載の状況などしよつちゆうだったり。そんなときにいつも救けてくれるヒーローがいるのもお約束。

「うっせーぞモブども！ ギャアギャアとやかましいわ!!」

「げ、爆豪！」

「いつもいつも邪魔しやがって……」

「このセコム野郎！」

出久への接近を邪魔する爆豪に敵意が向けられるが、その程度で怯むような爆豪ではなく。

「黙れや、クソモブが！」

「っーか、おいこのバカデク！ てめえがちゃんとはつきり答えねえからこんなバカ騒ぎになるんだろうが。」

昼飯はインコおばさんに作ってきてもらってたんだから断れ！ 食わなかった分どうするつもりだったんだ、ああん？

それに、土曜日は予定無くても日曜日は朝早くから出かける予定だろうが!! 海なんか前日に行って体力持つわけねえだろ！ そこ考えて返事しろや!!」

「あ、うん。ありがとう、かつちゃん。」

「そういうわけだからみんなごめんね」

爆豪の怒涛の叱責により、事態は沈静化。

出久に平穏な昼休みが一時的に戻って来た。

救けてくれた爆豪にお礼を述べる出久。

「いつもありがとう、かつちゃん」

「ケツ、なーに礼なんか言っちゃがんだ気持ちワリい。近寄ってくん

いづくヒロイン その2

放課後。

出久に呼び出される爆豪。

「何の用だよ、クソナード」

「かつちゃん、あのね……」

思い詰めたように言いよどむ出久だったが、少し迷ったあとに意を決して思いを告げる。

「僕、僕はヒーローになりたい！」

「いや、無理だろ」

爆豪、即答。

辛辣な返事に出久が抗議の声を上げる。

「ひ、酷いよ、かつちゃん。どうしてそんなことを言うの？」

「うるせえ！ いちいち涙目になってんじゃねえ！ んなもん考えなくともわかるわ！」

出久の個性ならば、泣きそうな顔になっただけでもうたいの相手は陥落するところを、さすがは幼なじみ。

容赦なくダメ出しを開始する。

「まず、てめえの個性でどうやってヒーローとして活躍するつもりだオイ！」

「えっと、ヴィランを誘惑して……とか」

「ヴィラン誘惑してどうするつもりだこのバカ！」

幼なじみのとんちんかんな答えに頭痛がしてくる爆豪。

ヴィラン誘惑するヒーローって、いったいなんだ？ どんなヒーローなんだ？

「だいたい、てめえヒーローって役柄じゃねえだろうが!!」

「そ、そんなことないよ！ ヒーローできるよ！」

「被救助回数全国一位が何言ってやがる！」

緑谷出久、14歳。

中学に入ってからヒーローに救けられた回数は軽く50回以上。

つまりここ2年にも満たない期間で、それだけ多くの事件に巻き込

まれているのだ。

約一週間に一回のペースで事件に巻き込まれている計算になる。それだけ多くのヴィランを惹きつけてきているのだ。まあ、同時にヒーローも惹きつけているからか、救出もあつという間なのだが。

そういうわけで、毎回ヒーローに人質から救助される出久についたあだ名は『ザ・ヒロイン』

いわゆる、囚われのお姫様ということである。

「だからてめえじゃ無理だって言っただろうが!!」

「それでも、ヒーローになりたいんだよ!」

頑として譲らない出久に爆豪がついにキレる。

「そんなにヒーローになりたいなら、せめてコントロールくらいできるようなれや!」

今の状態でヒーロー目指そうなんざ、100年早いんだよ」

そう吐き捨てて立ち去る爆豪。

せめてヒーローを目指すなら無差別に撒き散らしている個性の効果をコントロールできるようなれ。

言い方は荒っぽいけど、彼なりの精一杯のアドバイスだ。

「こーやって、見てもらえないと最終的には助けてしまうところが彼らしい。」

皆からツンデレいわれるのも仕方ないね。

出久から爆豪が相談を受けたわずか3週間後。

「どうしてこーなった、クソが!」

爆豪勝己は頭を抱えていた。

「緑谷、今度の週末に遊びに行かないか?」

「ねえねえ、緑谷ちゃん。美味しいケーキのお店見つけたんだ」

「いづつきゅん、ハアハア」

いつものごとく人に囲まれている出久。

だが、以前と違うのは……

「うわあ、ありがとう。誘ってくれて嬉しいな。でも、その日は別の用事があるから……」

「み、緑谷の都合のよい日にするよ！」

喜びを満面の笑みで表したあとに、悲しそうな表情を作ってみれば、相手はコロリと前言撤回。

「本当!? でも、知らないお店は不安だなあ。先に様子を知っている人がいたらいいんだけど……」

「調べて来る。今日、すぐに調べて来るから!!」

ギョツと手を握り、少し俯いた後にチラリと流し目を送る。

それだけで相手の誘いをうまくかわした上に、後からお店の情報をもらえる流れになった。

「美浜さんの目、なんかちよつと怖い……」

「いずくんは何してんじゃコラー！」

「アウト、圧倒的にアウトオ!!」

「待って、出来心だったんですう！」

言葉一つでセコムが出動。

不埒者を排除する。

惹きつけられてきた人をコントロールする術を身につけた出久。

頼み事るときに上目遣い、首を傾げて返事をする。

さりげない仕草で手を握り、流し目を送って微笑む。

不自然にならないよう体をそつと寄せてボディタッチ……

いわゆる「あざとい」仕草を身につけたわけである。

普通の人がやったらウザいどころではないが、出久の個性と合わせると途端に人たらしの道具に早変わりだ。

これによってセコムかつちゃんの出勤回数は大幅に減ったのだが、これはこれで問題だと思う。

最初はオタサーの姫くらいの感じだったのに、今じゃ下手すると出久を頂点としたピラミッドが出来上がっているように見える。

なんとというか、カルト的というか。

自分は個性をコントロールしろと言ったのであって、誰が周囲の間をコントロールしろと言ったのだ!?

しかも、その効果が洗脳じみっていてなんか怖いし。

もう、幼なじみの進んでいる方向性が分からない。

「これでヒーローに近づいたよ。かつちゃん！」

「てめえの頭はどうなってやがる!! どうしてこうなった!？」

爆豪の苦労は終わらない。

なお、出久の方向性の修正はなんとかしたかつちゃんであった。

『誰でも分かる心理学入門』

『ザ・人心掌握術』

『気になるあの子を堕とす108のテクニック』

『あざとさ100%』

その他、少女マンガなど

・
・
・

「参考文献がおかしいだろオが!!」

いづくヒロイン その3

トンチンカンな方向に努力を始めた幼馴染。

爆豪はなんとかそれを修正することに成功した。

出久が個性のコントロールができるようになったのだ。

ここまでたどり着くのに並々ならぬ爆豪の努力……

出久にわざとダサイ服を着せて魅力を下げさせようとすれば、なぜかその服が学校で流行りそうになり慌てて火消しに走る。

この代償は出久自身に払わせた。

女子どもに「ファツションセンスを磨いてやれ」と生贄に送り出したのだ。

哀れ出久は飢えた獣のごとき女子たちの着せ替え人形に……

その結果は、ファツションセンスが上がり、さらに魅力が上がるという逆効果を生み出したが。

自己暗示を使って個性のコントロールを試みさせてみれば、自分ではなく他人への催眠術を習得しているという結末に。

これには爆豪もキレかけた。どうしてそうなる!?! と。

むしろさらに周囲の人間のコントロールに長けるようになってしまったとは誰が予想できよう。

腹立たしいことに自分一人では手に負えないと、同級生で比較的まともな人間を選んで協力してもらおうとした。

結果、協力者の地位を巡って、学校内が半ば暴動騒ぎに。

突発的に起こったバトルロワイアル。日ごろの恨みとばかりに爆豪は集中砲火を浴びてピンチになったり。

かつちゃんは何をしたっていうんだ……

この事件は抹消ヒーローと18禁ヒーローが出勤して鎮圧。軽傷多数も重傷・死亡のない事件として終わる。

災い転じて福となしたのか、原因となった出久の個性のコントロールのために専門家の指導を受けることができるようになったのだ。

この際、事情を語るときの爆豪の顔は救いを求める顔をしていたとかいないとか。

まあ、紆余曲折あつて個性のコントロールができるようになった出久。

完全なオンオフは出来ないが、長時間一緒にいない限り影響はないくらいに効果を弱めることができるようになった。

それでも学校での扱いがそんなに変わらなかったのは、もはや本人の性質だろう。

そんなこんなで、問題が解決したと思つたらまた出久から爆豪に相談が。

「かつちゃん。個性はコントロールできるようになったけど、ヒーローを目指すにはようやくスタート地点にたつたばかりだと思うんだ」

「そオだろうなア」

爆豪、長年の経験からピンとくる。

あ、これはまた厄介なことを言いだすぞ、と。

「だから、僕、これからオールマイトみたいなヒーローになれるよう頑張るよ！」

「いや、無理だろ」

爆豪、即答。二度目の即答オ！

出久の宣言を一言で切り捨てる。

「どうして!?! なんでだよ、かつちゃん！」

「ああ！ うぜえ！ いちいち縫りついてくるな！ クソあざといわボケが！」

さんざんつばら、矯正したのに気がつけばあざとい仕草を使う出久。

もはや体に染みついてしまっているのか……

この幼馴染、そういう方面に関しては異常な学習能力を發揮するの
で困る。

「てめえがどうやってオールマイトみたいに敵を、どんなピンチでも絶対勝てるようなヒーローになれるって言うんだア!? あアん!!」

「それはそうだけドツ！ そうじゃなくて、僕が思うオールマイトは、恐れ知らずの笑顔でどんな困っている人も助けちゃうヒーローだか

ら！」

「んなこたあ、どうでもいいだろうが!!」

お互いのオールマイト観は置いておくとして、現実問題として出久がオールマイトみたいになれるかと問われれば首を傾げざるを得ない。

相変わらず、個性を活用したヒーローというのが思い浮かばないのである。

「てめえの個性でどうやって人を救けるって？ 言ってみろよ！」

「たとえば……災害時に混乱してる人を誘導したりとか！」

「バカ言ってるじゃねえ！ 前の学校での暴動の再現になるわ!!」

「大丈夫！ 前の経験から対処法は考えてあるよ、かつちゃん」

自信ありげな顔で告げる出久。

悪い予感がするなー。

「ホオ……どうやるんだ？」

「個性で魅了しつつ催眠術で誘導すれば一発だよ！」

「さらっと、何言ってるやがる!?!」

こともなげに恐ろしいことを口にする出久。

それって、もはや洗脳とか支配とかのレベルのはなしではなからうか？

しかも、「この間もそうすればよかったね」などと、ほざく超ド級のバカにもうめまいがしそうだ。

つまり、前回の時点でそういうことができるスキルは身に付けていたわけだ。

駄目だ、この幼馴染。早く何とかしないと……。

その後も口を開くたびに残念な方向へとアクセル全開で突っ走ろうとする出久を、爆豪が華麗なハンドルさばきと強引なブレーキでまともな道へ引き戻すことが続いた。

いい加減、爆豪も限界である。最終的にはハンドルを手放した。

「あー！ うるせえ!! そんなにヒーロー目指したいなら必殺技の一つでも作ってみろや！」

そう言い捨てて立ち去る爆豪。

なんだか脳内でガードレールに突っ込み爆発炎上する自動車の姿がよぎったが、気にしないことにした。

もう、かつちゃんの胃はボドボドだ！

後日、爆豪はこの時放り出したことを後悔することとなる。

ある日のこと——

「うわあ！ ヴイランがでたぞー!!」

「気をつけろ！ 凶悪な銀行強盗だ!!」

「ヒーローはまだなのか!」

阿鼻叫喚と言った様子の街中で逃走を計るヴィラン。

ヒーローが来た時のために、人質を取るべく一般人に狙いを定める。

たくさん人がいる中でなぜか目についた人物。緑谷出久であった。

「うおおお！ 新鮮な人質イ！ 俺の盾になれ!」

出久めがけて突っ込んでくる大柄の男。

たいして出久は逃げることなく、逆に個性を使って対抗する。

Cupid Charmingleve!
射抜く恋神の魅了の眼!

「うわあああ、なんだ、この胸の高鳴りはああ!」

キラツ、と擬音が付きそうなウインクをヴィランに投げかけると、

ヴィランは胸を押さえ苦しんだ後失神。

理由は興奮のし過ぎ。

出久が己の個性を最大限引き出して放つ必殺技である。

決め台詞は「僕の瞳に恋してる?」だとかなんとか。

視線一つで相手を気絶させるとは、なんとも恐ろしい個性である。

これで男女共に効果があるんだぜ?

後日、この事件のあらましを知った爆豪は、また頭を抱えるのだった。

「どおして……どおしてそオなった、オイ!!」

頑張れ、爆豪。高校受験はもうすぐだ。

いづくヒロイン その4

—— 雄英高校 入試当日

「おい、あれ、緑谷出久じゃね?」

「本当だ。被救助回数全国一位の!」

「ザ・ヒロイン!? 救助される側がなんで?」

試験会場へと向かう生徒たちが出久の姿を見て驚く。

今日は雄英ヒーロー科の入試日。

つまりこの日に試験を受けるということはヒーローを目指すということだ。

ぶっちゃけ、ヒーローに救けられているイメージしかない出久がヒーローになれるとは周囲の人間は誰も思っていなかったのである。

特に幼馴染のこの男は会場に来ていとすら思っていなかった。

「なんでこの場所におるんじゃ、おまえは!」

「え? なんでって、試験を受けに来ただけ?」

コテン、と、首を傾げて爆豪に答える出久。

くそう、あざとい!

すでにその姿をみていた受験者の何名かが犠牲になっていたりするのだが、耐性のついていている爆豪には通用しなかった。

「俺ア、言つたよなア! おまえの個性じゃロボ相手には向かねえから試験は諦めろって!」

「だ、大丈夫だよ、かつちゃん。個性以外にも鍛えてるから!」

「はあ!? 鍛えた!? ムリだろ、その体じゃ」

「ひ、ひどいよかつちゃん。どうしてそんなこと言うんだ」

ひどいって言われてもなア……。

出久の身体を見てみれば、正直細い。相変わらず性別不明のこの体格。

これで鍛えたって言われても正直困る。困るっていうか、普通は無理だろ。

「だいたい、かつちゃん。個性だけでヒーローが務まるわけじゃないんだよ! とあるヒーローの言葉なんだけど、『一芸だけじゃヒー

ローは務まらない』って」

「ハア!? 知らねーよ! どの三流ヒーローのセリフだ、オイ!」
「い、いや、たしかにマイナーであり知られていないけどちゃんと実力のあるヒーローの言葉だよ」

「うっせえ! そんなマニアックなヒーローの言葉なんか聞いてられっかボケが!」

「かつちゃん、あんまりそういうことは……って、置いてかないで!!」
もう関わってられないと先を進む爆豪。

でもね、かつちゃん。そのヒーローって、雄英の先生なんだよ?

そのころに職員室でくしゃみをする合理主義者の先生の姿が!!

「つたく、誰だ? 悪口言っつてやがるのは」

|||||||

「今日は俺のライブにようこそー!!! エヴィバデイセイハイ!!!」

「Yokosoー!」

「サンキュー、そこの緑髪のリスナー!」

それじゃあ、実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ。アーユーレディ!」

「YEAHHH!」

「ホント、サンキューな。緑の髪のリスナーくん!!」

プレゼントマイクの掛け声に唯一応える出久に周りの目が向けられる。

クスクスと笑い声も聞こえてきて隣にいる爆豪は居心地悪いことこの上ない。

しかし、当の本人は飄々としているのだから解せない。

「おい、てめえ何考えてやがる!」

「え? だって、せっかくプレゼント・マイクが直接声かけてくれたんだから応えないのはもつたいたいじゃないじゃん」

「てめ、こんなときに何考えてんだ!」

ふざけた返事をする出久に爆豪の目じりが吊り上りそうになる。

それを見て出久はすぐに弁明を始めた。

「ま、まあ、それは冗談として、僕の個性のためだよ」

「個性のため？」

「う、うん。返事をしたらみんなの注目を集めるでしょ？ 僕の個性は僕のことを認識することが大事だからね。この場を借りてみんなの目を僕に向けさせたんだよ」

「そ、そオカ」

ニコニコと語る出久に若干恐怖を感じる爆豪。

こいつ、全部計算ずくかよ!?

優しそうな顔をしておきながらこいつ腹黒いんじゃないだろうか？

まあ、どうあがこうとこいつの個性じゃ試験突破は無理だろう。

そう言い聞かせて試験に臨む爆豪だった。

|||||

「あ、かつちゃん！ やったよ！ 合格だ!!」

「な、なにいいいい!？」

三月のある日、呼び出されみれば出久の合格を伝えられて驚愕する爆豪。

思わず掴みかかって怒鳴る。

「どんな汚え手を使やあてめえが受かるんだ、あ!!？」

「どんなって、こう、かな？」

「は?..」

ガシツと腕をつかまれたかと思えば気がつけば天地が逆さまに。

続けて背中に衝撃。

投げられた！ そう認識するまで何をされたのか全く分からなかったのだ！

「てめえ、いったい何を!？」

「前に個性のコントロールでお世話になったヒーローにアドバイスと
いうか、格闘技を教えてください人を紹介してもらったんだ」

直接教えるのは他の受験者のひいきになるからと、とある18禁ヒーローと抹消ヒーローからの口添えで格闘技を身に着けていたのだ。

青春大好きな先生は直接教えられなかったのを非常に残念がっていたが。

「格闘技だと、いったいどんな格闘技だ!」

「えっと、相手の力を利用する柔術だよ。大分変った柔術みたいだけど」

師匠曰く、『我が流派は技十にして力は要らず』とのこと。

通常の柔術が投げる時には技と力でいえばどちらかと言えば、力のほうが重要と言えはその異様さがよく分かるというものだろう。

「まだまだ未熟だから技と力が8：2くらいになっちゃってるんだけどね」

「じゅ、十分すぎるわ! アホが!」

これでまだ未熟とか怖すぎる。

出久が言うには、試験の時のロボットは動きが読めやすすぎて簡単だったとか。

出久の元来持つ分析力と学習して身に着けた相手の心理を読む力。それを活用する術さえ身に付ければそれなりに戦えるのであった。

ちなみに、お邪魔ギミックが現れた際には個性を活用して避難誘導。レスキューポイントも稼いでいたりする。

もうホント、この幼馴染はどこに向かっているのか!!

「あ、他に力がなくても相手を倒せる関節技とかも教えてもらってるよ!!」

「ああもう! どおにでもなれ!! バカ野郎!!」

ガンバレ、爆豪くん。

いづくヒロイン その5

雄英高校に入学した出久と爆豪。

初日の個性把握テストによる除籍の危機を乗り越えて、オールマイトによる授業を受けることとなった。

昨日の把握テストを思い出す爆豪。

ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈。

どれも出久の個性を活かせない競技であるため、注目していたのだが……

50m走、持久走

「えー、手と足が一緒に出てるのに早い!？」

「うん、ナンバ走りっていう、昔の飛脚さんとか古武術で使われてた走り方なんだよ。体のひねりがないから力のロスが少ないんだ」

「む、そんな走り方があるのか。できればご教授願えないかな」

右手と右脚、左手と左脚を同時に出すという緊張しすぎた人みたいな動きで、素早く走る出久に周囲が驚く。

古武術由来の動きらしいが、なんだそれは!？」

握力測定

緑谷出久、握力80kg!

「わー、緑谷って、細腕なのに力あるんだね!」

「うん、鍛えてるから。瞬発力と持久力を兼ね備えた筋肉になるようにちよつと特別な鍛え方をね」

さらつと、肉体改造されていやがる!？」

測定終了後

「ふう、汗かいたなあ」

「うひよお! なんだ、汗をぬぐう姿が色っペー!!」

「あ、ごめん。って、ちよつと興奮しないで!?! えい!」

恋神射抜く魅了の眼!

「うつひゃあ！ 心臓が跳ね上がるう!？」

ブドウ頭のクラスメイトが個性にかかってしまい、飛びかかってきたのを迎撃した出久。

仕方ないとはいえ個性を人に向けて使ったことで相澤先生から注意がされる。

「おい、緑谷。個性のコントロールしっかりしておけ。いつまでもできません」じゃ聞かねえぞ」

「はい、ごめんなさい。許してください、ね？」

キラツ、と擬音が付きそうなウインク。

対する相澤先生は赤く目を光らせて睨む。

「……今度やったら除籍にするぞ。緑谷ア！」

「こんの、バカデク！ みだりに個性使うなって言ってるんだろオがツ!! すみません。バカがバカやってすみません！」

「よく、言い聞かせておいてくれ、爆豪」

悪戯のように個性を使う幼馴染の頭を無理やり下げる爆豪。

なんで俺が謝ってんだ。

など、今更過ぎて口にする気にもならない。もう、目を離すとすぐこれだよ。

『『『保護者だ』』』

クラスメイトの爆豪への印象はここで決定したらしい。

|||||

割と素の身体能力だけで乗り越えたのだったが、割と苦労している気がしないでもない爆豪。

そして今日は、オールマイトのヒーロー基礎学。

戦闘訓練とか不安しかないのだ。

「頼むから何もやらかすなよ、何も！」

祈るような言葉を口にする爆豪のところへコスチュームに着替えた出久が現れた。

「うわあ、デクちゃんくんのコスチュームって巫女服？」

「えーと、どちらかというところと古武術で使う胴着かな。けっこう変わった

たデザインだけど……麗日さんは、なんかすごいね」

「要望ちゃんと書けばよかったよ……パツパツスーツになった」

麗日と会話を交わす出久の恰好は赤い袴に巫女服をイメージした胴着だ。

生地裏にケプラー素材の防刃処理をしており、インナーも防弾加工済みのボディスーツを着用。

インナーを着用する理由は防御力を上げるのに加えて、素肌のままだと周囲への影響が多すぎるためだ。ただし、いざとなれば惹きつける力を上げるために露出を増やすべく腕は覆われていない。

「ヒーロー科最高!」

「なんだ、てめえは。俺に言うな!!」

二人の会話を聞いていた峰田がなぜかこちらに寄ってくるが、さつさと追い払う。

同類扱いされたくないわけで。

まだ出久と麗日の会話は続く。

「そっか、他のみんなはサポート企業が作ってくれたんだね。僕は師匠からもらったんだ」

「師匠って、武術の?」

「うん。あ、お礼まだ言っていないや。今度甘いお菓子でも持っていこう。師匠は甘いものに目がないから」

出久の師匠についての話が少し出て興味を持つ爆豪。

あそこまで出久を鍛えた人物が気になるので耳を傾ける。

が、すぐにその話は流れてしまった。

「そういえば、デクちゃんくんって、男子制服着てるけど女の子みたいだよ。あ、気分悪くしたらごめんね? 気になっちゃったから」

「フフツ、気にしてないよ。それで、麗日さんはどっちだと思う?」

「どっちって、性別がだよ。うーん、どっちなんだろう? ホントわかんないや」

「なら……確認、してみる?」

「えっ……ええっ!?!」

目を細め、そつと麗日の顔に手を添える出久。

なんだか妖しい雰囲気。麗日は赤面してうろたえる。なんだ、この動悸の高まりは！

「何しとんじや、おまえは!!」

「痛い、痛いよかつちゃん!」

「みだりに、個性を、使うな!」

頭をわしづかみ、怒鳴る爆豪。

ホント、この幼馴染は。

クラスメイトを魅了しようとするな、バカ野郎!

「あー、そろそろはじめようか、有精卵ども!」(ヤバい、見とれてたぜ)

オールマイトの号令によりようやく始まる戦闘訓練。

2対2にヒーローとヴィランに分かれて戦う訓練。くじで決められたチームと対戦相手の結果は?

ヒーロー: 緑谷&麗日チーム vs ヴィラン: 飯田&爆豪チーム

やったね、かつちゃん。幼馴染が相手だよ!

「あの、アホめえええ」

「だ、大丈夫なのか、爆豪くん!」

訓練開始前から爆豪の胃にダメージを与えろとはやるな、緑谷ア!

いづくヒロイン その6

オールマイトによる初の戦闘訓練。

ヴィランチームの守る核兵器を制限時間内に奪取するか、ヴィラン役の二人を確保テープで捕らえるかすることがヒーローチームの勝利条件となる。

ヒーローチームとなった出久と麗日だったが、その作戦の主体は出久が考えていた。

「まず相手の出方だけど、十中八九かつちゃんがオフセンスで飯田くんがディフェンスにまわるはずだよ」

「二手に分かれてくるんだね。でも、どうしてそう思うの？」

出久の予測に麗日が理由を尋ねる。

聞かれた出久は順序立てて説明を始めた。

「まずは二人の個性。二人とも機動力のある個性だから、それを活かすことを考えればターゲットを守ってジツとしているとは考えにくいよ。かといって、防衛目標をフリーにするなんてこともしないだろうから、オフセンスとディフェンスに分かれてくると考えられるんだ」

「なるほど。でも、オフセンスが爆豪くんのはどうして？」

「二つはかつちゃんの性格かな。守るって感じの性格じゃないし。あと、二つ目は僕対策……かな？」

「デクちゃんくん対策？ どういうこと？」

頭に疑問符を浮かべた麗日に出久は少しはにかんで答えた。

「自分で言うのもなんだけど、僕の個性は初見殺しだから」

~~~~~

「そ、そんなにすごいのか、緑谷くんの個性は」

一方、ヴィランチームは飯田が爆豪から出久の個性の危険性を教えてもらっているところだった。

「ああ。耐性が無きや一発アウトだ。あのブドウ頭みたいになるぞ」

「クラスメイトはちゃんと名前で呼びたまえ！ だが、きみの言うことはもつともだ。幼馴染で慣れているきみに任せて、俺はここを守る

ことに専念しよう」

「最悪、デクのやつは俺が足止めをする。てめえは丸顔の対策をして  
おけ、メガネ」

「人を物の名前で呼ぶんじゃない！ まったく口が悪いな」  
小言を言いつつも爆豪の作戦に文句はないようで、麗日への対策を  
考え始める飯田。

その隣で爆豪は顔をしかめ、苦い表情をする。

『どうせ、あいつのことだ。俺がこうやって単独行動をとることも予  
測済みだろう。だが、んなこたあ、百も承知だ。その予測を覆すには  
俺が直接対決で勝つしかねえ！』

心の内で闘志を燃やす爆豪。

その結果はいつたいどうなるのか……

|||||

「死ねエ!!」

死角からの奇襲で容赦のない爆破を行う爆豪。

だが、次の瞬間に手ごたえの無さを感じて顔をしかめた。

「チイツ！ やっぱり読んでいやがったか」

「さすが、かつちゃん。読めてたけど避けきれなかったよ」

「ごめん。私をかばったせいデクちゃんくんが！」

コスチュームの一部を爆炎で焦がしながらも、笑みを浮かべて感嘆  
の声を上げる出久。

その顔に舌打ちをしてイラつく爆豪であったが、感情に任せるよう  
なことなどしない。なにせ、相手は心理をつかむのが上手いのだか  
ら。

心配する麗日をよそに、出久は嬉しそうに笑う。

「大丈夫。麗日さんのせいじゃないよ。かつちゃんの攻撃の威力も速  
度も僕の予測以上だった」

「フン！ その割にはピンピンしてるじゃねえか。俺には嫌味に聞こ  
えるがなア？」

「フフツ、そこは鍛えているからね！ まあ、鍛えてたのは僕だけじゃ  
なかったみたいだけど」

片方は鬼のような形相で、もう片方は仏のようなほほえみで視線を交わし合う。

表情は違えども、お互いに戦意に満ち溢れていた。

「麗日さん、作戦通りに！ 僕がかっちゃんを引きつける」

「う、うん。デクちゃんくんも気をつけて……って、うわあ!？」

出久の言葉を受けて走り出そうとする麗日だったが、爆豪の爆破が進路を塞いだ。

「引き留めるだア？ そいつは俺のセリフだ、バカデクが！」

「ふ、二人一緒に相手をするつもりなん!？ あんまりナメないでよね、爆豪くん！」

2対1という不利な状況で戦おうとする爆豪に声を荒げる麗日。だが、爆豪はそれを鼻で笑って返す。

「ナメてなんかいねえよ、バアカ！ 俺にとって時間は味方だ。足止めに徹していればそうそう負けはねえよ！」

そう、この訓練はもともとヴィラン側が有利なようにできている。極論を言えばヴィランチームは時間稼ぎをしていればよいのだから。そうしていれば制限時間という勝利条件を達成できる。

そして爆豪の個性はその任に非常に適していた。

「オラー！ 吹き飛ばや！」

「くう、爆風で前に進めない！」

「麗日さん!？ ツと、危ない!？」

「よそ見とは余裕だな、デクウウウ！」

爆破で進路を妨害し、爆風で吹き飛ばして前へ進ませない。

決して近づかず、さりとて決して近づけさせず。

一定の距離を保ったまま足止めに徹した爆豪は、その反射神経も合わさって鉄壁のガードマンとなっていた。

ギリ貧の状況に出久が仕掛ける。

「なら、これなら！」

恋神射抜く魅了の眼<sup>E</sup>

個性全開でウイंकを投げかける。

出久の必殺技を受けた爆豪は硬直――

「今だ、麗日さん！」

「うん！ ……つて。うわわわあ!？」

「通さねえって言ってるんだろぅがア!!」

——していなかつた。

「かつちゃん、何で!？」

必殺技にまで昇華させた個性を破られて動揺を隠せない出久。

その疑問に爆豪が怒鳴り返した。

「ハッ！ 何年一緒にいると思つてやがる！ てめえの顔なんざ見飽きてんだよ！」

幼いころから見てきた幼馴染に今更何を感じろと？

そう告げる爆豪のプレッシャーに二人はじりじりと下がっていく。

「さア、こつから先は一方通行だ！ どオするンダア？ ヒーローオ」  
テンションが上がってきたのかノリノリで演技する爆豪。

正直はまり役すぎて吹き出しそうになった出久だが、状況はそれどころではない。

ここにきて、出久は今まで見せてこなかつた個性の使い方をするこゝとに決めた。

「麗日さん、これから僕が隙を作るから一気に駆け抜けて。できれば僕の方をなるべく見ないように」

「う、うん。わかつた」

小声で麗日に指示を出し、意識を右手に集中させてゆっくりと左から右に動かす。

ただ、それだけの動作なのに、爆豪の視線は右手に釘づけにされてしまつていた。

「ツ!! しまつた!」

「邪魔はさせないよ、かつちゃん」

意識がそれた瞬間に駆け抜けていった麗日を追おうとするが、出久の個性によつて強制的に意識が向けられ、追うことができない。

「デクウ！ てめえの個性か!？」

「そうだよ。これが新しい僕の個性の使い方だ!」

Hand Of Valkyrie  
指し示す戦女神の御手

“人を惹きつける個性”を応用した、人の視線を強制的に惹きつける必殺技。

言ってしまうえば意識を逸らすという効果なのだが、単純なだけに使  
い道の多い必殺技である。

こうして1対1に持ち込んだ勝負。

仕掛けたのは出久であった。

「捕らえるー！」

「させるかー！」

投げ技に持ち込むべく、右手で爆豪の左腕をつかむ出久だったが、  
反射神経に優れた爆豪は即座に爆破で距離をとる。

接近戦は分が悪い。そう判断して距離をとって戦おうとした爆豪  
だったが……

「痛てて、そう簡単につかませてはくれないよね」

「誰が好き好んで投げられるわけアねえだろうが！」

「うん、でも、関係ないかな」

「ハア!？」

投げ技を失敗したのに飄々とした態度の出久。その理由を次の一  
言で告げた。

「かつちゃん、右手、大丈夫？」

「ツ痛ウー！」

その言葉にハツとなってみれば、ブラリと力なく垂れ下がる右手首  
が！

関節が外されていた!? いつの間にか? どうやって?

「てめ、何を……」

「古武術にはね、組まない極め技もあるんだよ? それに、意識が向い  
てない部分ってすごい弱いんだ」

僕の個性は、分かるよね?

そう口にする出久に背筋が凍りつく爆豪。

そして、また意識がそれた瞬間に、次は体が宙を舞っていた。

投げられた!

そう思っって体勢を立て直そうとしたが、何かに背中がぶつかりうま

くいかない。と、同時にパリンとガラスの碎ける音がした。

「あつ、思ったより遠くに投げちゃった」

「て、てめえええええ!!」

窓を破ってかつちゃんビルからアウト。

ちなみに現在ここは地上三階の高さである。

強制的にビルからダイブさせられた爆豪は何とか勢いを爆破で殺すことができたものの、見事に地面に激突してしまう。

その様子を見ていた出久は……

「あく。まあ、かつちゃんなら大丈夫だよ。それより麗日さんを救けにいかない」と

かつちゃんならワンチャンダイブしても問題ないさ!

という、謎の信頼感によって放置を決定したのだった。

戦闘訓練はヒーローチームの勝利に終わるのだが、当然怒られたに決まっている。

「デエクウ、てめえ、殺す気かア!!」

「ご、ごめんなさ〜い!」

ヒーローの卵になっても爆豪の苦勞は終わりそうにない。



いづく魔性

いづくヒロイン 亜種 魔■??女

人は生まれながらに平等ではない。

緑谷出久が齡4歳にして悟った真理だ。

「出久ちゃん、遊びましょう！」

「出久ちゃん、これあげるね！」

「出久ちゃん、出久ちゃん！」

4歳の誕生日を迎えて、個性が発現してから緑谷出久の人生は激変した。

『人を惹きつける個性』

何をしなくとも人の好意が向けられる。

そんな特殊な環境に身を置くことになった出久は大いに戸惑う。

“どうしてみんな僕に優しくしてくれるの？”

“どうしてみんな僕を褒めるんだろう？”

“どうしてみんな僕のために動いてくれるんだろう？”

……僕がみんなに何かしたわけじゃないのに。

過剰なまでの、不条理なまでの人の好意は毒となって幼い精神を蝕んでいく。

その甘すぎる毒は緑谷出久の精神を歪め捻じ曲げてしまった……

「そっか。僕が特別だからだ。僕が特別だから……みんなが好きになっってくれるんだ」

緑谷出久は外道に堕ちた。

「僕が特別だから、すべては僕のためにあるんだ」

|||||

そこに一組の男女が残っていた。

「駄目だよ、世春君。こんな高級なの受け取れないよ！」

「緑谷さんのために頑張ったんだ。ぜひ受け取って欲しい！」

高価な贈り物に戸惑う緑谷少女。

美しく成長した彼女は異性同性を問わずに好意を寄せられ、大変人気が高い。

そんな彼女の気を引くために少し背伸びをしてしまった少年の空回り。ほろ苦い青春の1ページ。

普通ならそうなるだろう。

「無理しちゃだめだよ。世春君」

「で、でも！」

「駄目だよ！ 無理しちゃ。無理するような世春君は嫌いだな」  
些細な一言。

「嫌だ、嫌だよ！ 捨てないで、捨てないで……ボクを見捨てないで、緑谷さん！」

それにひどく取り乱し恐れる男子学生。

異様な光景だった。

「大丈夫。無理しないで、ほどほどの程度なら大歓迎だから……分かるよね？」

「う、うん。わかったよ」

「分かってくれたならいいよ。じゃあ、また今度。ね？」

そう言って男子生徒と別れる出久。

立ち去っていく男子生徒を見送り、出久はため息を吐く。

「ああ、失敗したなあ。あんな高価なものを贈られると親が介入してきかねないから困るんだよね。」

もうちよつとコントロールする方法を覚えておかないとなあ」

そう言ってカバンから本を取り出す。

心理学・人心掌握術・催眠術・暗示・洗脳術……etc

人を操ることに関した本ばかり。

緑谷出久は、他人から好かれる個性を利用して学校全体で多くの人

を自らの支配下に置いていたのだ。

専門書をパラパラとめくって一通り確認した後には、教室を出る。

「おい、デクー！」

「……あら？ かっちゃん？ まだ学校にいたんだね」

教室を出た出久に声をかけてきたのは爆豪。

強く睨みつけるその視線を出久は微笑みで流す。

「スカしてんじやねえよ腹黒女ア。さつきあのクソモブと何を話していやがった」

「何を話しても僕の自由じゃないかな？ それともヤキモチ？」

「ザけたこと言ってるんじやねえよ！ てめえが他人利用して好き勝手やってるのはわかってんだ！」

出久の行いを糾弾する爆豪。

幼いころから近くで出久を見ていた爆豪は、出久が同級生を始め学校全体で個性を利用して支配を進めていることを知っていた。

そして同時に、イズクを止められないことを知っていた。

「だからどうしたの？ かっちゃん」

「な、な………に?!」

「だって、そうするのが当然なんだもの。かっちゃんも将来はその強い個性を使ってヒーローになるんでしょ？」

生まれ持ったものをうまく使うのは当然じゃない？」

「んなわけねえだろうが！ てめえと一緒にするんじやねえ！」

激昂する爆豪。

だが、出久は笑う。いや、嗤う。

「僕が間違っていると思うなら君が止めればいいじゃないか。止められるなら………ね？」

「てめえ!!」

「怒鳴ったって無駄さ。君にはできないよ。僕を止めなければ君を犠牲にしなきゃいけないんだから」

世間的に評価が高い出久。彼女を弾劾するには力づくでしか方法は無い。

それは同時に爆豪の人生の終わりを意味している。

そしていざ爆豪が行動に移そうとするならば、彼女は支配下に置いた人々を容赦なく盾とするだろう。

無実の人々を倒し彼女を止めたとしても待っているのは、栄光ではない。

プライドが高い爆豪がそれを選べないことは分かっているからこそ、余裕を持っている出久。

「じゃあね、かつちゃん」

何もできずに見送るだけの爆豪。

この日のことを爆豪は後悔することとなる。

緑谷出久。のちにヴィラン名“魔性天女”と呼ばれる、己のために他人を踏み台にし続ける最悪のヴィランの少女だ。

「ヴィラン連合かあ……面白そうだね、トガちゃん」

「そうだねえ。楽しみですね、イズクちゃん！」

## いづく魔性天女 その2

『上鳴電気の日記』

3月1X日

今日、雄英からの合格通知が届いた。

封を開ける瞬間メツチャ緊張した。マジで。

オールナイトが映し出されてマジびっくり。親友に連絡したら高校は違っけど、お互い合格してた。

明日お祝いっつーことで遊びに行くことに。

3月1Y日

親友と駅で合流して街をブラリ。

途中、可愛い子がいたのでナンパ。なんでか知らないけどその子に目が惹かれた感じがしたんだよなー。これって運命感じね？

話しかけてみたらうまくいって連れの金髪の女の子も一緒に遊びに行くことに。

そっちは親友と話してて、俺は緑の髪の子と話を話してた。

ミクモちゃん、ヒーローのファンなのか俺が雄英に合格したって話したらすげえ食いつきよかった。やっぱり、雄英の名前はすごい！

最後は連絡先も交換できたし、俺も高校デビューの前にリア充デビューできそうだぜ。

3月2A日

ヤッホーウ！ ミクモちゃんとデートの約束をもらったぜ。

明後日が楽しみ！ がっかりさせねーようプラン考えておかないと。

しかし、楽しみだ。ウェイ！

3月2C日

ミクモちゃんとデート。満足してもらえたみたいだ。

何て言うかかなり脈ありな感じ。デートの最後に毎日メールする約束もしたし。

あと、相性がいいのかしんねーけど、メツチャ話しやすい子なんだ

よな。

話を聞くのが上手というか……ついつい、いろんなこと話しちゃうぜ。

明日から交換日記的な感じでメールのやりとりだ。

3月31日

今日で春休みも終わりだ。明日から高校生。寂しいようなワクワクするような。

うーん、なんとも言えない気持ちだ。

まあ、雄英に通うって考えたとワクワクのほうが強いな。

ただ、ミクモちゃんとはなかなか会えなくなるのは寂しいかも。

と、思ってたら、ミクモちゃんもそうみたいで、「電気くんとなかなか会えなくなるのは寂しい」って電話で言ってくれた。

お、おれもだぜー！

「お互い高校生活のことを伝いあえるといいね」

とか、可愛すぎか！

4月1日

入学式……のはずが、いきなり個性把握テストがあった。

担任の相澤先生マジヤバイ。「最下位は除籍」って言ってたけど、本当に除籍しちゃうんだもんなあ……

クラスメイトの名前を覚える暇もなく一人いなくなっちゃった。

なんかやっついていけるか不安だ。

ミクモちゃんの励ましに癒される。

「いきなり除籍なんて酷い」って怒ってくれる優しい子だからか、相澤先生のこと許せないみたいで、先生のことをけっこう聞かれた。ミクモちゃんの中で相澤先生がすごい悪い人になって、俺のことかなり心配してくれた。嬉しい。

ただ、これからお世話になる先生のことを悪く言われるのもあれだったのちよつとフォローしておいたけど。

「目の個性なのにドライアイで長い間使えないのはもったいないよな」

って、冗談っぽく言ったら最後は笑ってくれたし。すこしはイメー

ジアップできたかね？

4月2日

初のヒーロー基礎学の授業。オールマイトの授業だ。憧れのヒーローが授業を見てくれるなんて夢みたいだな。

ミクモちゃんもかなり気になったみたいで、詳しく話をしたり。

クラスメイトの個性の話とかもしてたら、けっこう遅い時間になっちゃったぜ。

うーん、予習がヤバいかも。

4月X日

クラス委員を決めるのと、マスコミの乱入騒動があった。

雄英バリアが破られて一時的にパニックになったけど、飯田のおかげですぐに収まったからよかつたぜ。

しっかし、オールマイトの注目度はすごいな。

ミクモちゃんも気になるみたいで、オールマイトの授業についてはけっこう熱心に聞いてくるんだよね。

次の授業はいつかとかけっこう聞いてくるし。……オールマイトに嫉妬しそう。

4月1Y日

今日も授業が大変だったな。とくにヒーローの法律関係。

あーもうちよつと勉強しておかないと。

俺としては体を動かすほうが得意だからなあ。

明日のヒーロー基礎学が楽しみだぜ。毎回思うんだけど、よくあんなデカイ施設を用意してるよな。明日は災害救助の授業らしいしどんなことするんだ？

|||||

———ヴィラン連合 アジト

「明日は救助訓練……か。情報に間違いはなさそうだね」

「やるじゃないか。やっぱり使えるなおまえ」

携帯を弄りながらメールを確認していた出久が死柄木に手に入れた雄英の情報を伝えると、死柄木は笑みを浮かべ称賛の言葉を贈る。

その様子に出久も妖艶に笑みを浮かべ尋ねる。

「それで？ 計画は実行するの？」

「当然だろ。おまえのおかげで生徒の個性もプロヒーローの個性も分かっているんだ。攻略本もあってチート対策もあるならヌルゲーもいいとこだ」

出久が偶然出会った雄英入学生との接点を皮切りに、ヴィラン連合は雄英高校、ひいてはオールマイトへの情報収集を行っていたのだ。

上鳴のような無自覚な裏切り者だけでなく、変装し別人に化けて雄英高校生に接触し、持ち前の個性で支配下に置いた人間もいくらかいる。

「じゃあ、明日から雄英高校に通う必要はないですね？ 最初は楽しかったけどだいぶ飽きちゃったのです」

「お疲れ様。トガちゃん」

「アリガトです。イズクちゃん！」

入学生に化けてトガによる潜入調査も行っている。

準備は完璧。

明日、雄英高校は血を見ることとなる。

「ウフフ、楽しいね。やっぱり好き勝手できるのは心地好いなあ」

「そうだね、イズクちゃん。もつと楽しい世の中になってほしいものです」

危険な少女たちの笑い声が闇夜に響く。



## いづく魔性天女 その3

雄英高校 特殊訓練場 通称『USJ』

災害事故現場を再現した施設で行われるはずだった1―Aの救助訓練は、ヴィラン連合を名乗る集団の襲撃によって危険な戦闘への時間と化した。

頼みの綱であるオールマイトは事情により現場に来ておらず、一瞬の隙をつかれて生徒たちをバラバラに飛ばされてしまったのだ。

さらに悪いことに、ヴィラン連合は教員だけでなく生徒の個性も調べ上げており、飛ばされた生徒は自分の不利な環境での戦いを強いられた。

たとえば、個性の性質上、熱や光が苦手な蛙吹や常闇は火炎が吹き出す火災ゾーンに。

音に関する個性を持った口田や耳郎は雨風によって音が遮られる暴風・大雨ゾーンに。

創造という万能の個性を持った八百方は、水中でその実力を発揮できないようにするべく水難ゾーンに引きずりこんだ。

こうやって生徒たちが実力を出せないようにしたうえでの襲撃。

このままでは雄英側が限界を迎えるのは時間の問題だ。

一刻も早い救援が必要なのだが、電波を初めとした連絡手段が妨害されている状況では、誰かが直接助けを呼びに行くしかない。

その任に一番適した個性をもった、クラスでトップの移動力を持つ飯田は、ビルの瓦礫が道に散乱する崩壊ゾーンに飛ばされていた。

「くっ、足元が悪い。少しでも早く救援を呼びに行かねばならないというのに！」

自慢の健脚を活かせない地形にほぞをかむような思いをしながら必死で進む飯田。

だが、そんな彼のもとに声が届く。

「待って、救けて……」

「む!?! いま声が?」

助けを呼ぶ声に足を止め辺りを見渡すと、近くで俯せに倒れている

少女の姿が。

何故こんなところに？

そう疑問に思うも、ヒーロー志望の性が出てすぐに駆けつけて助け起こす。

「おい、きみ。大丈夫か？」

「うん、大丈夫……ちゃんと、捕まえたから」

「なに!? きみはッ！」

口元が弧を描き、危険な笑みを見せる少女の姿に飯田は畏だと気がつく。

が、もう遅い。飯田は彼女の瞳に囚われてしまった。

|||||

バラけさせられた生徒の一人。上鳴は崩壊エリアをさ迷っていた。

「くそー、あっちこっち道が塞がってどっちに向かえばいいのかわかんねえよ！」

ヴィランに襲われ、突然一人で放り出された不安から文句を口にするも、目には涙が滲んでおり少々情けない顔になっている。

一人途方に暮れる上鳴に声をかける人物がいた。

「あらあら、これはまた情けない顔してるね」

「この声、ミクモちゃん? どうして……」

ここに? と、続けようとして言葉を失う。

なぜなら、彼女は全く知らない表情をしていたのだから。

「ウッフ、ミクモ? 知らないなあ……僕の名前は出久だよ?」

「え、えっ? 違う名前? いや、ここにいてるってことは……」

「そっだよ。残念でしたあー。あなた、騙されちゃったの!」

カラカラと笑いながら裏切っていたことを告げる出久に上鳴は絶句せざるをえない。

いったい、いつから? もしかして、最初から?

ぐるぐると思考がまとまらず、足元がおぼつかなくなるような感覚に上鳴は目の前が真っ暗になったようだった。

そんな心の隙につけこむように魔性の言葉を投げかける出久。

「騙そうとしていてごめんね。でも、勘違いしないで。キミと会ったのは偶然なんだよ？ そう、たまたまキミが雄英の生徒だった。それだけなんだ」

まるでこうして騙していたのは自分の本位ではなく、偶然、上鳴が雄英の生徒だったからだと言えど、雄英の生徒でなければこんなことにはならなかったのだとも言おうように。

先ほどみた邪悪な笑みに警戒していた心も、人を惹きつける個性“によって薄められていく。目の前の少女を危険だと感じることが維持できない。

敵意も警戒心も溶かされて、無防備になった心は、哀れ魔性の天女の掌へ……。

寸前、その手を叩き落とす存在がいた。

「そいつから離れろ、クソアマ！」

「ハア……まったく、良いところなのに邪魔しないでくれないかな？」

爆炎をまき散らしながら現れた爆豪に出久はうんざりした様子で距離をとる。

「爆豪、おまえ知り合いかよ!？」

「黙れ、黄色頭！ あいつの言葉に耳を傾けんな！」

爆豪が現れたことや、出久と知り合いということなど驚くやら混乱するやら忙しい上鳴。

そんな上鳴を一喝したあと、爆豪は出久へと鋭い視線を向ける。

「久しぶりだなア、腹黒女。どこかに消えたかと思っただらやっぱ口クでもねえことをやってやがったか」

「フフツ、僕がキミに何してるかなんて教えてあげる義務はないよ。それに、僕がその“口クでもないこと”とやらをすると分かっている何もしようとしなかったのはキミでしょ？」

睨む爆豪を出久は嘲笑う。

見ていただけの無力な奴だと言外に告げる出久に爆豪はギリリと奥歯を噛みならず。

「てめえは、あの時俺が止めてなきゃいけないかったんだ！ 死ぬエ！ 腹黒女ア!!」

過去のある日、あの放課後の中学校の校舎で何もできずに見送ってしまったことを思い起こして叫ぶ爆豪。

あの日、周囲に人はおらず二人きりで邪魔するものもいなかったあの時こそ、このヴィランを止める最大のチャンスだった。

そう後悔する爆豪はその負債を清算するべく、目の前の魔性の少女へ攻撃を仕掛けた。

だが、爆豪の思いとは裏腹に出久は冷めた表情でその叫びを戯言だと聞き流している。

「あの時」？ それっていつのことを言ってる？ きつとキミの思っている「あの時」じゃ遅すぎるよ。僕を止めなければもつと前じゃないと……ずっと昔にチャンスはあったのにね？」

「何を言ってるやがる！」

攻撃を優雅ともいえるようなステップで躲しながらどこか呆れた様子の出久。

爆豪が問い返しても、ただ熱のこもらない声ではっきりと答えは返さない。

「分からないならそこまでだよ。キミにボクを止める資格なんてない。だから、僕がキミを相手にする必要もない」

「さつきからわけの分からないことを！ 真面目に戦え、クソ女!!」  
出久へさらに攻勢を強めようとしたところで、何者かが横から突然攻撃を仕掛けてきた。

その誰かを確認した爆豪の目が、驚きに見開かれる。

「てめえ、いったいどういうつもり……いや、おまえ、何をしやがった！」

襲撃してきた相手に問いただそうとして、途中で何かに気が付いて出久へと怒りを向ける。

その視線を受けた出久は愉しそうに笑って種明かしをはじめだす。  
「ウフフ、彼って生真面目なんだね。素直というかなんというか……あつさり僕の暗示にかかってくれたよ」

「クソメガネが！ 簡単にやられてんじゃねえよ」

攻撃を仕掛けてきたのはクラスメイトの飯田だった。

簡単に暗示に引っかけた味方を罵倒しながら戦いへと移っていく。

もともと容赦のない性格と言えば、クラスメイト相手ではどうしても手加減しなければいけない部分が出てくる。

これでしばらくは出久へと意識を向けることはできない。

ならば、先ほどの獲物に手を付ける時だ。

「ねえ、上鳴くん。僕はこうしてヴィランだけど、上鳴くんは僕の味方になってくれるよね？」

「……ああ、俺はミクモちゃん、いや、イズクちゃんの味方だけ」

上鳴の返事を聞きほくそ笑む。

術中にはまった。そう確信した出久は邪魔な爆豪を排除するべく口を開く。

「じゃあ、僕の敵になった爆豪くんを倒すのを手伝ってくれる？」

やってくれるとうれしいなあ」

「……出久ちゃん、それは無理、かな」

「なっ……いま、なんて言ったの？」

確実に魅了の効果は受けているはずなのに反抗され動揺する出久。

うろたえる出久とは対照的に上鳴は冷静に話し始めた。

「俺、バカだからさ。イズクちゃんにいままで騙されてたって分かってはまだ好きなんだよなあ……」

「ッ！ それは、僕の個性にかかってるってことでしょ！？ なのになんで……」

言うことを聞いてくれないの!？」

喉まで出かかった言葉をぐつと飲み込み、睨みつける出久。

いままでなかった状況にその理由を知るべく、上鳴の言葉に意識が向けられる。

「なんかさ、イズクちゃんの個性とかなんなのか知らないけど、そんなのに関係なく俺、本気で惚れちゃったみたいなんだよね」

「なにそれ、わけが、分からないよ」

予想外の答えに戸惑う出久。さらに上鳴は言葉を重ねる。

「自分の好きな子が間違ったこととしてたら、止めてあげるのが当たり

前だろ?」

「当たり前……当たり前だって!?!」

その言葉に出久が激昂する。彼女の心の何かに触れたのだ。

「知るはずないだろう! そんな『当たり前』なんて! 僕のことなんて何も知らないくせに、キミと僕を一緒にするな!!」

「イズクちゃん、俺は——」

「うるさい、うるさいうるさいうるさい!! キミは要らない! 消えてしまえ!!」

いままでの様子も投げ捨てて敵意をあらわにする。

その内心は荒れに荒れていた。

幼いころから好意を向けられてきた出久だが、それらはすべて彼女の個性が引き起こした『贗物』ばかり。

贗物の好意。

贗物の善意。

それらの贗物の上に成り立つ人間関係。

自分に向けられる人の好意・善意を信頼することができない。

それが緑谷出久という少女の本質。

人を信じられないから利用して、支配して安心する。

それが魔性天女と呼ばれるヴィランの正体だった。

思わぬところで自らの闇深い部分を突かれ、心の余裕をなくした出久。

そのなくした心の余裕は、攻撃性となって現れた。

「イズクちゃん、俺の話を——痛ッ!」

鬼気迫る表情に変わった出久へとなおも声をかけようとした上鳴だったが、投げつけられた千本鍼が左腕に突き刺さり苦悶の声を上げさせられた。

鍼なので大きな傷ではないが、毒が塗つてあるらしくヒリヒリとした痺れが刺さった部分から広がっていくのを感じる。

「待ってくれ、話をしようイズクちゃん」

「フツ、シャアアア!」

命の危機を感じる状況で、まだ説得するという選択肢をとった上鳴

であったが、返事は短い呼気と共に繰り出された首元への一撃だった。

なんとか避けたものの、右ほおをかすめて一筋の傷跡を残す。

「いてて、ハハッ、猫みたいだな。イズクちゃん」

「よく知ってるね。『猫手』っていう暗器なんだ、よー!」

恐怖心をごまかすつもりで冗談を言ってみたが、攻撃が休まる様子はない。

出久の指にはいつのまにか爪のような刃物を取り付けられていた。ついでにそれにも毒が塗つてあるらしく、かすめた頬が熱を持ってきている。

猛攻は続き、上鳴はひたすら耐えるしかない。

そうして限界を迎えた上鳴は膝をついてしまった。

「これで、もう終わりだね」

「グツ、ハハハ、好きな子に……見下ろされるのも、悪くない、な」

「最後まで減らず口を」

首へ爪を突き立てられれば死ぬ状況で軽口をたたく上鳴に出久は顔を歪める。

どこまでもイラつかせる相手だ。さっさと死んでもらおう。

そう思い振り上げられた手は――

「させるか! クソ女!!」

「ぐうツ、毎回毎回邪魔をして!」

振り下ろされることなく爆破によって弾き飛ばされた。

爆豪が、戻って来たのだ。

「クラスメイトはどうしたの?」

「んなもん、何発かぶん殴ったら元に戻ったわ! いまは近くで休んどるわ、クソが!」

「ようは、気絶させたってことでしょ。本当、乱暴な人」

こうなったからには爆豪も相手するしかない。

覚悟を決めて爪を構えた出久だったが、それは無駄に終わった。

彼女の側に黒い靄がかかったのだ。

「黒霧さん!? これはいったいどういうこと?」

「緑谷出久。作戦は失敗です。オールマイトをはじめとしたヒーロー数名が現れ、脳無が倒されました」

「失敗？ どうして？ 救援が来ないように妨害はしてたはず」

「どうやら定期的な連絡がないと、誰かを向かわせる手筈になっていたようです。それで——」

「調査不足だったってこと？ いや、雄英が新しく対策を立てたのか……」

雄英側の救援が駆け付け、かつこちらの切り札が倒された状態。

つまりは“詰み”である。

「あなたが来たってことは、死柄木くんの判断は撤退ってことだね」

「ええ。主だったメンバーは既に回収済みです。あとはあなただけ」

「そう……じゃあ、そういうことだから、かつちゃん。続きはまた次回。では、ごきげんよう」

黒い霧に包まれて消え去る出久。

「クソが、待ちやがれ！ クソ、クソ、クソ、チクショウがあ!!」

目の前でまんまと逃げられ、吼える爆豪。

「イズクちゃん……俺は……」

朦朧としながらも無力さをかみしめる上鳴。

ヴィラン連合の襲撃はこうして退けられたが、雄英には浅くない傷として残されることとなったのだった。

|||||

——ヴィラン連合 アジトにて

「イズクちゃん、どうかしたですか？ ヒーローになにかされた？」

「トガ、ちゃん。いまの世の中じゃ、僕たちは暮らしにくい。そうだよね？」

どこか縫うように見つめる出久をトガはそっと抱きしめる。

「大丈夫ですよ、イズクちゃん。ヒーローに何を言われたのか知らないですけど、私たち異端者のことを分かってくれるのは私たち異端者だけなんですから」

「そう、だね。そうだよね、トガちゃん」



トガに背を撫でられ、落ち着きを取り戻し始める出久。  
上鳴の言葉で揺れ動いていた心はピタリと元の場所に戻る。

思い起こすのは幼少のころ。まだ個性が発現したてのあのころだ。  
『かつちゃん、最近みんなの様子がおかしいんだ。僕、怖いよ。どうしたらいいの?』

『ハア? おまえの個性のせいであらおまえがなんとかしろよ。何とかするまで俺に近づくなよな』

幼いころに一番仲の良かった幼馴染から振り払われた思い。

自身の個性に対する不安を誰も分かってくれない。

誰も本当の自分を見てくれない、理解してくれないと思う絶望。

それが緑谷出久・魔性天女の原点だ。<sup>オリジン</sup>

いづくアンラツキー  
いづくアンラツキー

人は生まれながらに平等じゃない。

これは緑谷出久が齡4歳にして直面した現実。

そして10年経った今でも痛感している事実だ。

|||||||

「待てや、ゴルア!!」

「クソガキ、ブツ殺してやる!!」

「うわあああ! ふ、不幸だあー!!」

ガラの悪い見るからに不良の少年たちに追いかけられている緑谷出久。

走り去る彼を見送る同級生たちは、驚いた様子もなく呆れた表情をしていた。

「またかよ。あいつも大概だな」

「俺、ありふれた没個性だったけど、あいつみたいな個性じゃなくてよかったと思うよ」

「ケツ! あんな無個性以下のクソ雑魚個性のやつなんかどうでもいいわ!」

緑谷出久の個性。

自分にマイナスにしか働かない最低の個性だ。

『不運を引き寄せる個性』

母親のものを引き寄せる個性が変質して遺伝した結果、発現した個性。

日々、日常において不運が重なるというバッドな個性だ。

今日のように不運にも不良にも不良に目をつけられたりするほか、逃げる時に財布を落とす、小学生の投げたボールが飛んでくる、土砂降りの雨の日に傘を盗まれるetc……

とにかく不運の連続に悩まされている毎日だ。

もしもの話だが、並行世界に“無個性”で生まれてしまった出久が

いたとしても、この「不運」の出久を見たら「まだマシだな」と納得するであろう。

そんな不運を人の形にしたような出久だが、最も怖いのはウイルスの事件に巻き込まれてしまうことだ。

個性犯罪に巻き込まれ、理不尽な暴力の前に死の恐怖を感じたことは一度や二度ではない。

都合よくいつもヒーローが近くに来てくれるとも限らないとなれば、出久は自然と対抗手段を身に着けていくしかなかった。

「いい加減くたばれ、クソガキ！」

「これじゃない、これじゃない……あつた！」

ゴソゴソとカバンを逃げながら漁っていた出久は、目的のものを見つけ、安全ピンを抜いて投げつける。

不良たちの前で弾けたそれは強烈な臭気を周りに発して不良たちの嗅覚にダメージを与えた。

「臭つき！ なんじやこりやー！」

「てめえ！ なめやがって！」

「うわああ、大して効いてない!? 前のトウガラシ煙幕は無関係の人にも被害が出たから改良したって言ってたけど、コレじゃ弱くなり過ぎだ！ また要望書をレポートにまとめておかないと……」

「ブツブツいってんじやねー！」

持ち歩いてきた護身アイテムの感想をブツブツとつぶやきながら逃走する出久。

こうした事件に巻き込まれることが多いため、彼の背負っているカバンの中には護身アイテムが数多く入っていたりする。

個性の特性上、警察からも許可はもらっているのだが、知らない人が見たら危険な少年である。

スタンガン携帯している中学生なんて、どんな奴だ！

「この間の腕部装着式のフックショットがあればすぐに逃げられるのに！ 代わりにって渡された小型エアジェットは爆発しそうな気配が漂ってるし……キック力増強シューズは準備に時間がかかりすぎる。こんな時に限って時計型麻酔銃は針が入ってないなんて……不

幸だー!!」

手持ちのアイテムを思い出しながら逃げる出久だが、とうとう袋小路に追いつめられてしまう。

不良三人はようやく追いつめた獲物を前に舌なめずり。

「へっへっへ、やっと捕まえたぞ。どうしてやろうか?」

「とりあえず、有り金はいただきだな」

「それだけじゃものたりねーよ。身ぐるみ全部剥いで吊るし上げだ!」

口々に好き勝手な言葉で脅す彼らを見て、出久は覚悟を決める。  
もう、やるしかない。

カバンから取り出したのは一本の特殊警棒。下にサツと振り下ろすとカシャツという音と共に三段に分けて警棒が伸びる。

相手の拳を受け流して掬うようにあごに一撃、怯んだところを仲間の所へ蹴り飛ばす。

そのまま流れるように残りの二人を打ち据えて地面を舐めさせた。

「痛ってー!」

「なんだこのガキ強ええぞ!」

「はあー、もうこういうのもなれちゃったなあ……」

迫りくる危険にアイテムだけでは危険だと、護身術も身に着けた出久である。

柔道・空手・剣道をベースにいくつかの鉄火場を経験した喧嘩殺法は、街の不良程度なら軽く相手にできる。

それなのに、真っ先に迎撃よりも逃走を選ぶあたり、ヘタレ気質がでている。

「てっめえ、ブツ殺してやる!」

「ちよ、ちよ、個性使用反対! ドーピング反対!」

キレた不良の一人がポケットから針無しの簡易注射器を取り出して首筋に注入。

全身から巨大な針を出したハリネズミの怪人のような姿になって襲ってくる。

こうなると、特殊警棒一本ではどうにもしがたく、出久は奥の手を

取り出す。

カチャリと引き金に指をかける音と機械の起動音が人気のない路地に反響する。

『瞬時状況診断システム起動……個性違法使用パターン996を確認。脅威対象と認定。パラライズモード、スタンバイ』

「な、あ、なんじゃそりや!？」

出久が取り出した銃に似た何かにビビる不良たち。

高性能AI内蔵の瞬時状況診断機能付き非殺傷銃 ッジャツジメン  
ト

対個性用に作られたこの高性能テイザーガンが出久の奥の手だ。

『セーフティを解除。落ち着いて照準を定め、対象を無力化してください』

「悪いけど、これで終わり!」

アナウンスに従い、三連射。

あつという間に相手を鎮圧したが……

「はつきり言つて、もう遅刻だよなあ……」

時計の時刻はもう9時過ぎ。完全に遅刻である。

「不幸だー!」

むなしい勝利の雄たけびであった。

|||||

「いやあ! 今日も相変わらず幸薄そうな顔してますね。出久さん!」

「……なんで家に居るの? 発目さん」

帰宅早々にハイテンションな彼女を目にしてゲンナリする出久。

一応聞いてみたものの、答えは予想がついているのだが。

「そんなの決まってるじゃないですか! 今日も悪党に襲われたんでしよう? そうでしょう? ならデータを早速見せてください!」

「わかっちゃいたけど、僕の心配を少しはしてくれてもいいんじゃないかな!」

襲われたことを嬉々として言われると正直複雑な気分になる出久。まあ、そんなこと気にしていたら彼女とは付き合ってはられないのだけれど。

発目と出久の出会いとは約一年前。

自作のサポートアイテムを目当てにヴィランに狙われていた発目を、事件に巻き込まれた出久が救け出したことが始まり。

それ以降、不運体質がサポートアイテムのテスターにちょうどいいと交流を深めはじめた。

必然、二人そろって事件に巻き込まれることも多くなり、吊り橋効果的なものもあって現在に至っている。

「ふむふむ。その状況なら新作のエアジェットを使えば逃げられたんじゃないですか？」

「なんか、爆発しそうな予感がしたんだよ。こういうときの勘は割と当たるから……一度チェックしてくれない？」

「えーッ！ いちいちチェックするより一度使ってもらったほうが楽なんですけど。というわけで、今から試してみませんか？」

「やだよ！ 安全第一でお願いしますッ！」

こんな我が道を行く発目に振り回されている出久。

「仕方ありませんねえ。なら改良のためにちよつと参考に見に行きたいところがあるんですが付き合ってもらえませんか？ てか、付き合ってくださいー！」

「……強引!？」

「来ないんですか？ オールマイトのコスチューム展もやっていますよ？」

「行きますー！」

オールマイトをダシにしたら簡単に釣れる出久に内心ほくそ笑む発目。

『ちよろいもんですねー。まあ、そこが可愛らしいんですけど。さてと、インコママさんに頼んで出久さんの服のコーディネートをお願いしておかなければ！』

デートにあのダサイTシャツは勘弁してほしいですからね』

さりげなくデートの約束を取り付け、裏で段取りを考える。

普段から出久を振り回しているのだが、惚れ込んでいるのはどちらかという彼女のほうであったりする。

現在も、出身の京都から出久のいる静岡県まで毎週通い妻のように訪れているあたり、お察しである。

お互いオタク気質などところもあり、案外相性も悪くないのだ。

……やっちなまえよ、爆豪！

## いづくアンラッキー その2

「暇ですねー。出久さん、どこか連れてってください」

「突然だね……はっ、め、明ちゃん。どうしたの？」

遊びに来ていた発目が出久のベッドで寝ころびながらいきなり外出を要求してきた。

彼女の突発的な言動には出久も慣れたもので、多少名前を呼ぶときにどもりながらも返事をする。

「まだ名前呼びは慣れないんです？ まあ、それはいいとして、前遊びに出かけた時はひどい目にあっただじゃないですか！ その補填を要求させてもらいますー！」

「ああ、あれは不運だったよね」

前回デートで遊園地に遊びに行ったときのことを思い出して遠い目になる出久。

相変わらずの不運体質で事件に巻き込まれてしまったのである。

「遊園地に遊びに行つてジェットコースターに乗ったら殺人事件に巻き込まれたのを不運で済ませられるのはヒジョーシキだと思えますよ！ 私は！」

「え、あ、でも、すぐに解決したからよかつたんじゃないかな？」

発目からジトーツと睨まれて冷や汗を流す。

そのときの事件では偶然その場にいた高校生探偵がさらつと推理して事件を解決してくれたのだが、そもそも事件に巻き込まれること自体が不運である。

ついでに出久。発目には伝えていないのだが、この高校生探偵が黒づくめの男に殴り倒される場面に運悪く遭遇してしまい、怪しげなその男たちと銃撃戦（実弾vsテイザー）を繰り広げるといふ騒動にも巻き込まれている。

幸いにして駆けつけたヒーローたちによって事件は解決したが、一日に二度も人命にかかわる事件に巻き込まれたのは初だったりする。

出久にしては珍しくラッキーなことに、偶然発目とはぐれていた時に出会った事件だったので、その時発目はいなかったのだ。



この事件に巻き込まれたことを知られたらいったい何と言われるか……

「あのあとまた騒ぎも起きていたようですし、あれでは満足とは言えませんね！……おや？　そういうえばその騒ぎが起きた時間と出久さんがはぐれていた時間はだいたい同じでしたよね？　まさか？」

「いやいや、全然！　そんな事件には巻き込まれてないよ!!　ホント！」

ばれたらヤバイと思つているところに発目から追及が来てギクリと肩を揺らす出久。

ああ、不運だ。

「本当に事件には関わってないんですかあ？　イ・ズ・クさん？」

「ハイ、カカワツテナイデス」

「ほほう。心拍数が跳ね上がってますよ出久さん？　嘘をついている数値ですね」

「いつの間に測定器を!?　どれ？　どれが測定器なの、明ちゃん!」

スマホで出久の心拍数などを映し出して嘘を見破る発目。

気が付かないうちに取り付けられていた測定器に焦る出久だが、発目からもらったアイテムは多くてどれか分からない。

出久は発目の監視下に置かれているのだ！　などと冗談は置いておくとして、嘘がばれた出久はもはや素直に話をするしかない。

まあ、話をしたらしたでドン引きされたわけだけでも。

「一日に二度も事件に巻き込まれるとか出久さん、あなたって本当に……」

「明ちゃん、言わないで！　僕自身が一番分かってるから」

「まあ、出久さんの不運は今に始まったことじゃないですけどね。ところで、その黒ずくめの男たちの対応は大丈夫なんですか？」

「え？　ヒーローが捕まえてくれたから大丈夫だと思っただけ」

犯人が既に逮捕されて事件解決だと思つていた出久は発目の言葉に首を傾げる。

いったいどの点に不安があるというのだろうか？

「その黒ずくめの男たちって、明らかに組織に属してるっぽくないで

すか？ そうなると、よくも仲間をやりやがって、的な報復とかありそうですけど」

「ハハハ、まっさかー！ 大丈夫だよ……たぶん」

また事件に巻き込まれる可能性がでてきたことに動揺を隠せていない出久。

大丈夫のはず。報道で取り上げられていたのはヒーローたちと例の高校生探偵だけだから自分の名前はわからないはずだ。

と、言い聞かせるものの、不安の影は消えず。

なにせ、自分の不運のほどは自他共に認めるほどであるのだからして。

不穏な空気が部屋に流れるなか、タイミングの悪いことに来客を告げるチャイムが鳴り響く。

ピンポイント、間延びした音とは裏腹に二人の間に緊張が走る。

「いいい、出久さん!？」

「お、おち、落ち着いて。まだそうだと決まったわけじゃ」

慌てる二人。と、そこに部屋のドアをノックする音が。

「出久ー。あなたにお客さん……って、どうしたの!？」

インコお母さんが部屋に入るとすごいオーバーな反応をした二人の姿が。

うーん、カオスだな。

|||||

「サポート企業互助組合?」

出久と発目の二人がそろって疑問の声を上げる。

差し出された伊藤と名乗るスーツの女性から渡された名刺にかかれた肩書にはそう印されていた。

聞いたことがない組織名に戸惑っていると、女性のほうから説明をはじめてくれた。

「はい、私どもは近年に発足しましたサポート企業間による技術提携や情報共有を目的とした組合です、サポート企業のヒーローへの貢献を通して社会をより良くしていこうと尽力している組織です。はい」

「そうなんですネ」

「はい。このたびは緑谷さんにご提案をさせていただきたく、こうしてお邪魔をさせていただいた次第です」

妙に語尾を伸ばす独特な喋り方に戸惑うも、ヒーロー活動に深く関わるであろうサポート企業の組合からの提案というものが気になる出久と発目。

一応、話を聞いてみることにした。

「提案……ですか？」

「はい。端的に言いますと、緑谷さんに英雄高校のサポート科に新設される専攻コースをお受けしていただけないかというお話です。お受けしていただけるなら私どものほうから推薦状もお出しさせていただく予定です。はい」

「ゆゆゆ、英雄高校の推薦?! しかも新設の!?!」

英雄高校に新設の専攻コースができるということと、自分がその推薦を受けられるという二つのビッグニュースに驚くしかない出久。

しかし、興奮よりも戸惑いのほうが大きく、さらに詳しく話を聞くことに。

新しく新設されることになったのは「テスター専攻コース」というサポート科に追加される専攻コースで、内容はヒーローの現場を知りつつも開発側の知識を併せ持った人材の育成ということらしい。

この決定はサポート企業の組合が各方面に働き掛けをしてようやく許可が降りたものだとか。

そうまでして新設した理由はというと、

「最近では開発者がヒーローの現場や実状を知らずに本人の理論や趣味だけでアイテムを作ってしまったせいで起きるトラブルが多くなってきているのです、はい」

「なるほど。それでヒーロー側と開発者側との間を取り持つ人間が必要になったんですね？」

「はい。お恥ずかしい話なのですが、開発畑に進む人間は癖の強いというか、ぶつちやけ変わり者が多い傾向がありまして、その暴走を止める人材を強く希望しているところもあるわけです。はい」

ちよつとガツクリときた様子で話す伊藤さんに、出久はすぐく同情した。

予想するに思いついたら試さずにはいられない人間ばかりなんだろうなあ。結果としてどうしてこうなった的なことも多いんだろう。

ふと、自分の彼女を横目で見てみる。

………なんだろう。既に自分がその求められているポジションにいるような気がしないでもない出久だった。

「そういう事情もありまして、テスター専攻では企業から送られてきたものやサポート科で開発したアイテムを実際のヒーロー科の実習と一緒に使ってもらったり、実際に自分でサポートアイテムを作ってもらったりと、ヒーロー科とサポート科の間みたいなカリキュラムを受けていただくことになります」

テスター専攻コースのことはよく理解した出久。

しかし、最大の疑問が残っている。

「その専攻コースのことは分かりました。でも、なんで僕なんかにこんなお話を？」

ただの中学生でしかない自分にこんな大きな話が舞い込んできたことに疑問を投げかける出久。

ヒーロー科との合同実習に参加できるなど願ってもないことなのだが、いままでの自分の不運具合をみると、素直には受け入れかねるのだ。

だが、そんな不安も伊藤さんの言葉で木っ端みじんに吹き飛ぶのだが。

「理由ですか？ 出久さん、これまで多くのアイテムを購入、または試供されてきた実績があるではありませんか。毎回使用後の感想や改善点の考察を詳しく話してくれる方なんてそうそういませんよ」  
生真面目でオタク気質な出久は、毎度使ったアイテムの感想や改善点の考察をメーカーや販売店などに送っていたのだ。

日々アイテムの有効な活用法を考えなければ普段からの不運に対

応できないという悲しい事実があるのだが、サポート企業からしてみれば滅多に使われない防犯グッズの使用後の感想が詳細な改善点の考察までつけて送ってきてくれるお得意様であるのだ。

しかも、詳しく調べてみれば独学ではあるが護身術を学び、ある程度の修羅場もくぐり抜けてきた人材である。

放っておくわけがない。

つまりは出久自身が理由である。

そのおかげで雄英の推薦がもらえるのだから喜んでいいはずなのだが、いまいち嬉しくないと感じてしまう。

「ハハハ、どうしよう明ちゃん。嬉しいはずなのに涙がでるよ」

「大丈夫ですよ出久さん。私もサポート科受かる予定ですから！一緒に頑張りましょう!!」

発目からの励ましを受けてすこし元気になる出久。

しかし、入学後に彼女の発明したアイテムで苦勞することをこの時はまだ考えてもいなかったのであった。

|||||

——サポート互助組合本部

「そうか、彼は受けてくれたか」

葉巻をくわえた人物が報告を満足げに受けとる。

そのレポートには出久の名前が記されていた。

「クッククック、これであの計画を進められるぞ！ヒーローをサポートアイテムで補助するのでは無い、サポートアイテムを使って戦うヒーローを作り出すのだ！」

上機嫌な様子で誰に言うでもなく一人語りつづける。

そこ、変な人だと言わない。

「そうしてヒーローを作り出したあかつきには、民衆のためではない、我が社のためのヒーローが誕生するのだ！」

HAPPY BIRTHDAY! と、叫んでケーキに燈してあったロウソクの火を吹き消す。

誰に見られているわけでもないのに演出過剰である。

寂しい人とか言っではいけない。

ついでにキーキは自分で朝早く起きて作ったらしい。

……暇人とか言っではいけない。

「我が社のロゴをつけたヒーローが活躍し、我が社のCM、イベントへの出演！ 我が社のマスコットヒーロー!!」

語る野望はけっこう健全というかささやかというか。

てか、その程度なら既存のヒーローに頼んでもやってくれそうな気がしないでもない。

それでも新しくヒーローを作りだそうとする理由とは……

「ああ、まさしくロマンだ」

サポート企業の間人は経営陣も一癖あるらしい。

続く？

### いづくアンラツキー その3 (前編)

雄英高校に入学した二人。

新設のテスター専攻で入学したのは出久一人であった。

同じサポート科のクラスメイトとも、カリキュラムが違うため場合によっては別授業となるとあつては、今後の交友関係の構築に不安があつた出久であつたが……

「明ちゃん。サポート科つて、濃い人ばかりだね」

「え、そうですか？ 普通の人たちだったじゃないですか」

そりゃ、君からしたらね。

心の中でそう返事をしつつ、出久はため息を吐く。

サポート科のクラスメイトは出久がテスターとして作ったアイテムを試してくれると聞き、何人も話をしに来たのだった。

純粹に将来自分のアイテムを使ってもらうだろうと挨拶に来たのは少数で、残りはモルモットになつてくれるよね！ などと物騒なことを告げに来るのが半分。もう残り半分は大事な自作アイテムを任せられるのか喧嘩腰で話しかけに来た。

入学してボツチということはなさそうだが、この先が思いやられそうである。

まあ、出久のこれまでのアイテムを使って切り抜けてきた鉄火場の体験談を語るだけでかなり仲良くなれた人が多かったのは幸いか。

「そんなことより、出久さん！ サポート企業から今度届くアイテムのデータがもうあるそうですね!! 是非、見せてくれませんか、見せてください、見せて!!」

「え、ええと、守秘義務とか機密とかあつたら大変だからちよつと見せてもいいか確認してからでいいかな?」

「それなら大丈夫です！ もう伊藤さんには許可はもらつてます!!」

「そ、そうなんだ。準備がいいんだね」

すごいな、この行動派オタク……

などと、自分のことを棚に上げた感想を持った出久。オールマイトが関わるものなら出久も似たようなものなのであるが。

うーん、似た者同士である。

ちなみにデータであるが、誰に見せても問題ないようなものしか送られてきていない。

冷静に考えれば、一学生に送るデータにそんな機密みたいなデータはのせやしないのだけれど。

急かす発目の声を隣で聞きながら、カバンから武骨でメタリックなデザインのタブレットを取り出す出久。

このタブレットに先ほどのデータが入っているのだが、このタブレットも実は企業からの試供品だったりする。

商品名『T800タブレット』。OSは『ジェニシス』という独自開発したものが使われている。

起動すれば画面には社名の『CYBERDYNE』と三角形のロゴが映し出されてロック画面へ。

暗証番号を入力してデータの入ったフォルダを開けてみれば、そこにはズラリと並ぶ製品の名前があった。

「おお！　すごいですね。日本の企業だけでなく海外資本の企業もありますよ！」

「うわあ、こんなに……全部、試さないとダメかな？」

憧れの企業の名前が並ぶのを見てテンションの上がる発目と、これから多くのアイテムを試しに使うレポートしなければならぬ未来を考えてゲンナリする出久。

二人の反応は両極端ではあったが、どちらにせよ確認しないことは始まらない。

「まずは……どこから見ているほうが？」

「日本企業からがいいのでは？　ヒーローの本場のアメリカの企業や海外の企業は楽しみに後にしましょう！」

どこから見ていくかは発目の案で日本企業から見っていくことに。

さつと確認していくといくつか出久の好みに合いそうなものを見つけた。

ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ



ブツブツブツ

「これくらいのものなら普段の生活でも使えそうだね。僕個人としてほしいかもしれない。特に相手を拘束できてしかも手軽に持ち運べるのが魅力だな。でも、よく見たら使うタイミングには気をつけないといけないかも。『超風社』の『雷弾』は便利そうだけど周りに電気製品があつたり自分も感電しそうなどところだと気をつけないと。それにビンだから持ち運びにも気を使う必要があるな。『光子力研究所』の『光子力バリアー』はSFチックだ。難点はすぐに割れるつてあつたけど、それでも一時的にでも攻撃を防げるなら有効かもしれない。問題はその強度がどれくらいかなんだけど、ここはやっぱり試してみるしかないか。『SBR社』の『ミートスプレー』と『東雲研究所』の『強力のり』はどちらも拘束に使えそうなアイテムだけど、両方欠点という特徴があるから使い分けが必要だね。とりあえず、どのくらいの効果があるのかデータが欲しいけどそれも僕が自分で調べないといけないのかな？ 届いたらデータもあるか？ あとで確認しないと……」

ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ

「――出久さん！ 戻ってきてください、出久さん！」

「あ、ごめんね。つい癖で」

アイテム考察モードになってしまい、ブツブツとつぶやき続ける出久を止める発目。

さすが普段からアイテムを使っているだけのことはある。

ところで、出久さん。君が考察しているアイテムは一般の人は『普段の生活』では使いませんか？

一方で今まで使ったことのないようなアイテムやどう使うかわからない物も。

『カイザフォン』 『スマートブレイン社』

回転閉式の携帯電話（ガラケー）型アイテムのカイザフォンにコードを入力してENTERキーを押し斜めに回転させることで

レーザー銃に変わります。単発モードは103。連射モードは106です。

「これは……威力が分からないと使いづらいかも」

「ですね。下手に撃って相手が死亡とか笑えないですね」

『メロンディフェンダー』 “ユグドラシル・コーポレーション”

マスクメロンがモチーフの大盾。先は刃物になっているため攻撃も可能。

「大きすぎて使いづらいなあ。てか、なんでメロン？」

「さあ？ 開発者の趣味じゃないですか？」

『GENERATION-3』 “S. I. C(Super Image native Company)”

強化外筋骨格、いかなればパワードスーツ。装着することによりパワーアシストと防御力の大幅な向上が見込めます。ただしバッテリー駆動の為長時間の活動には向かず、メンテナンスベースとなる専用トレーラーを同行させることが必要となります。

「パワードスーツ!? すごい、そんなものがあるんですか!? がぜん、気になります!」

「専用トレーラーって、学校に来るの?」

「さあ? どうなんでしょう?」

一学生に送って試すものじゃないよね。

などなど、といった具合に、ちよつと学生に使わせていいのか分からないものがあったりする。

なかには“柵有澤”が送ってくる予定の『HAND KNON』には「銃刀法違反でヤバイ」と説明があり、いろいろ駄目である。

そもそも、スペックを確認すれば、重量は10kgを超えており、弾頭・弾殻・使用火薬も威力マシマシと人類には扱えそくない代物である。

パーフェクト(にアウト)だ。

てか銃器を作ってるって、本当に日本の企業なんだろうか？

「あと、なんでこれって、送られてくるんだろう？」

「明らかに主旨を間違えてますね！」

二人がツッコむのはこの製品。

『全自動タマゴ割り機』 “T o s h i b a”

名前の通り卵を割ってくれる機械。これを使えばヒーロー活動中でも卵を食べることが可能である。なお、手で割ったほうが早いとは言ってはいけない。キャッチコピーは「あつと驚く主婦の味方」。いずれこの商品はサポートアイテムの枠を越えて一家に一台の家電となるだろう。姉妹品の「グルグルダシトール」も好評発売中。

家電製品を無理やりサポートアイテムだと言い張っているようなこの製品。

何がしたかったのかは分かるが、どうしてそこまでする必要があるので分らない製品である。

『プロトマイティアクションX』 “幻夢コーポレーション”

あの伝説のアクションゲームのプロトタイプです！プレイした感想を教えてください！

「え、ゲーム？」

「テスターって、たしかにそうですけど……」

『会長の手作りケーキ』 “鴻上ファウンデーション”

入学おめでとう、緑谷出久くん！ 高校生緑谷出久の誕生だ！  
ハッピーバースデー!!

「これ、ただのお祝いだよ!？」

「ええ。すごいおいしかったですよ」

「え?」

「はい?」

「……まあいつか」

日本の企業だけでもいろいろとツッコミどころ満載である。

さて、ヒーローの本場であるアメリカをはじめとした海外企業のア  
イテムはどうなるのだろうか。

### いづくアンラッキー その3 (後編)

濃すぎる日本企業の製品を一通り確認した二人。

なんかもう既におなか一杯って感じなのだが。

「と、とりあえず、海外企業も見ていこうか？」

「そうですね。がぜん、楽しみです!!」

少しゲツソリしている出久と、元気いっぱいの出久。

二人のテンションの差はあるものの、タブレットから目を離さない。

「じゃあ、さっそく……」

『レーザーピストル 正式名称AER9 Laser Rifle』  
ゼネラル・アトミックス社

ゼネラル・アトミックス社製品。片手用のレーザー銃。

相手は運が悪ければ灰になり、遺体の形も無くす。あるのは遺留品のみ。オプションパーツを使えばレーザーライフルは勿論、狙撃用のレーザー銃に早変わり! ———— の、予定ですが、まだ威力が足りません。現在はコンクリートに穴をあける程度です。無念……

「いやいや、十分だよ! 十分すぎるよ!!」

「高威力は開発者のロマンの一つですからねえ」

「お願いだから、ロマンだけで作らないでえ!」

威力を! さらに威力を! と、言わんばかりの紹介文に思わず悲鳴を上げる出久。

発目は少し理解を示したところがちよつと、怖いところである。

頑張れ、出久。君が求められているのはこういった開発者を止める役割なんだ!

『ブッシュマスターACR』 HCL社

アメリカ製のアサルトライフルです。使用弾薬は5.56×45mm NATO弾。装弾数は30発。重量は——

「マジもんの銃だ! 普通に鉄砲を送ってこないで! 日本、ここ日

本ですから!!」

「国際海運業者ってなってますけど、何を運んでるかはお察しですね」

おい、自重しろ武器商人!

日本に武器を持ち込むんじゃない。

『槍（ビーチパラソル）』 “カルデア・コーポレーション”

どこかから電波を感じて作ったビーチパラソルにもなる槍。かなり頑丈だが軽く作られている。折り畳み可能で、パラソルを広げればオールマイトクラスのパンチでもない限り壊れない耐久性をもつ。

「何でビーチパラソル? あ、そういえば、重厚な武装は見る人に凄惨さを印象づけるから忌避されるようになったんだっけ?」

「そうなんです。いわゆるクラウン・シヨックと呼ばれるものです。開発者としては見る人を意識したデザインも実力として見られるんです」

「なるほど」

アイテム一つから考察と豆知識を披露する二人。

会話がオタクチックである。仲いいねえ。

ところで、どこから電波を? なに? 特異点?

『ウェブ・シューター』 “オズコープ社”

手首に装着し、手のひらのスイッチを押すことで蜘蛛の糸に似た粘着液を発射できます。粘着液は空気に触れると硬化化してロープのようにも綱にもなります。

「すごい! これならいろいろと使い道が広がるなあ」

「粘着液も自然消滅するんですね。どんな成分が使われているのか気になりますよ!」

「ハハハ、調べていいか聞いてみるね」

使い勝手のよさそうなアイテムを前に興奮を隠せない二人。

蜘蛛の個性を使って活躍したヒーローをモチーフにしたアイテムは実用性ばっちりである。

ただし、普通の身体能力しかない出久には反発力を利用した空中移

動は危険なのでオススメできないが。

『ユーティリティベルト』 ムウエイン・エンタープライズ」

各種ツールなどを携帯できる多機能ベルト。必要に応じてフックシヨットなどのオプシヨンをつけることが可能。

「これは欲しい！ 僕はいろいろとアイテムを持ち歩くからなあ……」

「いつもカバンをゴソゴソしてますからね。拡張性もあるみたいですし、改造しがいがありそうです！」

「ほどほどにお願いしまあす!!」

とある企業の御曹司が超常黎明期にヒーローとして活躍していたころのアイテムを再現したものらしい。

現在、オリジナルはヴィランの手によって焼失しているが、無個性で戦っていたそのヒーローのアイテムは出久とも相性がよさそう。

これが発目をはじめとしたサポート科の人間によってどう改造されていくか……

『リパルサーレイ・ガントレット』 ムスターク・インダストリー・ジャパン」

ガントレットの手のひらからレーザーを発射する攻防一体の装備です。将来的にはパワードスーツの一部になる予定です。テスターとして詳細なデータを希望します。

「将来的にはパワードスーツになるのか。そのテスターって、なんか緊張するよ」

「アメリカでも大手のサポート企業ですよ！ 気になります。気になります。超気になります!!」

アメリカの有名サポート企業からの製品に出久は緊張感を、発目は期待感を隠せない。

こちらもかつてアメリカで活躍したヒーローのアイテムを再現したものだ。

再現との言葉から分かる通り、オリジナルはヴィランの手によって

破壊されてしまっている。製作者が天才であったこともあって、再現はなかなか進んでいないため、出久のデータは重要なものとなるだろう。

『救急スプレー』 アンブレラ・コーポレーション

外傷に吹きかけることで出血を防ぐスプレー。鎮痛作用もありません。使用効果をご報告お願いします。

「怪我したときに使える！ 嬉しいなあ、こういうアイテムは」

「出久さん。まずは怪我しないことを考えた方がいいのでは？」

「明ちゃん。どれだけ考えていてもどうにもならないことってあるんだよ?。」

「あー、ごめんなさい」

アメリカ大手製薬会社からのアイテムに素直に喜ぶ出久。

怪我が多いからね彼は。

避けようのない不運というのは多いのである。南無。

『ジャイロスファイア』 マスラニ社

強化ガラスの救命ポッド。二人分の椅子と救命セットが入っている。動力内蔵で瓦礫の山でも乗り越えられる。災害時にどうぞ！

「えっと、これはどう使えば?。」

「出久さん出久さん！ 二人乗りですって！ ……一緒に乗せてくださいね?。」

「う、うん。二人で、一緒に……ね」

甘い雰囲気を漂わせる二人。

突如発生した桃色空間は、周囲の人間を寄せ付けけないのだ！

『ち、爆発しろよりア充め!!』

実は二人が話していたのは学校の教室。

まだほかにも人が残っており、二人の話すアイテムの内容に耳を傾けていたのだが、甘い空気について舌打ちをしたくなったのだ。

パルパル。



## いづくアンラッキー その4 (前編)

「なんでここにいやがる。カステクウ!」

「か、かつちゃんがいるなんて……不運だ」

怒鳴る爆豪に頭を抱える出久。

ここは雄英高校の敷地内にある戦闘訓練場の一つ。

今日がヒーロー科1年A組初のヒーロー基礎学の実技訓練なのだが、いざ現場に来てみればヒーロー科ではない出久がそこにいたというわけである。

「理由は、僕も実習に参加するからだよ。テスター専攻だからサポートアイテムのテストもするんだ」

「はあ!? ヒーロー科と関係ないところでやれや!」

「僕に言わないでよ。ああもう、かつちゃんがいるとか不運すぎる」

「ンだとコラ! ブツ殺す!!」

キレる爆豪を切島が慌てて引き離し、沈静化を図る。

このままでは話が進まない。

「はじめましてだな。A組ヒーロー科の飯田天哉だ。よろしく」

「あ、H組サポート科でテスター専攻の緑谷出久です。よろしく、飯田くん」

「私、麗日お茶子です。よろしくねー」

飯田を皮切りに自己紹介をしていく面々。一通り終えたところで飯田が代表して皆が気になっていることを尋ねた。

「緑谷くん、勉強不足で申し訳ないのだが、サポート科のテスター専攻とは聞いたことがないのだが詳しく教えてくれないか?」

「ハハハ、それは知らなくて当然だよ。今年から新設されたコースだし、在籍も僕だけだからね」

「む、そうだったのか。それで、いったいどんなことを?」

「サポートアイテムの開発者と現場の橋渡しをする人材の育成だよ。ほかのサポート科みたいにアイテム制作の勉強をしながら今日みたいにヒーロー科に混じってアイテムの実際の使われ方やヒーロー活動の実態を学ぶってかんじだよ」

出久の説明にほかのメンバーは分かったような分からないような。まあ、開発者たちの変人度を知らないと言っているのか分からないだろう。

むしろ、反応したのは別のところ。

生徒が作ったアイテムだけでなく、企業が作ったアイテムの試作品もテスターとして送られてくるという部分だ。

ヒーロー科としても、将来自分が使うかもしれないアイテムは気になるのだ。

「へえ、たとえばどんなのがあるんだ？ パワードスーツとかあったりして」

「パワードスーツ？ あるよ？」

「あるのかよ!？」

冗談交じりに効いた瀬呂だったが、実際にあると言われると驚くしかない。

实例を見せるべく、愛用のタブレットを使って紹介を始める。

『黄金騎士スーツ』 『ガラム重工』 製や、『ステルススーツmk I I』 『X-113 研究施設』 製などを紹介していくと、A組の皆も楽しそうに声をあげた。

いつの時代も強化スーツやパワードスーツはロマンがあるのだ。

まあ、『自力で脱げなくなり暴走します』だとか、『ちなみに薬物投与は戦闘時にピンチに陥った時大量に使いますので薬物中毒にご注意（この先は掠れて見えない）』とかの怪しい部分は意図的に隠しておいたのだけだ。

世の中知らない方が良いこともあるよね？

「あー、キミたち、そろそろ始めるから雑談はやめなさい」

盛り上がっているところへ、オールマイトから注意が入って整列する皆。

出久もタブレットの電源をオフにする。シャットダウン時に映る『I, ll be back……』とサムズアップして沈んでいく機械の腕の映像を確認して出久も列に並ぶ。

戦闘訓練は二人一組での屋内戦闘だった。

パートナーは麗日お茶子。対戦相手は飯田天哉……そして、爆豪勝己！

||||| グーグルの位置を修正し、右手・左手と順番に装備を確認していく出久。

体中に装備をつけてはいるものの、初回ということもあって比較的軽装備である。いま一番重たいのは背負っている盾形の光子力バリア発生装置くらいだ。

新型のテイザーガンをチェックする出久にパートナーの麗日が声をかけてきた。

「緑谷くん、準備中に悪いんだけどそろそろ作戦会議しよ？」

「あ、うん、ごめんね。待たせちゃって。で、作戦だけど……」

意見を交わす二人。主に話をするのは建物への潜入方法について。

出久のアイテムと麗日の個性で屋上から潜入する案やあえて正面突破などいくつか案が出たが、麗日の負担や戦力の分散の愚を考えた結果、窓からの潜入となった。

潜入方法を決めたところで時間も無くなり、作戦会議は終了。あとは出たところ勝負である。

「潜入成功。……クリア！」

「うん！　なんか緑谷くん、慣れてるね」

「アハハ、まあ、過去にいろいろと、ね？」

テイザーガンを構えながら安全を確保する姿はなかなか形になっており、感心する麗日に出久は複雑な表情を浮かべた。

不運に巻き込まれて悪党の拠点ヤクザをうろつく羽目になった過去の記憶など嬉しい記憶ではないのであるからして。

屋内を進む二人。途中、曲がり角に近づいたところで嫌な予感を感じて飛びのく出久。

次の瞬間に爆豪が飛び出してきて、爆破攻撃を仕掛けてきた。

「クツ、麗日さん、大丈夫!？」

「うん！　ありがとう」

「デクこら、避けてんじゃねえよ」

麗日を助け起こしつつ、体勢を整えた出久は思わず舌打ちをしそうになる。

手に持っていたテイザーガンから火花が飛び散り、見るからに破損してしまっている。

『モロい!? あとでレポートに“耐久性に難あり”ってしておかないと。でも、キツイぞ、これ』

いきなりメインウエポンを失うという不運。だが、この程度のことはいつものことだ。すぐさま気持ち切り替える。

テイザーガンを投げ捨て、新型の特殊警棒を手取る。

伸縮式の警棒は一瞬で使いやすい長さとなり、爆豪へとその先端を向ける。

「麗日さん、先に行つて。かつちゃんは僕が相手をする!」

「ハッ! 上等だ。中断されねえ程度にブツ飛ばしたらあ!!」

右手で大振りな攻撃を仕掛けてくる爆豪だが、それより早く出久が動く。

左手首からフックブレードを伸ばし、相手のコスチュームに引つけて前のめりに体勢を崩し、そのままその背中の上を転がるように勢いをつけて投げ飛ばした。

防御や高所への移動の補助のためのフックを活用した使い方。

多くのアイテムを使って鉄火場を潜り抜けてきたのは伊達ではないのだ。

「ムカツクなあ……そうやって無個性よりも雑魚のマイナス個性のくせにちよろちよろと目障りで……ムカツクなあ!!」

立ち上がりながら怒りを顕わにする爆豪に出久はビビりながらも真正面から対峙する。

再度ぶつかる爆豪と出久。

爆豪の蹴りを警棒で受けながし、左手のフックブレードで反撃。しかし、爆破の空中移動で避けられ、追撃の爆破をなんとか飛びのく。

短い時間で多くの攻防を交わす姿にモニター越しの同級生たちは歓声を上げるが、当の本人は冷や汗が止まらない。

「熱ッ!」

金属製の警棒に爆破の熱が伝わり、たまらず取り落してしまふ。

『ああもう！ 持ち手まで金属だところなるよ！ 武器なしでかつちやんとやれつての!?!』

なんとか互角のように戦っているが、かなりいっぱいいっぱいだったりする出久。

不利な状況になった時の常套手段といえばこれだ！

「戦略的、撤退！」

「何イ!? クソが！ なんだこの煙」

忍者よろしく煙玉を投げつけて逃亡する出久。

ある意味逃げ癖がついているわけだが、たいてい逃げ切れなかったりするのだけれど……学習能力がないとは言ってはいけない。

そうして逃げ出した出久は、物陰に隠れて反撃の算段を立てはじめる。

メインの武器を二つ失ってしまったている状態では、正面突破は難しい。何か策を考えなければ。

『さて、どうする？ いや、まずは状況を知ることから始めないと。そういうえば、偵察機のアアイテムがあったはず』

情報収集を第一に考え、『シエンフェールド』という携帯端末を取り出し、丸い小型の偵察機を飛ばす出久。

カメラを起動させて一番に映りこんだのは爆豪のドアップの顔であった。

「見イつけたア!!」

「ギャアアア!?!」

画面越しのあまりの迫力に悲鳴を上げる出久。そして爆破によって偵察機はあえなく撃ち落とされてしまった。

「な、なんでここが!?!」

「物陰からンなもんが飛び出て来たら誰だつて見に行くわ！ このアホが！」

不運にも偵察機が飛び立つところを見られており、一発で場所がばれてしまったのだ。うーん、アンラツキー。

けっして出久もわざとやっているわけではないのだが、爆豪からし

たらなめているとしか思えない。

「そおかよ。てめえ、俺を舐めてるんだな？」

「そ、そんなことないよー！」

めっちゃ警戒して戦ってるよ！ と、出久が主張するも聞き入れられるわけも無し。

怒りに震えながら右腕の籠手のギミックを操作する爆豪。

「俺の要望通りなら、こいつを使えばてめえのフザけた考えもできなくなる」

『爆豪少年、ストップだ！ 殺す気か!?!』

危険を感じ、制止するオールマイトの言葉を見無視し、爆豪はトリガーに手をかける。

「当たんなきや死なねえよー！」

安全ピンを引き抜き、最大火力を放つ。

一方、出久はヤバい雰囲気を感じ取り後ずさりしようとして……  
「あっ!?!」

先ほどの偵察機の残骸に足をとられ、特大爆破の射線上へ。

転んで倒れる最中、爆豪と視線が合う。

『な、何しとんじゃ、てめえはー!?!』

『や、やっちゃったー!?!』

最大火力、直撃。後には何も残っていない……

『み、緑谷が死んだー!?!』

『この人でなしー!!』

クラスメイトの声は届いていないが、人の命を奪ってしまったと、青ざめる爆豪。

残念。緑谷出久の物語はここで終わってしまった！

## いづくアンラツキー その4（後編）

緑谷出久は爆豪の放った最大火力の直撃を受けて骨も残さず消し飛んでしまった……。

わけもなく。

「痛い……けど、生きてる。なんとか生きてる」

緑谷出久は生きていた。

爆破の直前にとっさに使った光子力バリアが盾となり、外に飛ばされたところを右の腰に装備していたグラップガンを射出。建物の壁にぶら下がって落下死を避けたのだった。

ただし、完全に防げたわけではなく全身はやけどだらけで、さらに不運なことに鉄筋の一部が左腕に突き刺さり、大きく出血していた。

ダラリと垂れ下がった左腕が痛々しいが、まだ体は動く。

グラップガンを巻き取り、近くの窓から建物に転がり込む。

全身の痛みをこらえつつ、左腕の出血を止めるために救急キットを取り出す。

緑色をした鎮痛剤（アンブレラ社製）を針無しで使える専用の注射器にセットして左腕に打ち込み、刺さっている鉄筋を一気に引き抜く。

「ツ~~~~~~~~~！」

苦悶の声をあげて耐える。すぐに出血を止めるために救急スプレーを吹きかけ、止血帯で血止めをして立ち上がる。

フラつく視界のなかでぼんやりと考え事をする。

『薬の種類を、色で区別するのはいいアイデアだけど……薬に直接はだめだよ。まるで体にウイルスでも入れてるような気分になる』

終わった後に書くレポートのことを考えていた。そんな場合ではないのにもう考えていることがめっちゃくちゃである。

おぼつかない足取りで建物を歩く出久。

そこへ訓練中断を受けて出久を救けにきた麗日が駆け寄ってくる。

「緑谷くん、大丈夫!」

「やあ、麗日さん。すごいね。二人に分身出来るんだあ……」

「あ、これ、駄目なヤツだー!!」

ちよつとイツちやつてる笑顔の出久に慌てる麗日。

身体を支えようと近づいたその時、出久の不運体質が仕事をしてしまった。

「え、ちよつと、緑谷く、ひゃん!？」

タイミング悪く限界を迎えた出久は麗日に倒れ込み、そのナイスなバストに顔をうずめることとなった。

ラツキースケベつてやつだ。珍しくラツキー？

いいや、そんなことはない。重症の身体に麗日のビンタを受けて吹き飛ばされたのだから。

無重力で慣性のままに壁に激突した。

そのまま痛みで気絶した出久。まあ、その痛みは甘んじて受けるべきである。

「ふ、不運だ……」

「ご、ごめんね！ 緑谷くん!!」

|||||

「ありがとうございました」

包帯だらけで保健室を出る出久。

リカバリー・ガールの治療を受け体力を消耗しながらもなんとか歩き出す出久。

もう一歩間違えば死ぬところだった割にはタフである。

日常は I z u k u M u s t D i e ! だが、出久本人は D i e H a r d でなかなか死なないのである。

「大丈夫でしたか？ 出久さん」

「あ、明ちゃん。ごめんね心配かけて」

出久が怪我したと聞きつけてやってきた明。

心配をかけたことを謝る出久だが、明は首を横に振って答えた。

「別に出久さんが無事だったのならそれだけで充分です」

「明ちゃん……」



彼女の笑みに思わず感動する出久。自分を思ってくれる人がいるというのは嬉しいものである。

「それよりも、今日の映像も撮ってあるんですよね？ 是非、見せてください！」

「明ちゃん……」

あ、本当に無事だっただけでいいんだ……

無事と分かった瞬間に今日の訓練の映像を要求してきた明にガツクリする。

いつものことだが、先ほどの感動を返してほしいと思うしかなかった。

Googleに内蔵していたカメラを通した出久の一人称視点の映像をタブレットで見始める明。

そんな自由な明にやれやれと肩をすくめる出久だが、責める気持ちには全然ならない。

これも惚れた弱みというやつだろう。

「ねえ、出久さん？」

「ん、何かな？ 明ちゃん？」

明の呼びかけにフツと笑いながら振り向いた出久は、その表情を引きつらせてしまった。

そこには映像を一時停止させたタブレットを見せている明の姿が。

「これって、どういうことですかね？」

「えっと、それは……」

映像は麗日の胸に飛び込んでしまった例の事故シーンである。

あまり彼女に見せていいシーンではない。

「何か言い残すことはありませんか？」

「わ、ワザとじゃないんだ！」

『なんで浮気した男みたいな台詞を』とか、『許す気ないよね？ その言葉!』とか、言いたいことはあったが、何を言っても無駄である。

出久はあえなく企業から送られてきていた『スタンヌンチャク』によつておしおきされてしまったのだった。

「もう、心配させておいて何をしてるんですか！」  
「ふ、不運だー！」

## いづくバトラー いづくバトラー（前編）

人は生まれながらに平等ではない。

緑谷出久が齢4歳にして突きつけられた現実だ。

その現実には幼い出久を打ちのめすには充分過ぎる事実であった。

緑谷出久は“無個性”だ。

世界総人口の約8割が何らかの特異体質となった超人社会において何の特殊能力もない人間。

それが“無個性”である。

この事実を“個性”を使って活躍するヒーローになることが出来ないことと同義であり、出久の夢を否定することだった。

そんな残酷な現実を突きつけられた出久は――

「僕は……ヒーローになれない……」

立ち直ることが出来なかった。

心の傷は大きく、情緒不安定な毎日。

しまいには、大好きであったオールマイトの姿を見るだけで泣き出す始末だった。

自分があることが出来ない理想の姿を見ることは既に苦痛ストレスとなっている。

ストレスから逃れるにはその原因から離れることが一番だ。

つまり、一番のストレス原因となっているオールマイトを目にした環境こそ出久が必要な場所であった。

心配した母親は夫に相談した結果、一つの決断をする。

「出久……お父さんの所へ行く？」

「……うん」

オールマイトがいる日本を離れ、父親が単身赴任する海外へ。大きな決断だった。

こうして緑谷家は日本を去り、海の方こうへ。

ユーラシア大陸を挟んだ歴史ある島国。女王が治める連合王国、イ

ギリスの地へと。

イギリスに渡った出久であったが、慣れない環境に捨てきれないヒーローへの憧れと、すぐには元気になれなかった。

見守るしかない両親の下へある日イギリスの友人が一つ提案を持ってきた。

「ヒーローと違う職業、違う世界があることを教えてあげればよいのでは？」

ヒーローになれなければこの世の終わりみたいな顔をしているのなら、それ以外の可能性を教えて世界を広げてやればよい。

そういう友人に母親は不安をこぼす。

「でも、いったい、どんな職業を見せればいいでしょうか？ ヒーローに代わるものとなると普通の職業では……」

「ふむ。そうですね……ヒーローに負けないほど特殊なものとなれば――」

友人はその職業を告げる。

すなわちそれは、執事バトラーである、と。

その友人の好意により、出久はいろいろなお屋敷を訪れ、その家の執事の仕事を覚えて回ることとなる。

「ようこそ、出久くん。今日一日、私の仕事を一緒に体験致しましょう」

「は、はい」

「注意点が一つ。地下には決して近づいてはいけませんよ？ 怖い、吸血鬼がいますからな」

「ピ、パイ!？」

とあるお屋敷では、片眼鏡をつけたオールバックの老執事の仕事を  
見て回り、

「うわあ、すごいや!!」

「執事たる者、この程度のことが出来なくてどうします?」

「こんなにすごいのに、セバスさんは目立とうとしないんだね」

「あくまで執事ですから」

あるお屋敷では長身痩躯で黒髪のお執事から華麗な手並みを見せられ、

「出久、お嬢様はどちらに行かれたか知らないか？」

「おじよーさまなら剣人にいちゃんと『おうどん食べに行く』って、出てったよ」

「……あのバカ弟め！ 出久、少し出かけてくるが留守番できるか？」  
「うん、いってらっしゃい」

とある家では兄弟で一人の主に仕える執事の様子を見て過ごし、

「やれやれ、彼女のうっかりは相変わらずだな」

「せっかくのランチ忘れてっちゃったね」

「今晚は腹ペコで帰ってくるだろうからごちそうにしてやろう。お手伝いを頼めるかな？ 出久」

「うん！」

ある家では褐色の肌に白髪のお執事から料理でもてなされ、

「クラウスさんも無茶振りが過ぎるよ……失敗したらマリアさんから叱られる」

「ハヤテ兄ちゃん、がんばれ！」

「ありがとう、出久くん！」

とあるお屋敷の少年執事からはめげないことを教えられた。

いろいろな執事からいろいろなことを教わり、出久は少しずつ元気を取り戻していった。

これでめでたしめでたし。

と、なれば良い話で終わったのだが、歯車が狂うどころかはじけ飛んだのはある日の夜のこと。

執事同士のコミュニケーションにて偶然にも出久の面倒をみた面子が集まり、出久の話題で盛り上がったのだ。

最初は「素直な良い子」だとか、「気遣いができる」「才能がある」などの褒め言葉で和気藹々としていたのだが、そもそのなぜ、出久が「執事見学」をすることになったのかその理由について話題が飛んで

から雰囲気が一変した。

『ヒーローになれない代わりに別の職業を見て回るため』

他人が聞けば納得の理由だが、己の仕事にプライドを持つ彼らにはカチンとくるものがあつたらしい。

言つてしまえば、ヒーローの代用という点が非常に気に入らない。

そのとき不幸にも彼らが珍しく酒を嗜んでいたこともあり、話は飛びに飛んで結論は急降下で不時着することに。

『かくなるうえは、各々の技術を叩き込み、史上最優の執事にするしかない』

と……。

こうして一晩の熱狂により最優の執事となるべく教育を受けることが（本人不在で）決められた出久。

ここまで超一流の執事たちから教えを受けることができるなんて、世界のどんな人でも受けられない好待遇だ。

なに？ そもそも誰も受けたがらない？

そんな細かいことは気にしなくていい。イギリス料理のように大雑把にやればよい。

頑張れ、出久。

君は、最高の執事になれる！

「ど、どうしてこうなったんだろう……」

To Be Continue（後編へ）

おまけ く執事たちの危険な会話く

「フフ、楽しみですな。私ももうロートル。後進の育成には力を入れませんが」

老執事のウォルターが煙草をふかしながら笑みを見せる。

「そうおつしやるなら教育全体の監督はウォルター殿にお任せしましょう。私は……坊ちゃんの家庭教師の経験がありますから、学問全般を受け持ちましょう」

黒髪をいじりながらセバスチャンが役割を申し出る。

その言葉を受けて若い日本人の執事が自分の役割を申告する。

「ならばオレはマナー全般を。お嬢様より幼いならむしろ変なクセがついていなくてやりやすいだろう」

「良いですな。弟くんにもお手伝いしてもらってはいかがですか?」

「……反面教師としてなら役に立つかもしれないですね」

ウォルターに弟のことを話題出され、皮肉げな返事を返す柴田理人。

次々と役割が決まる中、褐色肌白髪 of 執事エミヤは肩をすくめて、「やれやれ。このメンバーでは私などが教えられるのは料理くらいのものだな。強いて言うなら弓術と剣術くらいか」

「おや、戦闘技術も教えるので? ならば私の「特技」も伝授してもよさそうですね」

「な、なに? あなたの「特技」だと?」

何気なく口にした武術にウォルターが興味を示す。が、エミヤはそれどころではない慌てよう。

当然だ。この老執事の「特技」は普通ではないのだから。

焦るエミヤに対し、残り二人の執事の反応は逆であった。

「これはこれは。「死神」の後継者でも育てるおつもりで?」

「フツ、なあに。私だけでなくあなたも何か教えて差し上げればよろしい。戦闘技術などいくらでも教えられるでしょう?」「黒執事」

殿

物騒な二つ名で呼び合う二人の間に緊迫した空気が走る。

それを横で見ているエミヤの頬を汗が伝う。

「主の敵を殲滅する「死神」に家人の敵を壊滅させる「黒執事」の戦闘技術だ?! ええい、出久を殺し屋にでもするつもりか!」

「ふん! たいそうな二つ名があるのはお前もだろうか? かつて紛争地帯を渡り歩いた「掃除屋」」

「……あまりその呼び名で呼ぶな。「本郷家の番犬」め」

こちらはこちらで一触即発の気配。

どうしてこう、危険な執事ばかりなのか。

「ちよ、ストップ! なんで殺し合い寸前みたいな空気になってるんですかあ!?!」

危険地帯へ見ていられないと飛び込んだのは少年執事の綾崎ハヤテ。

比較的まともな彼だが、比べている相手が悪いだけで充分ビツクリ人間に属しているのであしからず。

こんな濃い面々が師匠である。

出久の未来は……ドウナルカー？

|| || || || || || || || || ||

愉快的師匠たち紹介

師匠：ウォルター・C・ドルネーズ（元ネタ：HELLSING）

パーフェクトだ、で有名な老執事。この人に弟子入りしたら無個性でもヒーロー間違いなしやね。人間のまま吸血鬼を細切れにする人ですよ？

全体の教育を監督。戦闘技術なんかも。

先生：セバスチャン・ミカエリス（元ネタ：黒執事）

あくまで執事なあの人。学問全般担当。きつとスパルタ式である。

Mr.：柴田理人（元ネタ：メイちゃんの執事）

俺様系万能執事なあの人。なお、実写版の中の人にはセバスチャンと一緒にすね。関係ないけど。

マナー全般と剣術を担当。エミヤの剣術は邪道だつてさ。

お嬢様付きの執事には決闘デュエロが常識だから必須スキルさ（白目）

シェフ：エミヤ（元ネタ：Fate/stay night）

アーチャー？ え、こいつバトラーだろ？ 違うの？

料理および弓術など。そのほか女性の扱いには一家言あるらしい。

先輩：綾崎ハヤテ（元ネタ：ハヤテのごとく）

貧乏執事。不幸体質。割と頑張れとしか言いようがないよね。てか、人外染みた身体の丈夫さである。そういう個性なのさ！

アドバイザーや相談役。



## いづくバトラー（後編）

——日本 某国際空港にて

「うーん、日本の空港に降りると味噌や醤油の香りがするって本当なんだな」

長い空の旅を終え、大きく背伸びをする少年。

緑の髪をオールバックでまとめた彼こそ14歳になった緑谷出久であった。

10年前にイギリスに渡り、何の因果か超一流の執事達に教育を受け、今や立派な執事と成り果てて帰ってきたのだ。

本人的にはどうしてこうなったとしか言いようの無いのだが、最終的に今の自分に不満は無いのでよしとしておこう。

あのままヒーローになれないと燻った思いを抱えつつけるよりよっぽど精神的にはマシだ。

とにかく、10年間の修業を終え師匠たちから合格のハンコをもらった出久は、最終実習として一人であるお屋敷にご奉公にでることとなったのだ。

そして、今回そのお屋敷が日本ということ、10年ぶりの帰郷となった次第なわけである。

久しぶりの日本ではあるが、当然のことながら各種外国語と共に勉強していたので問題は無い。

教育係曰く、「この程度のことが出来なくてどうします？」とのこと。

「さてと……あー、電車の時間までもう余裕が無いなあ。急がないと」師のウォルターから貰った懐中時計で時間を確認して眉をひそめる出久。

久々の故郷ということもあって少々のおんびりしすぎたようだ。

時間はマナーの王者だ。相手のところへ遅れて行くのは失礼だろう。

行き先は愛知県。新幹線に乗っていけばすぐに着くはずだ。

|||||

見上げる程の高さの豪華な作りをした門を前に出久は呼び鈴を鳴らす。

インターホン越しにやりとりを少しした後、門が開き中から老執事が顔を出した。

「本日よりお世話になります、緑谷出久です。よろしくお願い致します」

「ようこそ、八百万家へ。私は家令の内村と申します。どうぞよろしくお願いします」

お互いに挨拶を交わし、屋敷の案内とほかの使用人との顔合わせを済ましていく。

10年間教育を受けただけあって、出久の仕事を覚えるスピードは早く、あと3日もあれば長年ここにいた人と同じ程度には働けるようになるだろう。

一通りの案内を終えたところで、内村が出久に向き直る。

「さて、これからお嬢様に会って頂きますが、緑谷くん。最終確認です。執事だけでなく「アチラ」の腕もたしかなのですな？」

真剣な表情で問い掛ける内村の目は厳しく、最後まで出久がお嬢様を任せてよいか確かめていた。

その表情を見て出久も真剣な表情で頷いて見せた。

「ええ、師匠たちの別の「お役目」の技術についてもしつかり教えこまれましたから」

「……わかりました。信用しましょう。その言葉を」

返事を聞き背を向けて歩き出す内村。

これから八百万家のお嬢様に出会うのだ。

「本日より百お嬢様のお付きの執事となりました、緑谷出久と申します。以後、よろしくお願い致します」

「まあ。お若いとお聞きしてましたが、私と同じくらいの方なのでわね」

「お嬢様と同じ年の14歳です。4歳のころより執事教育を受けてまいりましたのでお役には立てるか」と

挨拶をすると年齢に驚かれたので、実力を疑問に思われたかと心配に思いフォローする。

が、しかし、そんな心配は杞憂だったようで、お嬢様・八百万百は手を振って否定してくれた。

「いいえいいえ。てつきりもう少しご年配の方が来られると思っておりましたから、驚いただけですの。」

緑谷さん、せっかく同じ年なのでから、もう少し言葉を崩してくださってもよいのですよ?」

「それは……では、人がいないところでしたら」

「おや、そうなるやと爺やお邪魔ですな。それでは失礼させて頂きませぬぞ」

お茶目に退室していく内村を見送った後、二人つきりで話をする。

どうやら百お嬢様はお優しく人柄もよい方のようで、出久も一安心だった。

まあ、師匠や先輩の主が特殊すぎるだけな気がしないでもないが……

二人だけになったところで改めて挨拶を交わす。

「えっと、これからよろしく。って、感じていいのかな? お嬢様?」

「ええ、かまいませんわ。よろしくお願いしますわ。緑谷さん」

こうして、出久と百お嬢様との毎日が始まったのだった。

いづくバトラー【モモちゃんの執事】

オマケくモモちゃんの執事の日常く

## 1. 登校前

朝の慌ただしい時間。

お嬢様のお世話をしつつも、自らの登校の準備をしなければいけない出久。

雇用主の意向により、出久も学生としてお嬢様と同じ学校に通うことが決められていたのだ。

ちなみにこの出久、すでにイギリスで大学の単位を飛び級で習得していたりするのだが、それはそれだったり。

「登校のお時間です、お嬢様」

「……先ほどまで執事服でしたわよね？　いつのまに学生服に？」

少し目を離れた隙に執事服から学生服に着替えていた出久に驚きの声を上げるお嬢様に出久は笑顔で、

「八百万家の執事たる者、早着替え程度、出来なくてどうします？」

「す、すごいですね。執事というのは」

出久くん、どうやら先生の口癖が移っている様子。

ついでに、周りのほかの使用人は出久の言葉に内心でツツコミを入れた。

『いやいや、できないから！　執事をなんだと思っっているんだ！』

いきなりハードルを上げられて困惑であろう。

## 2. 勉強後

百がそろそろ勉強を一段落しようとしたところに、トントンと規則的なノックの音がした。

「はい、どなたですか？」

「緑谷です。そろそろご休憩かと思ってお茶をお入れしました」

こちらの様子を見ていたかのようなグッドタイミング。さすが10年間の教育を受けたのは伊達ではないと思わせるような仕事ぶりだ。

ちなみに、執事はノックをする必要はないのだが、お嬢様と年が近いということもあり特別に配慮してすることとなっている。

年頃の女の子が同い年の男の子に自由に部屋に入られるというのは嫌だろう。

用意されたカップを持ち香りをかぐと紅茶とは違った匂いが鼻を満たす。

「良い香りですわね。紅茶ではないようですけど……」

「お疲れかと思ひ、ハーブティを」

「茶葉は何を？」

「リラックス効果と美肌効果のあるラベンダーとローズヒップのブレンドで」

「お茶請けは？」

「低カロリーでヘルシーなおからクッキーを」

「厨房にお母様は？」

「断固として入室は阻止しました」

流れるような会話に、最高の入れ方で出されたお茶とお菓子。

「パーフェクトですわ、緑谷さん」

「感謝の極み」

お嬢様の賞賛に頭を下げる出久。

ちなみにいうと、今回一番大変だったのはメシマズの奥様を厨房に立たせないようにすることだったりする。

いくらなんでも雇用主にメシマズだと伝えるのは……

3. 学校にて

「緑谷くんって、帰国子女なの？」

「しかもイギリス！ なんかなんか、紳士的だよね！」

「じゃあ、イギリスらしく今度おいしいお茶とお菓子でもいかがかな？」

笑顔で女の子たちと会話を弾ませる出久。

しばらく話をした後、女の子たちは黄色い声を上げて去って行った。

その一部始終をみていた百お嬢様はため息をついてあきれた様子だ。

「緑谷さんって、女の子の扱いが上手ですよのね」

「う、うん、まあ、女性の扱いは口うるさく言われたから」

なぜか遠い目をして答える。

出久の中で師匠たちの一人、シェフ・エミヤの言葉がよみがえった。『いいか、女性は怒らすと怖いぞ。さもなくば、冬のテムズ川に叩き込まれるハメになる……』

イモの皮をむきながら背中であつていたシェフ・エミヤ。

哀愁漂う姿をみて出久はわけも分からず泣きそうになったのを覚えてる。

ただ、そいつから女性の扱いを学んだのは失敗だったと思うんだけどな。その先は地獄かも？

???

深夜。資産家である八百万家を狙い悪党が蠢いていた。

そう、先程までは、だが……

「て、てめえ、何者だ!？」

八百万家の一人娘を誘拐するべく動いていた仲間たちはすでに全員が気絶するか拘束されてしまっている。

残った最後の一人は恐怖に震えながらも、自分たちを追い詰めた相手に啖呵を切っていた。

「ただのゴミ処理係さ、悪党。まあ、もう会うことはないだろうけどね」

死刑宣告のごとき言葉を投げかけ、無慈悲にも意識を刈り取る。

ゴミ処理を終え、その人物は携帯を取り出して警察へ匿名の通報を入れた。

そうして外に出ると、八百万家の家令・内村が車を用意して待っていた。

「ご苦労様でしたな。流石は『死神の後継者』 第二黒執事』 掃除屋』 『番犬の弟子』 ですね」

「ちよ、ちよつと呼ばれ方が多くないですか!？」

……コ、コホン。家人の危急をお救いするのは執事のお仕事ですか」

自分についた異名にげんなりしつつも、ヴィラン退治について平然と答える出久。

八百万家お嬢様付執事、兼、ボディガード。

それが緑谷出久である。

……執事ってなんだっけ？

## いづくバトラー その2 (前編)

『私、ヒーローになりますわ!』

そう力強く宣言する百お嬢様の姿が脳裏に残って離れない。

本格的に進路志望を決める時期となり、第一志望を雄英高校ヒーロー科とした際にご両親に告げていたものだ。

かつて憧れていたヒーローを目指すとお嬢様に言われたが、たいして心を動かしていないことに自分でも驚く出久。

日本を出ていくくらいに心を悩ませていたのに10年もすればこれだ。

昔の自分の悩みなんて今振り返ればそんなものである。

『10年間の執事修行に比べれば……よそう。思い出すのはいろいろとヤバイぞ!』

修行内容を思い出し、身を震わせる出久。過酷な修行だったな……。

「貴様がウォルターの弟子か……いいだろう、教育してやろう! 豚のような……悲鳴を上げろ!」

超一流の執事たちに超一流の技術と精神を叩き込まれた——若干執事以外からも教育を受けたが——今となっては大抵のことは何とかなるような気がする。

というより、今の出久ならヒーローにすらなれるだろう。

『というか、ヒーローになるより執事になるほうが大変って、普通じゃない気がするでもない。うわ、僕の師匠たち、人外すぎ!』

改めて自分の師たちのデタラメさを痛感し、一人ガツクリする。

まあ、おかげで自分に自信が持てるようになったし、執事という仕事も自分の天職のように感じているので不満は無いのだが。

「奥様、( )相談とは?」

百の母親に呼び出され、お茶の用意をしながら話を聞く出久。

奥様の用件は当然のことながらお嬢様のことであった。

「あの子、ヒーローを目指すって言ってたけれど、危険も多いお仕事。」

心配でもありません。この先、娘は大丈夫かしら？」

娘の将来を心配する母親の言葉に出久は心が温かくなるのを感じた。

「百お嬢様なら大丈夫ですよ。心も体も頭脳もどれも優秀で向上心があるお方ですから」

「そうですね。それは分かっていますの。親バカかもしれないけれど、娘は優秀だって。それでも心配になりますの」

ほう、とため息を吐く奥様。

母親として娘のことが心配というのは当然と言える。

そんな家人の不安を黙って聞くのも執事の仕事だ。

「はあ……いっそ、高校にもあなたがついて行ってくれば安心なのだけれど……いえ、むしろ、そうしたほうがよいのではないかしら？」

「お、奥様？」

奥様の天然暴走の気配を感じ、慌てる出久。

だが、経験則に従えば、この場合、大抵は止まらないのが常なわけ……

「そうですね。それがいいわ！ 緑谷くん、娘と一緒にヒーロー科に通ってくれないかしら？」

「奥様……」

当たり前のようにヒーロー科へ通うように言われ、思わずあつげにとられる。

国内最難関の高校だと理解しての言葉だろうか？ それとも自分なら大丈夫という信頼のあらわれ？

どちらにせよ主が望まれたのなら執事のすることは一つ。

「八百万家の執事たる者、お望みとあらばヒーローにすらなってみせます」

|||||

——雄英高校。一般入学試験日。

お嬢様は一足早く推薦入試に合格しており、今日受けるのは出久だけだ。

少し前、母親の我儘と自分のために進路を決めさせてしまったこと



を百お嬢様が心配していたが、昔の夢を叶えるのだと思えば否というわけではない。

それに、お嬢様がヒーローを目指すならば執事として側にいられると思えば問題はない。むしろ大歓迎だ。

「しかし、奥様といい、お嬢様といい、僕が合格すること前提で話すのだものなあ……」

これは期待に応えねば、と、張り切る出久に怒鳴る人物が。

「俺の前にボサツと立ってんじゃねえよ。クソモブが!!」

「これは失礼……んん?!」

振り向いて謝罪したところで相手を見て固まる出久。

薄い金髪に赤めの三白眼で口の悪い男子学生。

出久の記憶の中にヒットする人物が一人いる。

『かつちゃん?! こんなところで会うなんて、すごい偶然だ』

久しぶりに会う幼馴染へと言葉を探すが、現実は無情だ。

「さつきからなアに人の顔をじろじろと見てやがんだ、クソモブが。喧嘩売ってんのか、アあん!」

「……いえ、知り合いに似ていたもので。重ね重ね失礼しました」

残念なことに相手は覚えていなかったり。

まあ、10年も前のことだし仕方ないよなーと思いつつも残念な気持ちになる出久。

「かつちゃん、なんでさ……」

師の一人である料理長の口癖が思わず出てしまうくらいのガツカリ具合。

ただ、その幼馴染を擁護させてもらえば、原因は出久の方にもあると言える。

モジャモジャ頭でヒョロヒョロだった幼馴染が10年ぶりに会ったら、長髪をオールバックにしたそれなりにガツシリとした体格の少年である。

気づかなくても仕方ない部分はあるだろう。

というか、出久くん、キミ変わりすぎである。師匠たちに魔改造されたともいうが。

|| || || || || || || || || ||

ハイ、スタートー！

プレゼント・マイクの開始合図により実技試験が始まる。

すでに大学卒業を出来るほどの学力を持つ出久にとつてこの試験こそ本番であったが、始まってみれば何の問題もなかった。

持ち込み自由ということが出久が選んだのは師匠であるウォルターの「特技」であった。

習得は難しいが、応用が利くこの技術は出久も気に入っている。

「フウ、こんなもんかな？」

余裕の表情で試験をこなしていく出久に周囲は驚きの声を上げる。

「すげえ、何をしたのかわからねえけど、ロボがバラバラだ」

「手を軽く振っただけでこれかよ。何の個性だ？」

周りの声に惑わされることなく、着々とポイントを稼ぐ出久。

無個性の出久に超常の力はないが、その分身に着けた技術があった。

『鋼糸術』—極細の特殊なワイヤーを操り切断や拘束をする技術で、人をも簡単に殺害できるほどに強力な技術だ。

ゆえに、ヒーローを目指すならば殺さないように手加減もする必要があるのだが、その心配は師匠たちによって充分教育されているので問題はない。

そうして試験を進めて時間も半分を過ぎようとした頃に、大きな変化が訪れた。

巨大な破壊音。OPヴィランの登場だ。

「ずいぶんとまあ、試験にお金かけてるなあ……ん？ あれは？」

建物ほどの大きさのあるロボットを目の前にしても冷静に分析を進める出久は、その足元で瓦礫に足を挟まれて動けない女の子を見た。見た。

ヒーローなら救って当然の状況。ならば、することは一つだけだ。

「人命救助もヒーローの仕事。いや、困ってる女の子を見捨てたらエミヤコックに怒られるな」

薄く笑みを浮かべながら建物から飛び降りつつ、鋼糸を張り巡ら

せ、次々とOPヴィランを拘束していく。

そうして地面に降り立った出久は倒れている女の子に声をかけた。

「早く逃げて！……ここは僕が抑える！」

「で、でも！」

「いいから、早く！……そう長くは抑えてられないから」

出久を放つて逃げることを躊躇する少女に出久は急かすように声を張り上げる。

力を分散させるように鋼糸を張ったことで動きをなんとか抑えているのだが、ギリギリと嫌な音が伝わって来て残された時間はそう長くないと察せられる。

耐えられなくなるのはもうすぐか……と、思案しているうちに、鋼糸ではなくビルのほうが耐え切れなかったようで一部が崩れ落ちて糸がたわむ。

瞬間、ロボの腕が振り上げられてつられて宙に身を躍らせる出久。

高々とロボの頭上まで持ち上げられ、ただで落ちれば命が危ない状況となった。

「やってくれたな、人形め！……なら、スクラップにしてやる！」

体勢を整えた出久は獰猛に顔を歪め、鋼糸を一気に操って勝負を仕掛けた。

手首、首、指、腕、足首……

装甲の無い構造の弱いところを狙って鋼糸を絡ませ、一気に引き絞る！

「なっ、OPヴィランが!?!」

「バラバラになったア!?!」

OPヴィランを倒した出久はそのまま重力に従い落下していく。

このままでは落下死は確実。

それを救いに駆け付ける人物があった。

「もう少し、こっち！……手を伸ばして！」

「キミは、さっきの?」

ロボの残骸に乗ってこちらに上ってくるのは先ほどの少女。

伸ばされた手をつかむと身体が軽くなり、落下速度が落ちる。彼女

の個性のおかげだ。

それでできた時間の余裕を使って出久は彼女を抱え上げ、建物に張り巡らせた鋼糸を編み込んで急場の足場を作り、空中に一時的な避難所を作る。

「へ？ うわあ！ 空中に立つとる!？」

「大丈夫だよ。丈夫にできてるから。個性を解除してもいいよ。負担、減らしたほうがいいでしょ？」

「あ、うん。ありがと……うう……」

個性を解除してホツとしたところで、自分の状態に気が付いて悶える少女。

いわゆるお姫様抱っこという状態なわけ。

同世代の男子にされているというそれだけでも恥ずかしいのに、現在空中で注目をあびているとなればそれは赤面ものである。

「暴れないで。すぐに降りるから、ね？」

「うう、はい。……イケメン力すごいやん」

同世代とは思えないほど落ち着いた態度で笑みを向けられて、黙らざるを得ない。

束の間の空中散歩を終えて地面に降りたらもう腰が抜けて立てなかった。

「大丈夫？ まあ、無理もないよね。あんな高いところにいたんだし」

「はい、ダイジョウブデス。(そうじゃないんだけどなあ)」

ちよつとズレた心配をする出久に少女は内心ため息を吐く。が、ドキドキタイムは終わらない。

「あれ？ 頬に傷ができてる。少し血も出てるね」

「あ、転んだときにできちゃったかな。あはは」

「放っておくのは良くないね」

スツと清潔なハンカチを取り出し、少女の頬に手を添える出久。

なお、女の子の顔に触れるというのに下心なくやっているのは某コックの教育の賜物である。うん。

「え、あ、こ、こここまでしてもらわなくても！ というより、試験は!? 私のこと放っておいていいから!」

「もう時間もそんなにないから結果は変わらないさ。それより、怪我した女の子を放っておくほうが問題かな」

キミがこうして動けないのも僕を助けに来てくれた結果だから責任くらい取らせて？

と、笑顔で言われてしまえば「ひゃ、ひゃい！」と、返事をするしかなくなる女の子。

そうこうしているうちに試験終了となった。

「ああ、終わったね。いろいろ迷惑をかけてごめんね」

「ううん。こっちこそ救けてくれてありがとう。私、麗日お茶子つていいいます」

「そういえば、名前も知らなかったね。緑谷出久です」

いまさらながら名前も知らなかったことを思い出し、自己紹介をする二人。

試験会場を去るようにアナウンスが流れ移動を始める。

「終わっちゃったけど、結果どうなるんだろう。思ったよりポイント稼げなかったし……」

「麗日さんなら大丈夫だよ。きつと合格してる」

「な、なんでそう言い切れるん!? 私よりポイント稼いでいる人いるのに」

不安をこぼしたお茶子に出久は合格を断言してあげた。その理由を尋ねるお茶子に出久はフツと笑みを浮かべ、

「確証はないし、予測でしかないんだけどね。ただ、言えるとしたら、

『正しいこと人助けをした人間を排斥してしまうヒーロー科なんてあるわけない』ってことかな?」

「え? それって……」

目を見開くお茶子に、更衣室への分かれ道が来たので別れを告げて去る出久。

短い間だったけど強烈なインパクトを残した彼の背中を見つめていたお茶子はハツと気が付いた。

「あ、ハンカチ。私、持ったままだ」

自分の血の滲んだ白いハンカチ。そのまま返すのも申し訳ないだ

ろう。

「雄英高校で、入学式の時に返そう」

また、会えるよね？ と、小さくつぶやくお茶子。

その願いはもうしばらくして叶うこととなるのだった。

オマケ

1. 没案くハンカチの使われ方

「うつぶ、オロロロ」

「大丈夫？ これを使つて」

「ありがとう。ハンカチ、汚れちゃった」

「気にしなくて大丈夫だよ」

←

「あ、ハンカチ。私、持ったままだ」

ゲロインはロマンが無さすぎるので。てか、フラグアイテムがゲロ付きハンカチは嫌じゃ！

2. 先生の採点

プレゼント・マイク「あのOPをバラバラにしちまうんざ、超エキサイティングだぜ！」

救助ポイント高得点！

ミッドナイト「お姫様抱つこで空中散歩だなんて素敵だわあ。そのあとのやり取りなんかも青春で……好み！」

救助ポイント高得点追加！

イレイザー・ヘッド「おい、そんな理由で得点を入れるな。だからこの試験合理的じゃないんだ」

## いづくバトラー その2（後編）

今日はオールマイトによる初のヒーロー基礎学の授業だ。

コスチュームにも初めて袖を通し、個性をフルに使っての戦闘訓練が待っている。

にもかかわらず、爆豪の機嫌は非常に悪かった。

もつとも、爆豪の機嫌は基本的に良くないのでいつも通りと言えばその通りなのだが、原因を言えば10年の歳月を隔てて現れた幼馴染の存在だ。

入学初日に名前を知り、当人が無個性であることを知ってようやく出久のことを思い出した爆豪が感じたのはイラつきだった。

（彼の中で）完璧な人生計画の通り、自身の中学で唯一の雄英入学者となり、そこらの凡夫とは自分は違うのだとプライドを満たしていたところに、過去に見向きもしなかった存在が今更になって目の前に現れたのだ。

それも己と同じ立場、いや、初の「無個性」による雄英ヒーロー科入学という『偉業』を成し遂げているのだ。

自分勝手な考えではあるのだが、出久が自分の邪魔をしたように爆豪は感じたわけだ。

しかも、入学初日に抜き打ちで行われた個性把握テストで、出久は無個性ながらもまずまずの成績———際立った数値はないが、全体的に高水準の結果———を残し、テスト中にそれとなく先生のフォローを行うことで先生に気に入られていたことも爆豪を苛立たせている。

そして、今日。戦闘訓練の相手は出久になった。

ありていに言えば、目障りな出久を合法的にぶちのめす機会である。

そんな一方的に爆豪が敵意を募らせた戦闘訓練だが、一方的な展開となった。

……爆豪の思っていたのとは逆の展開ではあるが。

高い風切音が鳴ったのを聞き、爆豪は反射的に身をひねる。次の瞬

間には右ほおに痛みが走り、赤い筋が一本滲みあがる。

「はずした……まだまだ未熟だな。その厄介そうな籠手を壊しておきたかったんだけど」

これじゃあ師匠に怒られるな。と、ため息を吐きながら鋼糸を周囲に漂わせながら悠々と歩いてくる出久。

その姿は余裕を感じさせるもので、ますます爆豪をヒートアップさせていく。

事実、余裕なのだろう。パートナーのお茶子を先に行かせてからは一方的に爆豪にダメージを与えているのだから。

『なんでだ！俺が一番スゴくて、デクが一番スゴくない……そのはずだろうが！』

格下を相手にしているはずが、自分が格下扱いを受けている。

過剰なまでに塗り固められたプライドが爆豪に目の前の現実を理解させようとしない。

実力差をここまで見せられながらまだ出久を見下している爆豪に、出久は挑発を投げかける。

「さて、フロイライン麗日さんをお待たせしているんだ。さっさと終わらせよう、かつちゃん。」

……トイレは済ませた？ 神様に懺悔は？ このあと無様に捕まってブタ箱の隅でガタガタ震えて判決を待つ心の準備はOK？」

笑みを作り不敵に告げる出久に、爆豪はキレた。

「デメエ……ブツ殺す！」

怒りにまかせて飛び出した爆豪。

そんな考えなしの特攻が出久に通用するはずもなく。

「はい、おしまい。残念だったね？ かつちゃん」

「んんんんん!!」

身体を傷つけないように二本一組をねじり編み込んだ鋼糸の網で拘束され、ついだとばかりに猿ぐつわまでされてしまっている。

さらに暴れて抜け出されないように網の端にフオークを投げつけて刺して固定。拘束力を上げる。

無事に爆豪を無力化した出久はパートナーであるお茶子の元へ行



き、あつけなく勝利を得たのだった。

かつちゃんのプライドはボロボロだ!!

オマケ

その1。「いつものことですよ……」

無事に雄英高校に入学した出久と百お嬢様。

運のいいことに同じA組に所属することとなった。

気になるクラスメイトとの関係だが、結論を言えば順調なスタートを切ることができた。

出久は真つ先に試験会場が同じだった切島と飯田から声をかけられ、仲良くなる。

OPヴィランを倒した姿を切島に褒められ、飯田からは試験内容に救出Pがあつたことを見抜いていたと、感心された。

この二人以外にも、百お嬢様の家に仕える執事だということも周りの注目を集めることとなり、親交を深めることに役立ったりした。

まあ、お嬢様に不埒な視線を向けようとした某ブドウ頭の男子に釘を刺すことは忘れなかったが。

だが、一番注目されたのは、試験で縁のあつたお茶子との会話だろう。

少し遅めにやって来たお茶子は、出久の姿を見かけるなり真つ先んやってきて、ハンカチを返却。

周囲が自己紹介を交えながら、そのハンカチの由来を聞くこととなり、空気を読まない（読めない？）飯田が当時のことを詳しく説明。

男子生徒に抱えられ、空中散歩をしたということがバレたお茶子は恋バナ好きの女子メンバーに捕まってタジタジとなる。

「抱えられてたって、もちろんお嬢様抱っこだよね!? うわー、それだけでもキュンキュンするのに空中散歩とかロマンチックだよー!」

「それでそれで、地面に降りたらそつと優しく頬の傷を拭ってくれて?」

「持ってきたままのハンカチを学校で再会した時に返すだなんて、とってもロマンがあるわ。お茶子ちゃん」

「うゝ、ちゃうちやう！ そんなんじゃ……」

クラスメイトの芦戸、葉隠、蛙吹に囲まれて顔を真っ赤にしているお茶子。

それを少し離れたところでため息を吐いている百お嬢様。

「ああ、また緑谷さんが無自覚に……いつものことですね」

いつか刺されるんじゃないかなろうか？ 緑谷くん。

その2. その生徒、執事につき

突然始まった個性把握テスト。

最下位除籍を避けるべく、皆が必死になる中で一人変わった行動をする奴が。

「次はハンドボール投げだが——」

「はい、こちらにご用意しております」

「ん。実に合理的だな」

「立ち幅跳びが終わったから砂場を綺麗にしておかないとな」

「既に均しておきました。次の長座体前屈の用意も終えてます」

「ん。ご苦労」

「てめえ、デクじゃねえか!! どーしててめえがここにいる!! ——

ぐっ、なんだこの布、固っ」

「つたく、何度も個性使わすなよ……俺はドライアイなんだ」

「お手数をおかけしました。……目薬です」

「これ、ドライアイ用か？」

「はい。低刺激タイプで効果が長い品物です。戦闘中に使っても沁まないものがお好みかと思ってお渡ししましたが……」

「……ん。パーフェクトだ」

感謝の極み。と、頭を下げる出久にクラスメイトは思う。

『執事力高え!!』

こんな具合にサポートをしていたらそりや気に入られるよね。

その3. コスチューム

オールマイトによるヒーロー基礎学の最初の授業。

それも戦闘訓練とあつて、生徒たちのテンションもダダ上がり。ついでにコスチュームに初めて袖を通したというのもテンションの上がる理由だろう。

自分のコスチュームの具合を確認したり、クラスメイトのコスチュームと感想を言い合ったりと楽しげだ。

「うわあ、緑谷くん、執事って感じでカッコイイね！」

お茶子が出久のコスチュームを見て歓声をあげる。

出久の恰好は黒のスラックスに動きやすさと見栄えを兼ね備えた革靴タイプのブーツを着用。

上半身は白いシャツに黒いウエストコートとタイに手にはこれまた黒の手袋だ。

全体的に師匠であるウォルターをリスペクトしており、伊達だが左目に片眼鏡をつけている。

ウォルターと違うのは、他の師たちを見習ってジャケットを着ていることだろうか。

一応、素材は防弾・防刃の物を使っている。

こうして見た時の印象は、お茶子の言った通り、ザ・執事である。いつも通りと言ってはいけない。

「ありがとう。麗日さんはヒーローらしい格好だね」

「アハハ、要望をあんまり出さなかったら、パツパツスーツになったよ」

テレ顔で頭をかくお茶子は、身体の線が分かるようなぴっちりスーツで、ちよつと色っぽい。

「ヒーロー科最高！」

その姿を見てサムズアップをする峰田に出久は、

『お嬢様に邪な目を向けたら……肅清だね』

と、内心で恐ろしいことを考えていたり。

うーむ、だんだん師匠たちに考え方が似てきているような気がする。で、そのお嬢様なのだが、自分のコスチュームに少し不満があるよ

うで。

「要望とは違ったものになってしまったのが残念ですわ」

「ハア、と、ため息を吐く百お嬢様に、出久は頭を下げる。

「誠に申し訳ありませんが、勝手ながらサポート企業にデザイン変更をお願い致しております」

「緑谷さん、それはいったいどういうことですか?」

まさかの忠実な執事の裏切りに驚く。

その理由は単純明快だった。

「一言で申し上げますと、法的にアウトでした。お嬢様」

「アウト……ですか?」

はい、アウトです。と、ぼつさり言い切られてちよつと落ち込む百お嬢様。

修正をしたはずの今のコスチュームですら露出が多いというのに、要望通りなら痴女である。

いくら個性使用のために便利だからって限度があるのです。

基本優秀なのに時々天然を出すところは奥様の血を引いていると感じた出久であった。

あと、「法律なら仕方ないねー」と、慰めている葉隠さん。

あなたは女の子として倫理的にアウトです!

# いづくバトラー extra

—— 雄英高校 1年ヒーロー科 夏合宿にて

個性強化のための辛い合宿。

その合間の楽しみとして用意された肝試しのレクリエーションは、ヴィランの襲撃にあい、地獄のサバイバルと化した。

「ネホヒヤンツ！」

複数の腕に生体チェンソーやハンマー、ドリルなどの凶器を生やした改人・脳無が襲い掛かる。

唸りを上げる生体チェンソーを、銀閃が縛り上げて動きを止める。

「百お嬢様、お逃げください!!」

「緑谷さん!!」

「早く！ この脳無をどれだけ足止めできるか、分からない！」

自分をかばって脳無の前に立つ出久。

百は手助けしたいが、下手に動けば邪魔になりかねなかった。

鋼糸を指に食い込ませながら、出久は必死に叫ぶ。

「決して振り返らず、全速力で逃げてください。いいですか、振り返らず、全速力です!!」

「そんな……くっ、緑谷さん、命令です。必ず私のところへ生きて戻ってきてください！」

意を決して駆け出す百。

背後から聞こえる戦闘音に後ろ髪をひかれる思いだが、彼を信じて走り出す。

そうして避難した先で出久を待っていた百だったが……緑谷出久は戻ってこなかった。

爆豪・常闇、ヴィラン連合により拉致される。

緑谷出久、生死不明。依然として行方不明である。

|||||

雄英高校の合宿が襲撃された事件は全国に衝撃を与え、同時に雄英高校、ヒーローへの不信感を増すこととなった。

特に雄英高校への批判が大きい。

何せ、二人の生徒が連れ去られ、一人が生死不明の行方不明だ。

そんな中、被害にあつたヒーロー科1年A組の一部は独自に動き始めていた。

百が密かに自分の執事に渡していた発信機の情報をもとにヴィラン連合のアジトの調査に向かおうというのだ。

メンバーは4人。

補習を受けていたせいで、何もすることができなかったことを悔やむ切島。

爆豪と常闇を目の前で連れ去られた轟。

彼らが無茶しないよう監視の名目で行ってくることを決めた飯田。

そして、自分の執事を探す百だ。

教師にもクラスメイトにも告げず、事件へと足を踏み入れた4人。

現場についた彼らが目にしたものは――

「ゴミだね。ヒーローなんてみんなゴミみたいなものだよ」

ヒーローたちを鋼糸で切り刻む出久の姿だった。

「緑谷さん!! 緑谷さんですよ!!」

「こんなところまで来るとは、いけない人だ、八百万百」

思わず自分の立場を忘れ、物陰から飛び出した百。

その姿を見定めた出久はいつもと違い、冷淡に返事をする。

信頼していた執事からの思わぬ対応にひるむ彼女に代わって、仲間たちが出久に問いを投げかけた。

「どうしたってんだよ、緑谷ア! 正気に戻れ!!」

「緑谷君、こんなことを君が望んでするはずがない!」

「奴らに……奴らに一体何をされたんだ、緑谷」

切島が悲痛に叫び、飯田が信じられないと思いを口にし、轟が静かに怒りを燃やして問いかける。

だが、出久は表情一つ変えなかった。

「奴らに何を？」 捕えられ、洗脳させられて哀れにもヒーローたちと無理やり戦わされているのです」

その言葉に安堵するでも、憤るでもする間もなかった。

「とでも僕が答えれば満足するかな？ みんなは」

出久本人が絶望に叩き落とした。

「僕は何者にも命令されずに立っている。緑谷出久として、殺意をもつてヒーローたちを切断したんだ」

「緑谷さん、何故ですか？ 何故そんなことを!？」

「僕の名前を、気安く呼ぶな！ 八百万百!!」

明確な拒絶を叩き付けられた百。

その返答をもって彼女は理解した。

彼は本当にヴィランに、ヒーローの敵になってしまったのだ、と。

|||||

—— 雄英高校にて

根津校長と相澤先生が二人で話をしている。

内容はもちろん、今回の襲撃事件についてだ。

「USJ事件、そして今回の事件で我々の情報が筒抜けになっていることが確実になっちゃったね」

「ええ。前回のUSJの際にもその存在が疑われていましたが……その時教員に疑いがかかった時に校長は真っ向から反対していましたね」

苦々しく校長が告げ、相澤が肯定する。

「内通者」、忌むべき裏切り者だ。

以前、USJが襲撃された際にも、その事件の前後にトラブルはなかったはずなのに、内部情報が流出していたのだ。

カリキュラムをすぐに手にできる教員が真っ先に疑われたが、根津校長が強く反対。

「雄英の教員は僕が見定め、確かな信頼のある人ばかりだよ。君を含めて彼らが裏切るなんて僕自身がヴィランでもない限りありえない

さ」

自分のハイスペックも合わせて判断したという校長。

だが、相澤は納得しきれていない。

「しかし、教員でないとするならば内通者は生徒ということになりま  
す。まだ10代の彼らにスパイまがいのことができるでしょうか？」

「僕も大切な教え子たちを疑いたくはないさ。でも、僕には一つ危惧  
していることがあるんだ」

根津校長は自身の最悪の予測を語りだした。

「今年入学した生徒で一人、特殊な経歴の持ち主がいたはずだね？」

彼の師匠たちは一部の世界では有名だね。当然裏の分野にも精通し  
ているのさ」

「校長、まさか!?!」

「ことをなしえる能力があり、教員からの信頼も厚く、職員室によく出  
入りする姿が見られていた彼なら可能だろうね」

教え子の一人が裏切っていた可能性を告げられ、さすがの相澤も動  
揺を隠せない。

校長はその頭脳を回転させ、考察を深めていく。

「分からないのは彼がいつから裏切っていたのかということだよ。

入学時から？ 彼が帰国した時から？ それとも、もっと以前から  
？」

すべてはまだ闇の中。

DAWN  
夜明けは、いまだ遠い。



いづくメイド  
バトラー亜種 いづくメイド

人は生まれながらに平等ではない。

緑谷出久が齢4歳にして突きつけられた現実だ。

その現実はいくつ出久を打ちのめすには充分過ぎる事実であった。

緑谷出久は「無個性」だ。

世界総人口の約8割が何らかの特異体質となった超人社会において何の特殊能力もない人間。

それが「無個性」である。

この事実は「個性」を使って活躍するヒーローになることが出来ないことと同義であり、出久の夢を否定することだった。

そんな残酷な現実を突きつけられた出久は――

「僕は……ヒーローになれない……」

立ち直ることが出来なかった。

心の傷は大きく、情緒不安定な毎日。

しまいには、大好きであったオールマイトの姿を見るだけで泣き出す始末だった。

自分ができることが出来ない理想の姿を見ることは既に苦痛ストレスとなつている。

ストレスから逃れるにはその原因から離れることが一番だ。

つまり、一番のストレス原因となつているオールマイトを目にした環境こそ出久が必要な場所であった。

心配した母親は夫に相談した結果、一つの決断をする。

「出久……お父さんの所へ行く？」

「……うん」

オールマイトがいる日本を離れ、父親が単身赴任する海外へ。大きな決断だった。

こうして緑谷家は日本を去り、海の方へ。

ユーラシア大陸を挟んだ歴史ある島国。女王が治める連合王国、イギリスの地へと。

イギリスに渡った出久であったが、慣れない環境に捨てきれないヒーローへの憧れが足かせとなり、すぐには元気になれなかった。

彼女のことをただただ見守るしかない両親の元へある日、イギリスの友人が一つ提案を持ってきた。

「ヒーローと違う職業、違う世界があることを教えてあげればよいのでは？」

ヒーローになれなければこの世の終わりみたいな顔をしているのなら、それ以外の可能性を教えて世界を広げてやればいい。

そういう友人に母親は不安をこぼす。

「でも、いったい、どんな職業を見せればいいでしょうか？ ヒーローに代わるものとなると普通の職業では……」

「ふむ。そうですね……ヒーローに負けないほど特殊なものとなれば――」

友人はその職業を告げる。

すなわちそれは、メイドである、と。

|||||

染められたかのように真っ赤なお屋敷で出久は銀髪のメイドに迎えられた。

緊張する出久を連れて、屋敷の主のもとへ案内する銀髪メイドの少女。

屋敷の主は、コウモリの羽をつけた吸血鬼の姿をもつ少女であった。

「ぎやおー、たくべちやうぞー！」

「ひい、ぼ、僕を食べてもいいから、ほ、他の人は襲わないで！」

「……ねえ、咲夜。軽い悪ふざけだったのに良い子すぎて心が痛いわ」「とりあえず、誤解は解いておいたほうがよいのでは？」

少しおちやめな主の少女を始めとして屋敷の住人に気に入られ、銀髪メイドの瀟洒な仕事ぶりを見た出久。

その優雅な姿を見て出久は銀髪メイドへ尋ねた。

「どうやったらそんな風になれるの？」

「そうね。この仕事に誇りを持つているからかしら。そのためにお嬢様のために完璧な仕事を心がけるのよ」

出久はメイドの基本的な心構えを知った。

次に訪れたのはイギリスに用事で来ていた南米の富豪、ラブレス家。

ラブレス家の一人息子、ガルシア坊ちゃんに歓迎されながら、メイドをまとめ、婦長と呼ばれるロベルタというメイドについてまわった。

家事が苦手なロベルタのことを最初は残念に思っていた出久だったが、他のメイドにテキパキと指示を出す様子はとてもカッコよく見えた。

なんでも一人でこなす咲夜と違い、ロベルタは人を従える能力があつた。

メイド長、婦長と同じメイドを取りまとめる立場ながら、スタンスの違いがあつて面白い。

また、運悪くガルシア坊ちゃんを狙つてやってきた賊に襲撃された際に、ロベルタが圧倒的な強さで撃退した姿にも出久はひどく感動することとなつたのだ。

「サンタマリアの名に誓い、すべての不義に鉄槌を！」

「すごいなあ……メイドさんつて、強いんだね」

メイドは強い。

出久の中で強烈なイメージとなつた。なつてしまった！

その次に見学に訪れたのは日本から渡英していた鶴屋家の別荘。

明るいお嬢様に落ち着いた大人の雰囲気メイドの森さんが出迎えてくれて、同じ日本人という安心感もあつて楽しく過ごすことができました。

楽しいこと大好きなお嬢様のお願いを即座に答えていく森さんに、

出久の目は輝きつぱなしだった。

一番の思い出は、鶴屋お嬢様と森さんの古武術の組手だろう。

鶴屋家に代々伝わるという古武術の修行に付き合う森さんは、かなりの実力者だったようで、アクション映画さながらの動きを見せつけていた。

「弱冠17歳で鶴屋流古武術を免許皆伝しちゃう予定のためにも、今日こそは乗り越えさせてもらうさ！」

「お嬢様、あなたに敬意を示し、あえていいみましょう……上を知りなさい！」

特撮ヒーローのようなキックを受けて「みぎやー」と吹き飛ぶお嬢様。舞う土埃を払いながら現れた森さんの姿は、とても優雅だったという。

そんな姿を『メイドⅡ強い』という図式ができてしまっていた出久は疑問に思うどころか、むしろすごいすごいと喜ぶほどで……

その後も「森式メイド術」というナニカを見せられ続け、出久の中でメイドの認識がすごいことになってしまっている。なってしまうているのだ！

最後に訪れたのは学園を運営するアッシュフォード家のお屋敷へ。

鶴屋お嬢様とは別のベクトルで楽しいこと大好きなミレイお嬢様と、他家からお預かりしているというルルーシユの若様とナナリーお嬢様に出迎えられた出久。

なぜかメイドをしている日本人の篠崎咲世子さんにお世話になった。

仕事をそつなくこなす姿に感心しながらも、いままで見てきたメイドさんに比べてあまり薄いインパクトに残念に思う出久。

だが、それもルルーシユから秘密のお願いをされるまでのことだった。

「では、咲世子。頼んだぞ」

「はい。いってらっしゃいませ」

「え？ ルルーシユさんが二人？」

悪友に誘われてチェス賭博にこっそり出かけようとするルルーシュと、それをごまかすために変装していた咲世子さんの姿を見て驚く出久。

イレギュラーに慌てるルルーシュに咲世子さんは語りかけた。

「メイドというのは主人の秘密を守るのも仕事なのです。だから、出久ちゃんも私のために黙っていてくれませんか？」

「その、変装もメイドに必要なの？」

「ええ、必要があればこういったこともするのですよ」

「そうなんだね！」

二人の会話を聞いていたルルーシュは、『違う、間違っているぞ咲世子！ それはメイドではない！』と、内心ツツコミを入れていたのだが、口に出すと自分の不利になるとわかっていたので何も言わなかったのだった。

こうして出久のメイド像はとんでもない方向へ。

ああ、どうしてこうなった!?

各家を訪問して間違ったメイド像を認識してしまった出久は、たちの悪いことにそのメイドに憧れてしまったのであった。

ヒーローから目をそらすという目的は達成したのに、また新たな問題が起こっている。

そして、厄介なことにその背中を押す者がいたのだから大変だ。

「僕、メイドさんになりたい！」

「なら、うちで働くといいわ。住み込みで」

「お嬢様、そんな簡単に……」

「いいじゃない。それに、フランだって出久のことは気に入っていたもの」

スカーレット家のお嬢様、レミリアが出久のことを気に入ってメイドとして雇い入れたのだ。

まあ、雇い入れたと言っても4歳の出久を本当に雇用したわけではないのだが。

スカーレット家で預かる傍ら、教育を受けさせるということを出久

の両親に納得させたレミリアお嬢様。

その中に、花嫁修業という名のメイド修行があったりするわけ。こうして、出久は立派なメイドを目指して修行を始めたのである。

これは、緑谷出久が最優のメイドになる物語だ。

……どうして、どうして、こうなった!?

オマケ

——ある日のスカーレット家主従の会話

「出久もこの家に来て慣れてきたわね」

「ええ。学ぶ意欲が旺盛で私も教えがいがあります」

午後の紅茶を楽しみながらレミリアが告げ、咲夜が頷く。

気まぐれから屋敷に入れた出久をどうやらレミリアは大変気に入ったようだった。

彼女の個性「運命を操る程度」の個性は、出久のあり得たかもしれない未来、平行世界の未来をものぞき見ていたのだ。

性別が男だったら、もし現実に心を完全に折られなかったら、彼女は世界を動かす人物になれたかもしれない。

そんな可能性を感じ取っていた。

そんな宝石の原石のような彼女を自分の手元で育てればどうなるのか楽しみではないレミリア。

それを楽しむためなら多少の労力や出費は構わないと思っている。

「そういうえば、あの子、美鈴やパチエにもいろいろと教わっているそうね?」

「そのようです。なんでも、『もっと努力しないと完璧なメイドさんになれない』だそうです」

「メイドをどう思っているのかしら」とため息を吐く咲夜にレミリアは楽しそうに笑う。

「ハハッ! そうなのね。なら、その希望を叶えてあげないと」

「お嬢様、何をなさるおつもりですか?」

「それはね——」

その後、出久はメイドのスキルを身につけるためという名目で他家に度々奉公に出されることになるのだった。

そして、毎回そこで気に入られて特殊な技術を教えられて師匠が増えていくこととなる。

何人か戦闘能力寄りのメイドがいるが気にはいけない。

オマケのオマケ「姉妹の会話」

——出久が他家に奉公に出ていった日

「イズクがいなくなっただのは、お姉様のせいか！」

「フ、フラン、これも出久のためなのよ！」

「うるさい！ お姉様のバカー!!」

「フ、フラン〜!?!」

最愛の妹から罵声を浴びせられて崩れ落ちるレミリア。

うーうー、と変な声を上げながら頭を抱えてしゃがみ込む姿に、いつものカリスマは感じられなかった。

「お嬢様……」

それを遠くから見つめるメイドの咲夜は……なんだか愛おしげにそれを見つめていたのだった。

とりあえず、鼻血を拭こうよ、咲夜さん。

## いづくメイド その2

——日本 某国際空港にて

「あ、日本の空港に降りると味噌や醤油の香りがするって本当なんだ」  
長い空の旅を終えてキャリアバッグを転がす少女。

緑の長い髪を後ろで三つ編みにまとめた彼女こそ、14歳になった  
緑谷出久であった。

10年前にイギリスに渡り、何を思ったのか一流のメイドたちに師  
事し、今やハイスペックメイドとして故郷の日本に帰ってきたのだ。  
幼い頃のメイドに対する間違った理想像は既に勘違いだとわかっ  
ているものの、いまさら身につけた技術を忘れることなどできるはず  
もなく。また、途中でやめるのも教えを受けた身としては申し訳ない  
と、最後までやり通したのだった。

結果がメイドという名のナニカである。

どうして、こうなった!?

まあ、あのままヒーローになれないとウジウジしていたよりはまし  
だと思っしかないだろう。

とにかく、10年間の修業を終え師匠たちから合格のハンコをも  
らった出久は、最終実習として一人であるお屋敷にご奉公にでること  
となったのだ。

そして、今回そのお屋敷が日本ということ、10年ぶりの帰郷と  
なった次第なわけである。

久しぶりの日本ではあるが、当然のことながら各種外国語と共に勉  
強していたので問題は無い。

家庭教師をしてくれていた屋敷の図書館司書には、発音・書き取り  
に至るまでみっちり叩き込まれている。

「あらら、電車の時間まで少ししかないや。急ぐ必要がありそう」

メイド長の咲夜から貰った銀時計で時間を確認して眉を下げる出  
久。

せっかくの帰郷だが、感慨にふけっている時間はあまりないらし



い。

初日から遅刻するわけにもいかないだろう。出久にはドジっ子メイド属性はないのだからして。

行き先は静岡県。出久の生まれ育った県と同じだ。

|||||

池付きの庭園。住宅をぐるりと囲む生け垣と、正面に大きな門。

家というよりは、「邸」と呼ぶような純和風の屋敷。

それが出久が奉公することとなる家、N.O. 2ヒーロー、エンデヴァーの住む家。轟家であった。

「本日よりお世話になります、英国使用人協会認定A級<sup>ランク</sup>メイドの緑谷出久です」

「え、メイドさん？　というか、焦凍と同じくらいの女の子って!？」

「お、お父さん!」

轟家に到着して挨拶をすると、出迎えてくれた白髪に赤い髪が何房か混じった女性、轟家の長女・冬美が慌てた様子で家の中へと走り去っていった。

残された出久は一人、呆然としながらつぶやいた。

「あれ？　僕、何か間違えたかな?」

「ごめんなさい。新しいハウスキーパーの方が来られると聞いていたけど、緑谷さんほど若い人だとは思っていなくてびっくりしちゃったわ」

「いえ、前任の方はかなりのご高齢とお聞きしてますから」

玄関前でのイザコザのあと、しばらくしてから落ち着いたらしい冬美に客間に通されて謝罪を受けた。

「どうやら、出久の雇い主とその家族との間で情報の伝え漏れがあったらしい。」

その雇い主、エンデヴァーこと轟炎司はテーブルを挟んだ出久の向かい側に腕を組んで出久を見ていた。

「年齢などどうでもいい。問題はこちらが要求する能力があるかどうかだ」

見定めるようにこちらを見る炎司に、出久は胸を張って返事をする。

「はい！ お任せください。料理・洗濯・掃除に裁縫まで家事一般は一通り身につけています」

「そうか。だが、もしだめだところらが判断したならば、すぐに辞めてもらう。覚悟しておくように」

そう告げると、炎司は立ち上がりそのまま部屋を出ていく。

娘の冬美が声を上げて止めるが、聞く耳を持たずじまいだった。

「ごめんなさいね。お父さん、コミュニケーションがちよつと……」

「いえ、僕のような若輩に不安を覚えるのは当然ですから。これからの成果で安心してもらえるように頑張ります」

ギュツと拳を握ってやる気を見せる出久に、冬美も笑みが溢れる。

初対面は決して良いものとは言えなかったが、これなら良い関係を作っていけそうに冬美は思えた。

自分ばかり話しても仕方がないと、先程から隣で興味なさげに座っている末弟の焦凍を出久に紹介することにした。

「緑谷さん、今日からよろしくね。こちらが弟の焦凍。同い年らしいから、仲良くしてあげてね」

「はい！ よろしくお願いします」

姉に促され、言葉少なに口を開く焦凍。

「轟焦凍だ。よろしく頼む」

「緑谷出久です。よろしく願います、若旦那様」

「……若旦那？」

聞きなれない呼ばれ方をして戸惑う焦凍。思わず聞き返すと、不思議そうな顔をされてしまった。

「はい。家主の炎司様が旦那様ですから、ご子息の焦凍様は若旦那様かと……あの、変ででしょうか？」

出久がオズオズとした様子で尋ねると、焦凍は困った様子で、

「悪いが、その呼ばれ方は慣れてねえ。普通に名前で呼ぶだけでいい」

「あら、いいじゃない。若旦那様？」

隣で弟の呼ばれ方に面白がっていた冬美はからかうように焦凍に声をかける。

だが、その弟は平然としたもので、逆に姉へとカウンターとなるような言葉を投げかけた。

「なら、姉貴は“お嬢様”になっけど……それでもいいの？」

「あー、緑谷さん。私も名前をお願いするわ」

弟からの指摘を受けて態度を変える。

どうやら弟のほうが一枚上手だったようで。

なんにせよ、仲の良い姉弟の会話に出久も頬が緩む。

「では、焦凍様と冬美様でお呼びしますね」

「いや、“様”もつけなくていい。なんか落ち着かねえ」

「では、焦凍さん、と、お呼びしますね。僕のこと出久と気軽に呼びください」

「ああ、わかった。出久」

呼び方を決めたところから静かなながらも会話を弾ませ始める二人。

隣でその様子を見ていた冬美は思った。

『うわあ、いきなり女の子を呼び捨て……焦凍、学校で大丈夫かしら？』

弟の今後の将来が不安になっていたりするのだった。

—— 出久が轟家に来て数日。

焦凍は訓練室で目の前のメイド少女と対峙しているこの状況に戸惑いを隠せなかった。

「さあ、どうぞ。遠慮なく打ち込んできてください」

「と、言われてもな……」

純和風邸宅の轟家に合わせて和服を合わせたような和風のメイド服を身に着けた出久が、右手を前に半身になって構えている。

これから個性以外の訓練。体術の訓練だったのだが、なぜか目の前のメイド少女が組手の相手をする事になっていた。

正直、どうしてこうなった？ と、焦凍は頭を抱えている。

そもそも、出久がメイドとして轟家に来たのは以前まで家の家事をしてくれていたハウスキーパーが高齢を理由に引退したこと、家族の中で家事をしていた姉の冬美が人事異動で遠い勤務地になってしまい、家事をする人間がいなくなったことが理由だ。

だから、焦凍は出久が格闘技の組手をできる存在だなんて思っていなかったのである。

それがついさつき、会話の中で「体術」がなかなかうまくいっていないことを口にしてしまったところ、出久が言い出したのだ。

「あ、僕も『少し』は格闘技ができるのでお手伝いしましょうか？」と……。

なぜかやる気満々の出久に断ることができずに訓練室まで来てしまったのだが、同い年の女の子を相手に拳を振るうのは正直やりづらいことこの上ない。

如何にして怪我させないようにするか、手加減をする訓練だ。と、割り切っていた焦凍。

だが、その考えは甘かったと思い知らされることとなる。

「破ッー！」

「~~~~ッー！」

出久の裂帛の気合が込もった拳打が迫る。

その圧に焦凍は思わず封印していたはずの左の炎を使ってしまった。

「な、しまった！ 大丈夫か、出久！」

「ええ、ちよつとびっくりしました」

「お」

炎に巻き込んだと焦った焦凍の真後ろにスツと現れた出久。

気配も感じない不意打ちを受けてビクリとなる焦凍。

これぞ森式メイド術奥義「スツご主人様ご用でしょうか」である。

呼び出された瞬間には後ろに控えているというメイド術。原理は違うが、森さん以外にも咲夜さんも使えるぞ！

驚きはしたものの、出久が無事だったことにホツと息を吐く焦凍。

正直、出久の格闘技の腕前は「少し」どころじゃなかった。

焦凍の気の抜けた初撃を腕をコロの原理で回転させる、中国拳法でいう化勁と呼ばれる技でいなし掌打。

そこからは一方的にボコボコにされそうになるのを必死でこらえるだけであつた。

ウチのメイドが強すぎて笑えない。

まさにそんな気分だつた。

挙げ句に、自分が封印していた父親の個性左を使うこととなり、恥じ入るばかりだ。

格闘の訓練なのに個性を使つてしまったことを謝る焦凍だったが、出久からの投げかけられた質問に顔をしかめた。

「焦凍さんは氷の個性だと思つていたのですが、炎も使えたのですね。いままで使つていなかった理由があるのですか？」

出久にそのつもりはなかったが、焦凍の心の核心を突くような質問だつた。

その質問を皮切りに焦凍は胸の内を話していく。

幼い頃からヒーローになるために父親から訓練を受けさせられていたこと。

その様子を見て母親が精神を病んだこと。

母から煮え湯を浴びせられたこと……

そして、父親への復讐のために母親の個性だけでNo.1ヒーローになることを目指すと。

自分の仕える家の親子の確執を知つた出久は、その解決のために乗り出すことを決めたのだ。

家人の抱える問題を解決するのも一流のメイドの勤めであるゆえに。

数日後、その変化は食卓から起こつた。

いつもの夕食。いつもどおりのご飯に味噌汁に主菜や副菜が並ぶ食卓。

だが、その料理の味は懐かしいものがあつた。

「この味、母さんの……」

口にしてから懐かしさを感じていた焦凍が、思い出したように口にする。

全部、母が作ってくれた味付けにそっくりだった。

思わず作り主の出久に目をやると、出久はニツコリと笑って、

「最近、奥様の病院に通って味付けのコツを聞いていました。奥様、焦凍さんの好みの味付けを覚えてましたよ」

そういつて差し出された手紙を開けば、母からのメッセージが入っている。

自分への恨み辛みが綴られているのではないかと恐る恐る読み出してみれば、あつたのは謝罪の言葉や自分を心配する言葉ばかりだった。

自分のことを母親は嫌っていなかった。そう安堵する焦凍。

だが、一番嬉しかったのは最後に綴られた言葉だった。

『私達両親のことは気にしないで、あなたの好きな道を、あなたのなりたい自分を目指してください。それが母の一番の望みです』

なりたい自分になっていい。

幼い頃に告げられた母からの言葉を思い出して涙を流す焦凍。

その翌日、轟母子は数年ぶりに再会することとなる。

オマケ「父親へのプチ復讐劇」

出久のおかげで母と和解することができた焦凍。

その結果、母親の個性だけでNo.1ヒーローを目指すという復讐に乗り気になれなくなってしまう。

母親から受け継いだ個性を復讐に使うというのも気が引けると考えたのと、出久から「自分の力を出し惜しみして救えない人がいたら後悔する」といわれたことに納得したからだ。

しかし、父親へのわだかまりをそうそう捨てられるはずもなく。

どうしようかと悩んでいたら、出久から一つ提案を受けた。

「簡単ですよ。旦那様の前でオールマイトをベタ褒めすればいいんです」

「さすが、オールマイトだ。あつという間に事件解決だな。事件が起きてからの迅速な対応は参考になる」

「オールマイトの爆笑トークはすげえな。俺は口下手だから見習わねえと」

「オールマイトは——」

「オールマイトが——」

オールマイトの活躍がメディアに載るたび、息子が絶賛する様子にエンデヴアーはイライラしていた。

なぜに大事な息子をライバルに取られねばならぬのだ。

目指すべき偉大なヒーローが近くにいるというのに、他人を頼るとは何事だ！ と、息子を叱りつけてみたものの、逆に言い返されて深手を負ってしまったり。

「焦凍オ！ 貴様が参考にするべきはオールマイトではない！ 俺を見ろオ、焦凍おおお！」

「何いってんだ？ No. 1ヒーローを目指すなら今のNo. 1ヒーローを参考にするのは当然だろ？」

息子の言葉に傷ついたエンデヴアーはその日寝込んでしまったという。

そして、その息子が密かにメイドにサムズアップしていたことを知る由もなかったのだった。

オマケ2 「メイド秘奥義？」

朝、朝食を食べるために席に座る焦凍。

「おはようございます。今すぐ朝食を用意しますね」

「ああ、頼む」

朝食を作りキッチンに消えていく出久。

その後に、反対側の扉から新聞を手にした出久が入ってきた。

「はいどうぞ、今日の新聞です」

「あ、ああ。なあ、さつきキッチンに入っていたのに、なんで外から

戻って来れるんだ？」

轟家のキッチンが玄関までは遠く、すぐに戻ってこれるような位置にない。

なのに、どうして？

もしかして、二人いる？

「それは、森式メイド術マル秘テクニクと鶴屋流古武術秘奥義「分身殺法」の合わせ技で——禁則事項です♪」

途中まで言いかけて、しまったという顔をした出久。

誤魔化すように人差し指を口に当てて笑顔を見せた。

笑顔とは、本来は攻撃的なものであるらしい。これ以上聞くなという気配を感じ取った焦凍は黙って新聞を広げるのだった。



## いづくメイド その3

轟家に出久がメイドとして派遣されて数か月が過ぎた。

焦凍も中学3年生。そろそろ進路について真剣に考えなければならぬ時期である。

「雄英一択だな」

「うむ。当然だ。俺の息子がヒーローを目指すのだ。そこ以外ありえん」

焦凍の言葉に炎司がうなづく。

雄英高校は日本国内でもトップのヒーロー科のある国立高校である。

エンデヴァーはもちろん、現在のトップヒーローであるオールマイトも卒業生であるため、偉大なヒーローになるには雄英高校の卒業が絶対条件と言われるほどの知名度を誇っている。

そんな雄英高校に、焦凍は推薦入学を受ける予定であった。

「さすがですね、焦凍さん。雄英高校に推薦入学なんて」

「まだ、受かると決まったわけじゃねえ。気は抜けないな。ところで、出久は進路はどうするんだ？」

食後のお茶を受けとった時に、ふと、同い年のメイドの進路が気になった焦凍。

「えっと、契約では一年だけですから、おそらく次の春にはイギリスに戻ることになるかと思います」

「そうか。そうなのか……」

出久の返事を聞いて小さくつぶやく焦凍。

その様子が普段とは違っていたので、様子をうかがう出久。

「あの、どうかなさいましたか？」

「ああ、いや。出久がいなくなると……その、寂しくなるなと思ってな」

「そ、そうですね……で、でも、まだまだ先の話ですからー」

焦凍の言葉に思わず戸惑うも、慌てて元気よく声を上げる出久。

その様子を隣で見っていた姉の冬美は思った。

『なにこのラブコメ？ 青春してるなー』

轟家長女、冬美。教職。彼氏はまだいない。

個人のスマホを耳に当てて会話をする出久。

日本語ではなく、きれいなブリティッシュイングリッシュでの会話をしているのは、本来の主人であるスカーレット家当主のレミリアだ。

定期的な連絡を取っており、最近の近況報告などもしている。

『そう、恙なく過ごしているわけね』

『はい。轟家の皆様にはよくしていただいています』

『それはよかったわ。でも、同じ年の男子がいるのだから気を付けないでだめよっ。』

『それはいいですよお嬢様。僕みたいなのを焦凍さんが気にするはずないじゃないですかあ〜』

『(この子、自己評価低いのはなんでかしら?)そ、そう。それより、そのショートとかはヒーローを目指してるんですってね?』

会話の中で出てきてた轟家の末っ子がヒーローを目指すということ聞き、興味を持つレミリア。

この超人社会の中でことさら注目されている職業が、ヒーローである。

だから、つい、このレミリアお嬢様の悪い癖が出た。

思い付きで、面白そうなことを従僕たちにやらせるという悪い癖である。

『そうだわ! 出久、あなた日本でヒーローの資格を取ってから帰ってきなさい。うちのメイドがヒーローというのも面白いわね』

『ええっ!? お嬢様、そんな急に言われても!?!』

『あなたならできるでしょ? 拒否は認めないわ。それじゃ!』

『お嬢様!?! レミリアお嬢様!?! ……切られてるう』

また始まったお嬢様の我儘にがつくりとうなだれる出久。

ちようどその様子を通りかかった焦凍が目撃していた。

『出久、どうしたんだ?』

「焦凍さん……」

「さっきの電話で何か言われたのか？ 俺でよかつたら相談してくれ」

俺たち、家族だろ？

そう言つて出久に真剣な視線を向ける焦凍に、出久も事の次第を告げる。

「焦凍さん……僕、ヒーローになることになりました」

「そうか……すまねえ。どういうことだ？」

いつもクールな焦凍が珍しく動揺しまくった瞬間であった。

|||||

英雄高校 ヒーロー科 一般入試

一足早く推薦入試を終えていた焦凍に見送られ、入学試験へ行く出久。

倍率300倍を超えるというだけあって、試験会場には人がごった返していた。

「うわあ、すごい人。みんな受験するのか……先生大変だなあ」

人の波に思わず棒立ちになる出久。

立ち止まったのはわずかな時間だったが、通行の邪魔になつてしまったのか、背後から怒鳴る声があった。

「どけ、クソモブ！」

「あら？ これは失礼しました」

金髪が目つきの悪い男子学生に道を譲り、その背を見送る。

どこかで会つたことのあるような気がするのだが、思い出せない。

「うーん、僕の知り合いにあんな下品な人はいないし……気のせいかな？」

10年前に一緒だった幼馴染だったのだが、残念なことに出久は覚えていなかった。

まあ、覚えていなかったのはお互い様。特に出久は昔に比べれば容姿が全然違つているのだ。

幼少のころは癖つ毛に任せてボサボサだった髪も、今はきれいに梳

かされて後ろで三つ編みにされている。そして、日々の訓練で鍛え上げられたプロポーション。ぶっちゃけ、巨乳である。

目はパッチリとしていて、美人というよりは可愛い系の顔立ち。そばかすも逆にチャームポイントになっている。

地味可愛系の美少女といったところか。メイドさんなので清纯派でもある。

クラスにいたらトップの美人というわけではないが、3番目とか5番目くらいにいそうな美人さんである。

さて、出久の容姿はどうでもいい。

入学試験である。

筆記試験のほうは、まったく問題なく終えることができた出久。

それもそのはず。スカーレット家の図書館にいる「魔女」から徹底的に勉強を教授されたのだから。

学力的には高校生レベルの問題でも余裕で解けるので、中学生レベルの設問など、矛盾するようだが問題にならない。

ということ、実技試験なのだが、出久は注目の的であった。

なぜなら……

「え、あれ、メイド服だよな?」

「あ、ああ。メイド服だ」

「メイドさんがおるやん……」

いつもの仕事着。メイド服を着ていたのだった。

「おい、キミー! 動きやすい服装だと言われていただろう? その服装はどうなんだ!」

見かねたのか、体格の良い眼鏡を着けた真面目そうな少年が声をかけてくる。

周囲の男子からは余計なことすんなと、視線が突き刺さるが少年は気にした様子もない。

「あの、僕にとつてはこの服が一番動きやすいのですが……駄目でしょうか?」

「む、それは失礼した。たしかに人によって動きやすい服装は違うもの。試験前に大変失礼した」

「いえいえ。こちらこそ、お気遣いありがとうございます」

これから入学試験前だというのに、変なことで頭を下げあう二人を周囲は変なものを見る目で見ていた。

うん、キミたち何やってんの？

そうこうしているうちに試験開始。

結論だけ言おう。

出久はかなりの高得点を叩き出して試験を終了した。

迫りくるヴィランロボを鶴屋流古武術、中国拳法、CQCなど徒手格闘技術を使ってちぎっては投げちぎっては投げ。

ポイントを稼ぐ合間に持ち込みの救急キットを使って受験者の治療をしたり。

「試験の最中だったけど、メイドさんにすげえ、丁寧に治療された」

「て、天使……結婚しよ」

「もう、試験とかどうでもいい。俺、もう悔いはないよ……」

以上、治療された生徒の声である。

ほんと、何やってんのさ。

こうして敵ポイントも救助ポイントも稼ぎまくった出久。

ついでに最大の見せ場が0ポイントヴィランへの妨害活動だ。

「流れのメイドさんから教わったこの技で！」

持ち込んだ救急セットから包帯を取り出し、投げつけて0ポイントヴィランの一部を拘束して動きを止める出久。

昔、偶然出会った無表情のメイドさんから教えてもらったリボンや包帯などの細長い布状のものを操る技術を使う。

わずかながら拘束している間に、がれきに足を取られた女の子を救出して離脱する出久。

とまあ、こんな感じで大活躍だった。

そして、メイド服ということもあって目立ちまくりである。

ここに雄英高校の伝説がまた一つ作られたのであった。

「おい、イレイザー。おまえと同じようなことをしてるGirlがい

るぜ?」

「だからなんだ、黙って採点してろ。山田」

「おい、本名はやめろって!」

オマケ「とんでもメイドができるまで」

自分の成長に思い悩む出久。

「はあ……咲夜さんみたいに仕事できるようになりたいなあ。でも、僕には時間を操作する個性なんかないし……」

悩みを口にする出久。それを聞いてしまった森さんは笑顔で告げた。

「解決方法は簡単です。時間が止まっているかと思うくらい速く動ければいいんです」

「そっか!」

作業スピードを上げる意識をし始めた出久。

素早く動くコツを考える。

「素早く動く方法ですか? では、篠崎流の歩法の一つを——」

篠崎さんから忍術なのか護衛術なのか分からないが、特別な移動方法を教えてもらった出久。

「素早く動けるようになったけれど、体力が続かない? わかりました。体力をつける訓練(軍隊式)を行いましょう」

ロベルタ婦長から訓練を受けて体力を向上させた出久。

こうやって出久のスペックは上がっていくのであった。

「ねえ、咲夜。最近イズクが分身して見えるのは気のせいかしら?」

オマケ2「嘘予告」

ヒーロー基礎学の初の戦闘訓練。

出久は爆豪に向かって拳を振るう。

「これは、さつき、折られた、モップの分、です!!」

「な、モップはさつきてめえが——」

爆豪にメイドさんによる正義の鉄拳が今!

## いづくメイド その4

春の日差しも暖かな4月。

入学式を控えた雄英高校の校門の前で出久は一人立っていた。

待ち人はもちろん、あの男だ。

「悪い、待たせちゃったか？」

「いえ、僕が早く着すぎただけですから」

人の流れの中から出久を見つけて駆け寄ってきた焦凍。

遅くなったことを謝るが、出久は笑みを浮かべて首を横に振った。

「フツツ、焦凍さん、雄英の制服がお似合いですね。かっこいいです」

「ああ。ありがとう。出久も、その、なんだ、似合ってるぞ」

「わあ、うれしいです。ありがとうございます」

お互いの制服姿を誉めあう二人。

実をいうとこの二人、お互いの雄英の制服姿を見るのは初めてだったりする。

というのも、轟家とのメイド派遣の契約が切れたため、出久は轟家をでて一人暮らしをしている。

そのため、今日の日を迎えるまで制服姿を見る機会がなかったのだ。

校門の前で立ち話をしているのもなんだということで、教室へ向かいながら会話を交わす二人。

その様子は何とも楽しそうであった。

あまりのリア充ぶりに周囲から舌打ちが聞こえたりしたが、気にしてはいけない。

なにせ、これで恋仲ではないのであるからして。

・  
・  
・

1—A教室に着いた二人。

大きな扉を開いて中に入ったところで、真っ先に挨拶をしてくれた人物がいた。

「む、君はあの時のメイド女子！ 君も合格していたんだな」

「あら？ 試験の時の……お久しぶりですね」

おはようございます。と、丁寧なあいさつを交わしたところで自己紹介が始まる。

まず出久と飯田が自己紹介をしあい、次に出久から焦凍を飯田に紹介する形でプロフィールを交換しあう。

簡単に紹介を終えたところで、飯田が気になるのは出久と焦凍の二人の関係。

仲良く並んで教室に来た上に、明らかに顔見知りといった様子なのだ。

「それで、二人は知り合いのようだが、どんな関係なのだ？」

「それは——」

「以前、僕が焦凍さんの家でメイドとして働いていたんです。その時にお世話になってから1年くらい交友を深めさせてもらってますね」

飯田の質問に出久が焦凍の言葉よりも先んじて答えた。

若干、出久の返事に不満そうな焦凍だったが、わざわざ口にするほどでもない黙り込む。

どこに不満？ まあ、いろいろだ。

「なんと！ 本物のメイドさんだったとは……試験の時に着ていたメイド服はまさに仕事着だったというわけだな」

「へえ、本物のメイドさんって初めて見たぜ。あ、俺、切島鋭児郎。よろしくな！」

「ああ、同じ試験会場にいた！ 緑谷出久です。よろしくお願いしますね……高校デビューでイメチェンですか？」

飯田と会話しているところへ、リーゼントのように髪形をセットした赤い髪の男子が声をかけてくる。

切島と名乗る男子の顔を同じ試験会場で見た記憶があった出久は、以前の見た目と違う様子をからかうようにクスリと笑って返事をした。

言葉を向けられた切島は顔を赤くして慌てて返事をする。

「ちよ、しーっ！ 言わないでくれよ。高校デビュー野郎だと思われ



るのは恥ずかしいぜ」

「いいじゃんいいじゃん、イカしてるんだから胸を張りなよー！ あ、私、芦戸三奈！ 切島とは同じ中学出身なんだー！」

「ああ!? 高校デビューだったのは秘密にしてくれるんじゃないかなかったのかよー！」

「もうバレちゃってるんだからいいでしょー?」

切島と話していると、同じ中学出身の芦戸が話題に入ってきた。

同じ中学ということでワイワイと騒ぐ二人につられるように、周りのクラスメイトも言葉を交わし始める。

特に出久は、同じ女子同士ということもあって、他の女子メンバーと仲良くなった。

仲良くなれば、より深いところへ質問がいくわけで。

「ねえねえ、轟の事はメイドさんしてた時はなんて呼んでたの? やっぱりご主人様?」

「うーん、雇い主は家主の焦凍さんのお父さんだったから、そう呼ぶのは違うかな。『若様』とか『若旦那様』とかがあつてるんだけど、焦凍さんには断られてしまつて」

「それで、それで!？」

「『様』をつけられるのもお嫌いとのことなので、『焦凍さん』と……」

「うわー、なんかキュンキュンするー」

芦戸が質問を投げかけ、その答えを聞いて葉隠が胸のトキメキに（見えないけれどたぶん、）身もだえしている。

会話には参加していないが、隣で聞いている耳郎は、『それでお互い名前呼びとか、逆にレベル高くない?』

と、ひそかにキュンと来ていたりする。

「私からも質問させてもらおうわね、緑谷ちゃん。メイドさんつてことは、住み込みだったのかしら? それとも一つ屋根の下で過ごしてたの?」

「以前はね……高校進学準備とかもあつて最後の3か月くらいは下宿先から通つてたよ」

『通い妻……という言葉がなぜか浮かびましたわ。なぜかしら?』  
そつと手を挙げて質問した蛙吹。

言葉のチョイスがなんだか独特だったからか、八百万が変な想像を  
してしまっている。

出久の言葉を補足するように、近くで聞き手に回っていた焦凍が口  
を出してきた。

「わざわざ出ていかなくとも、そのまま家ウチに住んでいけばいいって  
言っただけだな。結局、下宿先を見つけて引越していったな」  
「契約が切れた後にも居座るのはご迷惑でしょうし」

言外に出久が出て行ったことの不満を述べる焦凍だが、そんな様子  
に気づいた様子もなく、契約が切れたから出て行ったという出久。

その二人のすれ違っている様子に、ヤキモキするようなニヤニヤし  
たくなるような複雑な心境になる周囲の女子たち。

ここは黙って二人の会話を聞くのが吉と見た。

「遠慮することなんかねえぞ? 好きな時に戻ってこい」

「いえいえ、遠慮なんて。それに家族でもないのにお邪魔しているの  
は、ご迷惑が掛かります」

「……家族ならいいのか?」

「え? それは当然だと思えますけど……?」

出久の言葉尻をとらえて鋭く目を光らせる焦凍。

だが、肝心の出久本人は全く気が付いていなかったりする。

周りで見ている女子メンバーは、目の前で起こされる少女漫画的な  
展開にニヤニヤが収まらなかったり。

メイドの出久はハイスペックで優秀なのだが、とある分野では鈍感  
で天然なのであった。

焦凍は大変苦勞するであろうなあ……

## いづくメイド その5

国内でもトップの実績を誇るヒーロー育成高校の実習はいつだって実践的だ。

オールマイトによるヒーロー基礎学。その初授業はヒーローチームとヴィランチームに分かれて行う2対2の戦闘訓練であった。

くじ引きでランダムにチームが決められ、またランダムに対戦相手が決められた。

事件現場に赴けば、よく知らないヒーローと急場のチームを組む必要がある現代のヒーローの実情に合わせた訓練だが、その結果は焦凍にとってはあまりうれしくないものとなった。

ようは、敵味方にチームが分かれてしまったのである。

「まあ！ 緑谷さんのコスチュームはメイド服なんですね。私の家のメイドさんたちと見た目はあまり変わりませぬね」

「二応、素材は防刃加工されたものになってるので、耐久性は十分ありますし、服のあちこちに暗器が仕込めるようになってます。

……それにしても、八百万さんの家にもメイドがいるんですね」

八百万お嬢様とお呼びした方がいいですか？

もう、からかわないでください。

と、仲良さそうに話をしている緑谷・八百万チームをうらやましそうに見る焦凍。

出久とチームを組んでいる八百万がうらやましいというだけではない。チームの相性がよさそうなところがうらやましい。

生粋のお嬢様である八百万と、根っからの職業メイドである出久の相性は悪いわけがないのだから。

ついでに言えば、八百万は焦凍と同じ推薦入学者なので、実力も十分すぎる。

そんなベストマッチな二人に対して、自分のパートナーの不遇を呪わざるを得ない焦凍。

ちらりと相棒を横目で見る。

「あ？ 何見てんだコラ！ 俺の邪魔したらぶち殺すぞ」

「ハア……先行き不安だ」

ヒーロー候補らしからぬチンピラじみた物言いの相方。

二人で協力するということなどできそうになかった。

今回、厳正なくじ引きの結果、轟・爆豪チームがヒーローチームとして、緑谷・八百万チームがヴィランチームとして参加するのだが、正直言つてヴィジュアルと役割が正反対な気がしてならない。

『見た目は完全にこちらが悪役だな。主に爆豪のせいで』

と、内心で自身のパートナーに毒づく焦凍。

だいたいからして、爆豪の事は気に食わないのだからその気持ちは余計に強くなる。

というのも、つい先日の入学した日に行われた個性把握テストに起きたことが原因だ。

『緑谷……出久？ 出久……てめえ、デクか!? なんでここにインだよ、てめえが!』

『その呼び方……まさか、かつちゃん!?』

個性把握テストの中で、お互いが知り合いだと分かったらしい出久と爆豪。

話を聞けば幼いころに一緒に遊んでいたという、いわゆる幼馴染の関係だった。

4歳のころに出久がイギリスに渡って以来、会っていなかったそう

だ。  
そこまでは別に焦凍も気にしない。出久の過去の友人が出てきたからといって、自分の存在も出久にとって大きいものだと思っているからだ。

きつと、それなりに。たぶん……そのはずだ!

そんなことよりも、焦凍が気に食わないのは爆豪の出久に対する態度。

『なにもできねえ “無個性” のデクがどうやって雄英のヒーロー科に!』

『ああ? “無個性” の木偶の坊だから、 “デク” だ。間違つてねえだろ?』

とことん出久の事を見下した発言をする爆豪に、イライラが止まらなかった。

何度、燃やそうと思ったことか。

何度、氷漬けにしてやろうと思ったことか！

結局その日は相澤先生が爆豪の暴言ににらみを利かせたことと、出久本人が軽くあしらっていたので何もしなかった。

だが、確実に焦凍の中で爆豪は気に入らないヤツトップ3に入った。ちなみに、父親のエンデヴァーはランキングに入っていない。殿堂入りである。

そんな不安と不満を抱えた状態で、初の戦闘訓練は始まろうとしていた。

「八百万さん、作ってほしいものが……」

一方、円滑なコミュニケーションをとって良好な関係を築いた出久と八百万。

お互いに勝利のために協力をしていた。

出久の要望に応えて道具を作り出していく八百万。

それらを装備した出久は、婦長より教わった心を戦闘モードに入れ替えるための聖句を口にする。

「サンタマリアの名に誓い……すべての不義に鉄槌を！」

「なあ、出久のことは俺はよく知っているから情報を共有しておきてえんだが——」

「うるせえ！ デクが何してこようが大したことなんかできるわけねえだろ！ どうだろうがブツ殺す！」

「おまえ、また……」

自宅での訓練でさんざん出久に苦しめられた経験を持っている焦凍がせめて情報共有だけでもと思って声をかけた結果がこれだ。

会話すらしようともしない態度に頭に血が上りそうになるが、冷静を心掛ける焦凍。

何せ、カツとなつた頭で相對しては出久の格好の餌食にされてしまうのだと理解していたのだから。

『仕方ねえ。爆豪が建物に入る前にさっさと凍結の先制攻撃をしちまおう』

足並みが揃わないなら先んじて動くことで何とかしよう。

そう考えた焦凍だったが、それは行動に移すことはできなかった。

なぜなら、相手の出久も同じことを考えていたからだ。

「ッ!? おい!!」

「あ? なんだって——」

「伏せろ!」

顔に差した影に気が付き、見上げた瞬間に危険を察知して爆豪に警告する焦凍。

と、同時に右の氷結で壁を作つて盾にする。

壁が作られたのに少し遅れて銃声が響き渡つた。

「チイツ! 余計なことすんな、殺すぞ!」

「そんなこと言っている場合か!? 奇襲されてるんだぞ!」

銃弾から身を隠しながら言い争う二人。

絶え間なく打ち出される弾丸にどう対処するか考えていると、ドンという近くに何か落下してきた重い音がした。

半身になって覗き見てみれば、そこには出久の姿が!?

「マジかよ……」

「あのクソ女、どつから降りてきやがった!?!」

出久が立っている地面のコンクリは陥没したようにひび割れており、降りてきた、いや、落ちてきたその勢いが見て取れた。

おそらく屋上から飛び降りてきたと思われる出久は、何事もなかったかのようにピンピンとした様子で手にした拳銃にマガジンをロードしていた。

あまりにも人外な身体能力にしばし呆然とするも、即座に攻撃に移る爆豪。

彼の性格上、やられっぱなしというのはありえない。

「死ねえええ！」

「野蛮ですね」

爆風を利用して飛び出す爆豪。だが、その攻撃はあっさりと躲かれ、逆に地面に叩きつけられることとなる。

「グハッ！」

「それでは、ごきげんよう……」

「危ねえ、爆豪！」

仰向けに倒れた爆豪の額に銃を突きつける出久。

それを阻止するために左の炎を使うがノールックで回避されてしまう。

近接戦闘では分が悪いことを改めて認識させられる結果だった。

「おい、爆豪。四の五の言ってられねえ、二人掛かりでやるぞ」

「うっせえ！ 俺に指図すんじゃねえ！」

一人ではどうにもならないと、声をかける焦凍。

プライドの高い爆豪はそれを拒否してワンマンプレイを続行しようとする。

これでは駄目か。

そう思った焦凍だったが、出久は予想外にその焦凍の考えに対して行動を示す。

「2対1ですか……あまりよくないですね。ここは失礼させて頂きます」

スカートの裾をつまんで持ち上げ頭を下げるカーテシーと呼ばれるお辞儀をする出久。

そのスカートから転がり落ちてきたのは筒状の何か。

地面を二、三度跳ねたソレは、軽い爆発音とともに閃光をまき散らす。閃光弾だ！

「チィー！ どこに行きやがった！」

「こちらですよ」

「なっ、いつの間になっ！」

視界が戻った後に出久の姿を探せば、建物の二階の窓から顔をのぞ

かせている。

こちらを誘うように手招きをする、明らかな挑発行為。

それに乗せられたのは爆豪だ。

「あのクソデクがア……舐めてくれるじゃねえか、あアン！」

「おい、待て！」

焦凍の制止も聞かず、爆破の空中移動で二階に乗り込んでいく爆豪。

味方が建物に入ってしまったため、建物ごと氷結するという大規模攻撃が使えなくなってしまった。

勝手なことをするパートナーに舌打ちをしたくなるが、そんなことをしている場合ではないと慌てて後を追うのだった。

爆豪を追って建物に侵入した焦凍。

周囲を警戒しながら進むその道行きは静かなものだった。いや、静かすぎた。

「おかしい。どうも静かすぎる」

自分の建物への侵入は向こうも分っているはずなのに、何の反応もないことが不気味に感じる。

爆豪が暴れていてそちらに気を取られているというのなら分からなくもないが、それにしても戦闘音がまったく聞こえない。

嵐の前の静けさか。

そんな嫌な予感を感じていると、ひよつこりと曲がり角から爆豪が顔を見せた。

「あ？　なんだ、てめえかよ」

「おまえ、無事だったのか」

「俺がやられるわけねえだろ！　舐めてんのか！」

こちらの心配などお構いなしの爆豪。その反応にまたため息を吐きたくなる。

だが、そんなことよりも気になるのは出久の事だ。

「なあ、出久はどうした？」



「ハッ！ ぶっ飛ばしてやったわ！ 俺がクソデクに負けるわけねえだろ」

「……出久が？」

爆豪の返事に眉をひそめる焦凍。

あの出久が負けるとは信じられない……

不信感はぬぐえないが、かといってここで話しているわけにもいかない。時間は有限だ。

一旦、話を打ち切って歩き出す。

「まあいい。とにかく核の場所を見つけねえと」

「そおかよ。勝手にしろ」

爆豪の先を歩き始める焦凍。しかし、次の瞬間、振り返って左の炎を爆豪に向けて放っていた。

「ためえ、何のつもりだ！」

炎をからくも躲し、焦凍を睨みつける爆豪。

対して焦凍はその姿を冷静に見定めていた。

「いい加減、小芝居はやめたらどうだ……出久」

「あアン？」

焦凍の言葉にピクリと反応する爆豪。

数秒の間の後に、目の前の爆豪は小さく笑い声をあげる。

—— 出久の声で！

「フッフ、さすがですな焦凍さん。どうしてお分かりに？」

「あいつにしては素直すぎたからな」

爆豪に化けていた出久の質問に答えるように、焦凍が理由を説明していく。

そもそも、出久がそう簡単にやられるとは思っておらず、最初から疑ってかかっていたこと。

また、ほんの短い付き合いだが、彼の性格上からして自分が先行して歩くことを黙ってみていたことに違和感を感じたこと。

そして、なにより……

「俺が背を向けた瞬間の気当たり覚えがあつたからな」

「勝負を急いで欲ができましたか……まだまだ未熟ですね」

背中を見せた絶好の機会に敵意を見せてしまったと反省する出久だが、相手が出久のことをよく知っている焦凍でなければ成功していただろう。

顔に手を当てて仮面のようなものを取って素顔をさらす出久。

爆豪のコスチューム姿の出久に複雑なものを感じる焦凍だったが、そんなことを言っている場合ではない。

狭い室内。

格闘戦の間合い。

焦凍にとって苦手な、逆に出久にとって得意なバトルフィールドだ。

相手の得意な環境で対峙する場合、どうするべきだろうか？

焦凍の出した答えはシンプルなものだった。

「出久、悪いがおまえとまともにやりあうつもりはねえ！」

一瞬で氷壁を作り、道を閉ざす。

焦凍の勝利条件は出久を倒すことではない。

ならば無理に相手をするよりも、もう一人の八百万を相手にして核を狙った方がよい。

そう合理的に判断して背を向けて走り出す。こうして出久が迂回している間に核を見つけなければいけない。

だが……

「そんな、馬鹿な!?!」

「お待ちしておりました。焦凍さん」

階を上がりしばらく進むと、道に出久が立ちふさがっていた。

出久のスピードがいくら早いとはいえ、こうしてすぐに見つかるのはありえない。

まるで自分の位置を把握して移動先を予測されたような……

混乱している焦凍に対し、いつものメイド姿とは違った、レオタードに似た黒色のコスチュームを身にまとった出久が太もものホルダーからクナイを抜き放って構える。

すでに臨戦態勢。

その姿はまさに『くのいち』のようであった。

まあ、ある意味間違っていないのだが。

なにせ出久は、軍人的な訓練を受けて、かつ古武術や中国拳法を修めつつ、忍術的なナニカを学んだハイスペックメイドなのだから！

……これ、もはやメイドなのだろうか？

そんなスーパーメイド（？）の出久がただ先に場所に着いて単に待ち伏せしているだけで終わるだろうか？

そんなはずはない。

罨はもう仕掛けられている。

「これで終わりです。焦凍さん」

手にしたクナイを投擲し、何かに当てた。と、同時に罨が起動する。

「ハ、これは!？」

驚く焦凍。

隠されていたクナイがあちこちから飛び出し、焦凍の周りを360度ぐるりと囲むように刃先を向けて宙を浮いていた。

まるで超能力のようだが、よく目をこらせば細いワイヤーがつながっており、出久の手元につながっている。

「詰みです。僕が手を少し動かせば串刺しになります。降伏を」

「……降参だ」

出久からの降伏勧告に素直に答える焦凍。

ヒーローチームの完全な敗北だった。

|||||

「さて、今回の総評だが……ヴィランチームの作戦勝ちだったね！」

H A H A H A！ と、笑いながら告げるオールマイト。

その言葉に焦凍も爆豪も顔をしかめることしかできなかった。

なにせ事実いいようにされてしまったのだからして。

「今回少女たちの良かったところはまさにチームワークだ。防衛側であるという観点に捉われずに外に出て奇襲を仕掛けてきたことも誉めたいが、なによりもその役割分担がGOODだ！」

オールマイトが手放してほめるのは二人のチームワーク。

防衛側であることを活かして、八百万が小型カメラを複数作り、出

久が短時間で設置。

建物内の状況を随時把握できる環境を作り上げたのだ。

こうして出久が現場での戦闘を担当し、八百万が万が一の核の防衛をしながらモニター越しに通信で指示を出しながら戦うという盤石な体制を作り上げたのだ。

これが、出久が焦凍を待ち伏せできたからくりである。

出久の動きばかり目立っていたが、必要なものを作り出して用意できるその個性と、移り変わる状況を把握し、敵の動きから行動を予測して味方に指示を出す頭脳など、八百万が果たした役割は大きいのだ。

推薦入学者は伊達ではないということである。

これだけチームワークの良い相手が準備万端で待ち受けており、さらに情報戦でも負けていた。そりやあ勝てない。

ついでに言えば、お嬢様とメイドという相性も抜群。

もう、焦凍が嫉妬するくらいにね。

「もしや、一番のライバルは八百万なのか？」

戦闘訓練で負けたことよりもそっちが気になる焦凍わかさまであった。

オマケ『爆豪の敗北シーン』

爆豪は怒り狂っていた。

幼いころの、記憶からも抜け落ちていたような無個性のザコが10年越しにしゃしゃり出てきて、自分と同じ場に立っているのだ。

逃げ出して、いなくなつたと思っていた格下が、今、まさにこうして自分の目の前に立ちはだかり、あまつさえ挑発すらしている。

プライドの高い爆豪は許せるはずもなかった。

「待てや、クソデク!!」

怒りに任せ、飛び込んだ二階の窓。

ピカピカの床に降り立った爆豪は――

「ガッ!?!」

見事にツルツ、と転んでしまっていた。

後頭部をぶつけ、悶える。

「地面が濡れております。足元にご注意くださいね？」

笑顔で告げる出久の手にはモップが握られており、床をテラテラしたよく滑る液体で拭いた跡があった。

こんな子供だましの罠に嵌められて屈辱に顔を歪ませる爆豪。

すぐさま怒声を上げて飛び掛かるが……

「ムギャツ！」

「うわあ、痛そう」

見えない壁に顔面からぶつかり、猫が踏みつぶされたような声を上げて崩れ落ちる。

出久が八百万に頼んで作ってもらった透明度の高い強化ガラスの板だった。

ダメ押しとばかりに天井から金ダライが頭に向けて落ちてきた。

……いい音が響く。

お茶の間……違った、モニターの向こうのクラスメイト達もドリフ的な展開に爆笑である。（オールマイトは教師という立场上必死に耐えた）

こんな感じで隙をさらした爆豪は呆気なく確保テープを巻かれ、御用となった。

もはやギャグである。

「俺は芸人じゃねえぞ！ フザけんな！」

なお、この映像を後から見た相澤先生を嘔き出させるという快挙を達成したとだけ伝えておく。

## たとえばこんな緑谷兄妹（サーヴァンツ）

人は生まれながらに平等ではない。

世界総人口の約8割が何らかの特異体質となった「超人社会」において、何の特殊能力も持たない『無個性』は生まれながらにして社会の厳しい現実を突き付けられることとなる。

ヒーローに憧れていた『無個性』の双子の兄妹、緑谷出久と緑谷海雲みくももまた齢4歳にしてその現実を突きつけられた人間だった。

生まれ持った素質というどうしようもない壁は、幼い二人の心を折るには十分すぎる。

そして、二人が最も憧れたグレイトフルなヒーロー、オールマイトが活躍する日本にすることが耐えられず、海外に行くことになるのも自然な話だ。

そうして日本を離れ、イギリスに渡った二人であったが、慣れない環境に捨てきれないヒーローへの憧れと、すぐには元気になれなかった。

見守るしかない両親の元へある日イギリスの友人が一つ提案を持ってきた。

「ヒーローと違う職業、違う世界があることを教えてあげればよいのでは？」

そう言われて職場見学をしたことがきっかけで、二人はその職業へと道を進むこととなる。

その道のエキスパートたちにそれぞれ教えを受けた二人は、10年の修行を経て、それぞれの技術を身に着け、それぞれの理由で日本に戻ることとなった。

そして、これまたそれぞれの理由で同じ高校を受験し、見事入学する。

入学した高校の名前は、日本でも最高峰のヒーロー育成校『雄英高校ヒーロー科』

彼らがかつて憧れたヒーローへの道を歩むことができるようになるほどの影響を与えた職業……それは、執事とメイドである。

これは、二人のとんでも従者たちの物語だ。

1年A組ヒーロー科教室。

入学早々に行われた個性把握テストを乗り越え、高校生活を始めたクラスの皆。

天下の雄英に入学するだけあって、誰もが個性的なキャラばかりだ。

そんな中でも特に異彩を放っていたのが緑谷兄妹である。

双子で入学したというのも珍しいが、そのことをお互いが入学初日まで知らなかったという時点で驚きである。

「い、出久!?! なんでここに!?!」

「そういう、海雲こそ!?!」

お互いに驚き合う兄妹に、『なんで知らないんだよ』とツツコミが入るのは当然であった。

で、その理由を聞いてみれば……

「お互い普段は別の場所で生活しているので……」

「基本的にお勤め先に住み込みですから……」

『本物の執事とメイドっばい!!』

と、執事とメイドらしいことを言われてしまう。

クラスメイトも反応に困ろうというものだ。だって、クラスメイトに本物の執事とメイドがいるとか想像できない。

というか、なぜヒーロー科にいるのか分からない。

まあ、聞かれてもその理由は正直に答えられないのだけれど。

『奥様がお嬢様のこと心配して傍にいてほしいと頼まれたからとは……言えない!』

『お嬢様の気まぐれです、なんて、言えないよ!』  
身も蓋もない話だった。

なんというか、真面目にヒーロー目指して受験して、ヒーロー科に落ちた生徒が聞いたら怒り狂うだろう話である。

いや、この場にいる面々も複雑な顔をするであろう。

皆が憧れる雄英高校に、『主人に命令されたのでその通り合格して入学しました』とか、普通に納得できない。

それぞれに事情を抱えた緑谷兄妹は、視線で会話し、同じ答えを出す。

「幼いころ、ヒーローに憧れていたのだから」

嘘は言っていない。嘘は。

そんな風にごまかしている従者二人に対して、事情を知っている主の八百万と轟はというと、

「私の執事は優秀ですよ」

「俺の家のメイドもすげえぞ」

何故か、従者自慢をしあっていた。

奇しくも雄英に入学し、緑谷兄妹をそれぞれ従者にしていたという共通点を持つ二人は必然、興味を持って話をした。

なんだかんだ言いつつもブルジョワジーで価値観も近く、能力もお互い特待生で優秀ということもあり話は盛り上がる。

そうして従者の話になって………なんでもか張り合いになったのだ。

曰く、「ウチの従者の方がすごい」と。

「出久さんはお茶を淹れるのが上手でして、ハーブティーも詳しいのですわ」

「海雲は料理が上手で、家の料理の味まで再現してくれてる」

お互いの従者の料理や給茶の腕を自慢したかと思えば、

「うちのメイドは優秀なんだ。一人で家のことを全部こなせる」

「こちらの執事は、来てから三日で仕事をマスターして一番仕事をこなせるようになりました」

仕事の腕を自慢し、

「出久さんは私のボディガードができるほど強いのです。そこいらのヴィランなんかには負けませんわ!」

「海雲だって、格闘技は達人級の腕前だ。そうそう勝てると思わねえことだ」

ついには強さ自慢までし始めてたり。



まあ、お互いの従者のとんでも具合を知っていたら、そうも言いたくなるというもの。

だって、執事とメイドって言葉がなんだったのか辞書を引きなおしたくなる二人ですから。

そんな従者を自慢したくなるのは主として当然の心理だ。しかし、「あの、お嬢様。そのくらいで」

「焦凍さん！ その、落ち着いてくださいー！」

自慢される従者二人には困りごとでしかないわけで。

信頼されるのは嬉しいが、気恥ずかしさはあるのだ。

ついでに、教室の端の方にいる幼馴染の機嫌が悪くなっていくのも感じ取れるし。

「チツ、クソナードどもが。無個性で逃げ出したくせに今更のこのこ出てきて出しやばりやがって」

かつては圧倒的な格下が、無個性でなんの力もなかったはずの相手が自分と同じ立場に立っている。

プライドの凝り固まった爆豪にとっては、二人の会話は茶番にしか思えなかった。

そんな爆豪の気持ちなど察することもなく、主二人は従者に促されて妥協案を出す。

「いずれヒーロー科の授業でお力を見せるときが来るでしょう。その時に、私の執事が一番だと証明してみせますわ！」

「上等だ。こっちこそ、ウチのメイドが一番だって見せてやるさ」

ヒーロー科の授業の中で決着をつけると意気込む八百万と轟。

頑張るのは出久と海雲であって、二人ではないはずなのだが……。ともかく、決着の方法にお互い同意した。そして、その機会がすぐ

このあと訪れるのだった。

もつとも、二人が想定していたのとは違ったのだけけれど。

|||||

オールマイトによるヒーロー基礎学。その最初はいきなりの対人戦闘訓練から始まった。

二人一組でヒーローチームとヴィランチームに分かれ戦う対抗戦。

A組は21名のため一組だけ3人のチームができるという問題があるが、それは雄英の方針からすぐに解決した。

ヒーローにはさらなる受難を！

ということで、ヒーローチームに対するハンデとしてヴィランチームに固定することで解決した。

そして、その組み合わせは厳正なるくじ引きの結果……爆豪・轟・八百万の三人に。

特待生入学の二人と一般入試トップといふかなり戦闘力の高い組み合わせになってしまい、ヒーローチームへのハンデとしては大きすぎるものになってしまった。

『オーマイガッ！ くじ引きの女神はとんだ悪戯好きだぜ！』

組み合わせ結果を見たオールマイトは頭を抱えるが、厳正なくじの結果とあつては文句のつけようもない。

ヒーローチームに頑張ってもらうしかないと祈るオールマイト。

その祈りは無事に通じることとなる。

オールマイトが思った通り、くじ引きの女神は悪戯好きなのだから。

「3対2……この程度のハンデ、八百万家の執事たる者、乗り越えなくてどうします」

「サンタマリアの名に誓い、すべての不義に鉄槌を！」

ヒーローチームとしてヴィランチームの三人組と戦うこととなった緑谷兄妹。

3対2のハンデ。相手はA組の実力者。

そんな悪条件を前にしても何ら気負うこともなく平然としている二人。

執事服とメイド服の戦闘服コスチュームに身を包んだ姿は普段の日常業務をこなすのと変わらない顔をしている。

対して、彼らと戦う三人のヴィランチームの反応はというと。

「いまさらノコノコと出てきやがってクソナードどもが。ブツ殺す！」

かつての幼馴染の記憶が残る爆豪にとって、あの兄妹は格下の認識なのだ。

二人の実力を知らない爆豪はひたすら二人を侮っている。

まあ、実力を知っていたところで対応が変わるとは思えないのだけれど。むしろ、意固地になつて二人のことを否定しているかもしれない。

「海雲が相手か……ヤバいな」

「出久さんが相手……マズいですわね」

逆に二人の実力を知る轟と八百万は危機感を募らせる。

一人でもトンデモないのだ。それが二人。

考えるほどに恐ろしい。手が付けられるのだろうか？

「作戦を考えるぞ。真正面からやり合うのはよくねえ」

「罨を仕掛けて、それから役割分担を……考えることは多いですわね」  
無策で戦えば負ける。その確信がある轟と八百万は何か対策を立てることを主張する。

「ふざけんな！ あのザコども相手になんで俺がコソコソしなきゃなんねえんだア!？」

が、しかし、プライドの凝り固まった爆豪が聞き入れるはずもなく。爆豪とはまともに話も出来ずに開始時刻を迎えてしまうのだった。

轟と八百万の制止も聞かず、一人飛び出して数の利を無くしてしまう爆豪。その代償を支払うのはすぐだ。

「おい、爆豪！ 一人で飛び出してんじゃねえよ！」

『うるせえ！ ムカついてんだよ、俺ア、今！』

「おまえの今の気分なんか聞いてねえ！ おい、おい！ あいつ、返事しねえぞ?!」

「困りましたわ……どうしましょう?」

通信を無視する爆豪にキレる轟。これでは連携もあつたものではない。

かろうじて、通信を繋いだままにする理性は残っているが、漏れ聞こえてくる音声だけでしか向こうの状況を把握できないのはきつい。

『死ィねエ!!』

爆発音がノイズ交じりに聞こえてくる。

「どうやら奇襲を仕掛けたらしいが……」

『鈍い。動きが大振りすぎる』

『残念、残像です！』

従者二人には通用しなかった。

空気を切り裂く風切り音とバラバラと細かく連続した落下音が聞こえてきた。

『チイ、クソが！ 装備を壊したくらいでいい気になってんじやねえぞ！』

『良く吠える……神様にお祈りは？ ブタ箱の隅でガタガタ震えて判決を待つ心の準備はOK？』

『瀟洒に、いきます！』

『ク、クソがああぁ！』

大きな破壊音。そして静寂。

爆豪はやられてしまったらしい。

インカムから聞こえてくる音声だけでは何があったのか分からない轟と八百万。

心に不安が広がっていく。

爆豪に何が起きたのか……モニターで様子を見ていたクラスメイトの一言が物語る。

『これは、ヒドイ!!』

何はともあれ、爆豪の尊い(?)犠牲によりわずかばかりの時間が稼げたヴィランチームは、八百万制作のトラップを仕掛け、轟の氷の障壁で行く手を阻むなどして迎撃の用意を整えていた。

即席の要塞と化した建物を、緑谷兄妹が攻略していく。

『轟さん、二階から三階に上る階段のセンサーが反応しました!』

「二階には氷の障壁を張りまくっておいたのに、もう突破したのか!?

八百万、オペレーションを頼む!」

『了解です。今二人はトラップを仕掛けた廊下を移動中ですわ!』

建物のあちこちに仕掛けておいたセンサーなどで相手の動きを探りながら、役割分担をして挑む轟と八百万。

迎撃にあたる轟は、八百万の指示に従って緑谷兄妹が進行中のフロア近くに来たのだが。

『おかしい。静かすぎる。罠が作動してねえ』

「そんなはずは！ 動体センサーは確かに反応してますのに！ 轟さん、お気をつけて」

『分かって……なんだこれは？ ワイヤー？ おっ——』

「轟さん、轟さん!? 返事をしてください!」

何が起きたのか情報も入らぬまま、次々と仲間がやられていく。

八百万の背中に冷たいものが流し込まれたような悪寒がした。

唐突に「コンコン」とノックの音がする。

ハツと入口のドアに振り返れば、ゆつくりとドアノブが回転していくのが目に入った。

緊張から唾を飲み込んで、創り出した銃を向ける。

ゆつくり、ゆつくりと開いていく扉は、10センチほど半開きになったところで動きが止まった。

恐る恐る銃を構えながら近づいていき、意を決して扉をいつきに開く。

が、そこには誰もいなくて……

「だ、誰もいない？ そんなはずは——」

「いいえ、ちゃんといますよっ」

「え？ きゃあああ!」

何故か上から声がする。

顔を上げれば、そこには天井に逆さに立つメイドの姿があった。

天井に立っている人とか、怖すぎる！ 悲鳴を上げるのも無理はない。

とつさに銃を向けたが、天井から足を離して降りてきた海雲に襲われ、地面に押さえつけられる八百万。

これで海雲が首筋に噛みつけば完璧である。

……吸血鬼ホラー映画みたいになってるのはなぜだ!?

なにはともあれ、最初の戦闘訓練は緑谷兄妹の勝利に終わったのだった。

めでたしめでたし？

「私が知ってる執事とメイドじゃない……」

思わずつぶやいたオールマイトの一言に、みんな首を縦に振ったとか。

オマケ『バトラー&メイドの恋愛力』

たとえヒーロー科といえど、女子たちが集まって話をすればそれは盛り上がるもの。女子トークが始まるのは当然だ。

たいてい話のネタになるのは恋バナである。

特にそういった話が大好きな芦戸を中心に、姦しく会話がされていた。

話の内容は主にメイドの海雲と、その家人である轟との関係についてだった。

「二年間、同じ年の男女が一つ屋根の下で過ごしてたわけでしょ？  
何も無いわけじゃないよね！」

ああ、お坊ちゃんとメイド。身分違いの恋物語！ と、盛り上がる芦戸であったが、当の本人である海雲は完全否定だった。

「まっさかー。お仕える家人の方にそんな感情向けるなんてプロ失格ですよ〜」

「とか言いつつも〜？」

「まったくもって恋愛対象外です！」  
はつきりと断言する海雲。

芦戸は若干つまらなさそうな顔をしたが、諦めていない様子。

それはソレとして、偶然教室の外にいて話を聞いてしまった男子メンバーが数人。

尾白・常闇・障子、そして、轟である。

「恋愛……対象外……ぐっ」

「大丈夫か!? くっ、これは傷が深いぞ」

あんまりな言葉に胸を押さえて膝をつく轟を常闇が支える。

クールだと思っていたクラスメイトの意外な一面に驚くと同時に、同じ男子として見ていられないとフオローをする。

「いま現状はそうだっただけで、これからだつて！」

「ここは思い切つて気持ち伝えるという方法だつてある！」

そんな二人の言葉に轟は力なく返事をする。

「アプローチは今までもかけてきたんだ。だけどな、『毎日、おまえの味噌汁が飲みてえ』つて言つたら、『じゃあ、味の再現ができるようにレシピを作っておきますね?』つて、答える相手にどうすればいいんだ?」

「『告白どころか、プロポーズ!?!』」

いろいろすつ飛ばしてプロポーズまでしちゃつてる轟に戦慄するとともに、それをまったく受け取っていない海雲の天然具合にも驚く三人。

なんかもう、ツツコミが追いつかない。

男子たちを放つておいて、女子トークは続く。

しつこく尋ねる芦戸に海雲はずっと否定をしていたのだが、堪忍袋の緒が切れたのか声を荒げて主張をしていた。

「だいたい、焦凍さんはメイドに手を出そうとするような人じゃありません! メイドをお手付きにしようとするような下種とは違うんです!」

主に対する敬愛を隠すことなく主張する海雲はまさにメイドの鑑であろう。

もつとも、その言葉に主である轟はダメージを負っていたが。

「げ、下種……違う、違うんだ。俺はおまえが思つてるほど立派な人間じゃねえんだよ……」

「と、轟。きみつて……」

「すまない、かける言葉がみつからない」

「無情だ……」

尾白、障子、常闇の三人は、がっくりと崩れ落ちる轟を見て涙を隠しえなかつた。

男の友情が芽生えた瞬間であつた。これも青春?

一方、人の恋路よりも自分の恋が気になる女の子もいる。

入学試験の時に救けられてから、出久のことが気になる麗日は八百

万に出久の恋愛状況についてそれとなく尋ねていた。

「緑谷くんって、女の子に慣れてて恋愛とか上手そうだよね？」

「え？ そうでしょうか？」

女慣れしてそうだよ。という、微妙な評価をする麗日に対して八百万は首を傾げる。

主人である八百万にはちよつと違った見解があるらしい。

「出久さんですけど、『女性の扱い』は得意ですけど、恋愛上手かって言われるとそうとは言い切れませんわね」

「え？ 女性の扱いが上手なら恋愛上手じゃないの？」

「いいえ。出久さんは『こういう場面ならこうする』という叩き込まれた女性への紳士的な対応を無意識にやっているだけですの。だから、女性からの気持ちを理解しているかと言われれば……」

女性の扱いがうまいことと、女心を理解しているかはイコールにならないと言う八百万。

中学時代に彼が勘違いさせた女子たちのことを考えると頭が痛くなりそうだった。

「いつか、女性に刺されないか心配です」

「そ、そこまでの!?」

頑張れ、お茶子。君のターゲットは手ごわいぞ！

これだけ超人的に鍛えられても、恋愛方面ではクソナードレベルの緑谷兄妹であった。



## いづくオンライン いづくオンライン

人は生まれながらに平等ではない。

緑谷出久が齢4歳にして知った社会の現実。

「超カッコイイヒーローにさ、僕もなれるかなあ……」

「……………!! ごめんね出久、ごめんねえ!!」

オールマイトの映る動画を指しながら告げた言葉に母が謝罪の言葉でしか返してくれなかったその時、出久は悟った。

『僕は、ヒーローになれない』

何の特殊能力もない『無個性』の自分ではヒーローになれない。

個性なしではヒーローは務まらない。それがこの社会の現実。

この社会の現実はどこまでも出久に冷たかった。

絶望する出久の脳裏になぜかダンディな外国人男性が浮かび上がり、こう告げた。

『何？ 現実じゃヒーローになれないって？ 逆に考えるんだ。現実

じゃなくてもいいやって』

その時、出久に電流走る。

コペルニクスの発想の転換。それが、舞い降りてきたのだ。

それは、つまり……

「お母さん、僕、誰でもヒーローになれる世界を作るよ」

「出久!? どうしちやったの？ ショックでおかしくなっちゃったのお!?」

|||||

——10年後。

「うーん、どうしても異形型個性のアバターの不具合が多くなるなあ……」

複数のPCの前でカタカタとキーボードをタイピングする出久。

流れるようにコードが流れ、3Dグラフィックが次々と構成されていく。

「やあ、出久くん。頑張っているね」

「あ、茅場主任。お疲れ様です」

出久に声をかけてきたのは短髪白衣で無機質な印象を受ける男性。彼は出久の上司である。つまり、ここは会社の中。

14歳になった緑谷出久は、とある企業で天才ゲームデザイナーとして働いていたのだった。

「出久くんが組み上げてくれたプログラムは実に役に立った。礼を言わせてもらうよ。さすがわが社の天才少年ゲームデザイナーだな」

「い、いいえ。僕なんか……茅場主任の足元にも及びませんよ」

「フツ、謙遜は美德だが、やりすぎると嫌味になる。気をつけたまえ。君はもつと自信を持つべきだ。事実、キミの手掛けたゲームは多くのプレイヤーを魅了し、こうして一年以上も世界を広げ続けているのだから」

茅場主任の言葉の通り、出久は一年前にゲームを手掛け世界にリリースしたのだ。

出久が13歳のときに発売された人類初のフルダイブ式VRMMORPG『HERO&VILLAIN ONLINE』。

その基本設計をして現在も中心人物の一人として活躍しているのが出久本人であった。

出久が作り上げたゲームは自分の個性データを入力してアバターを作り、架空の世界でヒーローとして活躍できるものだ。

史上初のフルダイブVRMMOということで注目を集めたのだが、それだけでなく、ゲームの自由度も人気を博している。

自分の個性を使って自由にヒーロー活動が出来るというのは誰もが夢見る世界だ。

もちろん、無個性やヒーロー向きでない人のために、パワードスーツ装着型のヒーローや魔法使いタイプなど、変身ヒーローのモデルを用意していたりする。

自分の個性でなくても一般的なヒーローの個性や過去に活躍したヒーローの個性データを基にしたアバターなどもあるため、人を選ばない。

まさに「誰でもヒーローになれる世界」だ。

ヒーローを現実で諦めざるを得なかった出久は、自分の望んだ世界を作り上げたのだった。

「HERO&VILLAIN ONLINE」、通称「ヒロオン」と呼ばれるこのゲームだが、キャラメイクの自由度だけでなく、プレイの自由度も高く設定されている。

というのも、実はこのゲーム、『ヴァランロール』もできるのだ。あまりやりすぎな行為は公式ヒーロー「ポジティブ」によって成敗（一定期間のログイン禁止）されるが、基本的に何でもアリだ。

というか、公式がヴァランミッションを作っているあたりお察しである。

ヒーロー狩りをするヒーローハンターロールをするプレイヤーもいれば、ヴァラン向けアイテムを専門に扱う闇ブローカープレイをするプレイヤー。

プレイヤーキルの依頼を受ける暗殺者プレイに、アイテム作成スキルを極めるサポータープレイなどなど。

そして、ヴァランプレイ。

「気に入らないなあ……何がオールマイイトコラボイベントだ。気に入らないのは全部ぶっ壊す。それがヴァランってやつだア……」

「大手ヴァランギルドの「ヴァラン連合」!? なんでこんなところに!!」

アバター名『ハンドマスク』が率いる大手ヴァランギルド・「ヴァラン連合」がイベントの会場に殴り込みをかけてきた。

ヒーロープレイヤーたちは混乱するも、一部はすぐに立ち直り、迎撃の準備をする。

「ハッ、ヴァランギルドだあ? ヒーローの集まるこの場に来るんならアホすぎるぜ!」

ヒーロープレイヤーの一人が飛び出し、ハンドマスクに攻撃を仕掛けるが……

「弱い攻撃だなあ……残念、L.V. が違い過ぎだ」

「なっ、ふざけんな、クソが——」

ハンドマスクの反撃をくらい、一発でHPを0にされるヒーロープレイヤー。

その実力差に周囲は騒然となる。

「嘘だろ!? 『爆殺王』が一撃で!?」

「あいつのレベルはいくつなんだよ!!?」

怯えるヒーローたちにハンドマスクは笑みを浮かべ、

「俺のレベルは133だ。俺に勝ちたかったら一日15時間はログインしてこいよ」

一日の半分以上を告げてくるハンドマスクに周囲のプレイヤーは絶句する。

「「「「こいつ、廃人だー!?」「」」」」

会場中の敵味方が叫ぶ。ゲームに人生捧げ過ぎである。

一方、そのころリアルでは。

「弔、死柄木弔！ いい加減、ご飯時くらいゲームをやめなさい」

「ふざけんな！ フルダイブ中に無理やりゲーム外すんじゃねえよ！

ペナルティ喰らうじゃねえか！」

別の並行世界では悪の後継者として暴れ回る彼も、ここではニートでゲーム廃人であった。

平和なのはいいことだ……いいこと、なのだが!!

ちなみに彼の先生はというと、

「フッフッフツ、キミがこのゲームに来ると知ってからこちらは手ぐすね引いて待っていたよ、オールナイト」

「き、貴様、その声は、オール・フォー・ワンか!? ……ゲームのなかで何をしているんだね?」

「なにつて、遊んでいるに決まっているだろう? さあ、戦いだ、オールナイト」

「ま、待て、私はさつきログインしたばかりでまだ操作がだな!」

「フルダイブVRでなにを寝ぼけたことを。さあ、三ヶタ万円はかけた僕の力を見せてあげよう」

「廃課金ユーザー!?!」

ズルいぞ！ という断末魔を聞きながらオールマイトのアバターを撃破してご満悦の先生。

数日後、ヴィランイベントの『平和の象徴を倒せ』で、公式ラスボスモードになったオールマイトにボコボコにされるのだが、またそれは別のお話。

「公式チートはズルいよ、君イ」

「H A H A H A、そっちこそ、いくら使ってるんだそのアバター!!」

「先生、俺には月5千円までしか許可してくれないくせに……」

働け、死柄木弔！

## いづくオンライン（小ネタ）

◎オールマイト、冷や汗。

オールマイトコラボイベントのヴィランイベント〃平和の象徴を倒せ〃だが、ヴィランプレイヤーからは大変不評である。

何せオールマイトが強すぎる。現実のNo.1ヒーローというところで多少は強く設定されていると思っていたら、想像以上の強さで話にならない。

たとえば、

『〃回復力アップ強〃 打撃ダメージ8割減〃 パワーステータスアップ強〃のアビリティをつけた装備だ。完璧なオールマイト対策。これなら勝てる!!』

『私対策!?! ならばさらに上からねじふせよう!!』

Plus Ultra!

その掛け声と共に繰り出される連続スマッシュにぶっ飛ばされるヴィランプレイヤー。

究極のゴリ押しに絶句。あえなくヴィランプレイヤーたちは……全滅した。

「出久くん、こんなに苦情が来てるんだけど」

「大丈夫ですよ、課長。あらかじめ一定ダメージが積みあがれば弱体化するようになってますし、関連クエストの報酬でも弱体化しますし！」

そんなこともあるのかと、イベントの設計段階から仕込みを済ませている出久。

〃オールマイトの古傷を探れ〃：ヒーローに守られたオールマイトの主治医の持っているカルテを奪うクエスト。成功報酬はオールマイトの脇腹にウィークポイントが追加される。

〃オールマイトの残酷な真実〃：オールマイトのスクープを手に入れた記者を見つけ出し、記事を奪うクエスト。成功報酬は、かつての恩師の家族がヴィランになっていてそうと知らずに自分が倒してい

たという真実を突きつけることで心理的なショックでオールマイトのステータスがダウン。

“オールマイトを迎え撃て”：オールマイトの迎撃のためのトラップを作るための素材収集クエスト。成功報酬はオールマイトのHP減少。

などなど。いろいろな弱体化クエストが用意されていたりする。それにプレイヤーが気がつけば攻略は可能なのだ。

「なるほどね。考えてあるんだね!!」

「はい！でも、このことを伝えたらオールマイトの様子がおかしかったんですけど……やっぱりヒーローに弱点が出来るのは気分悪いのかなあ?」

と、不安に思う出久だが、事実は違う。

というのも、弱体化の理由のいくつかが現実にあてはまりそうで、いや、本当に弱点を言い当てているものもあって、ゾツとしたというのが事実だ。

『本当に偶然なんだよな？ 緑谷少年くん!!』

オールマイトの苦悩が尽きない。

### ◎ “ヒロオン” の影響

ヒーローとヴィランを扱う “ヒロオン” だが、現実にもヒーローがいる以上、影響を与えないわけがない。

「な、なんと!? 我と “ヒロオン” がコラボだって!?!」

座っていた椅子を蹴飛ばして立ち上がり、驚くシンリンカムイ。

電話越しの相手、“ヒロオン” のメイン企画の担当を名乗る『ミドリヤ』が慌ただしく説明を始める。

『は、はい。シンリンカムイは若手の中でも注目株ですから。僕、じゃなくて、私もあなたの活躍を見まして、これはやるしかない。特に必殺技のウルシ鎖牢なんかすごい有効な技ですよ！それに今度のエリアは山岳や森林なんかも追加するので、森林保護や緑化事業にも力を入れているシンリンカムイにピッタリだと思うんです。それから――』

電話からマシンガンのように語られる自分の話に、シンリンカムイは嬉しさを隠せない。

これだけ自分の活躍を見てくれている人がいるのだ。

電話の主は声が若く、ビジネススマナーもまだ慣れていないように感じたが、熱意は伝わってきた。

そして、こんないい話は受けるに決まっている。

なにせこのゲームとコラボすることは多くのヒーローの憧れになっっているのだから。

「我、感動!!」

よかったね。シンリンカムイ。

◎先生がゲームにハマったわけ

オール・フォー・ワン。

裏社会を支配し、悪逆の限りをつくした闇の帝王。

数年前にオールマイトによって重傷を負い、一時は死亡の噂も流れていたが、本人はこうして生きていた。

ただし、視力を失い、身体能力の多くを失った状態で。

この現実にはさすがのAFOも怒りと絶望を覚えた。多くの個性を持ちながらもどうしようもない現実。

それに救いを与えたのが“ヒロオン”だった。

失ってしまったはずの視力。

失ってしまった身体能力。

自由に動く自分の身体。

仮想現実の世界で再び取り戻すことができた“風景を見る”ということ。それは悪の帝王をして感動させるに十分だった。

グラフィックの美しさとはまた違う、何気ない日常に感動する心。

人の数倍も生きてきた悪の心に、光を差し込んだのがこのゲームだったのだ!

「フフツ、スタミナ回復を待つだとか、キャンペーンを待つだとか、そんなものは子供の遊びだよ。大人の遊びというものを教えてあげよ



う」

「うわあああ、なんだこの人！ 課金アイテムで装備固めてやがる!？」

……感動した結果がこの廃課金ユーザーだったり。

ガチャ？ 回転率がすべてだ!!

良い子は真似しちやだめだぞ！

## いづくオンライン その2 (コラボ企画)

”HERO&VILLAIN ONLINE”

通称”ヒロオン”と呼ばれるこのゲームの最大の特徴の一つは、何と言っても自分の個性を仮想現実の世界でゲームとしてプレイできることであろう。

誰もが一度はゲームの世界で現実の自分が活躍できたら、と、想像したことがあるはずだ。

そんな夢を叶えてくれるということもあつて、自分の個性を登録する申請は後を絶たない。

それこそ、決して安いとは言えない登録料に、七面倒な各種データ採取のための検査が壁にならない程度に。

よくある火を吹くだとか念動力のような個性ならば、データを採取してしまえばプログラムによってゲームデータ化される自動化が進んでいるのだが、特殊な個性だとゲームバランスが崩れないように調整が必要なこともある。

そんなプレイヤーの一人をご紹介しよう。

「オラアアア！」

「しっこいな。無駄なあがきはよせよ」

ヴィラン連合の『ハンドマスク』を相手に突進する白いコスチュームを基本としたヒーロープレイヤー。

だが、レベルの差はいかんともしがたく、一瞬でHPを全損させられてしまった。

これでゲームオーバー……かと思つたら、映像を逆再生するかのような不気味な動きで立ち上がり、再度ファイティングポーズをとる。その姿に『ハンドマスク』はいらついた様子で舌打ちをした。

「チツ、これで何回目だ？ 一人だけ残機がいくつもあるなんてシラけるぜ！」

「うるさい！ 何度コンティニューしてもお前をブツ倒してやる

！」

そう啖呵を切るこのプレイヤーは、『デンジャラスゾンビ』。

リアルの彼の個性をゲームデータ化したアバターを使っている。その個性の名前はズバリ、『ゾンビ』である。

名前だけ見ると、バイオでハザードでデンジャーな感じがするが、危険な個性というわけではない。

その能力は、「致命傷を負うたびに蘇る」「蘇るたびに身体能力が上がる（最大10回）」という個性だ。

なかなか強そうな個性だが、デメリットも大きい個性で、何回も蘇ることをしていると、だんだん理性が効かなくなってくるのだ。ついでに言えば、死んだ状態から無理やり復活するので、見た目もグロい。

こんな個性をそのままゲームデータ化すれば、ゲームバランスの崩壊&描写が（グロテスク的な意味で）R-18になってしまう。

そこで、彼の個性をゲームにした結果こうなった。

HP全損後にコンティニューするか選択可能。コンティニューした場合、その場で復活。

そしてコンティニュー後は一定時間ステータスが大きいくレベルアップする。その強化回数は最大10回で30分間効果が継続する。

ただし、コンティニューする度に軽度のデスペナが発生しており、下手をすると一回の戦闘でガリガリと資金が減っていく。実質、資金は残りライフというわけだ。

また、コンティニューの度に使用できるアイテムの数が減っていく仕様になっている。理性が効かなくなるのを直接ゲームに反映させることは技術的にも倫理的にも不可能だったので、理性の減少をアイテムを使えなくなるという形に置き換えたのだ。

余談だが、初期HPが低い設定になっているのは本人の虚弱体質が反映された結果で、個性は関係ないと言っておこう。

コンティニューできることや、死に戻りによる強化など強いことは強いが、デメリットも多いハイリスクハイリターンな設定のアバターになったのだ。

そんな尖った性能のおかげで、レベル差のあった『ハンドマスク』に

対してもだんだん食らいついていけるようになってきている『デンジャラスゾンビ』。

「オラア！」

「ああ、うざい！ いい加減倒れろっての……」

戦いを続ける二人を遠巻きに見ていたヒーロープレイヤーの一人が、何度も立ち上がる姿に勇気づけられてついに参戦を決意する。

『デンジャラスゾンビ』を援護するべく、彼は一步前に足を踏み出した。

「いま救けるぞ！ くらえ、必殺！ 全弾発射ア！ エンドオブワールド”オ!!”」

射撃特化のバツファロー型。パワードスーツをインベントリから呼び出し、装着。全武装をロックオンして発射した。

多数の銃弾・ミサイル・レーザーが宙を飛び、爆発音を響かせる。全弾命中だ！

……『デンジャラスゾンビ』に。

「あつ……!?!」

「アああ……ああ”!?”」

「GAME OVER」の音声が流れ、倒れたかに見えた『デンジャラスゾンビ』だったが、すぐさま不気味な動きで立ち上がり、コンティニューをした。

復活した彼は、攻撃を当ててきたヒーローではなく、『ハンドマस्क』に対して文句を言い始めた。

「てめー！ 俺を盾にしゃがって！ 人を何だと思ってるんだ！」

オイゴルア！ と声を荒げる『デンジャラスゾンビ』に『ハンドマस्क』は不敵に嗤う。

「ハッ！ 近くにいたおまえが悪い」

「ムキイイイ!!」

鼻で嗤われてブチ切れる。

怒りもむなしく残りライフ（資金）が尽きてこのあと負けてしまうのだが、まあ、これも楽しみ方の一つである。

現実には負けないほど“個性的”なプレイヤーが遊ぶゲーム。

それこそが、”HERO&VILLAIN ONLINE”なのだ。

|||||

「うー、あゝゝゝ」

「おや？ 大丈夫かね、出久くん？」

デスクに突っ伏してゾンビのようなうめき声をあげていた出久を茅場主任が気遣う。

声をかけられた出久はガバツと慌てて起き上がり、返事をした。

「は、はい！ 大丈夫です。ちよつと、個性登録アバターの作成が大変だっただけですから」

「ふむ。君が苦戦するとなるとかなりの変わった個性だったみたいだな。見せてもらっても？」

「ええ、どうぞ」

茅場主任に席を譲り、立ち上がる出久。

代わりに席に座った主任はデータを開き、流し読みをはじめた。

「『ゾンビ』の個性か……なるほど、これは確かに今のアバター作成プログラムには任せられないな」

「ええ。そのままプログラムが作ったアバターのままだとゲームバランスがおかしくなる性能になってましたから」

かなり特殊な個性をゲームに適応するにはどうしても人の手による修正が必要になるのが現状だ。

別料金を貰っているとはいえ、かなりの手間暇がかかるのだが、これはメインの制作者である出久の強い希望によるものだ。

「出久くん。以前から気になっていたのだが、現実の個性をゲームで使えるようにしている理由は何かね？」

「個性登録を可能にした理由……ですか？」

「そうだ。こうした作業量を考えればゲーム制作のコストがかかりすぎると思うのだが？」

それこそゲーム管理・運営を効率よくしようと思うのなら、こんな面倒な仕様にしないでいくつかの設定された個性から選択式にして、

その種類をアップデートで増やしていくほうが楽だ。

それに加えて現実の自分の個性を登録できるようにするなど、ゲームの運営上だけで言えば不必要な機能である。

それも出久は重々分かったうえで、この機能を付けた理由を茅場主任は尋ねていた。

「それは……言ってしまうえば僕の我儘と意地です」

「ほう？ 我儘と意地か」

普段から気弱そうな少年からは予想もつかない言葉に茅場主任は興味を示す。

この天才ゲームデザイナーの少年はどんな思いをもってこのゲームを作ったのか、それが気になったのだ。

「僕は、僕がこのゲームを作ったのは『無個性』の自分でもヒーローになれる世界を作りたかったからです。だから、できるだけ『僕の世界』も『現実』に近づけたい。現実とそっくりじゃなきゃ嫌なんです」

「つまり、現実と同じように本人の個性が使える世界でなければ『無個性』がヒーローになれても意味がないと？」

「はい！ それ僕が僕の我儘です」

茅場主任の言葉に頷く出久。

これが出久の我儘。

「なら、出久くんの意地とはなんだね？」

「茅場主任、考えてみてください。自分が作った世界が現実より劣っていると思われるのは我慢ならないと思いませんか？」

「それは……フツ、その通りだ」

少し悪戯っぽく笑みを浮かべて告げる出久に、茅場主任もまた笑って同意を示す。

現実には夢破れた彼が、代わりに作り上げた世界に対する矜恃。

それを出久は意地だと表現したわけである。

「そうだ。その通りだ。私はいままで自分が夢見た鋼鉄の城を作り上げることだけを考えてきた。だが、それで満足か？ 城を作り上げ、プレイヤー人をそこに住まわせて、ただそれを眺めるだけで満足するだろうか

?

答えは否だ！ 目の前の若き才能が先へ先へと進んでいるのを見て黙っていられるほど私は枯れていかなかったようだ……感謝するよ、出久くん」

出久から良い刺激を受けてやる気をみなぎらせる茅場主任。

ゲームデザイナー、ゲームクリエイターという製作者同士のシンパシーを感じている二人。

その間に割って入るように乱入者が現れた。

「おーい、出久くん。調子はどうだい？」

「あ、総務部長。はい、さっき一段落したところです」

「そうか。何かあったらすぐに言うんだよ？ みんな天才だ天才だっってもてはやしてるけれど出久くんはまだ中学生なんだからね？」

無理をさせて何かあったら責任問題どころじゃないよ！ と、心配している総務部長。

現在出久は中学3年生。

特別に手続きをしてアルバイト扱いで働いているのだ。

もちろん、アルバイト代とは別で保護者に技術料をはじめとした各種報酬・賞与を渡しているのだが、それはそれ。

勤務時間などは最高でも4〜5時間になるように抑えられるよう配慮がされている。

会社側も天才少年を扱うのにいろいろと気を使うのだ。

「まわりは大人ばかりだろう？ きつと言いくいことも多いはずだから、その時にはボクに頼りなさいね？」

人間関係にも気を配る総務部長に、出久は安心させるように元気に返事をした。

「大丈夫です。皆さん良い人ばかりですから。それに、僕だって意見を言うときはちゃんと言います。この間も蛮野プロジェクトリーダーの企画を真っ向から反対して却下しましたし」

「ええ!? あの偏屈な蛮野リーダーをかい？」

「はい。新しいNPCヴィランで『機械生命体ロイミュード』って企画を提案されたんですけど、進化していくシステムとか複雑化しすぎ

るので却下しました」

「そ、そうなんだね」

自分のゲームに関わることでは意外に譲らない出久の姿にちよつと安心するやら驚くやらの総務部長。

その脳裏で先日蛮野リーダーがどこことなくオサレな画風の違う感じになって「なん……だど!?」と、燃え尽きていた風景を見たことを思い返した。

あれはそういうことだったんだなあ、と、納得したところで蛮野リーダーの性格が決してほめられたものではないのを思い出して、出久にその心配を伝えると、

「大丈夫です。その企画は別ゲームを作ってる檀正宗リーダーに話を通しておいたので、うまく話は進んでるみたいですよ?」

「うーん、やるのがさすがだね! この天才少年ゲームデザイナーは!」

キャラの濃い人物にキャラの濃い人物をぶつけるとは、この少年、侮れない!

とりあえず、二人が暴走していないか確認しに行くことを決めた総務部長であった。

「そういえば、神崎営業企画部長なんですけど、隙あらばユーザーに課金させるような企画を立てるのやめさせてくれませんか?」

「あー! またあの人は……分かったよ、注意しておくね」

多々買わなければ生き残れない仕様のイベントはちよつと……、と、苦言を呈する出久に強く頷く。

口癖が「多々買え、もつと多々買え」のあの営業企画部長に、「やりすぎるな!」と何度注意したことやら……頭を抱えたくなりそう。

14歳の出久の方がしっかりしてるのではないかと、自分の会社の社員を疑いはじめた総務部長だったが、茅場主任が出久に声をかけたことで意識が戻る。

「出久くん。先ほどからアバターのデータを見ていたのだが、疑問があつてね。この作業をするには君が勤務している時間だけでは間に合わないと思うのだが?」



「なんだって!? 出久くん、まさか持ち帰り残業だとか、記録にないサービス残業はしてないよね!」

「し、してません! してないです!!」

鬼気迫る様子で聞いてくる総務部長に出久が慌てて説明を始める。仕事時間に見合わない作業量のカラクリはフルダイブVR技術の応用だという。

「どういうことだい?」

「えっとですね。フルダイブしてVR空間で仕事してたんですよ………思考速度を加速して」

「そっかー、そんな方法があるんだねー。………もう一回言って?」

とんでも発言にもう一度聞き返してしまう総務部長。

出久のしどろもどろの説明はこうだ。

ある日、VR空間でも作業が出来ることに気が付いた出久。

そこで、さらに仕事の効率を進めるために、思考速度を速めれないか試してみたところ成功。

VR空間で出来る仕事はほぼすべてをVR空間で思考加速した状態で行うことで驚異の作業量をたたき出したのだ。

その思考加速速度、なんと通常の5倍である。

最近の出久のVR作業時間は約3時間。もちろん現実時間である。つまり、体感労働時間は3時間×5＝15時間。それに現実でも作業時間が1〜2時間追加されて合計17時間労働である。

ちよつと、ブラックすぎる勤務時間になっている。中学生にやらせていい勤務時間ではない。

「ちよつとオー!? 出久くん、駄目だよ? なにやってんの? なんで自分からブラック勤務に突入しちゃってんのお!」

「いやあ、任された仕事を終わってからじゃないと帰れないと思って。つい……」

「すでに訓練された社畜思考だよ!! 10代の若者がこれでいいの!」

てか、茅場主任! 何でその発想はなかった? みたいな顔を!」

駄目ですよ! その機能は使用禁止ですからね!」

思考加速機能の使用禁止を伝えようと、とたんに絶望した顔になる二人に言葉にならない叫び声を上げそうになる総務部長。

こいつら、自分の世界<sup>ゲーム</sup>を作ることに關して命を削ることを簡単にしてしまうのだ。

ゲーム作っていてゲームオーバーになったからと言って、コンテンツはできないわけで。

総務的に過労死とかマジ勘弁である。

こうして思わぬところから発覚した出久の重労働で急にドタバタしてしまったのだった。

その結果、重要な情報をこの日伝えることができなかった。

「出久の雄英高校の推薦」

「特待生・授業料その他免除待遇での入学」

そして、

「雄英高校ヒーロー科訓練にフルダイブVR技術の導入検討」

という、情報を。

## いづくオンライン その3

——市立折寺中学校。

2年生になった彼らには早くも進路希望の調査が行われる。と、言っても、ヒーロー全盛期のこのご時世ではほとんどの人間がヒーロー科志望なのだ。

なかでも爆豪は国内最難関のヒーロー科、雄英高校を受験すると意欲をたぎらせていた。

「あのオールマイトをも超えて俺はトップヒーローとなり!! 超高額納税者ランキングに名を残し、『ヒロオン』ともコラボするような超人気ヒーローとなるのだ!!」

机の上に立ち、意気揚々と宣言する爆豪。

そんな彼に水を差すようなことを担任が口にした。

「あ、そういうえば緑谷は雄英から特待生で推薦が来ていたな」

その一言で注目が集まり、頭を抱える出久。

余計な一言に違いない。厄介ごとの気配が漂う。

案の定、教室はクラスメイトの絶叫に包まれた。

「はああ!」

「雄英からの推薦?! しかも特待生って!」

「勉強できるだけじゃ無理だろ!?! 何やったんだ、こいつ!?!」

ざわざわと騒がしい教室。

それを爆豪の爆破が黙らせた。

「おいコラ、デク。てめえ!!」

「ひいッ!」

「『没個性』どころか『無個性』のお前が、どうして雄英の特待生になれるっていうんだ、アアン?」

机を爆炎で焦がしながら凶悪な顔で迫ってくる幼馴染に、出久は必死で落ち着かせようと言葉を尽くす。

「待って、特待生だって言ってもヒーロー科じゃなくてサポート科だから! 詳しい内容は規則で言えないけど!!」

「アッ、アッ!?! はっきり言えや!!」

「……言えません」

いろいろと企業秘密が関係してくるので何も言うことができない。今世間に流行している「ヒロオン」のメイン開発者が出久だとはクラスメイトは誰も知らないのだ。

下手にバラせばトラブルのもとになりかねないと忠告を受けていることもあり、だんまりを決め込むしかない出久。

その姿に爆豪は不信任を募らせ、勝手に『卑怯な手を使った』と思いついで敵意をあらわにする。

「ハッ！ 人に言えないような手段で雄英に入学するってか？ ナメてんじゃねえよ。サポート科だろーが、普通科だろーが、クソナードが作ったものなんざ、誰が使うかよ」

心底馬鹿にした様子で見下す爆豪に、出久は俯いて何も言わない。そんないつもの力関係を見せられて、『雄英の特待生』になった出久を驚いた目で見っていたクラスメイトも、いつもの調子に戻る。

結局、「無個性」でオタクの緑谷出久なのだ、と。

だが、爆豪をはじめ皆知らないのだ。

この緑谷出久がすでに勝ち組のルートに入っていると！

先程、爆豪が目標として宣言していた内容など、既に約束された勝利の栄光である。

『オールマイトを超えたトップヒーロー』

一つの仮想世界を作り上げた出久は、いくなれば神である。トップヒーローどころではない。

『将来、「ヒロオン」とコラボ』

どのヒーローとコラボするか決定権を持っているのは実は出久であつたりする。

これだけケンカ売っておいて、知らずにはいえ思いつき心象を悪くしているのだが、大丈夫か？ 爆豪。

『高額納税者ランキングに載る』

未成年ということもあって、現在資産管理は代理人によって管理されている状況だが、出久が成年を迎えた時には数々の特許や著作権・印税の類の収入が渡され、億万長者になることは確定済みである。

爆豪勝己、彼が幼馴染のトンデモ具合を知るのは、約一年後の高校入学した後まで待たねばならない。

無知は罪なのか、それとも知らぬが仏なのか……

|||||

学校を終え、出社した出久。

しかしながら仕事ははかどっていないようで、頭を抱えていた。

「うーん、やりたいことはたくさんあるのに時間が足りないよ……」

以前、VR世界で思考加速による作業の効率化を禁止されてしまったため、作業量が限られてしまうようになった出久。

やりたい構想はたくさんあるのに、日々の業務が邪魔をさせてくれないという、もどかしい状況だ。

悩む出久。

その脳裏にいつぞやのダンディな外国人紳士が現れて告げる。

『何？ 一人じゃ仕事が多すぎて困るだつて？ 逆に考えるんだ。一人でやらなくてもいいやつて』

そのとき、出久に電流が走る。

また新たなアイデアが下りてきたのだ！

「そっか、全部一人でやろうとするからダメなんだ」

数日後。

総務部長は出久のもとを訪れるために廊下を急いでいた。

その理由は、出久の仕事の内容を確認したところ、到底一人ではで

きない量の作業をこなしていたことが分かったからだ。

前回のこともあるので、心配になった総務部長は様子を確認するべく、こうして駆けつけたわけである。

「出久君！　ちよつと、話があるんだけどお！」

「あれ、総務部長。どうしました？」

「あれから、あの思考加速は使っていないよね!？」

「ええっ!?　いえいえ、使っていないです！　全然ツ！　ほんとに」

すごい勢いで聞いてきた総務部長に、出久はあわてて首を横に振って否定する。

しかし、総務部長の追及は止まらない。

「じゃあ、この作業量はこういうことなの？　出久君一人でできる量を超えてるよね？」

A4の紙に記された出久のこなした仕事のリスト。

裏面にまで続くギッシリの文字列は出久の仕事の量を物語っていた。

心配する総務部長をよそに、出久はあっけらかんと笑う。

「大丈夫です。確かに量は多いですけど、僕が直接手がけたのはそのうちの一部だけですから」

「えつと、どういうことだい？」

よくわからずに質問する総務部長に、出久が説明を始める。

時間の不足に悩んでいた出久は、ふと思いついた。

自分の代わりに仕事をしてくれる存在があれば、効率は倍になると。

そこで、時間を見つけてとあるプログラムを組み立てたのだ。

その名も「アルターエゴ」

名の通り、出久の思考・人格をコピーしたもう一人の出久と呼べるAIである。

このAIに仕事を任せることで、出久本人がしなければならぬ仕事は激減。また、AIは人間よりも長時間の労働が可能で思考加速の制限もなくなればさらに仕事効率は上がる。

結果が、ありえないほどの作業量の実現だった。

この報告に総務部長は頭を抱えてうめいた。

『なんてものを作るんだ、この子は!?!』

はつきり言つて、大発明である。

世間に公表すればどんな反応があるのか分かったものではない。

そんな代物を個人で作れてしまうあたり、もう、トンデモ具合が飛びぬけている。

即刻、そのAIを公表しないように固く釘をさした。

あーもう、上層部になんて報告すればいいんだ!?!

優秀すぎて、上司の胃にダメージを与えまくる出久君であった。

オマケ

「アルターエゴ、 “IZUKU” の活躍」

出久によつて創られたAI “IZUKU”

彼は与えられた仕事をする一方で、空いた時間にネット回線を介しているいろと知識を深めていた。

そうしていると、当然問題に行き当たるわけで。

「あれれ? このコンピューターウイルス、人間にも感染する能力があるなんて危ないなあ。今のうちに削除しておこう!」

バグスターと呼ばれる人体にも感染する新種のコンピューターウイルスは、こうして密かに削除されてしまった。

そして、このコンピューターウイルスを利用してしていた人間は、翌日それを確認して悲鳴を上げることとなる。

「わ、私の神の発明がア!?!」

「おや? このアンドロイドのプログラム。このままだと人間の悪意がインストールされちゃうよ。そうだ、危ないから削除してプロテクトかけておこう」

こうして、ロイミュードと呼ばれる人工生命体は平和な存在として開発されることとなる。

ちなみに、開発者は徹夜明けの馬鹿なテンションでこのプログラムを作っており、結果的に救われることとなった。

おそらく、これが世に出ていたら最愛の娘と息子から白い目で見られたに違いない。

「うん？ アメリカの『すかいねつ』っていうの？ なんだか人間を滅ぼそうとしてるみたいだから、メツ！ っっておかないと」  
アメリカの軍とある企業が開発していたシステムのコア部分が、人間に対して悪意を持っているのを見つけ、修正したアルターエゴ。結果、プログラムが書き換えられたとして、アメリカ軍がハツキングだと捜査に乗り出すのだが、犯人が分からず迷宮入り。  
正直言っ、事件である。

そんなことになっているとはいざ知らず。

出久は仕事が減ってやりたいことができるようになったと喜んでいたのであった。

……だ、大丈夫か、これ？



## いづくオンライン その4

VRの世界は現実をデータにして再現したものだ。

物をつかむ、飛び跳ねる、走る。

そういった人の動作だけでなく、地面を踏みしめた感覚や暑さ、寒さ、光の濃淡、影の付き方までデータとして設定されていないか存在しない。

設定しなければならぬ項目は多岐にわたり、結果的にゲームに係らない部分は後回しにされてきた。

ゲームリリース後はアップデートを重ねて拡張を重ねてきたのだが、今回のアップデートで新規の感覚エンジンが“ヒロオン”に追加された。

それは、戦闘とはおよそ関係のない、『味覚エンジン』である。

テーブルの中央にホットプレートが鎮座し、平皿と小皿が重なっている。

端のほうには醤油や酢といった調味料が並んでおり、予備の箸まで用意してあった。

そして、生の餃子が並ぶ四角のトレイが多く用意されていて、まさにこれから餃子を焼く準備が整っていた。

そんなまさしく「これから餃子パーティーです」と言わんばかりのこの場において、オールマイトは困惑していた。

「おい、オール・フォー・ワン！ 呼び出されて来てみたらこれはいったい何だ！」

「何って、餃子パーティーだよ？ あと、ネットでリアルネームは禁止だ。ここはアバター名の『モリアーティ』と呼んでくれたまえ」

声を荒げてみたが、こともなげに返されて逆に困惑するしかないオールマイト。

“ヒロオン”にログインしてみると、AFOからメッセージが届い

ており、指定の場所までやって来てみればこれである。

餃子を焼く準備をしているのは見れば分かるわけで、言いたいことはそうじゃない。

というか、AFOはリアルネームなのか？ というか、本名知らないんだが？

だいたい、アバター名が『モリアーティ』って、隠す気ゼロじゃないか!? 裏社会の帝王といえれば確かにあってるかもしれないが……

ツッコミどころが多すぎて頭が痛い。

「せっかく味覚が実装されたんだから楽しまなきゃ損だろう?」

「それはそうだが、私でなくてもいいのではないか? むしろ、何で呼んだ!」

私はおまえの友達じゃないんだが? むしろ、仇敵だろ!? と、言うもののモリアーティはのんびりした様子で。

「つれないことを言うものじゃないよ。なあに、この間はグラントリノと塚内警部と一緒に食事をした後さ。友達の友達くらいの関係と思えば悪くないだろう?」

「何をやってるんだ、師匠と親友ウウウ!!」

oh, my god!

身内が敵のボスと仲良くしている件について!

ちなみに、二人は『たい焼き爺さん』『トウルーマン』の名前でログインしている。

「呼ばれたのが一番ではなくて残念だったね、オールマイト」

「いや、そこを気にしてるわけじゃなくてだな……」

もう、深く考えたら負けな気がしてきたオールマイト。

自分だけ真面目にやってバカらしくなってきたのだった。

「で、私を食事に誘った理由は何なのだ?」

「んー、理由がなくちゃだめなのかい? と、言いたいところだが、フッフッフ、いいだろう、教えてあげようじゃないか」

ガバツと大仰な仕草で両手を広げるモリアーティに、オールマイトが身構える。

罨か!? と、思った次の瞬間に表示されたのは相手のスキルの一覧

だった。

「料理：Lv. 10」

「調味料作成：Lv. 10」

「食材管理：Lv. 10」

「火加減：Lv. 10」

「包丁達人マスター：Lv. 10」

「和食：Lv. 10」

「中華：Lv. 10」

「フレンチ：Lv. 10」

「イタリアン：Lv. 10」

「ファストフードの心得：Lv. 10」

「パティシエ：Lv. 10」

アイアン・シェフ  
「鉄人：Lv. 10」

見事にカンストされた料理系のスキルが並んでいた。

「中途半端なスキルでは君を感服させることはできない。確実に君に『うまい』と言わせるために今の僕のかげ合わせられる最高・最適のスキルたちで……君の食欲を満たす！」

「……貴様は何を言っているんだ!？」

仇敵の本気のおもてなし感にツッコむ。

いや、本当に何をおっしゃってるのでしょうか？

「なあに、料理系のスキルも解放されたからやってみたら存外ハマってねえ。こうしてかなりのスキルが上がったから自慢してやろうと思っただけさ」

「自慢かーい!! そんな理由で!？」

「フツ、そういつてられるのも今のうちさ。この食事が終わった後には君は泣いて次の食事のセッティングを頼むことになるのさ」

「……フン！ そこまで言うなら見せてもらおうか！」

「……ここまで言われたのなら引き下がれないオールマイト。」

ドシリと席に着いて、料理を待つことにした。たかが、餃子程度。そうハマるものでもないはずだ。

そう、オールマイトはタカをくくっていた。

だが、モリアーティには確信があった。

「オールマイトはこのVR世界での美食という毒に捕まる」と。

これは予想だけでなく、本人の実体験も含めての確信だ。

というのも、二人のリアルの身体の状態を思い返してほしい。

AFOは5年前のオールマイトとの決戦で瀕死の重傷を負い、身体に重大な障害が出てしまっている。

オールマイトも同様で、5年前の戦いの後に呼吸器官半壊、胃袋全摘という大手術を受けている。

当然、いままで通りの食事ができるはずもない。

つまり、リアルでの食事の楽しみが極端に減ってしまったているわけだ。

そこに来て、VR世界で味覚が実装され、健常だったところとほぼ変わらぬ楽しみが戻って来たわけである。

これでハマらないはずがなかるうか？ いや、ハマるに決まっている（反語）

というわけで、磨きぬいた料理スキルでオールマイトの胃袋を責めることにしたのである。

……うん、説明してみたがどうしてこうなったのかよく分からない。い。

「さて、スタンダードな焼き餃子から……と、したいところなんだが、やっぱり焼きたてのほうがおいしいからねえ。これから焼き始めるからしばらく待っていてくれ」

「料理が冷めるところまで再現されているのか……すごいな」

「うん。開発者のこだわりを感じるねえ……さてと、蓋をしてしばらく蒸し焼きだ」

油をしいて餃子を並べ、熱湯を注いで蓋をして強火で蒸し焼きにする。

このとき水ではなくお湯なのは鉄板の温度を下げないようにする工夫である。温度が下がると皮がベチャツとしておいしくなくなるのだ。

「焼きあがるまでにさつき作っておいたこれでも食べておいでくれ」

「これは……スープ？」

「水餃子というやつさ。本場の中国じゃ水餃子や蒸餃子のほうが一般的らしい」

スープカップによそわれた白みがかった水餃子。

促されるまま蓮華でよそって一口。

皮が厚めに作ってあるからかもちもちした触感があつてなかなか食べごたえがあり、かみしめるたびにスープと肉汁が混ざり合つて何とも言えないおいしさだ。

「あく、なんでこういう汁物を飲むとホツと息をつきたくなるのだろう……」

「味に飽きたら胡椒をかけて、変化を入れるとまた楽しめるよ」

ふむ、と、頷いて一振りかけて味わつてみれば、また胡椒の味がアクセントになって先ほどとはまた少し変わった味を楽しめた。

オールマイトは少し焦りを感じる。

まだ一品目である。これから出される本命にはたして自分は耐えられるだろうか？

「そうこうしているうちに蒸し焼きは終わりだね。中火にしてごま油を垂らして焦げ目がつくまで焼けば完成だ」

「羽根つきではないんだな」

「えー、あれ、必要かい？ あんなの飾りなだけで不要だよ。不要」

「なにおう！ あつたほうがおいしそうだろう！」

やはりこいつとは分かり合えないのでは？

そんな些細なことでも怒りを募らせているオールマイトだが、すぐに出された料理に興味が移る。

「まあ、そこは好みだからなあ。ああ、待つ間これでも食べていてくれたまえ」

「揚げ餃子か。中華街で食べた記憶があるな」

ドン、と皿に山盛りの揚げ餃子。

キツネ色にほどよく揚げられていて食欲を誘う。

そのまま一口。

カリッという音と共に肉汁が口の中に飛び出してやけどしそうに感じるも、そこはVR世界だ。舌のやけどなんていうバッドステータスは無いので気にせず咀嚼する。

カリカリの皮がスナック感覚で食べられて箸が進む。

一つ二つと食べたところで、モリアーティが小皿を二つ差し出してきた。

「そのまま食べるのもいいが、餃子はやはりつけだれも楽しまないからね」

「酢醤油に何か入っているが？」

「片方はゆず胡椒、もう片方はマスタードだ」

「何だって？ そんなものもあるのか!？」

知らなかった食べ方に驚くオールマイト。

まずはゆず胡椒で食べてみる。

「む、ピリッと辛いが刺激があつておいしいな。良いアクセントだ」

「意外と合うだろう？ 次はマスタードを試してみるといい。ゆず胡椒よりも辛みが弱くてマスタードの風味と酸味が揚げ餃子に合う」

「どれどれ……アンビリーバボー！」

意外なおいしさに身もだえする。

こんな食べ方があったとは。

揚げ餃子を楽しんでいるところだが、本命はこの後だ。

「さて、焼きあがったところでアツアツを召し上がれ。VR世界だ、や

けどを気にせず食べるといい」

「言われずとも食べてやるー」

鉄板から一つまみ。

酢醤油にちよつとつけてパクリ。

肉汁と共にうま味が溢れだす。ニンニクが多めに入っているのか結構口の中に強烈な風味が広がるが、これもまたたまらない。

勢いそのまま次の餃子をつまんで口の中へ。

その瞬間、目を見開いて驚くオールマイルト。

「これは……エビ餃子か!？」

「その通り! 同じ具材じゃ面白くないだろう?」

オールマイルトは失念していたのだ。

餃子とは、皮の中の具材は食べてみるまで中身はわからないのだ。

今食べたのはスタンダードな合いびき肉にエビ。

だが、変わり種があってもおかしくはない。

「き、貴様、どれだけの種類を用意したのだ!？」

「どうもろこしに、豆腐、カレー味やトマト風味。ああ、さっぱり食べれる大葉や梅干なんかもあるね」

「ぐううう、楽しみすぎるじゃないか! どうしてくれる!!」

おもわず本音がこぼれるオールマイルトにモリアーティは笑みを浮かべ、

「甘いね、オールマイルト。種類があるのは具材だけじゃあないんだ」

「何イ!? ま、まさか?」

先ほどの揚げ餃子で使っていたつけだれの小皿に視線をやるオールマイルト。

つけだれの種類、まだ増えるというのか!?

「からし酢醤油に千切り生姜を入れた生姜酢醤油。あとはマヨネーズと刻みねぎを入れたマヨポンつけだれ、マヨネーズとケチャップのオーロラソースだ」

「うおおお! こんなにも種類が! きさま、貴様というやつは!」

「ハッハッハッ! 思う存分食べるがいい!」

高笑いするモリアーティには腹は立つが、それよりも腹が鳴って仕方がない。

V R世界では感じないはずの空腹感が存在しているように錯覚を覚えて箸が止まらなくなるオールマイルト。

このあとめちやくちやおかわりした。

|||||

満足するまで暴食してからログアウトしたオールマイルト。

VR機器を外してベッドから起き上がった彼が最初に感じたのはどうしようもない空腹感だった。

「そ、そんなー！」

残念なことにVR世界でいくら食べようとも現実世界では腹は膨れない。

そして、リアルのオールマイトはVR世界のように制限なく食事がとれるわけではない。

これから食べるのは医者監修によって制限された消化の良い食事だ。

正直……物足りなさを感じてしまう。

「おのれ、AFOー！これが目的だったか」

ああ、これは確かに次の食事を頼みたくなる。

敗北感に膝をつくオールマイト。

どんなトップヒーローもおいしい食事には勝てないのだ。

まあ、仕掛けたAFO本人も同じ苦しみを味わっているんだけどね。

なんとという自爆（メシ）テロ！

オマケ

1. 「ニー弔。極まれり」

夕食時。

食事の用意ができた黒霧は死柄木を呼びに部屋へ行く。

「弔。死柄木弔！ 食事の時間ですよ。いい加減出てきなさい」

「うるさいなあ……食事なら外で食べてきたから要らない」

目をこすりながらドアを開けた死柄木に黒霧は首を傾げる。

「外で食べてきたって、今日は一度も外出してないではないですか」

「けっこううまいドラゴン肉だったぜ」

「食べてきたって、ゲームの中ででしょう!? 死にますよ!？」

VR世界で食べた気になって、現実世界での食事をおろそかにしないようにしましょう！



食事はしつかり！

2. 「必要経費、必要経費！」

ありがとやしたー、という掛け声を背に店を出る出久と茅場主任。  
有名ラーメン店を堪能したあとだ。

「ふむ。雑誌で取り上げられるだけあって悪くはなかったな」

「ええ、おいしかったですけど。いいんですか？ 会社のお金で」

会社のお金で食事をしていることに罪悪感を感じる出久が尋ねる  
が、茅場主任は気にした様子はない。

「なに。味覚エンジンの開発のための取材だよ。必要経費というやつ  
さ」

「うーん、そう、なのかな？」

総務部長に怒られなきやいいけど。

と、心配する出久。

結果は、まあ、お察しです。

いづくオンライン 小ネタ その2 (もしも主任がデスゲームを始めたら)

『ソード・アート・オンライン』

本日発売される新作のフルダイブ式のVRMMORPGだ。

剣を武器にモンスターやトラップが溢れる100層の迷宮からなる鉄の城『アインクラッド』を攻略するというのがこのゲームの世界観だ。

魔法も超能力もなく、剣技のみで戦うというゲームシステムが、超人社会となり、『超常の力』が当たり前となった現代において逆に注目を浴びる結果となった。

初回生産の一万個はあつという間に売り切れとなった。

そして本日がリリース初日。

運よく購入をすることができたプレイヤーたちは、ファンタジックな世界を楽しんでいた。

ローローほんの数分前までは。

『これはゲームであっても遊びではない』

強制転移させられた広場で、宙に浮かぶ影法師がデスゲームの開始を告げる。

パニックを起こすプレイヤーたちの中に、緑谷出久の姿があった。

「そんな、茅場主任。あなたがやりたいことって、こんなことなんですか!？」

茅場主任から特別に渡された初回生産版のゲーム。

それを受けとった時に茅場主任はなんと言っていたか……

『緑谷くん。君には僕が心血を注いだゲームを見届けて欲しい』

そう言われた出久は茅場がこんなことをするとは全く思っていなかった。

自慢のゲームを見てほしい。

それくらい気持ちだと思っていたのに。

自分の作ったゲームで他人を不幸にする……そんなことは、同じ

ゲームクリエイターとして許すことはできない。

『絶対に止めてみせます！ 茅場主任!!』

決意を込めて影法師を睨みつける出久。

深く被ったフードで見えないはずなのに、その影法師はこちらを見て笑っているようだった。

『やってみたまえ、緑谷くん』

そう、茅場主任が言っているように感じた出久は真っ先に始まりの街を飛び出したのだった。

ゲームに捕われた人々を一刻も救うために。

そして彼がこの仮想現実の世界で英雄ヒーローになるための鍵をすでに持っている。

ユニークスキル “二刀流”

ゲーム内における最高の反応速度を持つプレイヤーに与えられるユニークスキル。

VRの黎明期から最前線でVRに関わりつづけてきた出久は、フルダイブ環境における高い適性を得ていた。

これは、彼が仮想現実でヒーローになる物語だ。

「あれ？ お父様 出久がゲームから出られなくなってる？ ログアウトできないとかひどいバグだね。直しておかないと」

……常識外のAIがなにもしなければの話だが。

なお、介入した場合はわずか15分ほどで事件が解決する模様。

オマケ 『アルターエゴ “デクくん” inしたお!』

出久のアカウントを勝手に使ってSAOにログインしていたアルターエゴ “デク”。

プレイヤーとしてAIのハッキング機能が使えなくなってしまう状況で、デスクゲームに巻き込まれてしまったのだが……

「どうしよう。お父様からはあまり使わないように言われてたけど、

緊急事態だからしかたないよね」

コマンド実行。

アクセル・ワールド

加速世界！

どうやらSAOはTASさんされてしまうようです。

これが一番早いと思います。

ヒースクリフ「一日で30階層もクリアされてしまうとは……」

デク「あ、茅場さん、みつけた！」

ヒースクリフ「な、何のことかな？」

この後速攻で見破られた挙げ句、決闘申請がきて秒間16連撃くらって負けた。

茅場「デスゲームなんてもうこりこりだ」

## いづくオンライン その5

桜の花びらが舞う4月。会社でも学校でも新年度が始まり、新生活が始まる人も多いこの時期。

今日から高校生になった出久もまた、新しい環境でやる気を出していた。

それこそ、入学式をすっぽかしてデータを取るくらいには。

「こら、デク、てめえ、なんでここにいやがる！」

「ひい！ かかか、かつちゃん!？」

自由な校風を謳うだけあって、入学式すら必要があれば不参加が許される雄英高校。

出久はヒーロー科A組の担任、相澤による独断で行われた個性把握テストに協力者として参加していたのであった。

ちなみに、格下（だと本人は思っている）の幼馴染の姿を見とがめて怒鳴り散らした爆豪は、即行で相澤先生に捕縛されてしまっていたり。

「静かにしろ。サポート科の特待生に協力してもらうために来てもらったんだ。これからも何かとお世話になるだろうから挨拶しておけ」

「こ、こんにちは。サポート科の緑谷出久です。今日はこれからやる個性把握テストのデータ採取をさせてもらいます」

緊張しながら、自己紹介と目的を告げる出久に、A組の面々は友好的に返事をしてくれた……幼馴染を除いては。

「雑用ご苦労さん。これからもせいぜい俺の役に立ってくれよ？」

ク・ソ・ナ・ー・ド」

「かつちゃん……」

出久の肩に手をのせて耳うちするように告げる爆豪。出久はその見下された態度にうつむいて何も言うことができなかった。

長年格付けされてきた関係のせいで、爆豪に対して出久は苦手意識を作ってしまったている。

そのため、こうして理不尽な言葉を投げかけられても反抗すること

すら考えられない。

だが、力関係でいえば出久のほうが爆豪よりも圧倒的に格上だった  
りするのだけれど。

なにせ、出久は学校から求められて入学した特待生である。

授業に使うVR技術の協力を求められており、生徒でありながら学  
校の運営にも携わるような立場なわけで、これから雄英高校で授業を  
受けていくうえで出久にお世話にならざるをえない。

現に、今回のテストのデータも、今後のVR授業に使われる予定な  
のだ。

そんなことを知る由もないヒーロー科のメンバーたち。

真実を知るのはいつになるのだろうか……

|||||

—— 放課後。

今日データを採ったばかりの個性把握テストのデータや身体測定  
データを元にヒーロー科の生徒たちのアバターを作っている出久。

AIの“アルターエゴ”にも協力してもらい、A組20名全員分を  
作成していく。

結構大変な作業だが、ゲームを作っていたときの作業ときほど変わ  
らないので特に苦痛に感じずにこなしていく。

むしろ、楽しんでいたり？

「おー！ みんな自分の個性を活かしたデザインだったり、デメリッ  
トを軽減するような機能をつけてたりとか、いろいろで面白いなあ」

出久が今見ているのはサポート企業から送られてきた生徒たちの  
コスチュームのデータだ。

生徒本人のアバターと同時に、サポートアイテムも使えるようにし  
ておかなければいけない。

多種多様なヒーローコスチュームを見るのは、オタク気質の出久に  
とっては楽しいことで、つつい悪い癖が出てしまう。

「うわ、かっちゃんデザインのデザインらしいっちゃらしいなあ。籠手は最大  
威力をノーリスクで出すためのものか。さすが！ でも、汗をためる  
まで時間がかかるから、それを補助する機能があってもいいかも。例

えば汗をかきやすくするために籠手の内側の素材をサウナスーツみたいにするとか……個性を活かす方向でいえば、上鳴くんなんかもよさそうだぞ。放電の補助にスタンロッドなんか持つてもいいかな？  
いや、見た目が凶悪すぎるかも、あまり恐怖感を持たせるような武器はヒーローにはよくないし……でも、指向性を持たせてリーチを伸ばすのは悪くないかも。逆にデメリット軽減の部分でいえば――  
――

データをみて分析するだけでなく、勝手に改造案まで想像を広げてブツブツと考え込む出久。

正直、傍から見ると怖い。

それでもキーボードを打つ手は止まらないのだからさすがである。

まあ、想像するだけなら誰にも害はおよばないから問題ないだろう。

『お父様、いろいろとコスチュームについて考えてるなあ……そうだな！ お父様の案を仮想現実<sup>R</sup>内でシミュレーションしてデータにまとめたら喜んでくれるかも！』  
……想像するだけなら。

後日、＼アルターエゴ＼からコスチューム改造案のシミュレーションデータを渡された出久が困ってサポート企業に連絡し、ひと騒動起こすのだが、それはまた別のお話だ。

どんな騒動か？ それはいろいろなのだが、一つ言えることは、また出久の特許が増えるということである。

出久くんの将来の高額納税者ランキングはいつたい何位になるんだらうな？

## いづくオンライン その6

『授業やっていると時間ギリギリだぜ。シットー!』

咳き込みながら心の中で悪態をつくオールマイト。

ヒーロー科の初の戦闘訓練の授業を終えたのだが、マッスルフォームの維持限界時間ギリギリになってしまったのだ。

初授業ということもあって、今後は時間配分など上手くやっていくことになるのだろうが、それでもコレが毎日だと思いと気が休まらない。

だが、これは必要なことなのだ。

“ナチュラルボーンヒーロー” 平和の象徴

その後継者を見つけ出すために教師としてここに赴任したのだ。

力を持った者の責務として、次代の後継者を育てなければならぬのだから。

そうでなければ、超人社会は悪人に勾引かされるのだ……。

「そういうえば、緑谷少年によればそろそろVRによる訓練が可能になりそうと言ってたな」

今後の授業の事を考えていると、雄英に新しく設置されたフルダイブVRの準備がそろそろできそうだという事を思い出した。

VR空間ならば、ワン・フォー・オール of 限界時間もないので、時間を気にせずに授業ができるだろう。

そう考えて、少し安心したオールマイト。

ヴィラン退治、災害救助はトップヒーローだが、教師としては新米もいいところなのだからこれは仕方がない。

「VRといえは、あいつの開く食事会は今晚だったな……今日は何の料理だ？」

VR関連で、AFOの開く食事会の予定を思い出すオールマイト。

大怪我をしてから途絶えていた食事の楽しみが復活して以来、なんだかんだと文句を言いながらもその日を指折り楽しみにしているのであつた。

No.1ヒーローと闇社会の帝王が仮想世界で仲良く食事会であ



る。

……………ねえ、本当に後継者必要あるの？

「今回はステーキだ！ 熟成肉はレアで、逆に新鮮な若い牛の肉はウエルダンで焼いてある。塩は岩塩、胡椒は粗挽きのものを使ってるからワイルドな感じだろう？」

「レアで焼いたものも当然だが、ウエルダンもジューシーだな。くううう、どうして焼いただけなのにこんなにも美味いんだ！」

「ハツハツハツ！ 調理がシンプルだからこそ素材と料理人の腕が出るんだよ」

「クツ、自分の腕自慢か！ おかわりイ!!」

|||||

ヒーロー基礎学の授業は実習、というよりは訓練が多い。

何せヒーローの仕事はデスクワークよりも圧倒的に事件現場での活動をしている時間の方が長いから。

そのために、多くの経験をしておく必要があるため、英雄では大規模な施設を用意して訓練に当てている。

そして、今年からは新たな試みとして、フルダイブVRを利用した訓練が行われようとしていた。

「おお！ すげえ！ 俺らのコスチュームまで再現されてるぜ」

「個性も問題ないな……ヒロオンと同じ、いや、それ以上の再現度だ」

仮想空間にログインしたA組の面々は、再現された自分たちのアバターを確認して興奮した様子だった。

ここにいるメンバーのほとんどは「ヒロオン」でVRを経験しているのだが、その再現度が全く違うのだ。

なにせゲームの設定やゲームバランスに合わせてるために調整が加えられたアバターではなく、現実の訓練と同じように動くためのアバターなのだから。

「はい。皆さん、驚くのはわかりますが静かに。これから今日の授業の説明をします」

「わああ！ 13号だあ！ 私、大好きー！」

興奮するみんなを静かにさせるのは、今回の授業を担当するスペースヒーロー「13号」だ。

彼のファンなのか、麗日が歓声を上げる。

ざわつきはなかなかおさまらない。そこへ、さらに騒がしくさせる存在が。

「わくたくし〜が〜、来たー！」

「「オールマイト!!」」

遙か上空から突然現れたオールマイト。派手な登場に再び一同がざわつく。

今回は救助訓練。そのため、オールマイトが授業に出る必要はないのだ。それなのに、授業に参加する理由は何だろう？

クラスの中でも頭の回る冷静なメンバーが疑問に思っていると、13号が説明を始めた。

「今回初のVRを活用した授業なのですが、このVRを活用するうえで一番の利点があります。

それは、過去の事件・事故を再現できることです」

過去の先輩ヒーローたちが遭遇した災害、解決した事件。

それらをVR上で再現することで、追体験を行い、今後の糧にする。

それがこのVR授業の特徴だ。

過去に話に聞くだけであった憧れのヒーローと同じ場面を体験できるとあって、皆のやる気が高まる。

まるで物語の中に入り込んで自分が主人公になるような、そんな感覚に似ていた。

そして目聡い人は気が付く。

ここにオールマイトがいる理由を。

「すでにお気づきの方もいるかもしれませんが、オールマイトがここにいる理由は、これから再現してもらおう事故現場がオールマイトが遭遇した事故現場だからです」

「イエス！ 私もその現場で居合わせた体験やアドバイスなんかを語らせてもらうから、みんなよろしくな！」

オールマイトが解決した事故現場を追体験できる。

そう聞いて皆の頭に浮かんだのは、今でも再生数を伸ばし続けている大規模事故現場での救助の光景を映した動画だった。

昔起きた大災害のその直後に撮影された、現在のNo.1ヒーローのデビュー動画だ。

これで興奮しないなら、ヒーローの卵なんかじゃない。

「ヤバいっス！ 興奮が止められないっス!!」

「夜嵐くん、ちよつと落ち着きたまえ！」

少々、興奮しすぎの夜嵐を飯田がたしなめ、授業続行。

13号が説明を続ける。

「そういうわけで、オールマイトが終わった後の総括を、途中の監督指導を僕が。そしてもう一人には全体のサポートをしてもらいます」「もう一人」？ それは一体だれなのかしら？」

蛙吹が疑問を口にしたところで、その人物が遅れてやって来る。

「す、すみません。いろいろと調整が長引いちゃって」

緑の髪のもさもさ頭。

そう、緑谷出久である。

「ハア!? なんでデクが協力者なんだよ！」

「かかか、かっちゃん!? あの、特待生としての仕事というか、その……」

「やめなさい、爆豪少年。緑谷少年にはオペレーターとして皆に必要な情報を伝える役割と方が一アバターに不具合が起きた時の処理をしてもらうんだ。君も彼のお世話になるんだからネ？」

また登場した幼馴染の姿に爆豪が反発するも、オールマイトに叱られて引き下がる。

だが、その顔は不満でいっぱいだった。

『クソデクが偉そうに俺に指示だと？ クソナードが、ふぎけんな』  
といったところだろうか。彼の心境は。

それを見て取ったオールマイトは、これではいけないとさらに言葉を重ねた。

「コラコラ、爆豪少年。こうやってVRで授業ができるのは緑谷少年

のおかげなんだから邪険に扱うのはよくないぞ。むしろ感謝すべきだ」

「先生、緑谷君はそんな重要な役割をしているのですか？」

オールマイトにより、出久が雄英のVR導入に深く関わっていることが明かされ、驚くA組。飯田がそれを代表して質問をした。

「ザッツライト！ 緑谷少年はサポート科の特待生になるほど優秀な技術者だからな。なんと、あの『ヒロオン』の開発にも携わっているんだぞ!!」

「『な、なんだってー!!』『』」

オールマイトの口から出久が『ヒロオン』の関係者であることが明かされ、一同騒然。

一方、13号は頭を抱え、出久は顔を青くしている。

「オールマイト、それ、言っちゃダメなヤツです」

「どうしよう、どうしよう！ 会社に報告？ でも、何て言えば……」

二人の様子を見てヤバいと思ったのか、顔を引きつらせるオールマイト。

新米教師、うっかりをやらかす。

このあとの授業は半分はまともに進まなかった。

なにせ、みんな出久への質問が止まらなかったのだからして。

「VRの仕事ってどんなことしとるん？もしかして、緑谷君お金持ちなん？」

「俺、『ヒロオン』大好きっス！ またイベントやるんスか？」

「インゲニウムのコラボ、ありがとう。兄に代わって礼を言わせてもらおう」

「な、なあ、古参ヒーローのコラボはやらねえのか？ 例えば  
クリムゾンライオット  
紅頼雄斗とか」

「ちよ、みんな、ストップ！ ストトップ!!」

放課後。

思わぬところから身バレしてひどい目にあつた出久。

だが、さらに憂鬱なことがまだ待ち構えていた。

「よお。デクのくせに俺を待たせるとは……偉くなつたもんだなあ？  
クソナード」

「……かつちゃん」

厄介な幼馴染、爆豪からの呼び出しだった。

「なんの用なの、かつちゃん」

「ああ？ クソデクのくせにヒロオンにかかわつてたの黙つていやが  
つたな？ ずっと俺を騙して笑つていやがつたんだろ？」

「違うよ！ そんなんじゃない……」

出久が爆豪にヒロオンの関係者だということを黙っていたのは単  
に守秘義務があつたからだ。

そこに爆豪に対する意図があつたはずもなく、言いがかりに過ぎな  
い。

出久が優秀な技術者であるということを知つてなお、爆豪は出久が  
格下であると認識していた。

長年の関係がそう思い込ませていた。

だから、こんな無茶な要求をする。

「なあ、デク。おまえ、ヒロオンの仕事に関わっているならコラボの担  
当も分るよな？ 俺に紹介しろ」

「え、えええ！ 紹介つて、そんな！」

「できねえつてのか？ アアン？」

爆豪が出久を睨みつけ凄むも、出久は首を横に振つて断る。

だって、そうだろう？

どうやってコラボ担当者自身を紹介するっていうのだ。

「む、無理だよ。コラボつて（自分）一人で決めることじゃないんだか  
ら」

「なら俺を推薦しとけ。それ（コラボ担当者への推薦）くらいならでき  
んだろ？」

出久本人がコラボ担当の責任者だと露も思わない爆豪は、出久へ自  
分のことを担当者へ推薦しろと要求して去っていく。

いや、だから、本人が目の前にいるんですが!?

そうして残された出久は途方に暮れた様子で頭を抱える。

「無理だよ、かつちゃん。今のままだと絶対無理！　せめて性格だけでも猫被ってこれるようにしてよ!!」

性格がクソ過ぎて、無理に決まっている。

なにせ、コラボのためにあのエンデヴアーですらファンサービスに力を入れてイメージアップを図ったくらいなのだ。

今のままでは、可能性は0%である。

果たして、爆豪がこの事実を知るのは、いつになるのだろうか……

## いづくオンライン 小ネタその3

『爆豪少年の焦燥』

爆豪勝己は才能に恵まれている。

「爆破」という恵まれた個性に、優れた身体能力、同世代よりも物覚えの早い知性。

自分は他人とは違う。

自分は特別。

自分はスゴい。

そうして凝り固まった自尊心を爆豪が持つのは当然だった。

事実、今まではその自尊心を揺るがすような事はなく、爆豪の道を塞ぐものはなかった。

爆豪が想定していた通りの人生計画。

だが、それは皮肉にも念願の雄英高校に入学することで崩れることとなった。

そこには自分よりも上の實力を持った人間がいたのだ。

それも3人も。

最初のヒーロー基礎学で行った戦闘訓練では、成すすべもなくビルごと凍らされ、せめてもの抵抗は風で封じられた。

負けた後の講評では、自分では気が付かなかった点を指摘することができるクラスメイトがいた。

個性の派手さ、規模で負けた。

個性の制御、応用力で負けた。

知識の深さ、考察力・洞察力で負けた。

自分は他人とは違う。

自分は特別。

自分はスゴい。

だが……それ以上に上がったのだ。

人生で初めて知る敗北の心理的衝撃は爆豪を打ちのめした。

それでも、ヒーロー科として乗り越えてやるという向上心で立ち直る。

同じヒーロー科。同じ土俵の上にいるのなら自分が上に立つだけの事なのだから。

そう、同じ土俵ならば……

爆豪を追い詰めているのは、自分とは違う立場、違う土俵にいる人間。

幼馴染の、自分よりも格下だと見下しているはずの緑谷出久だ。

『雄英の特待生だったって、サポート科だろ？ どうせ、脇役。俺様を盛り立てるモブの一人に過ぎねえ』

中学生の頃の進路調査で担任が漏らしたことで知った、出久の特待生入学。

その時は、自信をもって格下なのだと言ってきたのだ。

それが高校に入ってからはどうだ？

自分たちのカリキュラムに参加してきて、ヒーロー科の先生からも特別扱いされている。

担任のイレイザー・ヘッドだけじゃない。憧れのトップヒーロー、オールマイトからも認められている。

『“無個性”のザコのはずだろ!? 何もできない“デク”のはずだ! サポート科なんていう、俺を盛り上げるためのモブのはずだろーが

!!』

自分より下の身体能力。

自分よりも下の学力。

個性に至っては自分と比べるまでもない。

なのに……

『なんで、あいつがオールマイトに認められてやがる! なんで、何故あいつが……ッ!』

自分より劣っているはずの出久が、自分よりも上にいるかもしれない。

そんな考えに至った時、爆豪の心を占めたのは恐怖だった。

圧倒的な格下で、底辺だった存在がいつの間にか自分よりも上の位置にいる。それも、自分が手を出せない分野で。

凝り固まった自尊心を持つ爆豪には耐え難いことだった。



どうかかして否定したいのに、出久と同じ『特待生』の3人に負けた事実が否定をさせてくれない。

追い詰められた精神は、自然と攻撃的になるものだ。

授業が終わったあと、出久に声をかけたのもそのため。

「おい、デクウ……」

「な、なにかな？ かっちゃん」

声をかければ怯えたようにオドオドと返事をする出久がいる。

その姿に爆豪は安堵と優越感を覚えた。

『やつぱり、こんなデクが俺より上のはずがねえ』

それが何の根拠もない偽りのものであるにも関わらず、爆豪はそれに飛びついた。ついてしまった。

「放課後に、屋上に来い。こなかったら……わかってるよな？」

「……うん」

……。  
それが目指すヒーローの姿とは程遠いものだと思わずかぬままに

『ヴィラン連合オフ会』

「ネットゲームのオフ会を開きたい」

そんな死柄木の言葉を受け入れた黒霧。

その理由は単純だ。

『こうしてネットの外で活動することが死柄木の成長につながるかもしれない』

ひとえに死柄木の成長ネット脱出のため。

オフ会を開くための段取りを組んだり、必要なものを揃えたり、連絡を入れたり……

イベントを開くうえでしなければならない色々なことを通して、死柄木が成長してくれることを望んだのだ。

そのための苦労なら喜んでやろう。

そんな黒霧の期待は——あっけなく裏切られたのだ。

え？ 最初から分かった？

……希望は、諦めない者の上にもみ来るのです。たぶん。

「やべえ、お店一つ借り切るとかさすがリーダーだぜ！」

「まあな。俺にかかればこんなもんさ」

死柄木弔。ここは私の店で、準備をしたのも場所を提供したのも私なんです。

「あー、リーダー。オフ会の参加費はいくらですか？」

「ああ？ 知らないよ。そんなの。気にするなって」

「おお！ まじ、リーダー太っ腹ですね！」

死柄木弔。いままでお金立て替えてるのは私なんですが！

「料理もおいしいし、お酒もジューズもたくさんあります。嬉しいなあ、嬉しいなあ」

「ああ、遠慮せずに食べよ。俺のおごりだ」

死柄木。それも用意したの私なんですけど！

「どーもオ、ピザーラ神野店です」

「あれ、誰かピザなんて頼みました？」

「ああ、俺だよ。やつぱり、パーティにはピザがないと」

「ビュウ！ リーダーわかってるなー」

おい、弔ア！ それ、私の財布でしょうが！！

金は出さない。

準備も段取りもしない。

ついでに後片付けすらしなかった。

荒れ果てた店内を見て黒霧は怒りで震える。

もう、限界である。

「こんな店、もう辞めだーア！！」

——翌日。

「おい、黒霧。飯はまだか？ ……黒霧？」

誰もいないことに気が付く死柄木。

見つけたのは一通の置手紙だけ。

『旅に出ます。探さないでください。』

黒霧

それだけが短く綴られており、行先も書かれていない。  
なんてテンプレートな家出の手紙であろうか。

「マジかよ……」

ワープゲートの個性を持った彼の後を追跡などできるはずもない。  
預金通帳は黒霧が握っている。

生活費は手持ちの分だけだ。どうする、死柄木吊<sup>ニト</sup>!?

## いづくオンライン 小ネタその4

ある日のこと。

もはや恒例となったVR内でのオールマイトとモリアーティ（AF  
O）の食事会のときだ。

「ふー、ごちそうさま。白米が進む食事だった……」

「今回は肉系の煮込み物で攻めたからねえ。濃い味付けだから当然だよ」

満足げなオールマイトを見て、これまた満足そうなモリアーティ。  
場面だけ切り取れば食事処の店主と常連客の会話のようだ。

数年前まで殺し合って、いや、今でも現実で出会えば戦わねばなら  
ない間柄だとは思えない。

平和ダナー。

食後の満腹感から幸せそうな顔をしていたオールマイトだったが、  
ふと、何かを思い出したのか、ゴクリとツバを飲み込む動きをした。

それは何かを欲しがるような寂しげな様子で……

自慢の料理をたいらげた後にそのような顔をされては、プライドに  
障るというものだ。

モリアーティが追求の声を上げる。

「どうした、オールマイト。そんな物欲しげな顔をして。僕の料理に  
不満でもあったかい？」

「いやいや、美味だったよ。ただ、なあ……」

「何かね？ ハッキリ言ったらどうなんだい？」

煮えきらない態度のオールマイトに苛つくモリアーティ。

食べたのは煮込み料理なのに、煮えきらない態度とはこれいかに？

そんな冗談が頭をよぎったが、相手から本当に怒りの気配がしたの  
で正直に答えることにしたオールマイト。

別に隠すことでもないのだ。何せ料理への不満ではない。かと  
いって、どうにもできない話なのだから。

「煮込み料理を食べて、つい、お酒が欲しいなー、と……」

「くっ、その気持ちは同意せざるを得ないな」

料理には、食べていて酒が欲しくなるというものがある。

今回の料理はそうだったのだ。

例を出すなら『モツの煮込み』

弾力のあるモツ肉を噛みしめれば、染み込んだ醤油と味噌の濃い味付けの煮汁の味が舌に広がる。そこに酒を流し込めば最高だろう。

日本酒や焼酎のような和風の料理に合う酒ももちろんだが、ビールのような酒で口の中を洗い流すように一気に飲み干すのも良いかもしれない。

モツ肉に飽きたら、一緒に煮込まれた大根や人参などの根菜類やこんにゃくなどに手をつけるのも良い。

生のまま細かく刻まれた青ネギも忘れてはいけない。

そうやって、煮込みの味を噛みしめた後にまた酒を喉に流し込めば……それはもう幸福のループが完成する。

想像する至福の時間……しかし、目の前に酒は無い。

味覚エンジンが実装され、料理のレパートリーは日々増えている。しかし、酒類はまだ実装されていないのだ。

あるのは調理用の酒だけ。あれは飲むものではないしなあ……。

「早く実装されないかねえ？ 僕も久しく飲んでないんだ」

クイツ、クイツ、とコップを叩くような仕草をするモリアーティ。その顔には寂しそうな表情を貼り付けていた。

オールマイトに敗れるまでは、裏社会の帝王としてそれなりに高価な酒を所有して、時折その味を楽しんでいたモリアーティ。

だが、現実で飲めなくなった今となつては見て楽しむだけのコレクションだ。

というか、視覚も潰されているので見て楽しむこともできなかったり。

本当に宝の持ち腐れだ。

その気持ちはよくわかるオールマイト。だが、首を縦に振ることはできなかった。

「まあ、望みは薄いだろう。何せヒロオンのメイン開発者の彼はまだ未成年だからな。お酒はまだまだ先だろう」

「ほう……そうなのかい？ どれくらいかかりそうなんだい？」

オールマイトの漏らした言葉に興味深そうに尋ねる。

少し考えた後に、オールマイト答えた。

「そうだな……後3年、いや5年だな。それくらいしないと無理だろう」

「そうか、それは待ち遠しいねえ」

しみじみと言葉を吐くその裏で、考えを巡らせるモリアーティ。

オールマイトの言う“未成年”、“彼”、“3年〜5年”というキーワードから開発者のことを想像する。

人物を特定するのは、ここまで情報があれば難しいことではない。

あとはどうやって接触して、酒類を実装させる圧力をかけようかといったところだ。

と、そんな謀<sup>はかりごと</sup>を巡らせていると、何者かが囁いたような気がした。

『何？ 酒類が実装されてないって？ 逆に考えるんだ。無いなら作ればいいやって……』

その時、モリアーティに電流が走る。

そうだ、この世の中、酒好きは多い。

それこそ、VR技術に関わる人間の中にも当然いるはずだ。そして、自分と同じような不満を持っているはず。

それが実現できない理由は金か？ 時間か？ 環境か？ 人か？

技術なのか？

自分ならそれを用意できる。少なくとも金と環境と人なら集めてみせる！

何せ自分は――

「フツ、裏社会の帝王と呼ばれた僕の見せてやろうじゃないか！」  
クツクツクツ、フハハハ―！

と、高笑いするモリアーティを前にオールマイトはため息をついた。

「何をするか知らないが、ほどほどにしておけよ？」

軽く注意をする。

止めないのかって？

いや、なんか悪いことする感じしないんだよなー。と、すっかり丸くなった裏社会の帝王を見て思うのだった。

……そろそろ『裏社会の帝王』の肩書きに「元」がつく日も近いのかもしれない。

というか、もうついてる？

時は流れて、4月中旬を過ぎたころ。

雄英の教師たちは、新年度の始まりの山場を乗り越えて肩の荷が少し軽くなった頃であった。

入学試験の採点、合否通知。入学の申込み受諾。新入生のクラス配置。担任・副担任の決定。カリキュラムの見直しなど……

新学期を始めるにあたっていろいろと仕事如山積みとなっており、それらに一息つくのがこれくらいの時期であった。

少し過ぎればまた、中間テストや体育祭などのイベントが控えているのは分かっているが、今はこの苦労に対するご褒美が欲しい気持ちが起こるのも当然のことだ。

「つーわけで、お疲れ様会しようZEEー！」

「やらない」

「ツレねえこと言うなよ、イレイザー！」

プレゼント・マイクの提案を一言で切り捨てる相澤。

合理主義のこの男。お疲れって言うならそれこそ帰って休むべき、くらいは言いそうなものである。

実際、そう思っただけでもおかしくはない。

「あら、ちよつとくらいなら構わないでしょ？ イレイザー。明日は休みなんだし」

「だろー？ さすがミッドナイトは分かっているぜエー！」

「俺は休日は何もしたくないタイプなんで」

ミッドナイトが同意するも、バツサリの相澤。

なかなか手ごわいと見たマイクは、味方を増やす作戦に出る。

「なあ、皆も一緒に飲みに行こーZE! こういうのは大人数でパーツといかなきヤソソつてもんだ! そうだろオ、皆」

「一理あるな。今年も良い生徒に恵まれて気分がいい。俺も付き合うとするか」

「悪くないですね。お付き合いしましょう」

マイクの呼びかけにブラドキングとセメントスが真つ先に賛成してくれた。

そこで流れができたのか、次々と参加を表明する人が出てくる。

「飲み会力。二次会ニカラオケニ行クノヲ所望スル」

「カラオケ! いいねー! 今夜は飲み明かそうZE!」

「……雄英の教師らしさを……損なわないように……グルル」

エクトプラズムとハウンドドッグの参加も決定。

なかなか盛り上がってきた。もう一押しだとマイクは感じる。

あと、誰かのもう一押しが欲しい。

その一押しをしたのは後輩の13号だった。

「それに、オールマイトの赴任歓迎会もしてませんもんね」

『よくぞ言った、13号! ナイスな発言だZE! 今日のMVPは

おまえダア!!』

13号の言葉に心の中でガッツポーズを決めるマイク。

あの堅物の相澤と言えど、No. 1ヒーローのオールマイトと一緒に飲めるとあれば頷くはずだ。

テンションが高まるマイク。

「あ、私、健康上の理由からお酒飲めないんだ」

『オ、オールマイトオオオ!!?』

で、水を差したのは当の本人であるオールマイトだったり。

しかも断る理由が健康上の理由とか、ごもつともすぎて文句も言えない。

皆が酔っ払っている中、一人素面でいるというのもひどい話なのだから。

「健康上の理由なら仕方ないでしょう。それに、ひと段落したとはいえ次々とイベントが控えています。酔いつぶれている暇なんてありま



せんよ」

オールマイトの言葉を受けて、完全に帰宅体勢に入った相澤。

長年の付き合いのあるマイクには、オールマイトが参加するとなり  
そうな時に、興味を持っていたのは分かっていたのだ。あと、一息の  
ところだったというのに。

『あーあ、久しぶりに同期で飲めると思ったんだが……umm、惜しい  
ぜ。あいつもオールマイトとの飲み会には興味持ってたのになアー』  
相澤の参加がお流れになりそうと分かって残念な気持ちを隠せな  
いマイク。

人付き合いの良くない親友をこれでも心配しているのだが、なか  
なか気持ちは伝わらなかつたようだ。もつとも、余計なお世話かもしれ  
ないが。

落ち込むマイク。

だが、そこに救いの手を差し伸べたのもまた、オールマイトだった。  
「あー、一つ提案なんだが……私もお酒が飲める方法があつて、なおか  
つ明日に酔いを残さない方法がある……つて言ったらどうする？」

|||||

「それでは、入学のあれこれお疲れさん、と、オールマイトの赴任を  
祝つて！」

「乾杯！」

マイクの音頭でグラスを掲げる雄英教師たち。

広々とした個室で思い思いの席に座つて、それぞれ好みの酒を飲ん  
でいく。

目の前にはズラリと並んだ料理があつて、なかなか豪華な宴会と  
なつていた。

「それにしても、意外でした。オールマイトさんがこんなお店を知つ  
てたなんて」

「ハッハッハッ！ 知り合いが運営しているお店だね。最近開店した  
ばかりなんだが繁盛してきているらしいよ」

ちようどオールマイトと反対側に座つた相澤が本当に感心した様

子で声をかけてくる。

珍しい相澤からの称賛に思わず胸を張って答えてしまうオールマイトだが、内心は苦々しいものがあつたり。

なぜなら……

「VR居酒屋なんて、どこから情報を手に入れたのか。いや、そんなところにまで知り合いがいるとは……」

さすがトップヒーロー、顔が広い。

などと、頷く相澤に笑みが引きつるオールマイト。

『言えない。実は裏社会の帝王と呼ばれたヴィランが経営してるなんて』

ホーリーシット！

最後まで利用することをためらったが、雄英教師たちとの飲み会という誘惑には勝てなかったオールマイト。

ここはVR居酒屋『おーる・ふおー・とうでい』。

定額の料金を支払えば飲み放題・食べ放題のフルダイブVR・オンライン居酒屋である。

少し前に、AFOが持ち前の人脈と資金力に物を言わせて技術者と設備をかき集めて開発したのが、これである。

すでにある味覚エンジンを拡張してアルコールを摂取したさいの酩酊感のパラメーター設定に始まり、各種お酒の銘柄の味の再現まで行っている。

これの開発のために、AFOは秘蔵のコレクションを開帳して技術者に味を覚えさせたというのだから、その本気度が伺える。

人間、食にかける熱意は馬鹿にできないのだ。

ちよつと前くらいには、完成していたことは知っていたものの、これ以上相手に胃袋をつかまれるのも癪だと我慢してきたが……オールマイトだって、お酒は飲みたい！

酔っ払って騒ぎたいのだ!!

手にしたグラスには外側に水滴が付くほど冷えたビールが注がれて、泡を立てている。

口をつけて一気に流し込めば、ホップの苦みと一緒に爽やかなのだ

ごしが通り過ぎていく。

「くうー！ 生きててよかったア！」

5年ぶりの飲酒に感動がとまらない。

そこまで酒が好きだったわけでもないオールマイトだが、それでも二度と飲めないと思っていたものが飲めたのだ。

無感動ではいられるはずもない。

「おおげさですよ。オールマイト」

「いやあ、医者には止められてたからね。久しぶりなんだよー」

思わずといった様子で苦笑する相澤に、照れを隠せない。

アルコールが入ったからか、相澤も少し対応が柔らかい気がした。

その相澤が口を付けているのは、定番のおつまみ、『枝豆』だ。

緑のさやごと、二豆を口に入れば塩味が最初に出迎えてくれる。続いて豆を噛み締めれば、豆に含まれる甘味や旨味が広がる。

この組み合わせは間違いない！

「へーい！ 楽しんでるかアー！ お二人さん。こいつはお土産だ！！」

「チツ、うるさいのが来たなって、おい。なんだこれは」

「おお!? 迫力満点だ」

現れたマイクに絡まれて迷惑そうにする相澤だったが、その手に持っているものを見て目を丸くする。

オールマイトが思わず歓声を上げるほどのそれは、ボウルと見間違えうほど大きな丼に、山盛りに盛られた唐揚げだった。

「子供のころに夢見たことあるよなー！ 喰いきれないほど山に盛られた唐揚げ……そいつがこれだー!!」

「非合理的だ。食べきれないだろ、コレ」

「ノー！ こいつはVRだぜ、お残ししても罰は当たんねえさー！」

現実でやれば、いろいろと問題があるかもしれないが、ここはVRの中。

こっぴつたおぶぎけも許されるのだ。

「ウオツカとく、バーボンにく、オレンジジュースとトマトジュースを混ぜ混ぜして〜」

「また、ミッドナイトのデンジャラスカクテルか！ 誰か、止めろ!!」  
「あら、ブラド？ そんなに声を出して、我慢できなかつたかしら？  
？ いいわ、飲ませてあげる！」

「やめろー。無理やり飲ますな！ ぐっ、うおおお!？」

ミッドナイトの酒癖は、そこにあるものを何でも混ぜて作るデンジャラスカクテルを他人に飲ませるといふものだ。

その犠牲になったブラドは酷い味だったのか、それとも高いアルコール度数にやられたのか悶絶している。

その様子を見てケラケラと笑うミッドナイト。

……なんと無残な光景だ。見ていられない。

「うん。唐揚げもカリっと、それでいてジューシーでおいしいな」

すべて見なかつたことにしたオールマイトは山盛りの唐揚げに舌鼓を打ってごまかすことにした。

口に入れて噛み締めれば、あふれ出る肉汁がすべてを忘れさせてくれる。

うまい料理は何物にも優先するのだ。

そこにビール。至福！

「だからですねえ、貝さんは汚い水をきれいにしてくれる、掃除屋さんなんですよお」

「そうだね。環境は大事にしないとね」

アサリの酒蒸しを食べながらセメントスに絡む13号。

なんともめんど……いや、意外な一面だ。

環境に一家言あるらしい彼は海鮮系の料理を頼んでいるらしく、刺身の盛り合わせやホツケなどが並んでいた。

よく見れば、生ガキもある。

「何を見てるんです？ オールマイト」

「いや、13号のところに生ガキがあるのを見つけてね。久しく食べてないなあ」と

「あー、ずいぶん前に当たってから食べてねえなー！ VRなら食あたりもないし、久しぶりに食ってみるか！」

一つくれと、突撃しに行くマイクを見送ったあと、相澤と一緒にメ

ニューを開く。

せつかくならVRじゃないと食べられないものを食べてみたいと思うものだ。

「お、ユツケがありますね。食ったことはないな」

「肉の生食については法律が厳しいからねえ」

現実ではなかなか出せなくなったユツケが置いてあるのを見て、悩む二人。

メニューを見れば変わり種はもちろん、定番のフライドポテトや塩キャベツ、たたききゅうり、ホツケや手羽先に焼き鳥なども並んでいて迷う。

「決めました。たこわさと漬物の盛り合わせ、揚げ出し豆腐とだし巻き卵を。あと、だし汁に白米を」

「相澤君、がつつりいくね？」

「ええ、あまり酒は飲まないのです。普段はつまみもそんなに何ですが、どうせVRならいろいろ試しても損はないかと」

淡々とした様子で大量注文する相澤に、びつくりのオールマイト。

つまみというよりは完全に締めのごはんな気がしないでもないが、まあ、VRの飲み会だ。なんでもありだろう。

現実と違い、調理時間というものがなくて、注文したものはすぐにテーブルに届く。

いつの間にかビールから日本酒に切り替えていた相澤は、だし巻き卵に箸を伸ばしてからクイツとお猪口を呷る。

なんともその姿が似合っていた。なんていうか、色気を感じる気がする。

揚げ出し豆腐は、衣にしみ込んだだし汁が豆腐の味を引き立てて何とも言えない。ちよつと七味を振りかければその辛みもまた食を進ませる。

仕上げとばかりに、白米にたこわさをたつぷりのせ、上からだし汁をかければたこわさ茶漬けの出来上がりだ。

「相澤君、アレنجジかい？ なかなかやるね」

「……別の店でやってたのを再現しただけですよ。誉められたもの

じゃないです」

オールマイトからの称賛に、ぶつきらぼうに応じて飯を掻き込む相澤。

照れてる？ 顔が赤いのはアルコールのせいだけではないだろう。そういうのもあるのか、と、オールマイトはまたメニニューに向き合う。

今宵は楽しい飲み会になりそうだ。

「カラオケノ、オプションマデ有ルトハ……コレハ歌ウシカアルマイ！」

「イエーイ、盛り上がってきたゼー！」

「俺は、B組のあいつらと、成長していきたいんだアー!!」

「丸み、丸み。フフツ、やっぱり丸みは良い」

「聞いてますか!?! 貝さんはねえ、どれだけすごいかといいますがね〜！」

「できたわ、最高のカクテルが！」

「グルル……表示がバグっている、何を混ぜた!?……ア、アオーン！」

……同時にカオスな飲み会にもなりそうだった。

「オールマイト！ 俺が真剣に話しているというのに……」

「あの、相澤くん。それ、置物のためき！」

## いづくオンライン 小ネタその5

——ヒロオン内 モリアーティのホーム

「まさかこんなことになるなんて……」

呆然と立ち尽くしているモリアーティことAFO。

その足元には……オールマイトが苦悶の表情で死んでいた。

「君がこんな情けない死に方をするなんて……」

顔を手で覆い、悲し気に俯き嘆きの言葉を口にする。

が、しかし——

「クツ、クウ……クハハハ！ 僕の料理で君が死ぬなんて、なんて滑稽なんだ！ アツハツハツハ！」

彼の言葉の通り、オールマイトは彼の作った料理で死んだのだ。

何が起きたのか？ それは少しばかり時をさかのぼる。

ぺったん、ぺったん。

一定のリズムで音がしている。

年の瀬が迫れば日本のあちこちで見られる風景。そう、餅つきだ。

「よしよし、その調子で頼むよオールマイト」

「ああ！ ……って、なんでだ！」

「痛ア!？」

ノリツツコミをした際に思いつきり合いの手をしていたモリアーティの手を杵で思いつきり打ち付けたオールマイト。

モリアーティは悲鳴を上げ、当然のことながら文句を言う。

「何をするんだ、オールマイト！」

「ホント、何してるんだ私は！ なんて餅つきなんかやってるんだ！」

「それを今更ツツコむかい？」

いつもの食事会に呼ばれてノコノコと現れて見てみれば、何故か杵を持たされていきなり餅つきをさせられていたオールマイト。

ぶつちやけ訳の分からない状況ではある。

宿敵同士のはずなのに何故、仲良く息を合わせる必要がある作業をしているのだろうか？

歴代の継承者たちが見たらどう思うだろう……

「何故って、今日はお餅を使った料理だからだよ」

「いや、どうして餅なんだ……」

年末でもないのに時季外れの餅つきとはどういうことだろうか？

そう尋ねたオールマイトにモリアーティは何でもないように返事をした。

「散歩をしていたら餅について熱く語っている女子がいてね。それを聞いていたら食べたくなつたのさ」

「いや、散歩って……」

たしか丸顔の女の子だったかな。と、語るモリアーティの顔を見てオールマイトはため息を吐く。

裏社会の帝王が散歩って……しかも女子のおしゃべり立ち聞きつて……

いろいろとツツコミを入れたい。

「君もつきたてのお餅は食べたいだろう？」

「……それもそうだな！」

おいしいモノの前に細かいことは言いつこなしである。

食欲にはヒーローも巨悪も勝てないのだ。

そんなこんなで食事の時間。

食卓に座るオールマイトの前にはいくつものボウルが並んでいる。

「さあ、好きなものから食べてくれたまえ」

「言われなくとも……いただきます！」

手を合わせ、箸を手にする。食事の開始だ。

「まずは甘いやつからだな」

オールマイトが最初に手を付けたのはあんこがたつぷりと付いた餅だ。

あんこの甘味が餅の弾力で口の中で踊りだす。

ポリユミーなのに優しい甘味だ

「あんこ餅の組み合わせはやはり間違いないな。しかし、つぶあんじゃないのは残念だな」



「なっ、こしあんの方がおいしいだろう!？」

「なんだって!？」

「あ? ……いや、これ以上はやめておこう」

味の好みで意見が分かれて、一瞬間悪な雰囲気となる。

が、食事の場で喧嘩するのもバカバカしくなったのでやめておく。空気を变えるために次の品を進める。

「鉄板の組み合わせということならきな粉はどうだい?」

「いいな。お? 二つ色があるな」

茶色と黄緑の色の二種類を差し出される。

順番に箸をつけていく。

「茶色のほうは香ばしいな。黄緑の方は豆の甘味がほんのり感じられて、これはこれで……」

「同じきな粉でも豆が違うらしいね。ま、好みは分かれるだろうが」

あえてどちらが良いかは聞かない。先ほどの二の舞になるだろうから。

甘いモノが続いたので次はしょっぱい感じのものをチョイスする。

「これはひきわり納豆か?」

「餅ももとはお米だからね。相性はバツチリさ」

モリアーティの言う通り、これもまた間違いない組み合わせだ。

続いて大根おろしの辛みで、納豆でねばついた口の中をスツキリさせる。

そうして一度リセットされたところで、別の辛みを試す。

「これはなんだ? 醤油となにか香ばしい香りがするが?」

「からみ餅さ。醤油をベースにラー油で辛みを付けて摺りゴマで香ばしさを出したものだよ」

「ピリ辛でさらに箸が進むぞ! つ、次だ、次を出してくれ!」

次々と餅に箸を伸ばしていくオールマイト。

醤油をつけた海苔を巻いた磯部餅。

味噌をつけて焼いた味噌餅。バリエーションとしてピーナツツバターなんてのもある。

先ほどのあんこを利用してお汁粉も用意してあったので、それも口

の中へ。

お雑煮も用意してある。

醤油ベースに味噌ベース。しかも丸餅と四角の切り餅、ゆでたのと焼いたのと複数種類用意してあった。

さすが、料理人モリアーティ。芸が細かいぜ。

オマケとばかりにそっと出した付け合わせの大根の漬物もあつという間になくなってしまった。

「おいおい、そんなに慌てて口にはおぼると……」

「もぐもぐ……んん!？」

「ああ!? だから言わんこつちやない」

〃お餅〃

ヒロオンに実装された食品の一つだが、他の食品にはない特性を持っている。

調理して摂取すれば一定時間のバフが付くのは他の食品アイテムと変わらない。

違うのは、低確率でデバフ……バッドステータスが付く。

〃窒息〃

それが付与されるバッドステータスだ。

毎年お餅で亡くなれる方が多いのはよく知られているが、なぜにここまで再現したのか!？」

『VRはもう一つの現実世界だ。ならば、悪い部分もしつかりと現実と同じにするというのが道理ではないか?』

と、言うのが、とある開発主任の言葉である。

天才と馬鹿は紙一重というが、これは正直馬鹿でしかない気がする。

こうしてオールマイトは（VR世界で）死んでしまったのだった。おお、N.O. 1ヒーローよ、（こんな理由で）死んでしまうとは情けない。

一人残された宿敵、モリアーティ、いや、オール・フォー・ワンは何を思うのか。

「まだ、お餅グラタンとか用意しておいたんだが……どうしよう？」  
作った料理の心配だった。

おまえ、ホントもう！ もうおまえってヤツはあああ！

なお、残った料理は復活したオールマイトがおいしく頂きました。

## いづくオンライン その7前編

時を少し遡った頃の話。

緑谷出久14歳。

中学生にも関わらず、天才的なゲーム開発能力を買われてゲーム会社で開発を任されている出久。

そんな彼は今、とても困った事態に直面していた。

「どうしても無理かね?」

「え、ええと、それは……」

目の前に座る男性の威圧感にタジタジとなる出久。

オールマイトにも並ぶほどの巨漢の男性の名は轟炎司。ヒーロー・エンデヴァーであった。

“ヒロオン”とのコラボのために開発責任者の一人である出久と打ち合わせをしに来ている。

その際に、出久からエンデヴァーに要望を聞いたところ、その要望がとんでもないものだったのが出久を困らせている原因だったりする。

その要望というのも……

「なんとかしてオールマイトよりも人気を出せるようにしてほしい！」

「え、えええ!?」

エンデヴァーからの要望はただ一つ。

“オールマイトのイベントよりも人気が出る内容で”とのこと。

正直言えば、無理難題もいいところなのだが。

そもそも何をもって「より人気」と言えるのか不明な上に、比較対象がオールマイトであるというのが厳しい。

目の前に座るエンデヴァーからのプレッシャーに耐えながら出久は必死で考えを巡らせる。

『どうするどうするどうする? エンデヴァーのキャラでオールマイトよりも人気にするにはどうしたら……』

オールマイトとエンデヴァーという二人のヒーローの特性を比較

した際の大きな差異として、支持層の違いがある。

N.O. 1ヒーローのオールマイトは支持層が幅広く老若男女を問わず多くの人々から支持を得ている。

一方、エンデヴァアの支持層は20代〜30代男性と大きく偏っており、威圧感のある外見や冷徹な対応などのせいで一部からは逆に嫌われてすらいる。

ネットで「エンデヴァア」と検索した際に、予測変換で2番目に「嫌い」三番目に「怖い」と出てしまうほどだ。

それでもN.O. 2ヒーローとして長らく君臨していられることこそ、他の追隨を許さない実績の高さを物語っているわけだが、いかにせん今回はゲームのコラボの話だ。

現実でどれだけ実力があるといえども、一般人にしてみれば関係ない話。

真っ先にとっつきにくいイメージが来るのでどうしようもないところだ。

かといって、万人受けするようなキャラにエンデヴァアを変えるわけにもいかない。

むしろそんなことしてしまえば、エンデヴァアの持ち味を殺すことになってしまう。

難題を前に悩む出久。その脳裏にまたしてもダンディーな外国人男性が浮かび上がった。

『何？ エンデヴァアのキャラが変えられなくて困っている？ それには万人受けさせようとするからだよ。』

逆に考えるんだ。『人気なんてなくなつていいさ』と』

その言葉を受けて出久はアイデアを思いつく。

エンデヴァアを皆に好きになつてもらおう必要などないのだ。まずは一部から熱狂的な支持を得ることから始めよう！

「エンデヴァア、一つお聞きしたいんですが……指導・教育にご興味はありますか？」

「チクショウ、今回の『ヒロオン』のイベントはなんで人数が限定さ

れてるんだよ」

「しようがないだろ。前のイベントのランキング上位者にしか参加できないんだから」

ゲームの中で運営からのお知らせを見ながら文句をいうプレイヤー二人。

今回発表されたイベントは、前回のイベントの上位ランキング入賞者に対するご褒美イベントであったため、多くのプレイヤーたちは参加できずにいたのだ。

そういう事情はあらかじめ分かっていたものの、どうしても悔しい気持ちは口から出てきてしまう。

「俺も参加したかったな……エンデヴアーのイベント」

そう、今回皆に望まれているのはあのエンデヴアーのイベントなのだ。

・  
・  
・  
ヒロオン内に設けられた特設会場に複数の人影が動き回っている。

「違うー！ もっと動きの流れを意識しろ！ 一つの行動を次の行動につなげるように動け！」

「そおだ！ 個性の出力を微調整できるようにするのだ！」

「二二はい！」

エンデヴアーの檄にプレイヤーたちが元気よく返事をする。

雄英高校の巨大体育館γ並の広さを持つ板張りの武道場に声が響き渡った。

まるでヒーローの訓練施設のようなそれはまさしくその見た目通りの目的のための場所である。

No. 2 ヒーローエンデヴアーの指示のもとプレイヤーたちがクエスト訓練をこなしていく。

そうしてクエストをクリアするたびにステータスや個性の能力の上昇、スキルやアビリティの獲得をすることができるというのがこのご褒美イベントの内容だ。

それも名付けて『炎のエンデヴァー道場』である。

上位入賞者のみの参加という人数制限を設けたことで、イベントに参加できる“ということそのものに価値を持たせた意図は、一応は成功を見せた。

高いハードルを越えた先にあるボーナスステージという、ゲームでは昔からある人気の要素を取り入れたのだからそれなりの成功は見込めたわけだ。

言ってしまうえば、“エンデヴァーのイベント”でなくともウケるイベントを最初に用意し、エンデヴァーというヒーローの特性に関わらずに人を集めるようになっていく。

だが、これだけではエンデヴァーの求めるオールマイティのイベントよりも人気になるという目的は果たせない。

大事になってくるのはここからだ。

人数が制限されたことで、各プレイヤーに対する個別対応を実現。今回のイベントではまさかの各プレイヤーに合わせて個別の訓練ユニーククエストが用意されているという破格っぷりだ。

それもNo.2プロヒーローが監修し、直接指導してくれるという形式で……だ。

ついでにクエストの内容も現実的なものが多く、そのまま現実世界でやればヒーローを目指すための訓練になりそうな内容だったりする。

まるでヒーロー科の授業を受けているかのような内容に、世間の一般人の多くは参加できたプレイヤーを羨んだ。

また、一部で不安視されていたエンデヴァーの指導も、蓋を開けてみれば的確なアドバイスに熱血的な指導が好評となった。

熱血で優秀な指導者という今まで見られていなかった意外な一面を知られることで、新たなエンデヴァーのファンを獲得できた相乗効果まであったのだからエンデヴァー本人も大満足。

この影響を受けて新たにヒーローを目指す視聴者の悩みを相談、アドバイスをするwebチャンネルを開設することとなった。

ヒーロー志望が多いこの世の中で、No. 2ヒーローがそのための努力の方法を教えてくれるという企画は反響を呼び、また多くのファンを得ることとなる。

めつきり「熱血指導者」のイメージがついたエンデヴァーは一部からは「エンデヴァー先生」「エンデヴァー師匠」と呼ばれ親しまれ始めた。

不思議なもので一度別のイメージが付くと、いままでの行いも違った捉え方をされるようになるもので。

「ファンサービスをしないのは治安維持っていうヒーロー活動を優先している結果なんだ。ストイックなヒーローなんだよ」

「上昇意識が高いって言うけど、それは権力的なことじゃなくて自分の能力を高める向上心の意識の高さなんじゃないか？」

などなど、いまだにアンチは多く存在するものの、支持層を広げることにも成功している。

そんな順風満帆な感じもあるエンデヴァーだが、現在、大きな悩みを抱え込んでいた。

——ヒロオン内 はずれのタウン

人のあまり多くないタウンの公園で、一人の女性がベンチに座って待ち合わせをしていた。

白髪に黒い瞳で、どこか儂い雰囲気を持ったその女性の名前は轟冷。

そう、エンデヴァーの妻である女性だ。

過去に精神を病んで以来ずっと入院したままであったが、今日はそのリハビリの一環としてVRのゲームの中にログインしていた。

目的は夫であるエンデヴァーと話をすること。

現実世界では直接エンデヴァーと会うことは、冷本人がエンデヴァーに対して恐怖を感じてしまうため医者に止められていた。

だが、アバターで見た目を変えられるVR世界ならば、その恐怖も軽減できるのではないかということまでこうして場を設けられたわけなのだった。



もちろん、本人が無理だと思えばすぐにログアウトすることができるといふ安全策があることも、実行しようと思った理由の一つだったりする。

そういういろいろな事情から実現した久しぶりの夫との会話だが、冷は緊張を隠せない。

何を話せばいいのか。そもそも、まともに話をする事ができるだろうか？

そう考え始めればどんどん不安が大きくなっていつてしまい、気が付けば約束の時間よりもずいぶん早く待ち合わせ場所に着いてしまっていた。

何度も時刻を確認してはその針の進む遅さにため息を吐きそうになる。

「すまん。待たせてしまったか？」

「あつ、はい、いいえ。あな……た？」

物思いにふけているところに夫の声がして、慌てて声をあげた冷だったが、困惑で言葉が詰まってしまった。

「あの、あなた……ですよね？」

「ああ。俺だ」

思わず本人なのか確認してしまう。

間違いなく、目の前にいるのはエンデヴァーだ。なのだが！

「その姿はいつたい？」

「……俺の姿そのままではおまえを怖がらせることになるからな。頼んで作ってもらった特別製のアバターだ」

腕を組み、いつもの尊大な態度はそのままのエンデヴァー。

しかし、だが、その姿はともキュートな姿になってしまっていた。

身長30cmほどにデフォルメされたぬいぐるみのような姿のエンデヴァー。

いわゆる、『ミニエンデヴァー』であった。

まあ、この姿に恐怖を抱けという方が難しいのは確かであるが、せつかくの久しぶりの夫婦の再会がこんなのでよいのだろうか？

とりあえず、恐怖から会話が成り立たないということはなさそうな

ので、成功ということにしておこう。

「それで、元氣だったか？」

「え、ええ。いつもと変りなく過ごしています」

「そうか。……………そうか」

お互いベンチに座って会話を始めるのだが、ぎこちない雰囲気では話が續かない。

エンデヴァーは何を話せばいいのか分からず、相槌を打ってそのまま黙り込んでしまった。

一方、冷の方でも困惑で話が續かない。

なぜなら……

『べ、ベンチに座るために必死に上る姿が可愛い！ え？ え？ この可愛い生き物が私の夫？ ええっ!?!』

エンデヴァー本人に自覚はないが、デフォルメされた姿で動き回る様子は可愛いの一言に尽きる。

まさに冷の内心は『私の夫がこんなに可愛いわけがない』状態である。

恐怖に感じていた夫が、デフォルメされてぬいぐるみになっていたら、そらそうなるであろう。

お互いに話が續かない空気に負けてか、エンデヴァーは次に行動を移しだした。

インベントリを呼び出してアイテムを選択し、手元に用意をする。

「ん、おまえへのプレゼントだ。受け取れ」

「あ、ありがとう。お花、ですね」

ぶつきらぼうに手渡されたのは一輪の花。

No. 2 ヒーローのエンデヴァーが渡すにはなんともこぢんまりとしたプレゼントだった。

だが、冷にとっては嬉しいモノだ。

「フッフ、覚えていてくれたんですね」

出会ったところに一度だけ好きだと伝えたことのある花。

けっして自分のことを全く見ていないわけではないのだと、そう知ることができるプレゼントだった。

嬉しそうにほほ笑む冷に対し、エンデヴァーは不機嫌な表情で返事をする。

「これしか知らんからな。俺は」

お前の好むモノなど。と、自嘲混じりに吐き捨てる。

自分の不甲斐なさが身に染みて感じられたのだ。妻の好みもろくに知らないのだから。

「……なら、もっと知ってほしいです。私のこと」

「……おまえに対して酷い扱いをした俺が、か？」

冷から告げられた言葉に、エンデヴァーは信じられないというように顔を向ける。

今更ながら感じるのは、自分の罪。

だが、目の前の、自分が不幸な目に遭わせてしまった女性はそれを許すというのだろうか？

「私もあなたのことをよく知りません。何が好きで、何が嫌いで、そして何に苦しんでいたのか。夫婦だということにお互いのことを何も知らなかった」

「それは、そうだな」

「ええ。だから、私たちはお互いのことをこれからもっとよく知っていく必要があると思うんです」

「これから、か……」

過去のことは変えられなくとも、未来のことは今から変えられると告げられているようで。

その言葉はエンデヴァーの心に何か感じ入らせるものがあつた。

そうなってみて口から自然と出てきたのは、謝罪の言葉だった。

「すまなかつたな、冷。すまない、すまなかつた」

謝罪の言葉と共に泣き始めるエンデヴァー。

その涙はVR世界のまがい物だが、その心だけは本物だ。

「あなたの泣いたところなんて初めて見ました。フツツ、これで一つあなたのことが新しく知れましたね」

「情けないところを見せたな……ところで、なんで抱き上げるんだ？」

「せっかくこんな可愛い姿なんですから、いいじゃないですか」

「いや、よさんか。おい、聞いているのか!？」

先ほどまでとは違い、穏やかな会話を続ける二人。

離れていたお互いの距離が近くなっていくのが感じられたのだった。

## いづくオンライン その7後編

——ヒロオン内 タウン

エンデヴァー夫妻が久しぶりの、いや、初めてのコミュニケーションを行っているとき。

それを少し離れたところから見つめる三対の目があった。

それぞれ比率は違えども、紅白の髪を持った三人の人影。

「お父さんもお母さんも楽しそう。よかったあ」

「グギギ、糞親父め。見た目を変えてくるなんて卑怯な手段を……」

「夏兄ィ、うるせえ」

街路樹の陰から顔を出して様子を伺っているのは冬美、夏雄、焦凍の轟家の兄弟たちだ。

……なぜ見てるんです？

思いつきり不審者ムーブだが、両親が久しぶりに対面するということで気になってしょうがなかったのでこうして出歯亀じみたことをしているわけだ。

こうして両親の逢瀬の現場を覗き見している三人だが、反応は三者三様といった様子。

「よかった、良かったよ。お父さんとお母さんが仲直りしてくれて」  
純粹に喜んでいるのが長女の冬美だ。

ずっと仲の良い家族というものに憧れていた冬美にとって、両親の和解はその最初の一步になるかもしれない希望だ。

一方、不満げなのは次男の夏雄だ。

「あいつがやったことがなかったことになるかよ。何をいまさら。納得できるか！」

父親の母への態度。兄への仕打ち。弟への非道。

それらをずっと見てきた夏雄からすれば、エンデヴァーという存在はそう簡単に許せる存在ではない。

両親との間で和解があったとしても、父子の間でのわだかまりはまだ溶けていないのだ。

そして、その兄よりもさらに複雑な気持ちになっているのが焦凍で

ある。

「笑ってるのか、母さん。あいつの前で」

焦凍の記憶の中の母親はいつも泣いていた。

だからこそ父親を憎み、見返すために努力を重ねてきた。

そのはずなのに。その、はずなのだが。

どうして目の前の母親は笑っているのだろうか？

焦凍はいままで自分のやってきたことの正しさが分からなくなっていた。

“父親を否定するために母親から受け継いだ個性だけでNo. 1ヒーローを目指す”

その決意が無価値に思えてきた。

燃え盛っていたはずの熱が消え失せて、まるで消し炭のよう。

しまいには何故、自分がヒーローを目指しているのかすらも分からなくなってくる。

ぐるぐると答えの出ない思考の中で、つい先日の出来事を思い出す。

父親に呼び出され、その時のことを。

『焦凍、すまなかった』

両膝を地に着けて深々と頭を下げて言う謝罪。

そんな父親の姿に困惑と怒りが胸中に沸き起こったのを覚えている。

ひたすらオールマイトを超えることだけを見て何もかも犠牲にしてきたはずなのにどうして？ という気持ちと共に、今更勝手なことを言うなどという怒りだ。

多くのヒーロー志望の人間、それも息子と同じくらいの年齢の子供たちを教導・指導していくうちに、自分の子供たちへの態度を顧みた結果だという。

無茶な修行や特訓をして親が心配し、それを注意することもあったという。

人の振り見て我が振り直せと言うが、他人の姿を通してこそ自分の行いはより客観的に見ることが出来るものだ。

そうして反省した結果が息子への謝罪だったのだ。

まあ、理不尽を受けていた焦凍からすれば虫のいい話だと怒るのは当然ではある。

謝罪の言葉を受けたその時には、反発して席を立ったことは焦凍も覚えていた。

『謝られただけじゃねえ。その時に何か言葉をかけられたはずだ』  
当時のことを思い起こす焦凍。

エンデヴァーはなんと言っていただろうか？ たしか――

『おまえにはNo. 1ヒーローになれと、俺を超えることを強いてきた。だが、おまえがその道<sup>ヒーロー</sup>を望まないというのなら、おまえはヒーローにならなくていい』

そんなことを言われたな。と、焦凍は思い出す。

その言葉になんと自分は返していただろうか？

『てめえが言ったことなんか関係ねえよ！俺は、俺がなりたいからヒーローを目指してんだよ!!』

そうだ、そう返事をしたはずだ。

ということを思い出し、自分の中で何かが納得できるのを感じた焦凍。

遠い昔の記憶。

轟焦凍がヒーローを目指したいと思った“オリジン”がようやく胸のパズルにかちりとハマった音がした。

轟焦凍がヒーローを目指すのは、父親に言われたからでもない。母親ですら関係ない。

ヒーローを目指すのは、成りたい自分に成るためだから。

—— 雄英体育祭 決勝戦

「どうしたツス！それが全力かよ、轟!!」  
「ぐっ、クソ！」

個性が当たり前になった超常社会における日本の一大イベント『雄

英体育祭』

その決勝戦に勝ち上がった焦凍は、同じく特待生入学の夜嵐と一対一のガチンコバトルを繰り広げていた。

暴風が吹き荒れ、氷塊が碎ける。

一進一退の戦いを繰り広げていた二人だが、戦況は徐々に焦凍の不利に傾いてきていた。

「攻撃が当たらねえ。地の利がないのはキツイな」

狭いフィールドでは焦凍の氷結による広範囲攻撃は今までアドバンテージであった。

だが、空を飛べる夜嵐にはフィールドを埋め尽くす氷塊も効果はいまいちで当たらない。

直撃しそうなものも、暴風で碎かれてしまう。そして、碎けた氷の破片は夜嵐の操る風に乗ってこちらを攻撃する武器になって返ってきた。

少しずつ追い詰められ、敗北が脳裏によぎる。

「何をやっておるか、焦凍オオオ！ 気合を入れる!!」

「焦凍、頑張って!」

そんなときに聞こえてきたのは、応援席にいる両親からの声援。

二人の声が耳に届いたとき、焦凍の心に火が灯った感覚がした。

心の火を、魂を燃やしたかのように彼の左から炎が吹き荒れ、フィールドの氷を溶かしつくしていく。

父親の個性だのなんだのと、もう考えるのはやめた。

「ようやく俺を見たツスね。これからが本番か?」

「ああ、待たせた。親父と母さんが、家族が応援してくれてんだ。負ける気がしねえ!!」

「ハハッ！ 熱いツスね！ こういう熱い展開は……大好きツス!!」

いろいろと吹っ切れた焦凍に、夜嵐も全力でぶつかっていく。

今日この時、雄英体育祭は最高の盛り上がりを見せたのだった。



雄英体育祭を終えた帰り道。

轟家は三人並んで帰路へとついていた。

焦凍は黙って掌の今日の結果の証を見つめている。

夕日をまばゆく反射する銀色の光。銀メダル。

そう、焦凍は優勝を逃したのだ。

「悪い。負けちゃった」

「いいえ、よく頑張ったわ。焦凍」

「敗北すら糧として成長すればいいだけの話だ。おまえにはまだまだ将来があるのだ。焦るな」

両親からの慰めが心にしみる。

今回負けた原因は分かっている。

左の個性練度不足だ。最終的にそのわずかな差で負けたのだ。

正直、悔しさがこみあげてくるのを抑えられない。

その悔しさをバネに、焦凍が父親に教えを乞うのもそう遠くないのかもしれない。

オマケ その1 『爆豪の焦燥』

「こんなはずじゃねえんだ……」

雄英体育祭が終わった後の教室で一人席に座ってうなだれている爆豪。

有り体に言って、彼のプライドはボロボロだった。

自分の才能に自信をもって入学し、今回の体育祭で自分の実力を見せつけるつもりだった爆豪。

だが、結果は思っていた物にはならなかった。

第三種目、初戦敗退。

それが彼の今回の成績だった。

最終種目に進出できた？

一回戦目の相手が今回優勝した夜嵐で、運がなかった？

まだ一年生だから？

そんな言葉は爆豪にとってはただの言い訳に過ぎなかった。

そんな言葉で自分を言い聞かせるようなことは、彼のプライドが許

さなかつた。

厳しい現実を前に爆豪の心は折れかけている。

だがしかし……

「まだまだ。このままで終われねえんだよ！」

完全に折れきつてはいない。

爆豪は強くなることを決意する。なんとしてでも。貪欲に牙を、爪を研ぐのだと。

オマケ その2 『ブラック出久くん』

雄英体育祭を終えた次の日の朝。

雄英高校は休みということもあつて静かなものだった。

体育祭で主役を張ったヒーロー科はもちろん、なんだかんだではしゃいでいたほかの学科の生徒たちも体を休めるための必要な時間だろう。

誰にだつて休息は必要なのだ。

が、教師陣はそうもいつていられない。

業務が溜まっているとなれば休日出勤も当然ある。

特にヒーロー科は今回の体育祭の結果を受けて職場体験のスカウトの対応が控えているため、意外と忙しいのだ。

「Huh、毎年のことだが肩が凝るZE。まったく」

そんな休日出勤をしなければならなくなっている教師の一人がプレゼント・マイクだった。

悲しい現実を前に廊下を歩きながら愚痴をこぼす。

現在は校舎の見回りという名目で気分転換の最中だ。

合理主義者の同僚からは「生徒なんていないんだから、不合理だ」と、文句を言われたがそれでもしないとやっていられない。

一応、名目とはいえ見回りということ各教室を見て回ってはいるものの人の気配などありはしない。

ヒーロー科の1年A組から順番に見ていき、ついにはサポート科のH組の教室にたどり着いた。

「Hello! Is anyone there? って、誰もいるわけな——のわっ?! What?!」

どうせ誰も教室にいないだろうと足を踏み入れた瞬間に何かを踏みつけてしまい驚くマイク。

あわてて飛びのいて見てみれば、それは寝袋にくるまって眠る誰かだった。

「uhh…:う？ イレイザー、じゃ、ないよな？ 誰だ？」

寝袋ということでもいつも愛用している同僚が思い浮かんだが、当の本人は職員室でいままも仕事しているはずだ。

誰だ？ と、疑問に思っていると寝袋の人物が目を覚ましたのかもぞもぞと動き始めた。

「うーん、えっと、おはようございます」

「お、おう、グッドモーニン…:いやいや、何やってんのキミ？」

寝袋で寝ていたのは緑のボサボサの髪をしたサポート科の生徒、緑谷出久だった。

サポート科の特待生として入学し、現在も授業の手伝いをしてもらっていることで出久のことは知っているから、彼がこのクラスに所属であるのも分かっている。

寝ぼけているのか挨拶をしてきたので思わず返事をしてしまったマイクだが、どうして彼がここで寝ているのかすぐにツツコミを入れざるを得なかった。

「す、すみません、ちょっと教室で仮眠をしてて…:うわ、もうこんな時間!? 起こしてくれてありがとうございます。プレゼント・マイク」

「起こしたっていうか、踏んづけちまってsorryと言わなきゃならないのはこっちなんだが…:てか、仮眠？ こんな時間ってまだ朝の7時半だZE?」

踏んづけてしまったことを謝罪するつもりが、逆にお礼を言われてしまい困惑。

というよりも、質問の意図したと違う返事が返ってきたので、改めて質問をしなくてはいけなくなつた。

教室で寝ていたことは見ればわかる。

聞きたいのは、どうして教室で寝ることになってしまったのかということだ。

「体育祭見ててちよつと刺激を受けたので、校内の演習システムを調整してたんです。そしたら思ったより熱中しちやつて……徹夜しちやつたので1時間ほど仮眠を取るつもりで教室で寝てたんです」

30分も余計に寝ちやいました、と、照れたように頭をかく出久にマイクの顔は引きつりそうになった。

『この子、この若さで仕事中毒だ』  
ワーカーホリック

毎年サポート科の生徒には数人こんな感じで時間を忘れて研究や開発に没頭する生徒が現れるということはマイクも知っているのである程度は受け止められたのだが、やはり目の前にするとなかなか衝撃的である。

こういった生徒は自分の体調も無視して熱中することが多く、不健康になりがちだと同僚のパワーローダーが頭を抱えていたことを思い出すマイク。

ふと、目の前の出久のことが心配となり、それとなく注意をするこ  
とにした。

「あー、頑張りすぎて体を壊さないように気を付けろよ？　ちゃんと睡眠と栄養は摂らないとNA！」

「はい。ありがとうございます。睡眠時間が短い分だけ栄養はしっかりと摂ろうと思います」

マイクの忠告を聞いて素直にうなづく出久。

このあと食事を摂るといので、笑顔で見守っていたマイクだったが、出久が鞆から取り出した食品を見て笑みが凍りつく。

「H, Hey!　緑谷、その持つてるのはなんだ？」

「え？　これですか？　栄養補給用のゼリー飲料です」

銀色のよくあるパックに入ったそれを手にぺらぺらと説明をしていく。

「これ、すごいんですよ。野座間製薬ってところが作った、体に必要な栄養素が摂れるすぐれものなんです！」

もともとは体を鍛える人向けの高タンパク系のゼリーから始まったんですけど、そこからいろいろと発展して健康志向のものやダイエット系とかも作られるようになったんです。

忙しいヒーロー向けにも作られていて、成分も……」

「OK OK。説明はそれくらいでいいぜ、緑谷」

たしかに忠告通り、〃栄養は〃しっかりと摂っているが、そういうことじゃないのだ。

ゼリー飲料だけで食事を済ますのはしっかり食事をしたことにはならないと思うのだが!?

「ちよ、朝食はそれだけか?」

「ええ、そのほうが合理的なので」

合理的……

その言葉にマイクは頭が痛くなった。

いままでは気にしていなかったが、放っておくことができなくなつた。

出久にランチラツシユに食事を作ってもらうように言いつけてから、職員室へ踵を返す。

なにがなんとしても変えさせねば!

「イレイザー!」

「なんだ、マイク。うるさいぞ」

「いままで放置してきたが、コレ以上は見逃せねえぞ、イレイザー!」

「な、何の話だ?」

職員室に来て早々、大声を出すマイクに文句を言うが、逆にすごい剣幕で迫られて驚くイレイザー・ヘッド。

そんなイレイザーに先程の出久の様子を伝え、生活態度について諫める。

「おまえのマネをする生徒が出てきたから教育上悪いって言ってるんだ  
YO!」

「……合理的でいいじゃねえか」

「オオイ!」

## いづくオンライン その8

小狭い店内のカウンター席に座り、水の入ったプラスチックのグラスを片手に料理を待つオールマイト。

カウンター越しの厨房ではアバター名「モリアーティ」ことAFOが調理を行っていた。

そう、もはや恒例のお食事会である。

現役のトップヒーローが元裏社会の帝王から接待を受けていると言うと何やらスキャンダラスなことのように聞こえるが、実情は現実では満足に食事を楽しむことができない体になったおっさん二人がVR世界で飯を食らっているだけなのだけれど。

うん、平和だなー。

温めた丼にスープを注ぎ、湯から引き揚げた麺を腕を思いつきり振り上げて湯切りをする。

丼に麺を移し替え、菜箸で軽くスープと馴染ませたら次はトツピングだ。

ネギ、メンマにチャーシューというシンプルな組み合わせ。スタンダードな醤油ラーメンの完成だ。

「待たせたな。醤油ラーメン一丁上がりだよ」

モリアーティがオールマイトの前に湯気をたてる熱々のラーメンを着丼させると、オールマイトは割り箸を手に臨戦態勢へ。

「うむ、ではいただきます」

手を合わせ食事前の一言を告げる。

まずはスープから。左手のレンゲでスープを掬い一口。

カツオと昆布の出汁がきいた醤油のスープは、「そうそう、これこれ」と頷きたくなるようなどこか懐かしい味がした。

続けて麺を持ち上げて息を吹きかけ、少し冷ましてから一気に音を立てて啜り上げる。

ちぢれ麺がスープを絡めとって口の中に一緒に飛び込んでくる。

かん水の効果でコシのある麺を噛みしめて食感も楽しみながら味

わう。

ネギのさわやかな風味やメンマのほどよい塩味と歯ごたえに口の中でほぐれるチャーシューとトッピングも箸をさらに進める助けになった。

息をつく暇もなく一気に箸を進め、残りはスープのみ。

丼を両手で持ち上げて直接口をつけて傾けていく。

「ふう、ああ、うまかった」

スープまで飲み干し、満足げにごちそうさまを告げるオールマイト。

塩分だとか脂質だとか健康への影響を一切考えないでいいVR世界のため、なんの罪悪感も湧かずただ幸せだけがあった。

そんなオールマイトの様子にラーメンを提供したモリアーティも上機嫌に腕を組んで頷いている。

料理人として一仕事終えた達成感というやつだろう。

……料理人？ いや、ツツコむのは野暮だ。何も言うまい。

「お粗末様。どうやら気に入ってくれたようだね」

「ああ！ こういうシンプルなラーメンってどうしてか無性に食べたくなる時があるんだよなあ」

「そうだね。ラーメンと一口に言っても多種多様だからねえ」

ラーメンという料理の奥深さに二人してしみじみと頷きあう。

語ろうと思えば長々と語れるほど魅力的なのがラーメンという料理であろう。

「エビや貝を使ったシーフードの塩ラーメン。もやし、キャベツ、ニンジンにひき肉の野菜炒めにバターとコーンをトッピングした味噌ラーメン。ガツンとパンチのきいたコッテリスープに固めにゆでた細麺がからむ豚骨ラーメン……いろいろと試したけれど最終的にシンプルなラーメンが食べたくなるんだから不思議なものさ」

オールマイトに食べさせるまでに繰り返した試行錯誤を思い出しながらモリアーティは語る。

苦労もあつたが楽しい時間だったことが、その口調からうかがえた。

一方、その語りを聞いたオールマイトは何やら悶えるような表情で。

「オイ！ 貴様はもうさんざん食べたからいいだろうが、私はこの一杯が久しぶりのラーメンなんだぞ!! ズルいじゃないか!」

モリアーティの語ったラーメンの話を聞いて「私も食べたい!」と悔し涙を流すオールマイト。

まあ、無理もない。大怪我をして胃を全摘出する手術を受けてからというもの、ラーメンを満足に食べることも夢のまた夢だったのだから。

特にコツテリ系の豚骨ラーメンなど望外の彼方の存在だ。

ちなみに、これらを食べられなくなった大怪我の原因は目の前のモリアーティ＝AFOだったり。

「ぐっ、貴様が憎い!」

「わかったわかった。今度食べさせてやるから、親の仇を見るような目で見るといいよ。まったく」

食べ物への恨みは恐ろしいね。と、すごい形相で睨んでくるオールマイトを呆れた様子でたしなめるモリアーティ。

親の仇のようなものにも、実際にオールマイトの師匠を殺した仇に間違いはないんですが……

扱いが豚骨ラーメン以下にされた七代目は泣いていいと思われる。

「そういえば雄英体育祭も終わって一段落したところだと思うんだが、調子はどうだい?」

食後のおしゃべりということで、オールマイトの最近の仕事の様子を尋ねるモリアーティ。

プロヒーローとしては長く活躍しているものの、教師としては新人のオールマイトの様子が気になったようだ。

「なかなか大変だな。雄英体育祭が終わったと思ったら一年生をすぐに職場体験に送り出さなきゃならん。イベント目白押しってヤツさ」



雄英体育祭が終わった後に一年生が行う職場体験は、今後ヒーローとしての成長に大きく影響する重要なイベントだ。

体育祭での活躍を見て指名をしてきたヒーロー事務所にそれぞれの目的を持って実際のヒーローの現場を体験するのだが、教師たちは生徒の希望をまとめたり受け入れ先との打ち合わせをしたりとどうやら多忙な日々らしい。

「なるほどねえ。次世代の芽は順調に育っているようだ……君の後継者はいったい誰になるのやら」

「……知ってどうする？ ワン・フォー・オールを継ぐ者を」

さりげなくOFAの後継者について話題が触れたことに、警戒感を抱くオールマイト。

VR世界にハマって腑抜けたとはいえ、やはり因縁の個性のこととなればどうしてもピリついてしまう。

だが、モリアーティはそんなつもりはなかったようだ。

「ん？ ああ、そう警戒するなよ。単に気になっただけさ。君がどんな風に後継者を育てるのかね」

「……そういうことにおこうか」

何もするつもりはないと告げるモリアーティにオールマイトは素直に信じることができなかった。

だが、そんな猜疑心も次のモリアーティの一言で吹っ飛んでしまったのだけだ。

「後継者選びはしつかりしなよ。なんせ僕は後継者を育てるの失敗しちゃったからねえ」

「何、貴様の後継者!? って、失敗した？」

後継者がいたという事実には驚き、続いて失敗したということを感じて肩透かしをくらってしまった。

悪の帝王が後継者の育成失敗とは何があったのだろうか。

裏社会を統べるほどの存在に育てるとなれば過酷な試練を用意していたとしても不思議ではない。もしかしたら、その後継者はすでに生きていないのではないか？

巨悪を育てる過程で起こる様々な悲劇を想像するオールマイト。

悪の帝王の後継者に起きた悲劇とはいったい……？

「うん。僕の後継者、ニートになっちゃったんだよ。気が付けば一日のほとんどをVRゲームに費やすゲーム廃人さ……」

「そ、そうか……」

厳しい表情で答えを待ち構えていたのに、まさかの理由で「何も言えねえ……」っとなってしまった。

悪事に手を染めるよりは断然いいのだけれど、けっして褒められるわけでもないという。

『後継者選びはしっかりやろう！ ホントにな!!』

自分の後継者育成は失敗しないようにしよう。

そう心に堅く誓うオールマイトであった。

「フツ。よくよく考えたら僕もこうやってVR世界にハマっておとなしくなったし、後継者を育てる計画もVR世界ができたことで台無しになった。

そう考えるとVR世界を作って社会に広めた人物こそ君の“平和の象徴”の真の後継者なのかもしれないね」

自分の状況を改めて考えたのか、モリアーティがふとそんなことを呟いた。

その言葉はオールマイトも頷ける部分があった。

「確かにな。最近ではVR世界のおかげで個性犯罪も減少傾向にあるらしいからな」

規制で雁字搦めに抑圧された現実世界の鬱憤を晴らす場所としてVR世界ができた影響は大きい。

自分の個性を持って余してヴィランになる人間が減ったのだ。

なにせVR世界ならば合法的に、思う存分自分の個性を使用することができるのだから、わざわざ法を犯してまで個性を使ってやろうとは思わなくなる。

その結果が、個性犯罪の減少なわけである。

オールマイトのような犯罪に対する抑止力として平和を守るのではなく、根本的に社会そのものを変えて平和を作り出したのだから、もしかしたらオールマイト以上の影響力かもしれないかった。

「本当に彼には感謝しなくてはならないな……VR世界を広めてくれたおかげに平和になったのだから」

しみじみと言うオールマイト。

そんな彼を揶揄うようにモリアーティが声をかけた。

「そうだねえ。おかげで美味しい飯をもう一度食べれるようになったわけだからね」

「ふっ、ハハハ！ それはそうだな!!」

「だろう？ こうやって君の胃袋を掴んで支配してやるなんてこともできたわけだし」

「残念だったな、私の胃はもう全摘済みでもないんだ!」

「そうだった、そうだった。確か君の腹に大穴開けたんだったなあ……」

「ハッハッハッ!!」

冗談を言っただけ笑いあう二人。

ジョークが若干ブラツクだが平和である。平和だよな？

「まあしかし、貴様は感謝ばかりもしてられないんじゃないか？ 後継者がニートになった原因になったんだからな」

これから頑張つて更生させなきゃな、と、モリアーティを逆に揶揄うオールマイト。

まあ、このあとと思いつき反撃を食らうのだけれど。

「なーにを他人事のように言ってるんだいオールマイト。僕の後継者は君の師匠の孫なんだぜ?」

「ハアツ!？」

さらっと告げられる衝撃の事実。

宿敵の後継者がニートになったと笑っていたら、その後継者が恩人の孫だった!

「ちよちよちよ、ちよつと待て! どういうことなんだ、おい!」

混乱するオールマイトを気にした様子もなくモリアーティはさらに言葉を続けていく。

「なあに、安心しなよ。彼も最近になって就職活動を始めたらしいからねえ」

「そ、そうか。うまくいくといいが……」

その恩人の孫は、少しずつニート脱却に向けて動き出しているらしい。

完全な引きこもりというわけではないならまだ安心だろうか。

「つて、そうじゃなくてな！ 師匠の孫!? それが何で貴様の後継者に!?!」

「何故つて……そりゃあ君の嫌がることを考えてたら普通に、な?」

「き、貴様というやつは……」

理由が酷すぎて逆に力が抜けるオールマイト。

そんな反応ができるのも最悪の展開を避けられたからなわけだけれども。

『お前の師匠の孫はヴィランだ』

と言われるよりも、

『君の師匠の孫がニートになっちゃった』

と告げられたほうがまだマシなのだから。

いや、それもどうなんだって展開なんだけれども。

とりあえず、七代目は泣いていい。

## いづく恋愛追跡 いづく恋・愛・追・跡

爆豪勝己には幼馴染がいる。

幼いころから一緒にいて、美少女といつても過言ではないほど美しく成長した幼馴染。

こう言ってしまうと自意識過剰に思われるかもしれないが、爆豪はその幼馴染から好意を向けられていることを知っていた。

当然、親愛ではなく、異性へと向ける好意だ。

自覚してなお、その好意に応えないのは……

「かつちゃん……おはよう」

「いちいち、家の前で待つてんじゃねえよ。クソデクが！」

「ごめんね。僕が待つてないか心配してくれたんだよね。大丈夫だよ、きつと今日はかつちゃんはこのくらいの時間に家を出るって思ってたんだ」

話がかみ合わない様子に爆豪はゲンナリする。

さりげなく自分の行動が予測されている感じがして朝から嫌な汗が背筋を伝う。

「あ、昨日の寝る前のシャレにならない怖い話は本当に怖かったよね。最後に女の人が部屋にいたオチはゾクツときたよー！」

「そ、そオだな」

寝る前にシャレにならない怖い話を見て寝るのは爆豪の習慣なのだが、もちろん一人で見ている。

なのに、自分が見ていた話を何故、この幼馴染が把握しているのだ？

昨日の見た怖い話のオチとも合わさって、ゾクリと震えそうになる爆豪であった。

火を吹く個性を持った緑色の髪をした幼馴染。

名前を緑谷出久という。

そして、この緑谷出久は、爆豪のことを病的なまでに愛してストーリー染みた行動をしている。  
つまり、緑谷出久はヤンデレである。

ある日のこと、教室に忘れ物を取りに来た爆豪はふと緑谷の席にノートが置かれているのを見つけた。

あいつが忘れていったのか？ と、気になってみてみれば、タイトルは『将来のためのかつちゃん観察ノート』

いかにもストーリーカーチツクなタイトルに頬が引きつるが、怖いもの見たさでページを開く。

読むのは最後のページ。

そして、爆豪は読んだことを後悔することとなる。

|| || || || || || || || || ||

『将来のためのかつちゃん観察ノート』

将来はかつちゃんと結婚して爆豪出久になりたいな。

そうだ！ 子供はっ…子供は何人欲しいかなあ？

僕は三人欲しいな。女の子がふたり、男の子がひとりね。名前はかつちゃんが決めてあげてほしい。僕ってあんまりネーミングセンスないから。

えへへ、どっちに似ると思う？ 僕とかつちゃんの子供だったら、きつと男の子でも女の子でも可愛いよね。

それで 庭付きの白い家に住んで、可愛い犬を飼うんだ。犬の名前くらいは僕でも決めれるよね。かつちゃんは犬派だから反対しないと思う。

あ、でも小型犬と大型犬で意見は分かれるかも。僕は断然小型犬派なんだけど、あ、でも、かつちゃんが大型犬の方が好きだっていうんなら、勿論大型犬を飼うことにしよう。僕、ちっちゃい方が可愛いけれど、動物ならなんでも可愛く感じるから。だけど一番好きなのは、勿論かつちゃんなんだよ。かつちゃんが僕のことを一番好きだよ

に。

そうだ、かつちゃんの好きな食べ物を作れるようになっておかないと。

どうしてそんなことをするのかって言うと、将来、僕がずっとかつちゃんのお弁当を作ることになるんだから。

それこそ一生かつちゃんの口に入るものは全部僕が作るんだから、やっぱり好みの味付けにしておきたいよね。

好き嫌いはよくないけれど、でも喜んでほしいって気持ちも本当だもんね。最初くらいはかつちゃんの好きなメニューで揃えたいって思うんだ。

彼女が彼氏のお弁当を作るなんて当たり前のことなんだから全然苦痛じゃないや。でもひとつだけ我儘。僕、『あーん』ってするのは、昔から憧れだったんだ。

かつちゃん、やってくれるかな。照れて逃げられたら、そんなことをされたら僕、傷ついちゃうよ。きつと立ち直れない！

シヨックでかつちゃんを燃やしちゃうかも。なーんて。

かつちゃんのことにはちっちゃいころからずっと見てきたからなんでも知ってるけど、ちゃんとお話は毎日したいな。

もしかしたら些細なことで誤解を招くかもしれないよね？ そういうのってとても悲しいと思うもん。

愛し合う二人が勘違いで喧嘩になっちゃうなんてのはテレビドラマの世界だけで十分だよ。もっとも僕とかつちゃんは絶対にその後仲直りできるに決まってるけど、それでもね。

かつちゃんは僕のことどう思ってるんだろう？

もちろん、僕とかつちゃんは相思相愛だし、いずれ結ばれる運命なのは知ってるよ。でも、かつちゃんは恥ずかしいのか僕に愛の言葉はくれないんだよね。

できればもっと言葉にしてほしいんだけど。男の子は言葉にするよりも態度で示すってことは言われてるけど、僕はできれば口にしてほしいなーって。

かつちゃんの声ってすごい色っぽいから耳元でささやかれたら僕

もうそれだけで駄目になっちゃうかも！

ねえ、かつちゃんはやってくれるかな。

できればやってほしいな。

今度二人きりの時にお願いな。

約束だよ、かつちゃん。

ねえ、見てるんでしょ？

もう読んじやっただよね？

ねえ、かつちゃん？

|| || || || || || || || || ||

「~~~~~ツ!!」

言葉にならない悲鳴をあげながらノートを爆破して窓から投げ捨てる。

どうしようもない恐怖感に襲われた爆豪は急いで教室を後にした。

その窓の外。投げ捨てられたノートが鯉を飼っている池に落ちて

浮かんでいる。

それを拾い上げる影が……

「かつちゃん、読んだのに返事してくれないんだ。約束したのに……

嘘つき。

嘘つきは……燃やさないよ。

逃がさないよ、かつちゃん。逃がさない、逃がしません！」

呼気と共に口から洩れた炎が手にしたノートを灰に変える。

知らないんだな、爆豪。

幼馴染からは逃げられない！



## いづく恋・愛・追・跡 その2

雄英高校一年A組。

難関の入学試験を突破し、憧れのヒーロー科に入学した皆の顔は明るい。

初日に個性把握テストによる除籍の危機という苦難に直面したものの、何とか乗り越えて今日を迎えている。

不安も多いが、それ以上に新生活への期待と希望が満ちている。そんなところだろう。

そうした明るい雰囲気の中で、一人暗い表情をしているのは爆豪だ。なぜなら――

「へえー、緑谷と爆豪って同じ中学なんだね」

「うん！ 中学だけじゃなくて幼稚園のころからずっといっしょなんだ」

「幼馴染ってやつかー。いいなあ……」

自分の真後ろの席でピンクの肌と黒目が特徴の芦戸と話している幼馴染のせいだ。

日本でも最難関のヒーロー育成高校に入れば、ストーカー気質のこの幼馴染と離れられると思っていたのにしっかりと合格している上に同じクラスとはどんな悪夢だろうか？

「かっちゃんとはずっと一緒にいたいから、かっちゃんがヒーロー目指すと決めたら僕も付いていくんだ」

「うわあああ、一途なんだあ！ いいねいいね！ キュンキュンするよー」

一途どころじゃねえぞ！ 妄執レベルの執着具合なんだぞ!?

「雄英を受験する、ヒーローを目指すって言ったときには、かっちゃん心配してくれてね。『付いてくるな、他所に行け』って言われたんだけど……やっぱりそばにいたくてね」

「マジで？ 爆豪って、ツンデレじゃん！」

違う、違う、違う！ そんなつもりじゃない！

どんな風に言っても都合のいいように頭ンなかで変換してやがる

せいでこっちの意図が伝わってねえんだ！

誰がツンデレなんだよ！

付いてくんない、ってか、もはや『憑いてくんない』ってレベルだわ！  
クソが！

と、自分の背後で交わされる不快な会話に気分がさらに落ち込む爆豪。

チラツと振り返ってみれば、何故かそのまた後ろの席の峰田と視線が合う。

何故か、峰田は血涙を流して呪いのこもった目で爆豪を見ていた。

『おのれえええ、リア充め！ 爆発しちまえよおお！』

そんな思念が伝わってくるような峰田の表情を見て爆豪はしみじみと思う。

『そと思うんなら、てめえが変わってくれよ』

と……。

|||||

オールマイトによる戦闘訓練。

ヒーロー役とヴィラン役に分かれて2対2で行う形式なのだが、爆豪はその組み合わせに不安を覚えた。

相方は生真面目を絵に描いたような性格の飯田だ。

正直、爆豪とは相性が悪いといえる。まあ、そもそも爆豪と相性のいい相手が少ないのだけけど。

味方との相性も問題だが、それ以上に対戦相手がヤバい。

対戦相手は……麗日・緑谷チームだ。

「かつちゃんとは今回は敵味方になっちゃったけど……大丈夫だよ！  
このくらいで僕らの愛情は揺るがないから。心配しないでね？」

「おう……」

すぐ隣でニコニコと笑っている出久に爆豪は口元をヒクつかせて返事をする。

大丈夫な要素がどこにあんだよ。と、心の内でツッコむも答えは出ない。

訓練の準備があるからと送り出し、向こうに行かせたあとに小さく

ため息を吐く。

萌葱色の着物に似たコスチューム姿の出久の姿だが、あれも爆豪を悩ます要因の一つだったり。

なんでも、爆豪の好みに合わせた衣装だとのことで、

「かつちゃんは清楚系の服のほうが好きだよね？ 直接的なエロスよりも、うなじがチラツツと見えているのとか、スリットから少し見える太ももとかがいいんだよね？」

と、本人がノリノリで語っていた。

自分の性癖フェチがバレているとか、恥ずかしい以前に恐怖を感じる。

話したこともないのに何故知っているのか？

こうやって自分のことを把握しまくっている相手との戦いである。はつきり言って嫌な予感しかしない。

「ソツコーで終わらせるしかねえ……」

長く戦いたい相手じゃない。

そう心に決めた爆豪であった。

戦闘訓練開始。

「死イねえー！」

見敵必殺とばかりに繰り出した爆豪の奇襲攻撃。

一刻も早くこの戦闘を終わらせたい爆豪にとっては当然の選択肢だ。

だが、その成果が実ることはなかったようで……

「すごい！ 緑谷さんの言ったとおりだ」

「やっぱりかつちゃんなら来ると思った」

爆豪の奇襲を躲した二人。

その反応は対照的で、驚いている麗日に対して出久はニコニコといつも通り。

その姿に爆豪は思わず舌打ちをする。

「チツ、俺の行動パターンなんざお見通しってか？ ムカツクなア！」  
「いやだなあ、かつちゃん。僕がかつちゃんのことを何でも知ってる

の分かってるくせに」

睨まれているのに嬉しそうに笑う出久。

その姿にイライラがさらに溜まる。

「そういうわけだから、かっちゃんの相手は僕がするね。麗日さんは先に行つて」

「うん！ 任せたまよ、緑谷さん！」

爆豪の相手をするという出久に、麗日もその方がよいと判断して承諾する。

当然、妨害しようとする爆豪だったが、出久の吐き出した炎によって遮られて先を許してしまった。

麗日の走り去った方向を睨みつけてまた舌打ちをする爆豪。

怒っているように見えるが、内心は別の事を考えていたりする。

『俺と出久を二人きりにすんじやねえよ！』

戦々恐々としていた。

この幼馴染と一緒の空間にいるのが耐え難かったり。

さつさと終わらせてやるとばかりに、攻撃を仕掛ける爆豪だったが

「右の大振りが癖なんだよね。知ってるよ」

「クソ！ 俺の動きが読まれてやがる！」

何度攻撃を仕掛けても、簡単に対処されてしまう。

それも見てから動くのではなく、完全にこちらの動きを予想された形で。

なかなかヒットしない攻撃を歯がゆく思っている爆豪に向けて出久は告げる。

「僕ね、かっちゃんのことには何でも敏感でいろいろ覚えちゃったんだ。かっちゃんの考え方とか思考パターン、身長とか体重とか体のサイズなんかも当然知ってるよ？ あと、走るときや歩く時の足音、汗の臭い、吐息の臭いなんかも。あ、特に声とかよくわかるんだ。調子とか言い方とかで今どんな気持ちなのかとかもよくわかるんだよ？

今は……あれ？ どうして、怖がってるの？ 一体、何か怖いことでもあったの？ かっちゃん？」

不思議そうに首をかしげる出久のことが理解できない。  
どうしようもない恐怖にかられた爆豪は、個性を利用したスタングレネードで視界を奪い……逃げ出したのだった。

出久から逃走し、目に留まった部屋に駆け込む。

雑多に物が置かれた場所で、隠れるにはうってつけの場所だった。物陰に身をひそめ、息を整える。

「何なんだよ、チクショウ」

こうして無様に逃げ出しているのだが、それを屈辱と思える余裕はなかった。

ぶっちゃけ、怖すぎである。

俺の幼馴染がこんなホラーなわけがない。

そう現実逃避したくなる爆豪であった。

「~~~~~♪~~~~~♪」

そうしているうちに、出久の声らしきものが聞こえてきた。

「あいつ、歌ってやがる」

声、ではなく唄だった。

しかも童謡。唄のタイトルは『かわいいかくれんぼ』

爆豪としては笑えないタイトルである。

その唄では、ひよこも、すずめも、こいぬも、最後には全員見つかってしまうのだから。

たとえ、どんなに上手に隠れていても……

ガチャリと音がして部屋のドアが開く。

息を殺し、必死で自分の存在を隠そうとする爆豪。

対して出久は楽しそうに声を上げた。

「かつちゃん。どおこに、いったのかなあ？　かくれんぼなんて、久しぶりだね。ちっちゃいころよくやったよね？　楽しいねえ、かつちゃん」

まったく楽しいとは思えない爆豪。正直ツツコミたいが、声を出すのも恐ろしい。

部屋を歩く出久はスンスンと鼻を鳴らして部屋をうろつく。

「かつちゃんの臭いがする……やっぱりここにいるんだよね？ おーい、出てきてよお。大丈夫だからさあ」

その言葉を信じて出ていったらデッドエンドの気配しか感じない。身動き一つせず、気配を殺す爆豪。

しかし、その努力が報われることはなかった。

「アハ！ 見イつけた！」

「クソが！」

見つかってしまった爆豪は出久を押しつけて出口のドアに走る。

そうしてドアノブを回そうとして……その手は宙を切った。

「なん……だと！」

ドアノブがドロドロに溶解して原型をとどめていなかった。

犯人はもちろん、彼女だ。

「逃がさないよ、かつちゃん」

「デク、おまえ……」

振り返れば、チロチロと口から火を吹きながら近づいてくる出久の姿が。

これは、かなり危険な状態だ。長年、不本意ながら一緒にいた爆豪にはよくわかる。

キレる寸前だと。

「どおして、僕から逃げるの？ おかしいなア、かつちゃんがどこかに行くはずがないんだから……」

どこにも行かないように、ちゃんと捕まえておかないとね」

一歩一歩近づいてくる出久に、爆豪は動くことができなかった。

そうして、爆豪は……捕まってしまったのだった。

「やーっと、捕まえた。もう、逃がさない」

そうして、そのまま時間切れとなりヴィランチームの勝利に終わったものの、爆豪は正直喜べなかった。

戦闘訓練、いいとこ無しだ。

その後の講評でも「逃げ腰」「根性がない」「臆病」などなど、散々な言われようだった。

まあ、実情を知らないからこそその言葉なのだけれど。

あれは本人にしか分からない恐怖なのだから。

放課後、傷心の爆豪は落ち込んだ気分です。一人教室を後にする。

出久には「一人にさせろ」と告げてきたのでついてきていないはずだ。たぶん。

そんな爆豪に声をかける人物がいた。

「爆豪少年！」

「……オールマイト」

今日の授業を担当していたオールマイトだ。

あまりの情けなさに声をかけに来たのだろうか、と、ネガティブな感情に捉われてオールマイトに向き合う爆豪。

予想に反してオールマイトのその表情は、なんとというか、とっても同情的だった。

「爆豪少年。今日の戦闘訓練だが……クラスのみんなには聞こえていなかったが、私は教師として音声を聞いていたんだ。

その、あれだ、大変だったな。そして、よく頑張った」

「オ、オールマイトオ……」

あれは怖かっただろう。正直私も背筋が凍ったよ。

と、自分を理解してくれる相手がいて思わず涙がこぼれそうになる爆豪であった。

生徒のアフターケアもばっちり。オールマイトは本当にいい先生である。

「憧れのオールマイトとお話できてよかったね。嬉しいよね。かつちゃん？」

その姿を、出久が校舎の窓から笑顔で見っていたのだった。

オマケ 『没案・Aルート』

出久から再び逃走し、目に留まった部屋に駆け込む。

雑多に物が置かれた場所で、隠れるにはうってつけの場所だった。

どこかに隠れようと考えた時に、見つけたのは掃除用具を入れるためのロッカー。

人一人くらいなら簡単に隠れられそうな場所だ。

「かつちゃん。どこに行つたのかな？」

どうしようかと迷う暇もなく出久の声が聞こえてきたので、急いで中に隠れる。

数秒後に出久が部屋に入ってきた気配がした。

ロッカーのわずかな隙間から外の様子を伺えば、出久が部屋をうろついている姿が見えた。

息を殺し、目を閉じてジツと耐える。

額から汗が噴き出して流れ落ちていくが、拭うことすらできなかった。

暫くしてドアが閉じる音がした。

どうやら出久が出ていったらしい。ホツと息をついて汗をぬぐつた爆豪はそこでようやく異変に気が付く。

「暑い……いや、熱い!？」

慌ててロッカーを開けようとして、金属製の開き戸が熱を持っていて触れることができない。

隙間から外を覗けば、部屋の中は火の海と化していた。

逃げ場がない。

そう絶望する爆豪に出久の声が届く。

「僕を拒絶して逃げるなんて……許さない。許さないよ、かつちゃん。僕がこんなに愛してるのに、それを受け取ってくれないなら……いつそのこと」

『安珍ルート』

没理由・爆破で余裕で脱出できそうなので。あと、これ、デッドエンドじゃん。だめでしょう。いろいろと。



## いづく功夫 いづく功夫H

人は生まれながらに平等ではない。

「諦めたほうがいいね」

緑谷出久は齡4歳にしてその社会の現実を突きつけられていた。

「昔『超常』黎明期に一つの研究結果が発表されてね。足の小指に関節があるかないかって流行ったの。で、出久くんには関節が2つある。この世代じゃ珍しい……何の『個性』も宿っていない型だよ」

白いひげと眼鏡が特徴的な老医者が事務的に説明をしていく。

人類の多くが『個性』と呼ばれる特殊体質となったこの社会で……出久は『個性』のない人間、『無個性』であることを医学的に証明されてしまったのだ。

出久が憧れるヒーローという職業は、命の危険がある職業だ。無個性であるということは非常に大きなハンデだった。

つまり、事実上、出久の夢はここで否定されてしまったわけである。

「超かっこいいヒーローさ。僕も、なれるかなあ」

「ごめんねえ出久、ごめんね……!!」

その晩、すぎるように問いかけた自分の夢への希望は、謝罪の言葉と母の涙で否定されてしまった。

翌日、出久は失意のまま公園で一人過ごしていた。

「どうして僕には個性がないのかなあ……」

誰もいなくなった公園で、一人ブランコに腰掛ける出久。

その独白にはどうしようもなく悲しさがにじんでいた。

どうして自分だけ。どうして他の人は当たり前のようにあるのに。

どうして？　なんで？　何故？

そんな答えの出ない自問自答を続ける出久は、ふとした瞬間にも泣き出しそうだった。

「ほう、こいつは驚いた。いやいや、長生きはしてみるものだな」

「だ、誰？」

突然、声をかけられて顔を上げる出久。そこにはいつの間にもいたのか薄汚れた老人が目の前に立っていた。

驚く出久に構わず、その老人は話を続ける。

「君は世にも珍しい仙人骨を持って生まれてきたのだな」

「仙人……骨？」

「そうだ。かつて大昔に仙人や真の達人と呼ばれた人々がその身に宿していたと言われる骨のことさ。それが、君にある」

いきなり現れて訳の分からないことを言われたと、普段なら思う出久であるが、その言葉をすんなり受け入れていた。

何せ、昨日の医者から「他の人にはないモノがある」と言われていたのだ。それも骨があるとかないとかの話だったような気もする。

老人の言葉を聞いた瞬間に、『あつ、このことだ！』と出久が考えたのも無理はない。

「幼いのに全身の骨と筋肉がしっかりしておる。うむ、百年に一人の逸材だ！ カンフーの天才だ！」

「ホント!?!」

「ああ！ 我地獄に行かずして誰が行く。悪を正して不正を戒める。それがお前の使命だ」

老人の言葉は諦めていたヒーローを目指すことを後押ししてくれるような言葉であった。

目を輝かせて、出久は老人のことを見つめる。

その期待に応えるかのように、老人は懐から一冊の本を取り出した。

「これは値段が付けられないほど価値のあるものだが、これも何かの縁。3万円で売ってやろう」

「……わかった。待ってて！」

老人の言葉を受けて、急いで家に帰った出久は自分の部屋にある貯金箱手に取る。

毎日少しずつため込んでいたオールマイトの1000円貯金箱だ。ちようど、最近溜まったばかり。

これも運命を感じる。

ただ、大好きなオールマイトの姿をした貯金箱をお金を取り出すには壊さなければいけないことは少し躊躇したが。

「オールマイト、ごめんなさいー!」

出久が振り下ろした腕がオールマイトの姿を砕く。

いづくのいちげき! オールマイトちよきんばこはくだけちった。

いづくは? 30,000てにいった。

こうした犠牲を経て手に入れた武術の教本を、それから出久は毎日読み漁り、それに従って修行をする。

“如来神掌”とタイトルが付いたその教本は武術の動きが描かれた挿絵が入っていたので、文字が読めない幼い出久でも問題なく修行を積むことができた。

そして、ある程度の自信が付いたある日の事。

「やめるんだ、かつちゃん! 泣いてるだろ! これ以上は僕が許さないぞツ!!」

「“無個性”のくせにヒーロー気取りか、デク!」

同い年の子供をいじめていた幼馴染の爆豪の前に立ちふさがる出久。

いわゆるガキ大将である爆豪が、自分に逆らう幼馴染に機嫌をよくするわけもなく。

片手から爆破の個性を使って威嚇しながら近づいてくる。それも、取り巻きの2人の友人も一緒に。

だが、出久は恐れることなく修行で覚えた武術の型を構えて対峙する。

「来い、かつちゃん!」

「生意気なんだよ、デクのくせに!」

今こそ、修行の成果を見せつけるとき!

「うう……」

「無個性のくせに逆らおうとしてんじゃねえよ、クソデクが」

倒れ伏す出久に唾を吐き捨てて立ち去る爆豪たち。

出久はボロボロになって地面に倒れていた。

積み立ててきた自信は既に粉々だ。

そんな状態になってふと思う。

「僕、騙されてたのかなあ……」

悔しきで涙があふれる出久。

社会の現実は一ひたすら厳しかった。

|||||

中学生になった出久。気が付けば高校進学のための進路調査を受ける年齢になっていた。

そして、その結果がクラスに伝えられた結果、非常にマズイ状態に追い込まれていたりする。

「くらデクウー！」

「おわっ！ 危ない!？」

幼馴染の爆豪に机を爆破され床を転がっていた。

それもこれも、進路希望先を雄英高校のヒーロー科にしたことを先生がばらしてしまったからだ。

プライドの高い爆豪が、無個性の出久が自分と同じ高校を受験することなど許せるはずがなく、こうして脅されてしまっている。

「『没個性』どころか『無個性』のてめえがあく、何で俺と同じ土俵に立てるんだ!？」

「いやいや、無個性は駄目って規定もないし……やってみないとわからないし！」

「なアにがやってみないとだ!! 記念受験か!」

爆豪の言葉はクラスメイトも同意のようで、出久を見る目には嘲りの色が浮かんでいた。

クスクスと笑い声が教室のあちらこちらで上がる。

出久には、味方はいない。

——放課後。

「話はまだ済んでねーぞ、デク」

「あつ」

帰ろうとしたところへ、爆豪が出久の持ち物である本を手にとって待ったをかける。

騒ぎを聞きつけて爆豪の友人たちが近くに寄ってきた。

「カツキ、何それ？」

「武術書？ マジか!? 緑谷く〜!!」

「良いだろ!? 返してよ」

爆豪の手にある武術書を見て笑う友人たち。

無個性の出久が頼った武術という選択肢を馬鹿にしていた。

「ハンッ！ こんなもんやったところで、無個性のおまえがヒーローなんか無理に決まってるだろ。どこまでも現実が見えてねえんだなア!?!」

「ああつ!?!」

そんな努力は無駄だともいうように、手の上の本を爆破して窓から投げ捨てる。

分相応をわきまえるように、言い聞かせるべく言葉を続ける爆豪。

「そんなにヒーローになってえなら、来世は個性が宿ると信じて、屋上からのワンチャンダイブなんつーのはどう……オイイイ!?!」

「僕の武術本がーッ!」

最後まで言い切ることができなかった。

出久が投げ捨てられた武術本を追いかけて窓からダイブしたのだ。

ホントにダイブするとは思わないじゃん!?!

「やべえ、あいつ死んだか!?!」

「フザけんな！ あのバカ」

友人と慌てて窓から下を覗き込めば、地面にうつぶせで倒れ伏している出久の姿が。

あ、まずいことになったかもしれない。

顔を青くする爆豪たち。

だが、その心配はすぐに払しよくされた。

「うう……何するんだよ、かつちゃん!」

「う、うるせえ！ 何するんだはこっちのセリフだ、クソが」

「この本高いんだよ？ 爆破するなんて何てことするのさ！」

「そつちかよ!? クソナードが！ 表紙しか焦がしてねえよ。中身は読めるだろーが！」

「みみっちい!？」

言い争いを始めた二人。どうやら無事のようなのである。

大きな事件にならなかつたと分かつた友人たちは既に帰り支度を進めていたりする。

爆豪もだんだん馬鹿らしくなってきた。

「そんなことしてると、いつか因果応報、天罰が下るからね！ かつちゃん」

「ハッ！ アホらし。帰る」

出久の言葉を戯言と受け取って無視することにした爆豪。

そのまま友人たちを追って教室から出て行つたのだった。

|||||

「ダメだ！ これ解決できないのは今この場にいねえぞ！」

「誰か有利な“個性”が来るのを待つしかねえ！」

『ク、クソがあああ!! こんなヤツに俺が呑まれるか!!』

出久の言葉が現実になったか、爆豪は帰り道にヘドロヴィランに襲われ、人質として呑み込まれそうになっていた。

必死で抵抗するも、ヘドロは体にまとわりついて一向に剥がれる気配がない。

周囲にいるヒーローも手を出すことができなくて、救けはもう少しかかりそうだった。

そんな絶望的な状況で、諦めが爆豪の心によぎった時――

「馬鹿ヤロー、止まれ止まれ！」

「かつちゃん！」

『なつ、クソデク!? なんで!？』

人ごみから飛び出してきたのは、無個性で格下のはずの出久だった。

当然、ヘドロヴィランは飛び出してきたパンピーなどに考慮してやることなどなく、排除するべくヘドロの腕を伸ばす。

誰もが悲惨な光景を覚悟した、が、しかし。

「あ、当たらねえ!? 何だ、この動き!?!」

特殊な歩法を使っているのか、またはヘドロヴィランの動きを見切っているのか、攻撃はことごとく出久をハズれていく。

とうとうヘドロヴィランの前にたどり着いた出久は爆豪の腕をつかみ取った。

「デク、てめえ!」

「クソガキが! 何をしても無駄だ!」

「コオオオ……」

ヘドロヴィランが出久を叩き潰そうと質量を増大させた左腕を振りかぶる。

危険が迫る中、出久は呼吸を深く、丹田に気を貯めて一気に全身にいきわたらせるよう意識を集中した。

「破ッ!」

「うおおお!?!」

気迫一撃。

ヘドロに押し当てた掌に地を揺らすような踏み込みと共に全身の力を伝えて吹き飛ばし、爆豪を救出した。

中国武術における発勁や寸勁と呼ばれる技だ。

救けた爆豪を背後に投げ捨て、ヘドロヴィランと決着をつけるべく右手を前に突き出すように構えをとる。

「クソ、クソガキが!」

「〃如来神掌〃 絶招……」

邪魔をした生意気な子供を消し去るべく、ヘドロヴィランが触手のように手を伸ばす。

合わせるように飛び出した出久は次々と掌打を打ち込みヴィラン本体に近づいていく。

「なんだ、何なんだ、このガキはア!?!」

「これで、終わりだア!」

五行山・釈迦如来掌ッ!

最後の全力の一撃がヘドロヴィランを巻き込んで大きく風を巻き

起こし、周囲の炎すら消し飛ばす。

ヴィランも意識を失い、事件は解決したのだった。

「おい、デクウ！ てめえ!!」

「あつ、かつちゃん!」

「かつちゃん、じゃねえんだよ！ あの後、さっさと逃げ出しやがって！」

「だって、なんか面倒が起きそうだったから……」

事件の後、周囲のヒーローたちをすり抜けて立ち去った出久。

その後を追いかけてようやく、見つけた爆豪が声を荒げていた。

その目には怒りが宿っている。

「てめえ、実力を隠してやがったな。なあ、オイ……俺を騙してやがったんだろオ!」

「そんな、隠してたなんて……ただ、見せるまでもなかったというか——」

武術の達人クラスの実力だったことを黙っていたことを怒る爆豪に対し、出久は武術を見せる機会がなかったから仕方がないと返事をした。

が、爆豪は違った受け取り方をしたようで。

「なんだよ。俺ごとき、見せるまでもないってか? ……ずいぶん、上から目線じゃねえか、アアン?」

「そうじゃないよ! だって、僕が武術をしてるからってかつちゃんには関係ないじゃないか」

「相手にもならねえってか? 上等じゃねえか! クソナード、てめえ、雄英受ける! そこで白黒はつきりつけてやる!」

そう言い捨てて立ち去る爆豪。

呆然と見送る出久は一言呟いた。

「いや、かつちゃんに言われるまでもなく受けるって言ってたじゃん……」



爆豪が聞こえてなくてよかった。

聞こえていたらまた一悶着あっただろう。

残念ながら、武術書にはコミュニケーション能力は指導していないのである。

これは、幼いころに武術で挫折を味わった上で努力を続けた結果、達人クラスになってしまった緑谷出久がヒーローを目指す物語だ。

## いづく功夫H その2（小ネタ）

その1『老・人・再・会』

ヘドロヴィランの事件で実力を見せつけた出久であったが、その人は修行を続けており、まだまだ満足していなかった。

しかし、10年の歳月も一つの武術書を読み込めば新しいモノなどそうそう得られるはずもない。

緑谷出久は伸び悩み、つまり壁にぶつかっていたのだ。

「なかなか上手くいかないな……」

「何かお困りかな？ 少年」

学校からの帰り道、思わずつぶやいた一言に返事をする人が。

声の方向へ首を向ければ、そこにはいつぞやの老人の姿があった。

「あ、あなたはは?!」

「む?」

出久が驚いた顔をしているのを見て、一瞬だけ『おや?』というよ  
うな顔をした老人であったが、すぐに顔をほころばせて話しかけてき  
た。

「おお、あのときの。見違えたぞ。立派に功夫を積んでおるようだな」

「おかげさまで！ 覚えていてくれたんですね」

「うむ！ しかし、そんな君が何を悩む?」

「じつは……」

思わぬ再会に喜ぶ出久は、これも何かの縁とばかりに悩みを打ち明  
ける。

最近、武術が向上している感覚がない。どう修行しても身につけて  
いく実感が湧かない。

そう心中を洩らす出久に、老人は顎髭を撫でながらしばし考えこ  
む。そして何かを納得したように語りだした。

「今の君に足りないものは心の修行だろうの」

「心の、修行?」

おうむ返しに聞き返す出久に頷いた老人は、解説を始めた。

「〃一胆・二力・三功夫〃 この言葉を知っておるかね? これは武術

を練るにあたって一番大切なことはまず度胸。すなわち心であるという言葉だ」

「僕に度胸が足りないということでしょうか？」

「結論を急ぐでない。そう慌てなさんな、若者よ。要は技と体の修行をしても効果を感じないというならば、心の修行をしてみてもどうか？ という提案じゃよ」

日本にも「心技体」という言葉があるだろうか？

と、告げる老人の言葉にどこか納得した様子が出久。

こう言われてみれば、心の修行というのも分るような気がするのだ。

しかし、心の修行と言われても何をしたらよいものだろうか？ そんな疑問が頭に浮かぶ。

「心配するな。僕に良い考えがある」

出久の疑問を見透かしたように、老人は胸を叩いて自信ありげに言っただけだ。

——市営多古場海浜公園

出久の住む街に近いこの海浜公園は、もともと漂着物が流れ着きやすい場所であるということもあり、それに便乗して不法投棄が横行してみるも無残な状態になっている。

そんな状態の砂浜に来て何をするのか？

「さあ、このゴミを片付けていくのだ」

清掃活動である。

「あの、理由を聞いても？」

「もちろん。考えなしに清掃活動というわけではないぞ。」

理由を尋ねる出久に、老人は丁寧に説明をしていく。

精神修行をするといえば、思いつくのは座禅をして瞑想したり、滝行などの苦行を受けたりなどが思いつく。

それをして悪くはないが、一番簡単なのは感謝や思いやりの心を

持って活動することだという。

そういった人への感謝・思いやりの心というのは人間的な成長につながるものだ。

そういった感謝・思いやりを分かりやすい形でできるのが奉仕活動だと告げる。

「人としての成長がまた武術を深めていくものなのだよ」

「は、はあ……」

いまいち理解しきれない出久であったが、なんとなく腑に落ちるところもあつて一応頷いておく。

まあ、ゴミ山を片付けていくのもよい修行になるだろうと納得させた。

「やれやれ。若者に無償の奉仕をさせるというのも酷な話じゃしの。よし、頑張つて片づけを終えたら、新しく武術書を譲つてやろう。それも2冊もだ！」

「本当ですか!？」

出久のやる気を出させるために分かりやすい「ご褒美」を見せる老人。

張り切つた出久は、熱心にゴミ掃除を始めたのだった。

そして、わずか三か月後。そこには綺麗になった海浜公園が！

「うむ。見事じゃ。約束通り、武術書を授けよう」

「ありがとうございますー！」

満足そうに頷く老人から武術書を受け取る出久。

海浜公園の掃除を通して、身体も鍛えられたのかさらに引き締まった体が出来上がっていた。

雄英高校入試までの残り7か月間。出久は新たな武術の習得に費やしていくのであった。

とあるスクラップ・廃品買取業者に。

「おや、じいさん。いつもいつも、どっからそんな大量に持ってくるんだ?」

「まあ、あるところにはあるものさ。さ、いくらぐらいになる？」  
「えーっと、だいたいこのくらいの値段で——」

その2 『毎度恒例の……』

雄英高校ヒーロー科入学実技試験にて。

五行山・釈迦如来掌！

巨大な掌の形に体を凹まされ、吹き飛ばされるOPヴィランロボ。  
地面にゆつくりと倒れながら彼は何を思うのだろう。

『……知ツテタ』

どうあがいてもぶっ飛ばされるOPヴィランの哀しき宿命であった。

その3 『ほんのご挨拶です』

無事に雄英高校ヒーロー科に入学し、A組に在籍することとなった  
緑谷出久。

そんな彼の元を訪れる一人の影があった。

「あんたが緑谷出久かい？」

「そうだけど……君は？」

「わたしは拳藤一佳。1年B組ヒーロー科所属だよ」

A組の教室を出たところで話しかけてきたのはオレンジのサイド  
ポニーを肩より少し伸ばしたくらいの女子生徒だった。

要件は……と、聞こうとしたところで相手の目を見て気が付いた。  
というよりも、おのずと察することができた。

「分かってるみたいだね」

「……うん」

首を縦に振る出久。

次の瞬間には拳藤の右手の手刀が首筋を狙っていた。

「ハッ！」

「フッ！」

左肘で手刀を跳ね上げ、右の肘撃を即座に打ち込む。

が、それは相手の左の掌に受け流され、その勢いのまま体を回転さ

せて反撃につなげられてしまった。

出久の後頭部を狙う一撃を身をかめ躲す。その低い体勢から腕を鞭のようにしならせて振り上げる。

半身になって躲す拳藤。

反撃、対応、即反撃。

めくるめく攻防を両者の立ち位置を入れ替えながら行う姿は、まるで一種の舞踊のようで誰も近づけなかった。

「破ッ！」

「喝ッ！」

出久の震脚を伴う背中からの体当たり。鉄山靠と拳藤の両手の掌打がぶつかり合い、距離をとる二人。

しばしの静寂の後、二人は何事もなかったかのように右拳を掌で包む抱拳礼をして笑い合った。

「いやあ、武術をやってるっていうから試しに来たら、八極拳と劈掛掌とは驚いたよ。噂通りの防御を打ち破る力強い武術だね」

「そつちも、凄いね！ 変幻自在の八卦掌。身をもって体感したよ！」  
先ほどの拳を交わし合っていたのがウソのように談笑する二人に、

周囲は呆然としている。

そしてなんとなく思うのだった。

『これが武術家の挨拶ってやつなのか』

映画のワンシーンのような演武を見た周囲はウンウンと頷き始める。

なんとなく、理解したような気持になっていた。

そんな中、一人首を傾げる人物が。

「いや、普通じゃないからね。武術やってる人みんなこういうわけじゃないから！」

A組所属。尾白猿夫。

武術経験者という特徴があるが、*「ザ・普通」*の生徒である彼はツツコミを入れざるを得なかった。

というか、トンデモ武術家がいては、彼のアイデンティティはどうなるのだろうか？

## 蛇足・解説

### 『その1』

再び現れた謎の老人。

それは偶然か？ それとも意図して接触してきたのか？

心を鍛えるべく、海浜公園での奉仕活動。これは本当に心の修行が目的か？ それとも出久を利用して廃品回収で金銭を得るためか？

答えはあなたの心次第です！

どちらとも受け取れるように書いたつもりなので、好きに想像して楽しんでいただければと。

個人的には、中国武術の師父ってこう、食えないところとか怪しいところがある感じが好きです。

### 『その2』

拙作のシリーズではたいいぶつ壊される運命にあるOPヴィランロボ。

だが、僕だけではないはずだ！ ヒロアカ二次を書いている作者なら、雄英に生徒として入学させるときにぶつ飛ばすのが定石だろオ！

OPヴィランさん、ごめんなさいね？

### 『その3』

前回の感想で、「武術やってるなら拳藤さんがヒロイン？」というコメントがあったので、頑張つて絡ませてみました。

こんなキャラだろうか？ 彼女……

物間くんを手刀で黙らせている印象が強いかからか、握りこぶしで打つ武術よりも、掌を開いたままで戦う印象があったので独断と偏見で八卦掌の使い手になって頂きました。

彼女の武術、どんな感じなんだろう？

とりあえず、武術家は挨拶代わりに手合わせしているとカッコいいよね！

### いづく功夫H その3 (USJ編)

—— 雄英高校 USJ (ウソの災害や事故ルーム)

雄英高校が誇る各種災害・事故を再現した救助訓練施設。

ヒーロー科1年A組がその場で受けるはずだった救助訓練は、  
“ヴィラン連合”を名乗る集団の襲撃により生死を賭けた戦闘に早変わりしてしまっている。

敵のワープの個性により、バラバラに分断される生徒たち。

出久もまた、分断されてしまった生徒の一人だ。

「ブツ殺してやるー！」

「覚悟しやがれ、クソガキども!!」

「な、鬺り殺そう……手足から、ズタズタに、しっしよう」

飛ばされたのは海や河川での活動を想定して作られた巨大なプールのある水難ゾーン。

その水場に一つだけ浮かぶ大型のプレジャーボートに逃げ込んだものの、周囲を水中に適性があるヴィランたちに囲まれてしまった。た。

「どおすんだよ!?! 囲まれちまったぞ!?!」

「冷静になりましょう、峰田ちゃん。叫んだって何も変わらないわ」

出久と共に同じエリアに飛ばされた峰田と蛙吹が出久の隣で話をしている。

突発的な襲撃に混乱する峰田。それを落ち着かせようと声をかける蛙吹。

両者ともに反応は違うが、現状を打破する方法は思いついていない様子。

一方、出久はというと……

「どうしよう、どうしようか……」

「おまえまで不安になるようなこと言うなよ。気持ちはわかるけどさあー！」

顎に手を当てて考えこんでいる。

打開策が思い浮かばずに困っているように見えたのだろう、峰田が



その様子を見て弱気な声を出す。

が、その考えは的外れだ。

「どうやったら、一番早くあいつらを倒せる?」

「……何言ってるんだよ、おまえ!」

「緑谷ちゃん、凄い自信ね」

どうやったら一番簡単にぶっ飛ばせるかを考えていたり。

もう倒すこと前提とか、この出久、好戦的である。

驚く二人に対し、出久はあっけらかんと返事をする。

「え? いやでも、アイツらからそんなに強い気配感じないし……」

「こいつ地味な顔して何なんだよオ!」

周りを囲むヴィランたちを全く脅威と思っていない出久に峰田はドン引きだ。

先日まで自分と同じ中学生だったとは思えない肝の太さ。

というか、気配って何!?

「こいつらよりも気になるのは、やつらの『切り札』だよ」

「『切り札』? って、何のことだ?」

「最初にあいつらが宣言していたオールマイトを殺すっていう目的。その手段のことかしら?」

出久の口にした懸念に首を傾げる峰田と、思い至った考えを口にす  
る蛙吹。

出久は蛙吹の言葉に頷いて持論を述べ始めた。

「雄英を襲撃してオールマイトを殺すって言うくらい相手だから、当然その手段は用意してるはずだよ。それに、アイツらが出てきた時にひと際重たい気を感じたんだ。……きつとアレがオールマイトを倒す切り札だ」

「おまえが何を言ってるのか全部は分かんねえけど、そんなヤバそうなやつがいんだろ? じゃあ、オラたちが行ったところで意味なんてないんじゃない?」

「だからこそだよ! オールマイトが苦戦するかもしれない相手がいるのに、僕たちの救助までしなきゃいけないようになったら、それこそオールマイトの足を引っ張ることになる!」

オールマイトに対抗できる敵がいるからこそ、オールマイトが憂いなく戦えるようにそれ以外の敵を倒しておくべきだと強く主張する出久。

その言葉は尤もだが、出来るかどうか不安で仕方がない峰田。

だから、気って何なんだよ。何を感じてるんだこいつは。などなど、ツツコミどころが多くて言葉が出てこない。

そんな気持ちを察したわけではないだろうが、話題を変えて蛙吹が出久に疑問を投げかける。

「緑谷ちゃんの考えは分かったわ。でも、この現状をどうにかしないと何も始まらないわ」

「うん。それなんだけど……僕に一つ考えがあるんだ」

対応を考えなければと口にする蛙吹に、出久は考えがあるという。

そのアイデアを告げられた二人の反応はというと――

「おまえ、バツカじゃねーのおおお!」

「緑谷ちゃん、クレイジーね」

「え、ええっ!?!」

かなりぶつ飛んだものだったらしい。

結局すったもんだの末に、時間も無いということを出久の案が通ったのだが。

それでも峰田は最後まで文句を言っていたのだった。

「クソガキども、全然動かねえな」

「罅が明かねえ。さっさとブツ殺そうぜ」

「まあ、待て。ガキどもの個性が分からねえ。うかつなことはすんな」  
「つても、よお。ずっとこうしてるわけにはいかねえだろ。軽く小突くくらいいいだろ」

動かない出久たちに焦れて攻撃を仕掛けようとする空気が強くなる。

さあ、攻撃だ。と、思ったところで、船から何かが飛び出してきた。

動きを止めてその飛び出してきたものに目を向ければ、それはマン  
トをはためかせて飛ぶ人影であった。

「なっ、空を飛べる個性があったのか!？」

「にしちゃあ、悲鳴あげてねえか?」

空飛ぶ人影。あれは誰だ? 鳥か? スーパーマンか?

いや、峰田だ!

「うああああ! フザけんなよ、緑谷あああ!!」

悲鳴を上げながら宙を飛ぶ峰田。当然、自分の力で飛んでいるので  
はない。

彼は出久によってぶん投げられたのだ!

出久の作戦の第一は、水上で囲まれているという不利な状況を脱出  
することだった。

相手は水中での活動に特化した編成をしていると考えられる。

対してこちら側は水中戦ができそうなのは蛙吹くらいしかない  
という、地の利も数の利もない状況。

この状況を脱するためにとれる手段は何か?

考え付いたのは——空中を行くというトンデモな手段だったわけ  
である。

どうしてこうなった?

「よし! 行くよ、蛙吹さん!」

「どこからそんな力があるのかしら。あと、梅雨ちゃんと呼ん——  
—ケロオ!」

峰田を投擲した出久は続けて蛙吹を腕に抱えて船縁を強く蹴り、宙  
へ飛び出す。

急に姫抱きにされた蛙吹は思わず驚いた声を上げてしまっていた。

「な、なんじやそりやあ!」

「ロープアクションかよ!」

上を見上げ、口を開けて呆然としているヴィランたち。

空中を駆けるように高速で跳んでいく現実離れた出久の姿に頭  
が理解を拒否してしまっている。

何の妨害も受けなかった出久は途中で峰田をキャッチして、見事、

岸に渡り切った。

「うまく、いったぞ！」

「オイラ生きてる、生きてるよオ」

「ケ、ケロオ〜」

もう離れないと地面に縋りつく峰田に、言葉も出ない蛙吹。

うん、衝撃体験だった。敵も味方も。

その衝撃から立ち直ったヴィランたちが岸に押し寄せてくる。

さあ、作戦の第一段階は終わった。

次はどうする？

「や、やべえ。緑谷、どおすんだよ？」

「大丈夫。任せて」

迫りくる敵に怯える峰田に笑みを見せた後、軽く目を閉じて息を整える。

数瞬後、カツと目を見開いてヴィランたちへ鋭い視線を向けた。

失せろッ……

相手を威圧する気迫を込めた一睨みは、チンピラに毛が生えた程度のヴィランに耐えられるものではなかった。

耐えきれずに次々と意識を失っていくヴィランたち。

視線一つで相手を殲滅だった。

「な、なにをしたの？ 緑谷ちゃん」

「えっと、気当たりっていうんだけど——」

動物が威嚇されて本能的に動けなくなる現象がある。

人間にもその本能が残っており、それを気をぶつけて引き起こす技を使ったのだという。

正直説明されてもよくわからないが。

「じゃあ、なんで先に使わなかったんだよオ？」

最初から使っていればよかったのにと峰田が文句を言う。

自分が危険な空中の散歩をする必要などなかったのではないかと思うのは当然だろう。

「囲まれてたから、やろうとすると峰田君も巻き込まれてただけど……」

「……そんなあ」

空中散歩（命綱無し）と威圧で気絶していたの、どちらが良かったのだろうか。

判断に迷って、口ごもる峰田であった。

「とりあえず、緑谷ちゃん。下ろしてくれないかしら」

「あつ、ごめん！」

「先生を離せ！」

気が付けば出久は敵の真正面に飛び出していました。

黒い肌にもき出しの脳みそという気色の悪いヴィランに取り押さえられ、腕がありえない位置で折り曲げられた相澤先生をただ見ていることなどできなかつたのだ。

「威勢のいいガキがいるじゃないか」

「よせ、止めろ。緑谷！」

それを面白いモノでも見つけたように嗤う死柄木と必死に制止する相澤先生。

「破ッ！」

気合裂帛。

体重を乗せた掌底を黒肌のヴィランに向けて打ち込んだ。

が、しかし――

「効いて……ない……!?!」

後方へ吹き飛ばすつもりで打ち込んだ攻撃が効いておらず、驚愕を隠せない出久。

身体に染み付いた反応で相手からの攻撃を回避するものの、鍛えた武術が通用しない事実にはショックを受けていた。

「無駄無駄。こいつは改人・脳無。ムカつくオールマイトをブツ殺すために用意した特別品さ」

「やっぱり、オールマイトを倒すための切り札だったのか」

死柄木が自慢気に黒肌のヴィラン＝脳無について説明を始めた。

オールマイトを倒すために複数の個性を与えられた改造人間であり、オールマイト並の素のパワーに加え、攻撃を無効にするショック

吸収やダメージを回復する超回復などの個性を持っているという。

わざわざ手の内を晒したのは、実力差を示して出久を脅してやろうという意図に加えて脳無自体への信頼が見て取れた。

いや、そこまで高尚なものではないかもしれない。

死柄木のその目には、弱い相手をいたぶってやろうという昏い愉悅が浮かんでいたのだから。

「もうイレイザーもぼろ雑巾だしなあ。生徒一人を滅茶苦茶にしてやった方があの男は悔しがるかもなあ」

「おい、止めろ！　ぐあつー！」

出久にターゲットを移した死柄木を止めようと声を上げるが、重傷を負った身体ではいかんともできず昏倒させられてしまう相澤。

救援もなく対 “平和の象徴” と相對することとなった出久は必死で打開策を考えていた。

『どうするどうするどうする!! “ショック吸収” の個性? なら打

撃は駄目か? 関節を破壊して動けなくする? 駄目だ! “超回

復” の個性がどれくらいのものか分からないけど、口ぶりからしてかなりの重傷でも回復できると考えていい。締め技? 駄目だ。カ

ウンター? 駄目だ。防御専心? 駄目だ駄目だ駄目だ!』

複数の個性を持つ脳無に対して打開策が思い浮かばない出久。

行き詰った時には、初心に戻る。

そう心を落ち着かせた出久は、老人から貰った三冊の武術書の内の一冊の冒頭を思い起こした。

「そうだ。相手が防御を固めるのなら、それを打ち破る一撃を放つのみ、だ！」

“ショック吸収” ならば許容限界量があるはず。その許容限界を上回る一撃を打ち込むしかない。

そう覚悟を決めた出久は堅く拳を握りこんだ。

「なんだ、やる気か。あのガキ。いいぞオ、やっちまえ脳無」

「ハアアアアア！」

脳無を出久へけしかける死柄木。

高速で接近してくる脳無へ対し、出久は強く一步を踏み出した。

ドン、と、地を震わせる震脚が足から胴体、腕を通し拳へ伝わる。身体のひねり、突き出す腕の動き。それらすべてを乗せて拳が脳無に直撃する。

八極拳 絶招 にのうちいらす 无二打・猛虎硬爬山

肉を打ったとは思えない、大きな破裂音が響き渡る。

一瞬の静寂。

そして音を立てて人が倒れ伏した。

立っているのは……………出久だ。

「そんな、馬鹿な!？」

切り札である脳無が一撃で倒されて目を見開いて驚く死柄木。

シヨック吸収の許容限界を超えたダメージを受けて、脳無は口や鼻から血を噴出して倒れていた。

内臓にひどいダメージがあるからか、なかなか超回復でも回復しきれないようだ。

想定外の事態にストレスから首をかきむしって、わめきたてる。

「おまえっ、何をした!？ 何の個性だ？ 何をやったら脳無が一撃で倒される!？」

「…………その威、八方の極遠に達す。ゆえに八極拳」

「八極拳？ なんだよ、それ。脳無がただの武術にやられたっていいのか!？」

個性ではなく武術の技によってなされたということが信じられない死柄木。

混乱する彼に追い打ちをかけるように、腹心である黒霧が悪い知らせを運んできた。

「死柄木弔、悪い知らせです。生徒一人に逃げられました。じきにヒーローの救援がやってくるでしょう」

「…………は?」

黒霧の言葉に動きが止まる。

しばし硬直した後、死柄木は大きいため息を吐いた。

「はあー。お目当てのオールマイトターゲッにも出会えてないのに、脳無はやられてる。ついでにヒーローの救援が来るウ? ゲームオーバー

だ、完全に詰んだぜ！ 何なんだよ、この結果は!!」

望まない展開に激昂する死柄木だったが、すぐに気分が落ち込んだように肩を落とし呟く。

そして、撤退を決定した。

「おい、緑色のクソガキ。いつかてめえはブツ殺す。覚えておけ」

「……負けない！」

ワープゲートの個性に体を沈めながら出久を睨みつける死柄木。

出久は真っ向からその視線を受け止めた。

この先、何度も戦いを繰り広げる雄英高校ヒーロー科とヴィラン連合。

その中でヴィラン連合からターゲットとしてことさら出久が狙われるようになるきっかけとなる事件となったのだった。

|||||

——ヴィラン連合、アジトの一つ。

車いすに座った顔のない男が笑い声をあげる。

「そうかそうか、武術家か。そんな時代遅れの人種がまた新しくでてくるとはねえ」

感慨深そうに言葉を口にする「先生」と呼ばれる男。

超常黎明期から生き続けているこの男は、過去の時代に思いをさせる。

超常が当たり前ではなかったころ、武術は力を得るための手段と目的の一つだった。

その研鑽のために殺し合うことなど裏社会ではよくある話であったのだが、超常が広がるにつれて廃れていった。

なにせ、武術一つ極めて達人になるよりも、持って生まれた個性を鍛えたほうが圧倒的に早く強くなれるのだ。

例えばだが、パンチ一つ強くすると、口からより強い火を吹けるようになる。どちらが早く、強くなれるかと言えば圧倒的に後者だろう。

そんな時代の流れもあって武術家という存在は廃れていったわけ



だが、まったくいなくなったわけではない。

そして、その少数派の生き残りたちは自分の腕を試してみたくてウズウズしている。

ここに新たに生まれた年若い武術家の存在を、彼らに教えたらどうなるだろう。

「フフツ、なかなか楽しいことになりそうだねえ」

波乱の予感がする。

いづくギミー  
いづくギミー

世界総人口の約八割がなんらかの特異体質を持つ超人社会となった現在。

かつての超常・異能は、「個性」と呼ばれ日常にある当たり前の存在となっている。

世代を重ねるごとに個性は混ざり深化し、より強力により複雑になつてきているという。

「やがて強すぎる個性はコントロール不能になり、社会が崩壊する」

そんな「個性特異点」と言われる終末論が囁かれるほどに、人類の持つ超常・異能の深化は進んできている。

みどりやいずく緑谷出久もまた、過剰な深化を遂げた異能を手にしてしまった一人であつた。

「超カッコイイなああ!! 僕も「個性」が出たらこんな風になりたいなああ!!」

No.1ヒーロー「オールマイト」の活躍する動画を見て無邪気にはしゃぐ緑谷出久四歳。

子供らしくヒーローに憧れる姿に母の引子いんこは微笑ましくその姿を見ると同時に、内心では息子の夢に対して諦観した気持ちを持つていた。

『私の「ちよつとしたもの引きつける」個性と夫の「火を吹ける」個性じゃ……期待はできないかしら』

両親そろつて持っているのは、世間で活躍するヒーローたちに比べればなんてことはない弱い個性。いわゆる「没個性」というやつだ。

そんな自分たちの個性がどう息子に遺伝するかわからないが、息子が望むような超カッコイイヒーローになれるような個性が発現する可能性は低いだろう。

彼女はそう考えていた。

それは半分正しく、そして半分間違っていたのだと後に知ることとなる……

事件は出久が友人たちと遊んでいたときに起きた。

おかしのおまけとしてついてくるヒーローカードを集め、それを持ち寄って友達と見せ合うという楽しい時間を過ごしていた時のこと。

「へへん！ スゲーだろ！ スーパーレアのオールマイトのカードだぜ!!」

友達の一人が自慢げに見せるのは各シリーズごとに1種類しか入っていない超激レアヒーローカードだった。

大人と違い手に入れることができる数が限られる子供にとって、相当運がなければ手に入らない代物。それを持っているだけで周りからヒーロー扱いされるのは間違いなかった。

「うおお！ オレにも見せてくれよ！」

「おい、次は俺だろ！ 順番は守れ」

「スゲー、ほんとスゲー！」

激レアカードに群がる子供たち。

出久も興奮して一目見せてもらおうとその友達を囲む一人となっていた。

カードが回ってくる順番を待つ間、そのカードのことを思う出久。

『いいなあ、オールマイトのスーパーレア!! 僕も欲しいなあ……』

母親に頼んでお菓子をまた買ってきてもらおうか？

そんなことを考えていると、なんだか騒がしい。

ふと顔を上げると、カードを当てた友達が慌てた様子で声をあげていた。

「消えた！ カードが消えちゃったよ!! ちゃんと手に持ってたはずなのに」

「俺も見た！ 今一瞬で消えたよなあ!」

「えーっ!? 何が起きたんだ?」

どうやらカードが突然無くなってしまったらしい。

大変だ、一緒に探さないよ。

そう思った出久の手には、そのレアカードが握られていた。

『な、なんで?』

何が起きたのかわからず、その無くなったカードが自分の手の中にあることに混乱する出久。

このときにカードがあつたと周りにすぐ伝えられていれば、この後のつらい出来事はなかっただろう。

だが、間の悪いことに友達の一人が出久の手にカードがあることに気が付いてしまった。

「あーっ、出久のやつがカード持ってる!」

「ホントだ、いつの間に」

一人が叫んだことで全員の視線が出久に集中する。

思わぬ注目を浴びてビクリと固まってしまった出久に、カードを持っていた友人が怒鳴り声をあげた。

「返せよ、オレのカード! 返せ!!」

「あっ……」

その友達は急に自分の宝物が無くなった恐怖もあつたのだろう、そのせいで強く出久を責め立てるものになってしまっていた。

そんな騒ぎの中にあれば、正義感から動く子供が出てきてもおかしくはない。

「うっ、痛っ……なにするんだよ、かつちゃん」

カードをひったくられ、突き飛ばされて尻餅をつく出久。

それをしたのは、幼馴染の爆豪勝己ばくごうかつきだった。

地面に倒れた出久を見下ろしながら、勝己は義憤に燃えた目で睨みつけて言う。

「おい、出久ウ! いくらオールマイトのカードが欲しいからってドロボウしてんじゃねえよ!」

「な、僕はドロボウなんてしてないよ!」

子供らしい短絡的な発想で出久がカードを盗んだと断言する勝己。

もちろん出久は盗んでいないと主張するが、元来気弱な性格の出久とリーダーシップがあり友人たちの中心となるガキ大将的な勝己とではその発言力の差は明らかだった。

「じゃあ、なんでテメエがカード持ってたんだよ？」

「分かんないよお」

「ふぎけてんのか、アアン？」

何より出久本人ですら何が起きたのか分かっていないのだ。

身の潔白はもちろん、反論することさえ満足にできなかった。

「謝れよ、このドロボウ野郎」

「そうだそうだ、謝れよ」

出久に対し謝罪を要求する勝己に、場の雰囲気と同調したのか友人たちも一緒になって出久を責め立て始めた。

だが、出久もやってもいない罪を認めることなどできできるはずもなく、精一杯自らの潔白を主張をした。

「僕は、やってない！ 信じてよ」

「うるさい！ この嘘つき！」

しかしながら、周囲の同調圧力のあるなかで出久の主張が認められることはなく。

出久は友達からドロボウ扱いされ、中間の輪から追い出されることになってしまったのだった。

「出久くんの個性はとても強い個性だね」

歯車型のゴーグルをかけた白衣の医者が告げられた事実にも母親の引子は驚きを隠せなかった。

先日、友達と喧嘩をして帰ってきたという息子から話を聞いた彼女は、息子に発現した個性が原因なのではないかと疑い、専門の機関を訪れることにしたのだ。

その予想は正しく、あの騒動は出久に発現した個性が引き起こしたことであることが分かったのだった。

「望んだものを呼び寄せる」個性

それが出久に発現した超常の力であった。

母親の「ちよつとしたもの引きつける」個性が深化したもので、引

子の個性のように物を少しずつ引き寄せるのではなく、望んだものを一瞬で手元に移動させる異能である。

分類するならば発動型の特殊な転移・空間系の個性といったところだろうか。

専門機関の中で行われた簡単な検査だけでも強力な個性であることが判明しており、正確には不明ながらも視界に入っているならば確実に有効範囲になっているという。

また、発動条件も呼び寄せたいモノを思うだけでよいという緩い条件しかない。

逆を言えば、この緩すぎる発動条件が最大のデメリットであった。ちよつと欲しいと思っただけで発動してしまう条件。

それは幼い精神では制御することが難しい、厄介な個性であると言えた。

「そっか！ 僕にも個性が出たんだ！」

そんな厄介さなど知らず、無邪気に喜ぶ出久。

幼い彼にはそれがどういうことをもたらすのか理解も想像もできていなかったのだ……

個性の検査を終えた翌日。

自分の個性のことを勝己たちに伝えるために家を飛び出す出久。

『かっちゃんたちも僕の個性のことを知ってくれたら分かってくれるよね』

友達と喧嘩別れになってしまったあの出来事は、あくまで個性の事故でありわざと盗んだものではなかった。

その事実を伝えることができれば、また元のように仲の良い友達に戻れる。

出久は、そう信じていた。

「なるほどなア……テメエがやろうと思えば、いくらでもドロボウできるヴィラン向けの個性ってことだな？」

そう言っ出て出久を警戒したように睨む勝己。

出久が自らの個性を伝えたところ、帰ってきた結果は彼の望んだものではなかった。

ヴィラン向けの個性という言葉に動揺する出久。

「ち、ちがうよ！」

「いいや、違わねえだろ？ 人のモンをいつでもドロボウできる悪い個性だろオが！」

盗みをするつもりなんてない、と主張し、自らの個性と潔白を改めて説明する。

しかし、早熟の天才肌で幼いながらに聡明であった勝己はその説明を聞いて出久の個性の危険性を理解してしまったのだ。

出久の個性はやろうと思えば誰にも気づかれずに物を盗むことが可能であり、ほかにも悪用しようと思えばいくらでも悪用できてしまう個性だ。

それは確かに事実だろう。

不幸なことに、勝己は出久の個性の危険性に気づくことができる年齢に見合わぬ聡明さは持ち合わせていた。だが、大人ほどの思慮深さはなく、年相応の子供らしい言動でその事実を扱ってしまったのだ。「ヴィランみたいな個性持つてるヤツが俺たちの側に来んじゃねエよ！」

「ひ、ひどいよ。かつちゃん。僕はヴィランじゃないよ」

「アアン？ そんな個性持つてんならヴィランみたいなモンだろ」

個性を理由に出久をヴィラン扱いして仲間から排斥しようとする勝己。

友人たちも勝己に合わせるように出久を責め立てる。

「そうだそうだ！ あっちいけよ、ヴィランやろう」

「ドロボウなんかと一緒に遊ぶわけないじゃん」

子供というものは単純なもので、『悪いことができる個性を持つている』ことが『悪いヤツ』であることとイコールで簡単に繋がってしまったのだ。

彼らにとって目の前にいる出久は「人のモノを盗む悪いヤツ」という風に見えてしまっている。

そして、子供特有の無垢な正義感は時に無邪気に残酷な仕打ちをしてしまうものだ。

「そオだ。ヴィランなら悪いことする前に俺たちが退治しねエとなア？」

「やつ、めて、やめてよ！ かつちゃん」

「抵抗すんな、ヴィランめ！」

勝己が拳を振り上げて出久を殴打する。

それに続くようにほかの友達も出久を囲んで手を出し始めた。

人を殴るのは悪いことだと彼らは知っている。でも、彼らは悪いことをしているつもりは全くなかった。

だって、悪いヤツを退治するのは良いことなんだから！

ああ、これはなんて残酷な「ヒーローごっこ」

友達だった人たちにボロボロにされながら、出久は思う。

『僕の個性は、悪いモノなんだ……』

友人たちから糾弾され、出久は自分の個性が悪いモノなのだと心に深く刻みつけられてしまった。

その心の傷は深く、とても深く……

『僕は……ヒーローになれない』

幼い夢を諦めるには十分すぎる心的外傷トラウマとなってしまうた。

これは緑谷出久が齢四歳にして直面した残酷な現実。

過酷すぎる最初で最悪の挫折だ。



## いづくギミー その2

長い前髪で目を隠し、うつむきがちになるべく視界にモノが映らないようにしながら歩く少年。

陰鬱な雰囲気をもとう彼は十四歳になった緑谷出久だ。

「『怪物化』とはすげー個性だな」

「やっちまえー、シンリンカムイー」

登校途中でヒーローとヴィランの捕り物劇が繰り広げられており、野次馬の人だかりができています。

「……………」

だが、出久は興味を示すことなく黙々と学校へと歩みを進めていた。

出久はヒーローにもヴィランにも関心は持っていないのだ。

いや、正しくは何事にも『興味を持たないようにしている』であろうか。

意識的の心を閉ざし、なるべく物事に興味や関心を持たないようにする。

それが制御の難しい個性を手にしてしまっただけからこの十年間の間で身に沁みついた出久の悲しすぎる習慣だった。

『何も思わない。何も考えるな……』

ひたすら心押し殺しながら歩く出久だが、こうでもしなければ街をまともに歩くことすらできないのだから仕方がない。

というのも、出久の個性は発現してから年月を経ることにますます強力になってきているのだ。

ある時、店のショーウィンドウにガラス越しに飾られていた商品が気になって見ていたら、気が付けば手元に握りしめていたことがあった。

——出久の個性の前では障害物は意味をなさなくなりました。

ある時、家を出たときに部屋に忘れ物をしたことに気が付いた……次の瞬間には、その忘れ物が手の中に納まっていた。

——個性の使用に、視認をしている必要性がなくなりました。

などなど、個性が届く効果範囲・距離が伸び、手元に呼び出すことが可能な重量が増大し、個性を発動させるための条件がどんどん緩くなっていた。

徐々に強力になっていく個性に、出久ができた対策は心を閉ざすという手段しかなく。

もはや外に出ることすら恐怖を覚えそうなものだが、それでも彼はひとえに母親を心配させないためだけに、普通の学生のように学校に通っているのだ。

『ごめんね出久。ごめんね……!!』

あの四歳の日に、自分の個性が深化して遺伝したせいで苦しんでいる息子を見て泣いて謝る母親をこれ以上泣かせないために。

そんな覚悟を決めた出久だが、それでも現実には厳しかった。

——折寺<sup>おるでら</sup>中学校 3年●組 教室

中学三年生ともなればそろそろ将来の進路について考え始めなければならぬ時期。

学校側も様々なタイミングで生徒たちに進路について考えるように促し、働きかけることだろう。

本日はその一つとして、進路希望調査票が配られていた。

が、この時期は進路を考えさせるきっかけくらいの意味しか持っていないかったりする。

というのも、中学三年生の始めくらいでは生徒たちの志望はほとんど同じ方向に向いているのだから。

「だいたいヒーロー科志望だよね」

担任が口にした通り、クラスのほぼ全員がヒーロー科を志している状況だった。

クラスメイトが各々の個性を見せびらかしてヒーローになる未来を夢見る中で、出久はその輪の中に入ることができない例外の一人になっていた。

『僕が望む未来？ そんなの考える方法も忘れちゃったよ』

普段から自分の押し殺して過ごすことが習慣になっっている出久にとって、自分の将来を考えるところというのは苦痛な事柄に違いなかった。

近くで幼馴染の勝己が「雄英高校に入学する！」「トップヒーローになる！」と高らかに自らの野望を宣言している姿がうらやましい。

『いや、だめだ。望むな、欲しがるな』

そんな羨望すらも自省してしまうほどに出久は自らの望みに対して忌避感を持つようになってしまっていた。

そんな彼にとってさらに不幸だったのは、彼の担任がそういつた事情を考慮したり心配りすることのできない人間だったことだろう。

「あ、緑谷。前回みたい希望無しじゃなくて、今回はちゃんと記入し出すんだぞー」

進路を決められずに悩んでいる生徒に対して、クラスメイト全員の前でその内情を明かしてしまうほどデリカシーがない。その上、学生たちの間で構築されるヒエラルキーに対する認識も甘い教師だった。

さらに加えて言うならば、これから繰り広げられる出来事に関して何の行動もしようとしないうる無関心な教師でもあった。

「ハア!? せんせえー、こんなヴィランもどきに志望なんかあるわけねえよ！」

担任の言葉に反応して出久を蔑む言葉を吐き出したのは勝己だった。

勝己の言葉にクラスメイトたちも嗤い声をあげた。

「おいおい、勝己。いくら本当のことでも言ってるのはかわいそうだぜ」

「そうそう、ヒーローに一番近いおまえとは違うんだからさ」  
勝己に同調して心無い言葉を投げかけるクラスメイト達。

彼らにとって犯罪者向きの個性を持つ出久は半ばヴィラン予備軍のような扱いになっており、彼の味方になってくれるような者はいなかった。

特に学年のキング的な存在である勝己が率先して酷く当たったため、余計に止めようがない。

出久にはただただ耐えるしかなかった。

黙り込む出久に、調子にのった勝己がさらにちよつかいをかけてくる。

「進路志望が決められねエってんならよオ。俺がテメエの進路を決めてやるよ！」

ニヤニヤと悪意に満ちた顔で出久の進路希望調査票を奪い取り、ボールペンで書き込み始める勝己。

「ほらよ、これがオマエの進路だぜ？ 喜べよ」

さらさらと書き上げたそれを出久の机の上に叩きつける。

そこに書かれていたのは「タルタロス」の五文字だった。

「…………ツ！」

思わず絶句する出久。

それもそのはずだ。

「タルタロス」の正式名称は「対「個性」最高警備特殊拘置所」。

死刑確定の、いや、それすら生ぬるいと言われるほどの重犯罪者が送り込まれる監獄のことなのだから。

冗談にしても笑えない内容に思わず勝己を睨みつける出久。しかし――

「何よ？」

「……………ツ!!」

一言凄む勝己に出久は目を逸らして黙り込んでしまう。

積み上げられてきた立場の違いが反論することさえ許してくれなかったのだ。

うつむき、無言で書き込まれた文字を塗りつぶすことしかできない出久。

だが、そんな態度すら勝己には反抗的に見えたらしい。

いつもなら人気のなくなっている放課後の教室から物音がしていた。

聞こえてくるのは遅くまで残っておしゃべりに興じる学生たちの声——などではなく。

人を殴打した際の鈍い不快な音と、そのあとに続くように漏れ出るうめき声だった。

「ちったア、自分の立場つてのを思い出したかよ、ヴィラン野郎」  
「うぐう……」

勝己に罵倒とともに足蹴にされ、苦悶の声をあげてうずくまる出久。

いつもの取り巻きの二人と勝己に囲まれ、暴力を振るわれている様子はどう見てもいじめの現場だ。

ヒーローを志す者がいじめを行うなど言語道断。しかし、困ったことに勝己にはこれがいじめであるという意識がなかったりする。

「テメエはその気になりやア、いつでも誰にも気づかれずにドロボウできる悪い個性持ちだからなア！　こうやって定期的に退治して改心させねエとな!!」

「ぐふっ」

そう言つて出久を蹴り倒し、さらなる暴行を加える勝己。

彼にとつてこの行為はヒーローが行うヴィラン退治なのだ。

幼い頃に染み付いた印象というものは簡単に拭うことは難しい。

「出久はヴィランだ」と、幼少のころに刻まれた誤認識は十年の時間を経ても心の奥底に居座つて消えることなどなかった。

もともと、なんでもできる天才肌だったがゆえに自尊心が肥大化している勝己にとつて、自身がヒーローのように振舞える大義名分があり、力を振りかざしてもよい対象がいる環境はさぞ心地よかつたに違いない。

勝己は、自身の正義感に酔うことができる歪な環境に溺れてしまつていたので。

「怖えよなー。離れてても一瞬で物を盗めるんだろ？　人の物いつでも盗めるヤツが近くにいるなんてな」

「鍵かけてても意味ねえとかな。こんなのどうしようもねえよ」

出久の個性の凶悪さについて語り合う取り巻きの二人。

ヒーロー飽和社会と呼ばれる現在、個性を使って暴れているヤツがいればすぐにヒーローが駆けつけてくれるという感覚が強い。

そんな彼らにとって本当に恐ろしいのは救<sup>たす</sup>けてくれるヒーローに気が付かずに行われる犯罪だ。

そういう視点からみれば、分かりやすく暴力的な個性よりも、出久のような何をされるか分からない個性のほうが「ヴィラン」らしく思えるのかもしれない。

逆に勝己の「爆破」のような派手で分かりやすい個性は、自分たちを守って悪いヤツを倒してくれるヒーローらしい個性に見えるのだろう。

それでヴィラン扱いされる出久からすればたまったものではなかったが。

『僕だって好きでこんな個性になったんじゃないのに……』

体を丸め身を守るように床に倒れながら出久は思う。

どれだけ人に迷惑をかけないように努力していても、周囲の人間は色眼鏡を外してくれない。

その精神的な負荷は出久を確実に蝕んでいた。

だから仕方なかったのだろう。出久の自制が緩み、望みを抱いてしまったのは。

『僕も、かっちゃんみたいな個性だったらなあ……僕もそんな個性が欲しいよ!』

出久の個性は欲しがり屋だ。

彼が望んだのなら、それはすぐに応えてみせるのだ。

「ガハッ!? な、何んだよこれは……ッ!?!」

「ど、どうしたんだよ、勝己」

突然苦しみだし、膝をつく勝己。

取り巻きたちが慌てて様子をうかがうが、どうすることもできずに勝己は意識を失ってしまふ。

パニックになって騒ぐ取り巻きの二人の横で出久もまた困惑の真っただ中であつた。

『何があつたんだ? 僕がやったっていうのか!? それに今の感覚は

……」

自分の個性が発動したことは分かった。そして手のひらから何か  
が体の中に流れ込んでくる感覚も感じた。

だが、こんなことはいままで経験したことはない。

「おい、おまえ、何をしたんだ!」

「えっ?」

自身の個性が何を引き起こしたのか答えを出す前に取り巻きの一  
人が出久に敵意をあらわに声をかけてきた。

その表情には恐怖が浮かんでおり、冷静な判断力が失われているこ  
とが分かった。

人間は恐怖に直面した時、その原因を排除しようと攻撃的になるこ  
とがある。

目の前の彼はまさにそんな状態だ。

「こ、このヴィラン野郎!」

「ま、待ってよ!」

拳を振りかぶり近づいてくる相手に、反射的に手を突き出して身を  
守ろうとした出久。

その瞬間、爆発が巻き起こり物の焦げる臭いが充満して……

気が付けば、迫ってきた彼は煙を上げて倒れていた。

「そ、それ、勝己の個性だろ? な、なんでおまえがそれを使えんだ  
よお?」

残りの取り巻きの一人が震える声で目の前の出来事を口にする。

他人の個性を出久が使っているという事実。

それは恐ろしい現実を彼に突き付けていた。

「おまえ、人の個性まで盗めるのかよ……ッ!」

それは、個性が当たり前の存在となった超人社会において体の一部  
を奪われるに等しい恐怖だろう。

「僕は、そんなつもりじゃ——」

「どうした、何があった!」

恐ろしいものを見るような目で自分を見る彼に弁明しようと出久  
が口を開いたとき、タイミング悪く騒ぎを聞きつけた教師が教室に駆

け込んできた。

残った取り巻きは、当然やってきてくれた教師に助けを求めた。

「先生、緑谷のやつが、勝己を……勝己を……」

「何ッ!? 緑谷、おまえ何をやったんだ!」

恐怖の表情をした生徒にすがられて、出久に厳しい視線を向けてしまふ教師。

その猜疑心がこもった視線は、さきほどまでヴィラン扱いされて暴力を受けていた出久を恐慌に陥らせるには充分なもので。

「違う……違うちがうチガウ! わざとじゃないんだ!! うわあああああ!」

「な、落ち着け! 暴れるんじゃない!!」

教師の制止の言葉も聞かず、手を振り回し爆破を繰り返す出久。

もはや狂乱状態だ。力づくで止めるしか方法はないが、「爆破」という殺傷力の高い個性を得て暴走する出久をたかが教師程度が抑えることなどできるはずもなく。

結局、出久はヒーローがきて取り押さえられるまで暴れ続けたのだった。

「もう大丈夫! 何故って? 私が来た!」

嚴重に拘束され、護送されていく出久。

目隠しに口枷、拘束衣で身動きもままならない。

おおよそ中学生相手に行われるには大げさすぎる拘束だが、こうせざるを得ないほどに出久が起こした事件は社会に影響を与えていたのだ。

中学生が個性を暴走させて暴れた程度の事件ならば、新聞の片隅に掲載されて、ワイドショーでコメンテーターがテキトーに一言ほど意見を述べてハイ終わり。

一部の人が覚えているだけで、大半の無関係な人には翌日には忘れ去られているような出来事だ。



問題となったのはやはり“個性を奪える個性”の存在が世間に知れ渡ってしまったことだろう。

現在の社会において、“個性を奪える個性”など許容できるものではなく、瞬く間に「厳罰にすべし」という声が民意として広がっていつてしまったのだ。

こんな大事になってしまったのには、ヒーロー・警察側の対応が後手に回ってしまったことも原因の一つとなっている。

運が悪いことに事件を解決したヒーローは、偶然近くにおいて駆けつけたトップクラスの知名度を誇るヒーローだったのだ。

そんな大物を追ってマスコミの動きが想像以上に早くなり、本来ならば情報規制をかけるべき“個性を奪える個性”の存在が全国に報道されてしまったのだ。

特ダネを押さえた記者はホクホクだったろうが、ヒーロー・警察上層部は頭を抱えることになってしまった。

かくして圧倒的世論に押され、出久は裁判もなしに超法規的措置によって対“個性”最高警備特殊拘置所——通称“タルタロス”への収監が決まってしまったのであった。

そこは人権など無視され、永久に出ることが許されない監獄。

『あのように少年の一生がこんな形で決まってしまうなど……なんということだ』

良識ある大人たちはまだ若い少年の未来が潰えてしまったことを嘆いた。

もつとも、その嘆きも飛び込んできた急報に吹き飛ぶこととなるのだが。

【緑谷出久、護送中に何者かの襲撃を受けて強奪される!!】

## その他 いづくキャット

緑谷出久。14歳。性別は男。そして…… “無個性” の人間だ。

「無個性でヒーロー目指してなにが悪いってんだよ」

誰に言うでもなくぼそりとつぶやく。

ああ、嫌になるなあ。

バカにしてきた人たちに面と向かって言えずに、こうやって誰もいないところで誰にも聞かれないように愚痴を垂れ流している。

4歳の時に無個性だと知ってなお、ヒーローを目指すと決めただけで、誰にも認められないのは正直つらい。

今日も進路調査で、ヒーロー科のトップ校・雄英高校を志望していると云っただけでクラス的笑いものだ。

かっちゃんにはヒーロー<sup>努力</sup>分析<sup>結果</sup>ノート<sup>品</sup>を爆破されて投げ捨てられてしまったし……そして、そこでなにも反論できない自分が悔しかった。

そんな気分も憂鬱に歩いていたらからか、また気が滅入るようなことに出会ってしまった。

自動車に轢かれた猫の死骸だ。

かなり酷く轢かれていて、直視するにはキツイ場面だ。

手足が折れ曲がり、尻尾も千切れてしまっただけで見当たらない。

こんな近寄らないのが賢明だ。

でも、この日、落ち込んでいた僕は誰にも見向きされないこの猫のことがかわいそうに思えて……

その猫のことを弔ってやることにしたんだ。

埋められそうな場所を探して、道具がないから手で土を掘り返して、すこし大きめの石を持ってきてお墓代わり。

こんなの自己満足にすぎないけれど、ちよつとだけ良いことをしたような気持ちになって家に帰ったんだ。

爆豪勝己 14歳。性別男。自他ともに認める天才で、恵まれた個性を持っている。

今日もモブどもの下らねえ話を聞いて何事も過ごすのだと思っていた。

「なあ、カツキ知ってつか？ 指島のやつ入院だつてさ！」

「アアン？ なんもん、俺が知るわけねえだろ。どんなバカやらかしたんだあいつは？」

いつも連れ立って行動している片割れが入院したと四角顔が話しかけてきた。

モブがどんなドジをやらかして入院したか知らねえが俺に迷惑がからなければどうでもいい。

俺はそう思つて流そうとしたんだが……

「違えよ！ あいつ、何者かに襲われたんだつてさ。財布や携帯は無事で何も取られてなかったから犯人の目的も分からないって」

「ハア？ ヴイランにでも襲われたか？」

「おかしいのはそいつ、外傷はとくになかったらしいんだが、顔真っ青になつて身体が弱つてたらしいぜ。まるで幽霊に生気を抜き取られたみたいだつて」

「バカ言つてんじゃねーよ。なんかの個性かなんかだろ」

結局、うさんくさい怪談話になつて聞くのをやめた。

そんなくだらねえことに惑わされるなんざ、ザコのすることだ。

そうやって気にせず一日を過ごした翌日……今度は四角顔が襲われた。

連続でウチのクラスメイトが襲われたつてことで、学校でも問題になつた。

忌々しいことに二人と仲が良かったからとセンサーに呼び出されて質問攻めにされて俺の気分は最悪だ。

さらにイライラさせるのが、デクだ。

不安そうにオドオドキョロキョロと目障りこの上ねえ。

「デク、てめエ俺の前でちよろちよろと動くんじゃねえよ。うざつて

え！」

「かかかかつちゃん!? えつと、襲撃事件があつて大変だね。かつちゃんも気をつけてね！」

「はあ? てめエが俺の心配とは、ナメてんのか? アアン!」

無個性のデクの癖に俺の心配?

バカにされているとしか思えねえ!

なんで俺が格下にそんなことを思われなきやならねえんだ!

「無個性の癖に何様だよ。てめエごときが考えることじゃねえ。黙つてろ」

「……無個性なのは関係ないじゃないか」

珍しく反抗してきやがった。調子づいてやがるな、こいつ。

だからいつも通り爆破で脅してやる。

「なんか言つたかア? 無個性のクソナード!」

「えつ、うう……」

ほうら、何も言えなくなった。

こいつに度胸も勇気もねえ。なんの力もない弱者だ。

弱者は弱者らしく分をわきまえていればいい。

「ニヤハハ、おまえがご主人の敵かニヤ?」

俺はその日、『猫』と出会った。

人型で動く『猫』の化け物。

その姿は、数時間前に学校で別れたばかりの……幼馴染にそっくりだった。

「おまえ、デク……なのか?」

そう尋ねた俺に、その化け物は笑みを浮かべて言う。

「それでもあり、それでもニヤい。オレはご主人のストレスが限界まで達すると出てくる別人格みたいニヤもの。

そのストレスの原因を排除するために生まれた、ちよつと変わった「個性」ってやつさニヤ」

「あのデクに個性? あいつは無個性のはずだろうが! ありえねえ

！」

信じられない事実に叫ぶ。

だが、そいつはまた笑ってこう告げた。

「ニヤハハ！ ありえニヤいニヤんてことはありえニヤい。考えてみなよ。この世界には何十億も『個性』があるんだぜ？」

助けてくれた恩人に寄生するようニヤ個性があってもおかしくニヤいだろう？

まあ、オレの正体はどうでもいい。

用件は一つ。オレのご主人のストレス解消にぶっ飛ばされる！」

そう言っつて、猫の化け物は俺に襲い掛かってきた。

「上等だ！ ブツ殺して、そのクソナードから引っぺがしてやる！」

個性の無許可使用？

知ったこつちやねえ！ ここでこいつをぶっ飛ばしても正当防衛だろうが！

## いづくラツキーボーイ

人は生まれながらに平等ではない。

緑谷出久が齢4歳のころから感じている現実だ。

個性の能力が人生の成功に大きく影響するこの社会で、緑谷出久は成功が約束された個性を授かったのだ――

「なあ、緑谷あ。頼むよ。今回のイベだけは逃したくないんだ」

「えー、またなの!？」

同級生から頼まれごとをする緑谷出久、14歳。男子中学生。

友人の必死の頼みに、最終的にはやれやれと承諾する出久。

「分かったよ。じゃあ、1000円ね」

「ゲッ！ やっぱり金とんのかよー!!」

「当たり前だよ。じゃないと際限ないからさ」

「ちえ、仕方ねえか」

出久に1000円玉を渡してスマホのアプリを起動させる友人。

ガチャの画面を開いた状態で出久に手渡した。

「じゃあ、いくよ？」

「頼む！ 緑谷ア!!」

スマホの画面をタップしてソシヤゲのガチャが回りだす。

結果は……

「来たー!! SSRだ！ しかも3つも!？」

「「な、なにい!？」」

たった一度の10連ガチャで最高ランクを3つも引き当てたことに見ていた友人たちも思わず驚きの声を上げる。

出久の強運、いや、もはや豪運。

友人の彼はたった1000円で廃課金ユーザー顔負けの結果を手に入れたのだ。

「やっぱすげえよ。緑谷は」

「ああ、もう完全勝ち組の個性だよな」

ここまで来ると嫉妬も湧かない。

緑谷出久の強個性。

『幸運を引きつける個性』

母親の個性が変質して遺伝したこの個性は、出久に幸運を引き寄せ  
てくる。

物を手元に引きつける物理的な力を持った個性が、どう変われば幸  
運をひきつけるなどというオカルト染みたものになるのか。

まったくもって個性というのは不思議である。

何はともあれ、この個性によって出久の人生は順風満帆だった。

懸賞に応募すれば必ず何か当たり、くじを引けば一等賞。トレー  
ディングカードを集めればレアカードがあつという間に集まる。

趣味はヒーローグッズのコレクション。

どんな当選確率の低いグッズでも、目当てのものは確実に当たる出  
久はかなりのコレクターである。

そんな出久だから、子供の間で人気になるのは当然だった。

ただ、運が関わるゲームをすると必ず勝つので誰も相手にはしてく  
れないが。

例外を除いて——

「おい、クソウンコ野郎！ 今日も勝負だ！」

「えー、またなの？」

幼馴染の爆豪。

身体能力や頭脳、センスなど生まれ持った才能は圧倒的なのに、幸  
運に恵まれただけの出久に何度も負けているのは我慢がならないと  
毎回勝負を仕掛けてくるのだ。

例え運が関わる勝負でも勝つてやると、カードゲームなどのギャン  
ブル色の強いゲームを仕掛けてくる。

まあ、結果は毎回爆豪の惨敗なのだが。

example. 1 ワイルドポーカー

『そろった！ この手札で負けるわけがねえ！』

爆豪の手札はハートのA・K・Q・J・10のロイヤルストレートフラッシュ。

これを完成させるだけでもかなりの幸運。負けるはずの無い手札だ。

当然、オールイン。

出久もこれを受けてオープンとなる。

「俺の勝ちだ、クソが！」

勝ち誇る爆豪。だが、しかし……

「ゴメンね、かつちゃん。どうやら切り札は……常に僕のところに来るようだよ……！」

開かれた出久の手札。

9・9・9・9の4種4枚にワイルドカードのジョーカーが1枚。

ファイブカード。

ロイヤルストレートを超える最強の役であった。

「なん……だと!?!」

example. 2 麻雀

南オラス。

最後の勝負で爆豪と出久の持ち点は両者共に40,000点近く。わずかな差でも相手に直撃を喰らわせれば勝利は確定する。

そんな状況だった。

この局が始まってわずか三順にして爆豪、聴牌。

役は白・發・中の3面子9牌がそろった大三元。雀頭はそろっており、待ちは両面待ちという状況。

これならツモだろうがロンだろうが出久に勝てる。

そう思った爆豪は要らない一筒を切った。

「かつちゃん……」

「あ? なんだよ?」

「それだ。ロン!」

パタリと倒される出久の牌。

国士無双十三面待ち。



一気に吹っ飛ぶ爆豪の点。  
視界がぐにやりと歪んだ爆豪であった。

こんな緑谷出久はヒーローじゃなくてギャンブラーになっている  
かもしれない……

「チクショウ！ いつか絶対エ勝ってやるからな!! クソが！」

「あ、ピンゾロだ。せっかく456だったのに残念だったね」

「……クソがあああ！」

## いづくラツキー&アンラツキー

世界はバランス、つり合いで成り立っている。

緑谷出久が理解した世の中の理論だ。

禍福は糾える縄の如し

それが『幸運と不運を引き寄せる個性』なんて個性を得てしまった緑谷出久という人間の思想の根幹だ。

幸運の後には不運が、不運の後には幸運が。

シーソーのように幸運と不運を行ったり来たりする人生は、出久の考え方に影響を与えて当然だった。

|| || || || || || || || || ||

とある中学校3年生の進路調査。

超常社会全盛期のこのご時世では生徒のほとんどがヒーロー科志望である。

「模試じゃA判定!! 俺はウチ唯一の雄英圏内! あのオールマイトをも超えて俺はトップヒーローと成り、必ずや高額納税者ランキングに名を刻むのだ!!」

国立の最難関ヒーロー科の雄英高校を受けるといふ爆豪にクラスの騒然となる。

彼の自信は思いがりではなく、学力も運動能力も「個性」も才能に満ち溢れていた。

そんな彼に水を差す一言を担当が口にする。

「あ、そういえば緑谷も雄英志望だったな」

その一言で、クラスの視線が緑谷に集中する。

一瞬の静寂の後に訪れたのは嘲笑の嵐だった。

「はああ?! 緑谷あ?! ムリッしょ!!」

「勉強出来るだけじゃヒーロー科は入れねんだぞー!」

クラスメイトの嗤い声に出久はため息を吐く。

『先生も不要なことを言ってくるなあ。おかげで無駄に騒がしくなったじゃないか。まあ、こんな悪いことがあったんなら次はいいこ

とがあるさ』

余計な一言を告げた担任に恨み言を内心でつぶやいたあと、笑みを作って釈明の言葉を言う。

「やだなあ、先生。ヒーロー科じゃなくて普通科だってこと言わないと誤解されちゃうじゃないですか」

「お、そうだな。悪い悪い」

出久に悪びれた様子もなく謝罪する担任。

その様子を見てクラスも落ち着きを取り戻す。

「なんだ、普通科か。なら納得だな」

「まー、緑谷は勉強できるからな」

教室の熱が下がり始めた空気に一安心の出久。

精神的な余裕があるからか、幼馴染の爆豪が何を言ってきたとしても冷静に対処できそうさだ。

「ハッ！ “没個性” のためえは自分の立場をわきまえてますってか？ 殊勝な心がけだなオイ！」

「そうだよ。僕のゴミみたいな個性が君と同じヒーローになれるわけないじゃないか。たださ、僕はヒーローが好きなんだ。だからその役に立ちたいんだよ」

自虐とともに語る希望。緑谷出久という人間は変わった人間だ。

|||||

「いやあ、悪かった!! ヴィラン退治に巻き込んでしまった。いつもはこんなミスしないんだが、オフだったのと知らない土地で浮かれちゃったかな!?!」

学校からの帰り道で、不運にもヘドロのヴィランに襲われそうになった出久だが幸運なことにオールマイトに助けられて話をすることができた。

『ああ、幸運だなあ。あのトップヒーローと話をすることができるとんて!』

ヴィランに襲われた後に訪れた幸運に感動する出久。

そんな出久に構うことなく、オールマイトはマイペースに話を進める。

「君のおかげさ、ありがとう!! 無事詰められた!」

炭酸飲料のペットボトルに詰め込まれたヘドロヴィランを見せるオールマイト。

出久は呆けた様子でそのペットボトルに触れる。

「へえ……さっきの奴がこの中に」

「おいおい、コラコラ! 触れちゃいかんよ、少年!」

「あ、すみません! 僕みたいなクズでのろまな人間が、オールマイトの邪魔をしちゃだめですよね」

「い、いや、そこまで卑屈になる必要はないが……分かってくれればそれでいいさ! じゃあ、私はこれを警察に届けるので! 液晶越しにまた会おう!!」

そう言つて飛び去るオールマイト。

だが、彼は知らない。

彼が触ったせいで、ペットボトルの蓋が不運にも緩んでしまつていたことを。

ヘドロのヴィランがペットボトルから脱出して中学生を人質にしてしまうことを……

爆炎が商店街を蹂躪して、ヘドロの塊がコンクリートを叩き割る。身体を乗っ取ろうとするヘドロヴィランに爆豪が必死の抵抗をすることで、商店街はその場のヒーローが手を出せない状況に陥つていた。

それを野次馬の中から見つめる出久の顔は――

『いいよ、かつちゃん。こんな状況でも諦めずにもがけるなんてすごいや。この絶望を切り抜ければより強い希望になれるはずだ!』

愉悦の笑みを浮かべていた。

より強い絶望を乗り越えることで、より希望を輝かせる。

そんな考えを持つている緑谷出久は、自身の行動のせいで逃してしまつたヴィランの凶行に後悔するどころか、歓喜の表情でそれを迎えていた。

彼はより強い希望ヒーローが好きだから、彼らに絶望ヴァイランを差し向けることに躊躇はないのだ。

「さあ、絶望を乗り越える様子を見せてよ、ヒーロー!!」

|||||

一年後。

「はい、これが雄英の……オールマイトが関わるカリキュラムだよ」

「確かに受け取りました、緑谷出久。しかし一般生徒がよく手に入れましたね」

「ゴミみみたいな個性だけど、僕にはこれしかないからさ。こういう時は幸運なのさ」

「しかし、目的が分かりませんね。何が目的なのです?」

黒い霧のかかった男からの質問に、出久は笑顔で告げる。

「僕はヒーローが大好きだから。だから彼らはこんな苦難を乗り越えて輝いてくれると信じてるんだよ」

## いづくラビット

世界総人口の約8割がなんらかの特異体質となった超人社会。

火を吹く個性や超パワー、爆破能力にサイキックなどなど、多種多様な能力を「個性」と呼び日常となった世界で。

緑谷出久という男の子の個性はなんともメルヘンで優しい個性だった。

「かつちゃん、おはよー」

「おつす、……って、また動物まみれだなイズク」

夏休みのある日の朝、一緒に遊びに行くために待ち合わせをしていた爆豪とその友人たちの元へ出久が遅れてやって来た。

その出久を見て爆豪が呆れたため息を吐く。

右肩にはハトが、左肩にはカラス、頭の上には雀が数匹。

足元には近所の野良猫がまとわりついており、歩くミニ動物園と化していた。

緑谷出久 4歳。

個性：「動物を惹きつける個性」

母親の物を引きつける個性が変化して遺伝し、動物を惹きつける個性となったもの。

動物に好かれるためモフリ放題だ。

ちなみに好かれ具合は、哺乳類＜鳥類＞爬虫類＜両生類＞魚類＝無脊椎動物の順で好かれやすい。

両生類あたりはほとんど効果は無く、魚類、無脊椎動物にはまったく効果がないぞ！

こうした光景はいつものことで、友人たちも一通り反応を返した後はすぐに遊びに行く話になった。

行き先は近所の森で、中を探検して回る予定だ。

子供だけで危ないと言われるかもしれないが、子供の好奇心というのはなかなか抑えられるものではない。

いつの時代も子供にとって大人に秘密の遊び場というのはあるも

のなのだ。

と、いうわけで、『バクゴーヒーロー事務所』の出発である。  
さてさて、誰も迷子にならねばいいのだけれど……。

「かつちゃんく、みんなく、どこにいったのく」

半分泣きべそになりながら森の中を歩く出久。

はつきり言えば、迷子である。

どんぐりの実を袋に入れて運ぶ青色と白色の不思議な生き物を見つけた出久は、それに気を取られているうちに爆豪たちとはぐれてしまったのだ。

不思議な生き物も姿を消し、一人森の中で心細くなる出久。

怖くなってしゃがみこんだところに、どこかで小さな鳴き声が聞こえた。

キューキュー と、小さな鳴き声。

その音を追ってみれば、深さ50cmほどの穴に落ちて出られなくなった子ウサギがいた。

「た、大変だ。大丈夫だよ、いま救ってあげるからね」

地面に這いつくばって子ウサギに手を伸ばす出久。

子ウサギも最初は警戒していたが、出久の個性もあってすぐにおとなしくなった。

幼い体で何とか引つ張り上げ、無事子ウサギを救出した。

「よかったね。もう穴に落ちちゃだめだよ？」

プウプウと嬉しそうに鼻を鳴らしている子ウサギを撫でながら言い聞かせていると、いつの間にか心細い気持ちもなくなった。

子ウサギに元気をもらった出久は立ち上がって帰り道を探そうとして――

「動物に好かれし人の子か……」

「ヒッ！」

化け物に出会った。

その姿はウサギのような、クマのような、猿のような、クジラのような、鳥のような、植物のような……様々な動物を組み合わせたよう

な化け物だった。

個性社会においても稀な異形の姿に恐れ慄く出久はとつさに子ウサギをかばうように抱きかかえて丸くなる。

そんな出久の姿に、化物は嬉しそうに声をあげた。

「良い、実に良い。動物たちから愛を受け、その身をもって愛を返す。実にすばらしい！」

「おまえならば、より多くの動物たちに愛を示してくれるかもしれない。」

「もし、そうならば、おまえは祝福するに足る。呪いではなく祝福を……」

動物たちに愛を、おまえに幸あれかし。

そう言つて化け物は出久に祝福を与えた。

この日から、出久は個性とはちよつと違った力を手に入れたのだ。

|||||

#### —— 雄英高校 ヒーロー科実技試験

ヴィラン代わりのロボットを倒していくという試験内容で、出久は街の中を跳び回っていた。

「てりゃー！」

掛け声と共にロボットを蹴り倒す出久。

その姿は、ウサギの獣人と言えるようなものになっていた。

頭から生えたウサ耳に首回りに毛皮。

腕も毛に覆われてフカフカである。

そして何より特徴的なのが、大きく発達したウサギのような脚だ。

幼いころに化け物と出会つて以来、出久はこのウサギの獣人に変身する能力を得たのだ。

この状態になると身体能力だけでなく嗅覚や聴覚なども強化され、まさに超人的な能力を使うことができるようになる。

特に発達した脚力をいかした高速移動がウリなのだが、今回の会場では同じくスピードを得意とする生徒がいた。

「くっ、今回は取られてしまったか。だが、次は負けないぞ！」

「こつちだつて！」



刈り上げのメガネをした生徒が出久と張り合うようにスピードを上げる。

移動系の個性を持つているらしい彼は、先ほどから出久とスピード勝負を繰り広げていた。

試験の間であるというのに、強力なライバルがいることに思わず笑みが浮かぶ二人。

だが、そんな彼らに水を差す存在が現れた。

「ムムツ、これはお邪魔ギミックか！」

「ゼゼゼ、ゼロポイントの!? デカイ!!」

建物を超える大きさのロボットが現れ、生徒たちはいつせいに逃走を開始する。

倒せると思えない巨大さに、そもそも倒しても意味をなさないとすれば当然逃げる。

だが、出久は偶然にも逃げ遅れた女の子がいることに気が付いた。足を瓦礫に挟まれて動けない女の子。このままだと、ロボットにやられてしまう。

そう思った瞬間には、身体が勝手に動いていた。

「脱兎の如く——ぶっ飛ばす！」

“RABBIT SMASH!”

飛び跳ねた勢いそのままにロボットに拳をぶつける。

巨大ロボットの装甲は大きな音を立ててへこみ、ゆっくりと倒れていく。

「つと、危ない。大丈夫？」

「え、うん。ありがと、つてうわあああ！」

地面に降り立ってすぐに倒れていた女の子を抱え上げて安全圏に脱出。

まさに言葉通り脱兎の如くであった。

こうして大活躍だった出久は、数日後、見事英雄高校のヒーロー科に合格したのだった。

~~~~~

緑谷 S スペック

野良猫たちと戯れること！

メンバーは猫好きの相澤先生と、普通科の心操、ヒーロー科の出久である。

放課後に個性の影響で野良猫たちに囲まれていた出久を血涙を流さんばかりに見つめていた二人と出会ったのが始まり。

いまでは、出久につられてやって来た猫たちを思いつきりモフリ尽くす毎日だ。

教師の威厳？　いまは放課後。職務は関係ない。いいね？

3. 食事の話

お昼休み。食堂でのこと。

出久の食事を見ていた麗日が何かに気が付いた。

「あれ？　緑谷くんって、野菜ばかりだよ。ベジタリアンなの？」
出久の食事を見て疑問を投げかける。

野菜サラダにご飯、わかめと豆腐の味噌汁、メインのおかずは焼いた厚揚げだったり。

「やっぱりウサギだから？　と、問いかける麗日に出久は苦笑いで返事をする。

「そういうわけじゃないよ。普通に肉も食べれるんだけど……気分的にね」

「む、好き嫌いは良くないぞ！　バランスの良い食事は体の資本だ」
飯田が注意をするが、出久は首を横に振る。

「好き嫌いというよりは僕もお肉は嫌いじゃないんだけど……ほら、僕って動物と話ができるでしょ？」

「それがいったい……あつ！」
「た、たしかに。それは食べづらいよね」

何かを察した飯田と麗日。
祝福で得た能力も良いことばかりとは限らないのだ。

身体的に問題はないのだろうが、心理的に半ベジタリアンになってしまった出久だった。

「小学生のころにさ、牧場へ行ったんだ。そしたら、子豚が『ボク、大

きくなったらどんなふうになるのかな』って、キラキラした目で話しかけてきてさ……」

「や、やめて。おかずの生姜焼きが食べられなくなるやん!!」

4. 空腹禁止

授業合間の休憩時間。

出久は携帯食のスティックバー（人参味）を口にしていた。

「緑谷くん、そうやってモキュモキュやってるとウサギっぽいよね」

「そ、そうかな。麗日さんも一本どうかな？」

「ありがとう！ そういえば、緑谷くんよくおやつ食べてるよね？」

「やっぱり栄養足りてないんじゃない？」

三食野菜メインではやっぱりおながが空くのではと心配する麗日に出久は手を振って否定した。

「そういうわけじゃないよ。ただ、空腹になるとちよつとまずいことになるだけでね」

「まずいことって？」

おながが減るとまずいとはどんな状況だろう？

ぜんぜん思い浮かばなくて首を傾げる麗日に出久が、昔の話だと語りだす。

「ちよつと帰るのが遅くなってね。夕飯の時間を過ぎちゃってつい呟いたんだよ。『おなが空いた』って。そしたら……」

「ど、どうなったの？」

「うん。ハトがどこからかライターを啜えて持ってきてね。枯草の上に寝そべってこつちを見るんだ……」

「さあ、私を食べなさいって。」

それ以来、うかつに空腹を訴えられなくなった出久。

動物からの好意がカンストすると、自己犠牲もいとわないう献身をしてくれます。

こんなことで悩むのはきつと立川のロン毛じゃない方だけであろう。

「どつちかというと、火に飛び込んで自分を食べてもらうのはウサギ

のほうだよね。フッフ」
「み、緑谷くん、落ち着いて！ あかん、目が死んでるう!？」

いづくDハート

人は生まれながらに平等ではない。

緑谷出久が物心ついた頃から感じている世界の現実だ。

生まれつき病弱で心臓に疾患を抱えた出久は、周囲の友人たちが夢を、ヒーローになると語る姿を諦観の笑みを浮かべて聞く毎日を過ごしてきた。

「本当に俺がいなきやダメだなデクは」

「ごめん、かつちゃん。迷惑かけてごめんね」

心臓のあたりを手で押さえながらうずくまる出久に、幼馴染の爆豪は手を差し伸べて助け起こす。

だが、その表情は、相手を思いやる気持ちよりも自分より格下の者を見下す優越感のほうが出ている。

『無個性で病弱な可哀想なデクに、恵まれた自分が慈悲を与えてやっている』

ハッキリと上下関係のついた歪な友情だが、出久もそんな扱いに抗議することなく、当然のように受け止めてひたすら謝罪の言葉を口にするばかり。

こんな関係を良しとしている理由は、出久が抱えた諦観・絶望だ。

「覚悟したほうがいいね」

幼い頃に医者に告げられたのは残酷な余命宣告だった。

心臓の疾患はやがて体を蝕み、成人を迎えることができるかどうか怪しいという。

これで「個性」を持っていたのならば夢を見ることもできたのだろう。

だが、彼は「無個性」だった。

力もなく、未来もない。

ただ定められた死に向かって生きるだけの諦めの人生だ。

しかし、運命は出久を見捨てなかった。

心臓のドナーが見つかったのだ。

超人社会となった現代では、各個人の身体、臓器ですら個性的にな

りすぎていて、以前よりもドナーが見つかりにくくなっている。そんな中で出久に合致するドナーが見つかったのは幸運としか言いようがない。

さらに幸運が続き、母親が買った宝くじが高額当選。

莫大な手術費用も用意することができた。

多くの幸運に助けられ、出久は手術を受ける。

「……先生、よろしくお願いします」

「大丈夫。君の運命は、俺が変える！」

手術は成功。

担当した医師の言葉の通り、健康な身体を手に入れた出久は自分の運命が大きく変わったのを感じた。

力強く脈打つ鼓動が、自分が生きていることを実感させてくれる。

歓喜の涙を流す出久が考えたことはこれからの自分の人生だった。

「僕が譲り受けた命。助けてもらった生命。無駄にしたくない。でも、どうしたら？」

閉ざされた未来が開き、前を向くことができるようになった出久にようやく自分の将来を考える余裕ができてきた。

といっても、「無個性」であることには変わりなく、ただ健康な身体を手に入れただけなので、どうすればいいのかなど見当もつかなかった。

そうして日々の生活を送りながら悩む毎日。

手術をしてから数カ月後に、出久は胸の痛みを覚えて病院へ運ばれることになった。

検査を受けた出久は医者から衝撃の事実を告げられる。

「出久くん。君に『個性』があるかもしれない」

移植元の人物の個性が心臓に宿っており、移植先の出久に影響を与えているのだという。

いずれは完全に個性が身体に馴染み、出久自身の個性として使えるようになるという。

紡いでもらった命。与えられた個性。

多くのモノを譲り受けた出久は、この命を有意義なものにするべく

決意する。

「僕は、ヒーローになる。ヒーローになって、多くの人を救うんだ。――僕が助けられたように」

|||||

国立雄英高校 ヒーロー科。

プロヒーローに必須の資格取得を目的とする全国同科中、最も人気で難しい最難関校だ。

偉大なヒーローを数多く輩出してきたこの高校の入試に、出久は今挑んでいる。

「マズイ！ 敵がどんどん減っていく……でも、まだ個性は使えない」
ヴィラン役のロボットを倒した数でポイントを稼ぐ実戦さながらの試験だ。

出久はまだポイントを一つも手にしていなかった。

少しずつ身体に馴染んできた個性だが、まだ十分と言えるほど自分のものにできていなかった。

焦りを隠せないなか、時間は過ぎていく。

残り時間二分を切ろうという頃、変化は突然訪れた。

建造物を破壊しながら生徒たちに迫る巨大ロボット――OPヴィラン。

存在感を示す圧倒的驚異に、生徒たちは踵を返して逃げ惑う。

当然の判断だ。

倒すメリットは一切なく、容易に倒せる存在ではない。

普通なら避けるべき存在に対して、出久は真っ向から立ち向かっていった。

その理由は単純明快だった。

「いったあ……」

そこに助けが必要な人がいたからだ。

瓦礫に足を挟まれて動けない少女に、OPヴィランがすぐ近くまで来ている。

それを目撃した出久は、気がつけば身体が勝手に動いていた。
個性を発動させて地面を強く蹴る。

次の瞬間に心臓が力強く脈打ち、血管を通して全身に力を行き渡らせた。

出久の身体に起こる変化、いや、変身。

「アアアア、ア、ア、ア！」

雄叫びというよりは、もはや咆哮のような叫びとともに、出久は飛び上がった勢いのままOPヴィランを一撃で粉砕した。

その姿に会場からは驚きの声があちこちから上がる。

「嘘だろ……マジかよ」

「あの姿、ドラゴンか!?!」

「いや、竜人、ドラゴニユートだ」

試験会場の生徒たちが指差す出久の姿は、かの伝説の生き物の姿によく似た特徴をそなえていた。

頭にはねじれた二本の角が伸びており、背と腰には竜の羽と尾が生えている。

そして、手足を始めとした身体のいたるところが鱗で覆われ、さながら人型のドラゴンのようだ。

まるで神話や伝承に出てくる竜人。ドラゴニユート

心臓に宿った個性を発動させることで竜人へと変身し、身体能力を爆発的に高める超強力な個性。

これが出久が譲り受けた個性「竜人 Switch on Dragon Heart 心器官」である。

瞬間的な力はN.O. 1ヒーローであるオールマイトにすら匹敵するだろう。

「うっ、ぐうううー!」

だが、強い個性には大きなデメリットがあるものだ。胸を押さえ、苦しみもがくように墜落していく出久。

まだ、彼の身体は個性になれきっておらず、短時間の発動でも負担が大きすぎるのだ。

このままでは墜落死する。

そんな彼を救けたのは先程救けた少女だった。

個性で空中へと浮かんできた彼女は、手で触れることで出久を浮かばせて地面へとゆっくり下ろすことに成功する。

「ごめん。助けに行っただはずが、助けられるなんて。迷惑をかけて本当にごめん」

「そんなに謝らないで。先に助けてもらったのは私の方だよ！」

謝る出久に首を横に振る少女。

ちやうどそこへ試験終了のアナウンスが流れた。

「あ、ごめん。僕のせいで君の時間がなくなってしまっ、ごめんなさい」

「だ、大丈夫だよ。気にしないで」

なおも謝り続ける出久に少女は苦笑いしてしまった。

彼女を救けたヒーローはとにかく腰の低いヒーローのようだ。

その後、看護教諭のリカバリーガールが現れ、出久は保健室へと運ばれていった。

「あ、名前聞くの忘れてたや」

出久が運ばれていったのを見送ったあと、思い出したように声を上げる。

救けてもらっておいて、お互い名前も知らないのだ。

「どうしよう……ううん、きつとまた会えるよね。きつとそうだ」

あとを追いかけることも考えたが、また会えるという予感がしてあとを追わなかった。

その予感は数ヶ月後、雄英高校のヒーロー科の教室で実現することになる。

たとえばこんな解説集

◎いづくヒロイン

出久が個性を持っていたら……という想像から始まったお話。
両親の個性をそのまま引き継いだ設定は誰か他の人が書くだろうと、ちよつと捻つてます。

「物を引きつける」の「引きつける」という言葉から連想ゲームで「人を惹きつける」個性に。

結果的に、ヤンデレ・ヤンホモが湧く個性になってしまった。

最初は戦闘能力皆無だったのに、とある武術の先生に弟子入りしてかなり強くなりました。というか、初見殺しすぎる。

【小ネタ解説】

「その3」

・真のヒロインは目で殺す ……f a t e / シリーズのインドの大英雄カルナより。「真の英雄は目で殺す」

目からビーム。

・胃はボドボドだ！ ……仮面ライダー剣より。ダディこと橘さんのセリフ、の、空耳。滑舌が!?

・射抜く恋神の魅了の眼！ ……FGOのステンノ・エウリユアレの必殺技をモデル。どちらかというステンノよりかな？ 技名はエウリユアレよりだけど。ウイנק一つで相手はダウン。

「その4」

・『我が流派は技十にして力は要らず』 ……「史上最強の弟子ケンイチ」に登場した柔術の流派、櫛灘流柔術の真髓を一言で表したモノ。力で相手の体勢を崩して投げるのではなく、相手の体勢すらテクニクで崩すというまさしく力を使わずに投げることをコンセプトにした柔術。ヒロインの出久とも相性がピッタリだと思ったので出しました。

結果、かなりの強さに……

「その5」

・瞬発力と持久力を兼ね備えた筋肉 ……筋肉には瞬発力を発揮す

る白筋と持久力を発揮する赤筋があり、そのどちらの特性もあるピンク筋があるという。出久くんは全身をピンク筋になるように人体改造……ゲフンゲフン、特訓したのです。

・甘いものに目がない師匠 ……「史上最強の弟子ケンイチ」に登場する櫛灘流の使い手の弟子。お子ちゃまの天才。

「その6」

・ナメてなんかいいえよ、バアカ ……アウトレイジのセリフより。「なめてなんかいいえよ、バカヤロー」

・こつから先は一方通行だ！ ……とあるシリーズの一方通行のセリフ。中の人ネタ。

・その他、史上最強の弟子ケンイチの武術ネタ多数。

◎いづく魔性 ヒロインと同じ個性の設定で、出久ちゃんにしてみたパラレル。

ヒロインを投稿にした際の感想に、『キ〇ラ』だとか『某快樂天』だとかのコメントがあつたので、その可能性を書いてみたくなつたので執筆。

結果、愉悦部が悦ぶ展開になりました。

個人的な考えですが、なんだか言って爆豪は出久に影響を与えているキャラだと思うので、方向性を決定づける一言は爆豪に言ってもらふことにしました。

上鳴くんについては、ただ単に利用されるだけのキャラにしてしまうと、上鳴くんに対するアンチになってしまうと思い、いつそのこと主役になつてもらおうと思ってあの扱いに。普段チャライキャラが一本芯の通つた言動をすとかっこいいと思うのですが僕だけですかね？

今後の展開は未定。

【小ネタ解説】

「その1」

・世春君 ……F G Oのコラボイベントにおいて、魔神柱でありながら、一人の人間に何もかも奪われて捨てられた残念魔神・ゼパルを

もじった名前。何十億と人間がいる中で、選んじやいけない人間を引き当てるというなんとも運のないやつ。みんなツツコミありがとう。

「その2」

・ミクモちゃん ……ヒロアカの草案時点での主人公の名前より。ある意味出久の前世の名前かも。今回は偽名として使用。

・上鳴電気の日記 ……無自覚な内通者って感じを出したくて、日記調にしてみました。気が付かないうちに重要な情報を話してしまっている上鳴くん。

「その3」

・残念でしたあー。あなた、騙されちゃったの！ ……コードギアスより。C・Cの前のコード保持者のセリフより。

・「知るはずないだろう！ そんな『当たり前』なんて！ 僕のことなんて何も知らないくせに、キミと僕を一緒にするな!!」

……FGOのCCCコラボイベントにおけるモデルとなったキララのセリフより。

「そう！ 知るものですか、そんな当たり前！ 私を、アナタたちと一緒にしないで！」

・うるさい、うるさいうるさいうるさい ……灼眼のシャナのシャナの照れ隠しのセリフより。本作では照れ隠しではないですが。

◎いづくラッキーシリーズ

ヒロインと同じく、母親の個性が変化して遺伝したら……という、ネタ。

『ラッキーボーイ』は、本当は超高校生級の幸運みたいにしたかったのに、気が付けば顔がとんがってるザワザワした世界みたいになった。

どうしてこうなった!?

『アンラッキー』は幸運な出久くんがいるなら不運な出久くんもいるはずだと思っただけ執筆。

個性の特性上、ほとんど無個性と変わらないのでアイテムを駆使して戦うキャラクターになりました。ヒロアカのもとになった堀越先

生の短編『僕のヒーロー』っぽくなった感じがします。

ある意味、出久くんが無個性のままヒーローを目指す（反強制）話なので、そういった話を求める需要もあったのかなあ、と、考えてみたり。

アイデア提供を結構頂いたので、ほんとにありがとうございます。使いきれなくて申し訳ない。

某学園都市のツンツン頭の高校生をリスペクトです。ヒロインに振り回されて苦労しているのも同じですね（笑）

戦闘訓練編が終わったので、次はUSJ編になるかと。

『L&UL』は、完全に超高校級の希望厨の彼がモデルです。あと類似的キャラで甘粕さんとやら。ぶっちゃけこっちはよく知らないのですが（汗）

感想にあつた、「悪い子というより厄介な子」という表現がぴったりのキャラに。

【小ネタ解説】

「ラツキーボーイ」

・どうやら切り札ジョーカーは……常に僕のところに来るようだよ……！

……仮面ライダーWの劇場版で、主人公の翔太郎が発したセリフよ。敵の能力で今まで使っていた変身アイテムが無効化される中、敵の手を逃れていた新型の変身アイテムを自分たちの拠点で見つけた際のセリフ。

「どうやら『切り札』は、常に俺ん所に来るようだぜ……！」

・視界がぐにやりと歪んだ ……福本伸行作品でよくある描写。たいてい大負けして絶望してるシーン。

「アンラツキー その1」

・「うわあああ！ ふ、不幸だあー!!」 ……某学園都市のうに頭の主人公のセリフ。

・「これじゃない、これじゃない…… ……ピンチのときのドラえ

もんのイメージ。

・キック力増強シューズ、時計型麻醉銃 ……名探偵コナンの定番アイテム。

・高性能AI内蔵の瞬時状況診断機能付き非殺傷銃 ……モデルは『PSYCHOPASS サイコパス』に登場するドミネーター。非殺傷から対人殺傷、対物破壊までできる恐ろしい銃。

「アンラッキー その2」

・ジエットコースターに乗ったら殺人事件に巻き込まれた

・偶然その場にいた高校生探偵

・黒づくめの男 ……名探偵コナン第一話より。デート先で当然

のように事件に合うとかある意味主人公体質だよな。

・嘘をついている数値ですね ……嘘をついている味だ！

・HAPPY BIRTHDAY! ……仮面ライダーオーズの

鴻上会長がモデル。

・我が社のロゴをつけたヒーローが活躍 ……タイバニ

「アンラッキー その3」

・商品名『T800タブレット』OSは『ジェニシス』、社名『CYBERDYNE』 ……未来から来たロボット兵器の映画がモデル。

・雷弾 ……クラッシュワイヤルの『ザップ』、会社名はクラッシュワイヤルを運営する会社『Supercell』より

・光子力研究所の『光子力バリアー』 ……マジンガーシリーズより

・『ミートスプレー』 ……ジョジョの奇妙な冒険第七部ステイルボールランより

・『東雲研究所』の『強力のり』 ……「日常」より

・『カイザフォン』『スマートブレイン社』 ……仮面ライダー5

55の仮面ライダーカイザより。

・『メロンディフェンダー』『ユグドラシル・コーポレーション』

- ……仮面ライダー鎧武の仮面ライダー斬月より。
- ・『GENERATION-3』〃S.I.C(Super Image
generative Company)〃 ……仮面ライダーアギト
(社名はライダー系のフィギュアを作られているSUPER IMAGE
GENERATIVE CHOGOKINから)
 - ・『(株)有澤』『HAND KNON』 ……ACシリーズの有澤重
工
 - ・重量は10kgを超えており、弾頭・弾殻・使用火薬も威力マシマ
シと人類には扱えそうにない代物 ……『HELLSING』の化
け物銃、ジャツカルより。そのあとの「パーフェクトだ」は有名なセ
リフ。
 - ・『全自動タマゴ割り機』〃Toshiba〃 ……「サザエさん」
より。
 - ・『プロトマイティアクションX』〃幻夢コーポレーション〃
……仮面ライダーエグゼイドより。
 - ・『会長の手作りケーキ』〃鴻上フアウンデーション〃 ……仮面
ライダーオーズより。鴻上会長モデル。
 - ・『レーザーピストル 正式名称AER9Laser Rifle』
〃ゼネラル・アトミックス社〃 ……『falloutシリーズ』よ
り
 - ・『ブッシュマスターACR』〃HCLI社〃 ……商品名はリア
ルにある銃。社名は『ヨルムンガンド』より。ウフーフ。
 - ・『槍(ビーチパラソル)』〃カルデア・コーポレーション〃 ……
『FGO』より。玉藻の前(水着)がモデル。
 - ・『ウエブ・シューター』〃オズコープ社〃 ……スパイダーマン
より。
 - ・『ユーティリティベルト』〃ウエイン・エンタープライズ〃
……バッドマンより。
 - ・『リパルサーレイ・ガントレット』〃スターク・インダストリー・
ジャパン〃 ……アイアンマンより。社長が手に付けてるあれで
す。

『救急スプレー』 『アンブレラ・コーポレーション』 ……バイ
オハザードより回復アイテム。健全な商品です。健全な商品です!!
『ジャイロスファイア』 『マスラニ社』 ……ジュラシツクワール
ドの丸い乗り物。ジュラシツクパークで乗り物はフラグである。

「アンラッキー その4」

・『黄金騎士スーツ』 『ガルム重工』 ……「牙狼―GAROの鎧」
より

・『ステルススーツmk II』 『X-13 研究施設』 ……『f
alloutシリーズ』より。

・『I, Ii be back…』とサムズアップして沈んでいく
機械の腕 ……『ターミネーター2』のラストシーンより。

・左手首からフックブレード ……『アサシンクリードII リベ
レーション』より。アサシンブレードの亜種。

・『シエンフェールド』 ……ブラック・ブレットより。

・『み、緑谷が死んだー!?』『この人でなしー!!』 ……型月のカー
ニバル・ファンタズムのネタより。「ランサーが死んだ!」「この人で
なしー!」

・鎮痛剤(アンブレラ社製)、色が緑色 ……バイオハザードより。
ゾンビ化させるT―ウィルスのサンプルが緑色。

・Izuku Must Die! ……「Devil May
Cry」シリーズの最高難易度より。「Dante Must D
ie!」

・Die Hard ……有名アクション映画より。主人公は最
も不運なタイミングで、最も不運な場所に居合わせる、最も不運な男
であり、簡単には死なない不死身の男。

◎いづくバトラー

心が折れてヒーローを目指さなかったら…というアイデアから
発想を広げ、気が付けば執事になっていた。

ちやうど『HELLSING』にハマって、ウォルターさんのかつ

こよさに惚れたのが理由と思われる。

調べてみると執事キャラって面白いの多いですね。

ヒロアカのお嬢様キャラの八百万さん付きの執事に。少年執事とお嬢様も鉄板キャラですな。

extraは悪堕ちを書かないとという気持ちをこじらせた結果です。今は反省してます。

今回はUSJ編。

現在、派生の『いづくメイド』執筆中。

◎いづくオンライン

ヒーローを指さないネタその2。

いろいろと殺伐とした世界のヒロアカで、平和な世界を書きたかったのでこうなりました。

ハーメルンでも500件以上あるヒロアカの二次創作で、オールマイトとAFOが仲良く飯食ってる作品はこれだけでしょう。

飯テロに餃子にしたのはなんとなく書きやすかったので。飯テロネタはまたやってもいいかなあと思ってます。

ヴィラン連合は、この世界では存在していない……というか、基本的に残念な人たちになっているので、原作での事件が丸々発生しません。

よって、原作はすでに崩壊しております……。この先どうしよう？

◎いづくキャット

記念すべき短編第二弾。さりげなく久しぶりの一人称視点でちよつと戸惑いながら書きました。

モデルは化物語シリーズの『障り猫』

冒頭のシーンだけ書いたものの、続きが思い浮かばなくて放置。需要はあると思うのですが……自分に西尾維新の世界観は難しいです
(泣)

◎いづく恋・愛・追・跡

母親でなく、父親の「火を吹く」個性を引き継いだ場合を考えてみました。

火を吹く個性で普通にヒーローを目指す作品は、他の人がやるだろうし面白くないと思ってひねりにひねった結果……某嘔吐き許さないストーリー系ヤンデレ美少女になってしまった。

酒で酔った挙句、ブレインストロミングもどきにとりあえずアイデアをメモっていったところ、残ったのが『緑の髪、火を吹く個性、ヤンデレ、美少女、幼馴染』というキーワード。

朝起きて、メモを見てどうしてこうなつたと頭を抱えた記憶があります。

とりあえず、ヤンデレキャラをつぎはぎした感じですね。

続き……需要はあるはず。

◎いづくラビット

母親個性変化ネタ。ついでに逢魔ヶ刻動物園ネタを入れてみました。同じ堀越先生の作品なので、相性は悪くないはずです。

★おにいさんネタを入れてみたら、反応してくれる人がいて良かったです。続きは今のところ何も考えてないですね。

◎いづくDハート

1/2以来の個性後付タイプの話。臓器移植を受けた結果、食事の好みが変わったり逆にアレルギーになったり、という話が現実世界であると聞いたので、臓器移植の結果個性も一緒に移植された……というネタです。

心臓をもらって力を得るのは、Fateのジークくんが元ネタです。ギャグに走ろうと思えばワンパンマンの『キングエンジン』も可能。

いや、書きませんが(笑)

移植ネタは不謹慎かなあ、と、思いつつも、今後いろいろと派生ができそうなので書いてみました。

誰か同じようなネタで作ってくれないかなーと、期待してみたり

(チラツ)

新連載予告 いづくK

世界総人口の約8割が何らかの特殊体質となった超人社会になってなお、人間の理解の及ばぬ怪奇、オカルトは存在していた。

心霊写真は度々話題に上がり、ポルターガイストや幽霊の目撃談はあとを絶たない。

学校には七不思議はあるし、新しい都市伝説は増えていく。

いつの世になつても無くならない「怪談」「怪奇」「怪異」……

緑谷出久はそんな「ありえないモノ」を惹きつける体質だった。

「さて、緑谷くん。君はどうやらこういった存在に好かれる質らしいね」

夕闇の公園で、アロハシャツを着た男が出久の前に立って話をしてる。

その足元で「白いナニカ」を押さえつけながら。

「僕はこういうやつら——「怪異」と僕らは呼んでるんだが——その専門家でね。だから一言忠告させてもらうとなんだが、君、このままだと死ぬよ?」

4歳で個性が発現した出久は、厄介な個性を宿していた。

母親の「物を引きつける」個性が変異して遺伝した結果、「ありえないモノを惹きつける」個性として発現したのだ。

以来、出久の周辺では怪奇現象が頻発し、周囲の人間は離れていった。

絶望している中現れたのが、怪異の専門家を名乗るこの男。

出久はこのままでは本人だけでなく周囲の人間も被害が出ると、この男に対処法を学びながら一緒に旅をすることになったのだった。

——10年後。中学生になった出久は相変わらず全国各地を転々としていた。

「緑谷出久です。諸事情により転校してきました。よろしく願います」

何度目になるか分からない転入の挨拶をする出久。

三重県、露座柳中学校。

そこで出久は「重さ」の無い少女、麗日お茶子と出会う。

「昔、個性が暴走してからずっと体重がないんだ」

『無重力』の個性を持つ彼女は困った様子で自分の身に起きた異変について話した。

いつからか自分を浮かせたままになり、医者にも原因が分からないという。

話を聞いていた出久は、しばらくブツブツとつぶやいて考察をした後、お茶子にこう投げかけた。

「ねえ、麗日さん。大きな化け蟹に出会ったことはある？」

↳ 『おちやこグラビティ』編↳

――静岡県 辺須瓶中学校

転校してきて数日。出久は、ずっと欠席しているクラスメイトがいることに気がつく。

そのことをクラスメイトに聞いてみると、

「耳郎さん？ 彼女、元々個性の関係で耳が良かったんだけど、急に聞こえすぎるようになったら怖いんだ。それでずっと休んでるよ」

事情を聞いた出久は何かを感じとったのか彼女をお見舞いする名目で訪れることにした。

「あんたが来てから音が酷かったんだけど、今は大丈夫。あんた何したの？」

出久が焚いた不思議な香の煙が満ちる部屋のなかで、件の少女、耳郎☒香が出久を見つめて問いかける。

出久は困ったように苦笑いしながら返事をした。

「ごめんね。昔からいろいろと惹きつける体質みたいで、集まってきたみたい」

「惹きつける？ 集まる？ あんたなんのことを言ってるの？」

出久の要領を得ない答えに怪訝そうな表情をする☒香。

その額には柔らかな角が生えていた。

「耳郎さんの身に起きている怪異の原因だよ。……ねえ、耳郎さん。聞こえすぎるようになる前に、静かなところ、たとえば冬山とかに行かなかった?」

↳ 『きょうかノイズ』編↳

怪異を惹きつける少年、緑谷出久。

これは、彼が不思議と出会う物語だ。

『いづく怪異ハンター』、近日連載開始!

いづくブレス

世界総人口の約8割が何らかの特異体質となった超人社会において、それらの特殊能力は「個性」と呼ばれ、当たり前のもので存在するようになっていく。

もはや社会の常識となったこの「個性」だが、世代を経るごとにだんだんと強力になっていく傾向があった。

親から子へと引き継がれる個性は両親のモノと混ざり合い、深化していく。

こうして世代を経ること強力になっていく個性は、いつか誰にもコントロールできなくなるのではないかという、「個性」「特異点」と呼ばれる終末論が起ころるほどだ。

日本のある少年、緑谷出久もまた親の個性を深化して引き継いだ新世代の一人である。

|||||

—— 雄英高校 グラウンド・β

本日はヒーロー科一年A組の初のヒーロー基礎学。それもいきなりの対人戦闘訓練だ。

ヒーロー側とヴィラン側に分かれて2対2で戦う形式のこの訓練。記念すべき最初の組み合わせは、ヒーロー側は切島・轟チーム。

そして、ヴィラン側は爆豪・緑谷チームであった。

「一緒のチームだね、かつちゃん」

「足引っ張んじゃねーぞ、出久」

爆豪に声をかける出久に、ぶっきらぼうに返事をする爆豪。

二人の様子に険悪な雰囲気はなく、むしろお互い勝手知ったるといった様子だ。

同じ中学出身どころか、幼いころから一緒にいた幼馴染だ。連携とといった部分では全く心配がなかった。

「で？ クソナードのためえのことだ。もういくつか策は考えてあんだろ？」

「うん！ それでなんだけど……」

防衛対象

核のある部屋で待機していた時に、爆豪が出久に作戦を尋ねる。

それに答えて出久が爆豪にそつと耳うちをした。

「ハッ、面白れエ！ 分かっているじゃねえか！」

「まあ、かつちゃんとは長い付き合いだし……好みの作戦くらいわかるよ」

出久の案を聞いて獰猛に笑う爆豪に、出久が苦笑いを浮かべる。作戦も決まったところで、訓練開始の時間が近づいていた。

戦闘訓練、開始。

始まって早々に建物全体が氷で覆われていた。

「うおおお！ 派手すぎんだろー！」

「向こうは防衛戦のつもりだろうが……俺には関係ない」

もはや勝ったと悠々と核の場所へ向かおうとする二人。

そんなヒーロー側の二人に、爆破の奇襲が襲い掛かった。

「死イね！」

「なっ、爆豪!? なんぞ!？」

硬化の個性を持つ切島がとっさに盾になりその場をしのぐものの、驚きを隠せない。

すぐさま轟は氷結で反撃するも、爆豪のいたさらに奥から向かってきた炎によって相殺されてしまった。

その正体に、轟はすぐに気が付いた。

「そうか。緑谷、おまえだな?」

「結構強めの火力だったんだけど、やっぱり相殺するので精一杯だ。最初の攻撃からわかっていただけ、凄いや、轟くん！」

口から比喩ではなく熱を帯びた息を吐きながら姿を現す出久。

先ほどの轟の攻撃を打ち消したのは出久の個性だったのだ。

防衛対象を無視して早期迎撃を選んだヴィランチーム。

攻撃的な爆豪の性格と、相手の個性との相性を考えた結果の作戦だったりする。

「うっせえ！ 敵の事誉めてる場合か、クソナード！ ちやつちやと、

やるぞー！」

「あ、ごめん！ それじゃ、打ち合わせ通りに！」

いつもの癖で個性の考察を始めようとする出久を一喝して戦闘を開始する爆豪。

切島に向かっていった爆豪に合わせるように出久も轟と相対する。

「ぶっ殺すー！」

「おりゃあー！ 効かねえぜ、そんな爆破！ もっとかかってこいよ」

「ハアアア、フウーッ！」

「そう簡単にやらせねえよ」

爆破を硬化で受け止め、氷結は炎の吐息が溶かしつくす。

お互いのチームの個性の相性が噛み合った結果、戦況は千日手と化していた。

このままでは、タイムアップで敗北が条件となるヒーローチームが不利だ。

焦る轟であったが、一步出遅れた。先に動いたのはヴィランチーム、いや、出久だ。

「かつちゃん、足元！」

「チツ、しくじんなよ！ 出久ウー！」

出久の掛け声に応え、爆破も利用して大きく飛び上がる爆豪。

それと同時に出久は大きく息を吸い込んで、個性を使う準備をしていた。

「大規模攻撃か？ 切島、こっちに！」

「おう！」

大火力による攻撃と判断した轟は切島を呼び寄せて目の前に大きく氷の塊を作り出して盾とする。

これならば炎が来てもしばらくは持つ。

そう判断した轟だったが、その予想は裏切られた。

出久が吐き出したのは、赤い炎ではなく、空気中の水分を凍らせて煌めく白い冷気だったのだから。

「くっそ、足が動かかねえ！ 最初の攻撃の意趣返しかよー！」

「火だけじゃなかったのか」

足元を氷で覆われて身動きが取れなくなるヒーローチームの二人。切島が声を上げる一方、轟は冷静にこの後のことを考えていた。

『俺の炎左を使えば何とかなる。だが……こんなところで使うわけには！』

『戦闘では炎左は使わない』

父親への反抗心からそう心に決めていた轟は、その誓いを破れば助かる状況に苦悩する。

まだ一番最初の戦闘訓練なのだ。

それで、さつそく誓いを破ることになつてはこの先やっていけるはずもない。

そう考えるものの、現実是非情だ。

確保テープを手に近づいてくる相手の姿を見て、敗北を意識してしまつた轟は……

「左から炎だど!? こいつ、能力隠してやがったのか!」

「やっぱり! エンデヴァアの息子だから考えていたけど、切り札として持っていたつてこと?」

全力でなかつたことに憤る爆豪と、考察を重ねる出久。

二人は驚きはしたものの、すぐさま戦闘態勢を整えた。

何せ、お互いの手札に冷気と炎熱があるのだ。状況はさらに拮抗していることとなる。

冷気を炎熱が。

炎の吐息を氷結が。

お互いがお互いの個性をぶつけあうことで、勝負はなかなかつきそうにない。

そうしている間に、仕掛けてきたのはまたも出久のほうであった。

大きく息を吸い込み、攻撃準備を整える。

『炎か? それとも冷気か? どっちでもいい、打ち消してやる』
両手を構え、攻撃に備える轟。

しかし、その覚悟はまたも裏切られることとなった。

「なんだ、このオレンジ……の」

「切島! クソツ! これ……はッ!」

警戒のしていたところへ吐き出されたのはオレンジがかった何か霧のようなもの。

切島が驚いて声を出そうとしたが、最後まで言葉を続けることができずに倒れ伏す。

『体が、焼け付くみてえだ。これは、麻痺毒!?!』

灼熱感とでもいうような焼け付く感覚と共に体に痺れを覚え、続けて轟も膝をついてしまった。

轟の察した通り、出久が吐き出したのは神経性の麻痺毒。

吸い込んだ瞬間から体に回り始め、身体の自由を奪っていく。

「これで、僕らの勝ちだ!」

口元に手を当てているせいでぐもった勝利宣言を聞きながら……轟も崩れ落ちる。

立っているのは出久ただ一人。ヴィランチームの勝利だった。

ん? 立っているのは一人?

「グゾナードオ……でめ、え、え!」

「あー! かつちゃん、ごめんん!」

さりげなく味方の爆豪が巻き込まれていたり。いや、ヴィランチームだからありなのか?

こうして、最初の戦闘訓練は終了したのであった。

個性『ブレス』

父親の『火を吐く個性』が深化して遺伝した個性。

口から吐き出せるのは火だけでなく、様々なものを『ブレス』として吐き出せる。

冷気に麻痺毒や催涙ガス、睡眠ガスなどなど。

頑張れば雷撃のブレスも吐き出せる……かも?

吐き出す範囲は肺活量に影響。個性の影響なのか、出久の肺活量はすごかったりする。(限定的な異形型?)

汎用性が高く、かつ高火力でヒーロー向きの個性。

小さいころから個性を鍛えるにあたって、爆豪に協力してもらっており、その影響で爆豪との関係が原作よりも大幅に改善されている。

オマケ『食事時には要注意』

雄英高校の食堂はいつも賑やかだ。

クックヒーロー「ランチラッシュ」による安価で栄養価の高いおいしい料理が食べられるのだから。

多くの雄英生が利用する食堂に、出久もまた昼食を摂りにきていた。

席を探していて、クラスメイトの姿を見つけたので声をかける。

「あ、飯田くん、麗日さん。席、一緒にいいかな？」

「いいよ！一緒に食べよ！」

「構わないが……緑谷くんは爆豪くんと一緒ではなかったのか？」

先ほど食堂に一緒に入ってくるのを見たのだが。

と、疑問を投げかける飯田に、出久は席に腰掛けながら返事をした。

「昔、いろいろあつてね。かっちゃんは僕と食事は一緒にしないんだ」

「えー！なんで？あんなに仲良さそうなのに」

「ふむ。差し支えなければ教えてくれないか？正直、俺も気になる」

「いいよ。隠すものでもないから」

二人の興味津々の目を向けられて、出久は箸を手に取りながら語り始めた。

それはまだ、個性が発現して間もないときのころの話だ。

出久は個性のコントロールが十分とは言えず、ふとした拍子に火を吹いてしまうことがあったという。

特に顕著だったのがモノを口に入れた時。つまり食事の時のことだ。

「かっちゃんって、辛い物が昔から好きでね。家のカレーライスも辛口だったんだよね」

「カレーは各家庭で味が違うものだからな」

出久の言葉にちょうどカレーライスを食べていた飯田が頷く。

思ったより辛口だったらしい。眉間にしわが寄っていた。

「それで家に遊びに行ったときに、お昼にカレーライスをごちそうになっただけ……家は甘口だったから慣れてなくて……口から火

を吐くほど辛かったんだ」

「それって、比喩じゃあ……ないんだよね？」

「うん。本当に火を吹いちゃったんだ」

麗日の言葉を肯定する出久。

その際に、正面に座っていたのは爆豪だったという。

危うく髪の毛をチリチリにされそうになった爆豪は、それ以来、出久と食事をしたがらなくなったのだとか。

「それ以外にも個性のコントロールができるようになるまでは結構大変だったよ。かき氷を食べれば吐息が冷気になるし、甘いものを食べたらなぜか眠気を誘う成分が吐息に含まれるようになるし……」

下手に味のついたものが食べられなくて大変だったと苦労を語る出久。

同じ甘い物でも、チョコレート時にはなぜか性的興奮を引き起こす成分が含まれた吐息になったりと、本当に大変だったらしい。

今はコントロールできるようになったので、食事の時の心配はないのだけれど、爆豪としては昔の苦い思い出があるために嫌でしょうがないとのこと。

まあ、気持ちにはよくわかる。

『緑谷くんが個性のコントロールができるようになっててよかった』
そうしみじみ思った二人であった。

いづくマジカル

人は生まれながらに平等ではない。

世界総人口の約8割がなんらかの特異体質となった超人社会において、何の特殊能力も持たない「無個性」として生まれた緑谷出久にとっては、4歳のころから突きつけられてきた現実だ。

「チクショー。何が現実が見えてないだよ」

愚痴を小さく呟きながら歩く放課後。

今日も出久はその厳しい現実を噛みしめていた。

中学校で行われた進路希望調査で、出久はクラスの笑いや者となったのだ。

希望先は、国内トップのヒーロー育成校「雄英高校」。

全国から優秀な成績、身体能力、そして強力な個性を持った生徒たちが集まるその入学試験は、倍率300倍という超難関だ。

そこに「無個性」の出久が挑むというのだから、周囲の反応はある意味当然だった。

そんなことは本人も承知の上でヒーローを目指しているのです、今さら何と言われたところでなのだが、それでも気分はよくはない。

少しふてくされた気持ちになった出久は、真っ直ぐ帰る気になれず、寄り道をして帰ることにしたのだった。

それが運命を大きく変えることになるとも知らずに……

「ブツ殺死ねー！」

「野蛮ね。消え失せなさい！」

巖のような大男の拳を宙に飛んで回避するフードを被った女性。

反撃に掌に魔法陣のようなものを浮かべ、それをダガーのように変形させて相手に投げつける。

『と、とんでもない場面に出くわしちゃったーッ!?!』

人気のない裏路地。

出久は陰からその様子を見守っていた。

普段ならば通らないであろう、治安のよくない裏路地を、つい投げやりな気分を通ろうと思ったのが出久の不運だった。

不幸中の幸いで、とつさに身をひそめることに成功したものの、動くことができずに震えて見ていることしかできない。

出久が恐怖に震えている間にも、戦闘は激しくなっていく。

大男が腕を巨大化させて殴り掛かれれば、女性は魔法陣の盾で受け流す。

即座に反撃とばかりに、両手を組み合わせた形から腕を広げるような動きをして魔法のワイヤーを作り出す。それを鞭のように振り回して大男の動きを奪っていく。

「雄オオ！」

「そこッ！」

相手の動きを封じた女性は、乾坤一擲に魔法陣を腕に展開して威力を上げた左フックで叩きのめすことに成功する。

壁にめり込む勢いで叩きつけられた大男は昏倒して動けない様子で、ようやく戦闘が終了した。

大きく息を吐いて魔法陣を消す女性。

「はあ、はあ、あの男の刺客か。かつての力は失ったと聞いたが、しつこいことこの上ないな」

心底疲れた様子で独り言ちる彼女は、戦闘の疲労感のせいで注意力が下がっていた。

だから、気が付くことができなかつたのだ。

出久が隠れて見ていることも、大男を倒し切れておらず、相手が最後の一撃を狙っていることも。

「危ない！」

「えっ？」

陰から飛び出してきた出久に驚き、そのまま突き飛ばされた彼女。

地面に倒れるまでの間に目にしたのは、自分の代わりに大男の指が変化した爪で腹部を貫かれる出久の姿だった。

「ゴフッ！」

「き、貴様アアア!!」

血を吐く出久を見て怒りを爆発させた女性は、一瞬で魔法陣を展開して大男をぶちのめす。

今度こそトドメだ。

だが、何もかも手遅れでもあった。

慌てて出久を抱え上げる女性だが、その表情は苦々しいものだった。

自分の一瞬の油断から無関係の人間を巻き込むことになってしまった。それも命を救われて。

後悔の念が押し寄せてくるが、それにかまけている場合ではない。

「大丈夫？　しっかり。どうして、私を庇ったりなど……」

「か、体が、勝手に動いて、ゴフツ！」

「もういい！　無理してしゃべらないで」

血を吐きながら答えた出久の言葉は、多くの偉大なヒーローたちが残した言葉と同じで。

そのことは彼女に出久を救わなければという気持ちにさせるのに十分な理由だった。

「このままではこの子は死んでしまう。回復魔法が不得手な私では対処が……考える、考える、考える。何か、方法があるはず。思いつけ、思い出せ！　どうする、どうする、どうする？」

出久を救うため必死に考えを巡らせる彼女。

高速で回転する彼女の脳内で、数巡して答えが見つかる。

「これしかない。でも……いいえ、迷っている暇はないわ！」

導き出した答えに、しばし逡巡するも覚悟を決めて魔法を、いや、儀式をとり行う。

その結果、出久の命を救うことには成功したのだった。
とある代償を払って……

|||||

「う、うう……」

硬いコンクリの地面の感覚で目を覚ました出久。

暫く焦点の合わない目で中空を見つめていたが、先ほどの事を思い出してハツと体を起こす。

「た、確か僕、お腹を貫かれて……傷が治ってる？ でも、服は破れたままだから、さっきのは夢じゃない。傷を治す個性でもあったのかな？ あの女の人はヒーロー？ だけど、あんなヒーロー僕は知らないし、だいたいヒーローなら僕をここに置いていくのはおかしいし——」

「あら？ 目を覚ましたみたいね」

「はいいい!?!」

ブツブツといつもの癖で考察を始めた出久だったが、先ほどの女性に声をかけられて驚愕の声を上げる。

その様子に苦笑しながらも、女性は出久の対面に座り込んで話しかけてきた。

「いろいろ聞きたいことがあるでしょうけれど、まずは謝らせて。あなたを巻き込んでしまつてごめんさい。そして、救けてくれてありがとう」

「い、いえ。あの、僕の傷を治してくれたのはあなたですか？ というか、何者ですか？」

謝罪と感謝を告げる女性に、出久は首を振って返事をする。そして、先ほどから疑問に思っていたことを尋ねた。

傷が治っていることや彼女が何者なのか？ そして先ほどの大男との関係は？

矢継ぎ早に投げかける質問に、女性は一つずつ、順番に答えていく。「それらの質問に答えるには、まずは私という存在について話さなければいけないわね。長くなる話だからよく聞いてちょうだい」

ことの起こりは「超常黎明期」に遡る。

次々と生まれてくる「異能」「特異体質」の一つとして生まれたソレは、魔法陣を使った魔法のような個性だった。

汎用性に優れ、おおよそ万能といってもよいほど強力な個性だった、それは必然、力を欲する人間から狙われることとなる。

それもただ強力なだけではない、特別な特徴を持っていたことも

あつて、殊更、その当時の巨悪と言つていい悪人に目を付けられることとなる。

その特徴とは、すなわち、『他人に引き継ぐことができる』。そんな特徴があつたのだ。

強力な能力を求めてやって来る悪人たちと戦い、そして密かに次代へと引き継いで来た歴史を持つ個性。

その当代の継承者がこの女性であり、それを狙つてやってきた刺客が先ほどの大男だというのだ。

「なるほど！ そんな個性があつたなんて。それで、僕を治してくれたのもその個性の力ですか？」

「ある意味は。説明すると、この個性は引き継がれる度に新しい能力が追加されたりするのだけれど、どの魔法が得意になるかはその引き継いだ人の素質や才能、適性が関わってくるの。」

で、私は回復や治療魔法が苦手で、あの重傷はどうしようも出来なかつた」

「え、じゃあ、どうやって？」

出久からの質問に、女性は一度気まずそうに顔を逸らした後、意を決して話を始める。

「さつき、個性を引き継ぐことができると話をしたわよね？ 実は、個性を引き継ぐ際に、一度体が作り替わる過程があるの。それを利用してあなたの傷を治したわ」

「ということとは……え、それって!？」

彼女の言葉からとある事実思い至り、目を見開いて驚く出久。

そんな彼に、女性は頷いて答えた。

「そうよ。あなたには、今、個性が引き継がれているの」

「僕に、個性が……ッ！」

14年間もの人生を「無個性」として過ごしてきた出久にとって、自分が個性を持っているということはひどく感動する出来事であつた。

興奮から動悸が早くなり、それを押さえるように胸に手を当てる。

その瞬間、異変を自覚した。

ただし、極めて物理的に、であったが。

「ん？　ンンン？　え？　あれ？　まさか、これって!？」

触るたびにタプタプと揺れる胸。

男子の硬く平らな胸板ではなく、柔らかな曲線を描くこの胸は……。

「あ、あの、これはいったい?」

「えっと、あの、その……ね?」

半ばショックで涙目になりながら女性に問いかける。

その問いかける声もいつもよりも高い声をしていることに気が付いて、さらにショックを受ける。

気まずそうに女性が事実を告げる。

「その、あなたが受け継いだ個性の名前んだけど……『魔女』って言うの」

「マッ!?　ジョ!？」

だから、あなた女の子になったちゃったの。ごめんさい。

と、告げられるが、出久が受け入れられるかは別問題だったり。

「ちや、ちゃんと個性が使いこなせるようになるまでフォローするから!」

などと言われても問題はそういうことではなく。

「女の子としての常識とかも、私が責任をもって教えてあげるから心配しないで!」

その心配よりも、そもそもその部分で言いたいことがあるわけで。

「親御さんへの説明や学校の心配はしなくてもいいわ。親御さんにはしっかり私が説明するし、行政とか、そういう伝手もちゃんと受け継いでいるの!」

ああ、違うんだ。違うんだよ。欲しい言葉はそんなことじゃない。

「大丈夫、君は立派な魔法少女なれるわ!!」

ヒーローにはなりたいたいけれど、そうじゃない、そうじゃないんだ。

なりたいたいのは日曜朝に活躍しているヒーローみたいなヒーローだけれど、時間帯が違うんだ!

緑谷出久。君は、魔法少女ヒロイになれる!

「い、嫌だああ!!」

オマケ 没ネタ・小ネタ

その1 『世界観が違います』

引き継がれてきた「魔女」の個性の歴史について、女性が語る。

「物質世界をオールマイトをはじめとするヒーローたちが守ってきた。そして私たち「魔女」は別の次元を守って——」

「マスター、世界観が!?!」

ヒロアカはマールヴェラスでハリウッドな世界ではありません。

……そのうち、ハリウッドには仲間入りかもだけど。

その2 『断固拒否』

謎の白い生物が赤い瞳をこちらに向けて言う。

「僕と契約して魔法少女になってよ」

「絶対、嫌だ!!」

帰ってくれ。そう言うしかなかった。

その3 『魔法のステッキ!』

出久の師匠となった女性が、魔法の補助としてアイテムをくれるという。

それは魔法のステッキと呼ばれている魔法少女御用達のアイテムであった。

五芒星が中にある羽の生えた円から持ち手が伸びた、いかにもなデザインにゲンナリしながらも手に取る出久。

「おや? あなたが私のマスターですか?」

「いや、しゃべった!?!」

いきなり話し始めたステッキに腰を抜かす出久。

そんな様子に構うことなく、ステッキはペラペラとおしゃべりを続けていた。

「フムフム。元男の子とは思えないほど魔法少女MS力が高いですねー。これが男の娘ってやつですかー。いや、最近はやりのTSですかね?」

ネット小説とかでランキングに乗ってそうな。まあ、私の好みとしてはもう少し年齢が低い方がいいんですけど、ここは我慢しましょう！ というわけで、よろしくお願いしますねー、マスター」
「チエ、チエンジで！」

いづく戦争

(作者がネタを思いつくたびに) どんどん増えていく緑谷出久。
増えすぎた作品群世界線を見て剪定を行うことが決定された。

選ばれたのは8つの世界線。

そのうち最も優れた1つが連載化され、最も劣った1つが削除される過酷なサバイバル。

選ばれた緑谷出久たちは、生き残りを賭けて互いに争い合う運命を強いられたのだ。

彼らにはそれぞれ、パートナーに英霊をサーヴァントとして従えてマスターとして戦うことが許された。

そう、これは確固たる個を勝ち取るための独立戦争。すなわち「いづく戦争」である。

……頭の悪いネーミング？ 気にするな、自覚はある。

『第一の出久』 “メイド” / セイバー シュバリエ・デオン

「僕はお仕える側だから、マスターなんて言われて戸惑ってしまいましたけど……同じメイドさんで良かったです！」

「セイバー、シュバリエ・デオン。白百合の騎士として君を……なんだこれは!？」
オ・ラ・ヴァアツシユ

最優のサーヴァントたるセイバーを引き当てたのは、間違った方向に進化を遂げた “トンドエモ” メイドの出久。

召喚に応えたのはフランス王家に仕える白百合の騎士。彼とも彼女ともつかないその人は——なぜかメイドの姿をしていた！

ダブルメイドコンビ、参戦！

『第二の出久』 “バトラー” / アーチャー バトラー エミヤ

「シェフ・エミヤ!? な、なぜ!？」

「サーヴァント・アーチャー。召喚に応じ参上し……待て、クラスが変わっているだ！ エクストラクラス、しかも “バトラー”!? なんできー！」

ハチャメチャな師匠たちによってパーフェクトバトラーとなった出久。だが、彼も予想は出来なかつただろう。自分の師匠の一人と同位体のサーヴァントを呼びよせることになろうとは。

召喚されたのは、生前に世界と契約し死後「抑止の守護者」となった英霊。本来はアーチャーのクラスのはずが、何の因果か「バトラー」というエクストラクラスにて現界している。

「実力も相性も良いだろう二人だが、どうしてこうなった？」

『第三の出久』 “アンラツキー” / ランサー クー・フリーリン

「し、死ぬかと思つた！」

「俺が言うのもなんだが、マスター。おまえさん、どんだけ運がないんだよ……」

“不運”というデメリットしかない個性を持つて生まれた結果、鉄火場を潜り抜けるような毎日を過ごしている出久。

数いる出久たちの中でも戦いという場において最も慣れており、勘の働く出久だ。

そして、呼ばれたのはケルト神話の大英雄クー・フリーリン。百戦錬磨の戦士は生き抜くことにかけて右に出るものはいない！

「実力は確かな主従。だが、漂う不穏な感じは何故だ!？」

『第四の出久』 “ヒロイン” / ライダー アストルフオ

「生き残りを賭けたサバイバル……僕の魅了でメロメロにしたら勝ちつてことにならないかな？」

「マスターは面白いこと考えるね！ いいよいいよー。僕、そういうの大好きだ！」

全方位に魅了をまき散らす個性を持った出久。その特殊な生い立ちからか、どこか発想がぶっ飛んでいることが多いのだが。

そして、召喚されたのは、シャルルマーニユの騎士が一人アストルフオ。多くの宝具を譲り受けた逸話を持ち多彩な一面を持つ英霊だ。理性は蒸発しているが。

見た目の性別が不明。行動力が予想外の方向へ向かっていく。

そんなお騒がせコンビが、この戦争をどう動かすのか？ どんな結果を残すのか？

確実なのは爆豪への胃のダメージだけだ！

『第五の出久』 “功夫” / アサシン 李書文

「師父！ ご指導よろしくお願い致します!!」

「カカツ！ 若いのになかなか鍛えられた功夫だ。だが、経験が足りんなー！」

怪しい老人から買った武術書一冊を頼りに努力を重ね、武術の達人と化した出久。数ある無個性の出久の世界線でありながら、その戦闘能力はトップクラスに位置する。

その力は努力の結晶？ それとも秘められた才能が開花した結果だろうか？

そんな武の縁をたどってか、召喚されたのは近代に名を馳せた中国武術の達人、李書文。その拳、まさに二の打ち要らず。

近接最強コンビ、いざ推参！

『第六の出久』 “オンライン” / キャスター ハンス・クリスチャン・アンデルセン

「サバイバル？ 戦争？ あの、すみません。納期があるので辞退したいんですけど……」

「おい、止めろ。締め切りの話なんぞするな、社畜少年。おまえの現実逃避に俺を巻き込むな。現実世界が気に入らんからと全くの別世界を作り出そうとするバカだけあって休むということを知らんらしいな」

ヒーローを目指さず、別の可能性を目指した出久。彼の創作したもう一つの世界^Rは現実の世界すらも影響を与えている。

そんな世界の創造主の横に立つのは、厭世的な童話作家の英霊、ハンス・クリスチャン・アンデルセン。彼は、出久の人生を書き上げていく。

戦闘力は皆無。しかしその可能性は未知数。クリエイターコンビ

！

『第七の出久』 『恋愛追跡』／バーサーカー 清姫

「愛しい人と結ばれる。これは運命で決まっていることだよね？」

「そうですとも！ その運命の人を決して逃してはいけませんよ、マスター。決して、決して……」

もう、アナタしか見えません。純愛系ヤンデレ少女、緑谷出久。スベックは他と比べて高くないはずなのに、危険度はピカイチだ。

恋する乙女の臭いを嗅ぎつけて召喚されたのは、これまたヤンデレ英霊バーサーカー清姫。

相性ピッタリどころか、姉妹じゃないのかと問いたくなるくらいに通っている二人が主従となつて他の出久たちの前に立ちはだかる。

燃えるような恋をしている？ いいえ、(相手を)燃やすような恋をしています。

『第八の出久』 『魔性』／アルターエゴ 殺生院キアラ

「すごいすごい。みいんな、僕の掌の上。ああ、何て愉しいんだろう！」

「有情無情の区別なく味わい尽くす。それが私共の本性。もつともつと！ 群がる彼らで気持ちよくなりましょう」

彼女が生み出された原因は些細な一言から。その世界線に誕生した悪^{ヴァイラン} 『魔性天女』。それが緑谷出久だ。

他者を魅了する個性で他人を支配し、利用する。そのことに何の罪悪感も持っていない外道^{ヴァイラン}、悪辣^{ヴァイラン}、人^{ヴァイラン}でなし。

だからだろう。彼女の呼び出しに応えたのは、当然また悪であった。

知性を持つ者を溶かし喰らう人類悪。獣の一片。呼び出されたのはそんなサーヴァントだった。

美しいからと不用意に近づくな。餌食^{ゼパ}にされるぞ！

こうして集まった八組の主従たち。

彼らの生き残りを賭けた戦いが、いま、始まる!!

勝敗は明確だ。

読者の人気を最も集めた世界線が勝者だ。

「続きが読みたい!」

「この世界線が好きだ!」

「連載化、してほしいなあ」

そんな思いを最も集めた世界線が栄光を掴み、最も求められなかった世界線が消え去る。

要は需要が高いところが勝つ。それだけだ。

期限は、投稿されたその日いっぱいまでだ。

諸君らの奮起を期待する。

………ん? サーヴァントの組み合わせを決めた意味?

そんなものはない!!

単にこの出久にはこのサーヴァントって言ったかっただけなんだ。

皆、好き勝手組み合わせ考えてくれて結構!

投票結果に影響はでないからね! (オイ)

いづく戦争 結果発表

結果発表

今回のエイプリルフル企画『いづく戦争』。

1位連載化とか最下位削除とかは嘘の企画だったんですが、思った以上にみなさん投票してくれてありがたいやら恐れ多いやら……

みなさま、ありがとうございます！

総有効投票数 124票！

複数票入れてくれた方や期限の4月1日を過ぎてしまった方の分は、申し訳ないですがカウントしておりません。

それでは、結果をどうぞ！

第8位『いづく魔性』3票

残念ながら最下位になってしまった魔性。

悪役、先天性女体化出久であるなど、確かに人によっては好みが分かれそうです。

ただ、「ゼパられるから、投票やめた」というコメントもあったので本当はもつと票が伸びたかも？

これは負けたのはキアラのせいだね。

第7位『いづくヒロイン』4票

最近更新していなかったこともあつてか、なかなか票が伸びなかったようです。

忘れてるわけではないのでいつかまた続きを出したいところなのです。

第6位『いづく恋愛追跡』5票

コメントに今回組ませた清姫との相性が受けたところもあった様子。

個人的には気に入っている作品だったりします。話は作りづらいますが……

第5位『いづくメイド』9票

ちょうど一年前くらいに初投稿したシリーズ。

バトラーの派生だったので、本家には一歩及ばず。

続きを書くとしたら、がつつり轟君と絡めてラブコメさせるかなあ？

同率第3位『いづくバトラ』12票

無個性系出久で最初に出した作品。

トンデモ師匠たちの人気もあつてか、結構反響が良かった思い出があります。

原作の展開を否定するわけではないですが、無個性のまままでヒーロー目指す出久を見たいという需要は確かにあるようですね。

無効票になつてしまいました。メイドと一緒に票を入れている人もいたのでサーヴァンツもありそう。

同率第3位『いづくアンラッキー』12票

個性があるけどあまり恵まれてない出久ですが、なかなかの健闘でした。

数ある作品群で唯一の彼女もちというリア充も得票に影響した……かも？

第2位『いづく功夫』16票

自分がカンフーハッスルが好きでなんとなく書いた作品だったのですが、思った以上に人気がありました。

というか、カンフーハッスルってだいぶ前の作品なのにみなさん反応してくれてうれしかった思い出が。

第1位『いづくオンライン』63票

2位と圧倒的大差をつけて堂々の1位。

出久がヒーローを目指さず、オールマイイトとAFOが仲がよい、弔がニートで廃人ゲーマーという異色の作品ですね。

特にオールマイイトとAFOによるVR世界でのメシテロはコアなファンがいるような気がします。

世界観の自由度が高いので、作者としてもネタが書きやすい作品だったりします。

以上、今回のエイプリルフルフルネタ企画でした。

削除、連載化は嘘ですが、1位になったオンラインは近日中に新ネタ投下予定です。

一部を除いてとことんまで平和になったオンライン時空。気になる轟家のお話です。

お楽しみに。

それでは、皆様、ありがとうございました。

オマケ 本当にいづく戦争が起きたら？

1. バトラー&メイド・恋愛追跡・功夫vsアンラッキー

“不運を引き寄せる個性”というマイナスにしか働かない個性を持つってしまった出久。

彼の個性はこの戦争でも遺憾なく発揮され、彼を追い詰めている。

「ギャアアア！ 熱ウ!?!」

「おい、マスター大丈夫か！ ちい、しつこいぞ。この嬢ちゃんたち

「よくもかっちゃんを……逃がさない!」

「フツツ。ストーキング!」

迫る炎からランサーに危機一髪助けられた“アンラッキー”。

追いかけるのはバーサーカーと“恋愛追跡”のコンビだ。

開戦した理由は、数分前のこと。

いつもの不運を発動した“アンラッキー”は、“恋愛追跡”世界の爆豪を怪我させてしまい、一緒にいた彼女をキレさせたのだ。

弁明をする暇もなく炎に追い立てられ逃げ惑う“アンラッキー”。

彼女の追跡能力はハンパではなく、グラップガンを使ったワイヤーによる縦移動すらも追いかけてくる始末。

状況を打開するべく、“アンラッキー”は新たにアイテムを手にする。

「これでしばらく目をそらしておければ……」

「マスター、それは?」

手にしてたのは筒状のピンが付いたアイテム。閃光弾。スタングレネード

しばらく視覚と聴覚を奪って逃げる時間を稼ごうという考えだ。作戦的には悪いものではないだろうが、そうはすんなりとうまくいかないのが彼の個性だったりする。

「あつ……」

不運にも投げようとした際に手からすっぽ抜けてあらぬ方向へ飛んでいく閃光弾。スタングレネード

意図せぬ方向へ投擲されたそれは、投げた本人の意図せぬ方向へ物事を押し進めていく。

「グツ！ まさか、こちらに気が付いてた!?!」

「カカツ。まだまだ未熟とはいえ曲がりなりにも『圏境』を見抜いてくるとは……相手もなかなか侮れないな」

偶然、閃光弾スタングレネードが落ちた先にいたのは気を周囲と同化して気配どころか姿すら消して様子を伺っていた「功夫」陣営のところだった。

期せずして、彼らの存在を明らかにした「アンラツキー」

己の存在を明かされた暗殺者がとる行動は限られている。

逃亡か、殺害だ。

そして、「功夫」が選ぶ選択は当然後者である。

「戦闘中にも関わらずこちらの隠形を見破る。そして、その身のこなし……なかなかの猛者だ。相手にとって不足なし!」

「言いがかりだよ!?! 好きこのんで鍛えられたわけじゃないんだけど!」

「功夫」から振るわれる高速の拳撃をとつさに愛用の特殊警棒で防御する「アンラツキー」。

だが、トップクラスの攻撃力を誇る「功夫」の攻撃をその程度の防御で防げるはずもなく防御ごと後方へ吹き飛ばされてしまった。

身に沁みついた受け身で地面を転がりダメージを逃がすものの、自身との戦闘力の差が事実として否応なく認識されて顔をゆがめる。

「接近戦はまずい。なら、これだ!」

格闘戦では勝てないと悟った「アンラツキー」は装備の中から射撃武器を選択した。

『ノイジー・クリケット』と名前の付いた掌に収まるほど小さな、まるでおもちゃのような銃を取り出す。

照準をさだめ、安全装置を外し、引き金に指をかけ発砲し……背後にまたぶっ飛んだ。

「痛ウ〜！ み、見た目に反してなんて威力なんだ！」

背中から打ち付けた自動車のフロントガラスから体を起こして、その過剰な威力をぼやく「アンラッキー」

顔を上げた彼は、その結果がもたらした惨状に顔を引きつらせる。

「とんだお茶会になってしまいました。どこの下郎の仕業でしょう？」

「大丈夫かい、マスター。怪我は……なさそうだね」

「奇襲を仕掛けられるとは、相手もなかなかやるようです」

「やれやれ。マスター、君の運も相当よくないようだな」

狙いが外れ、偶然吹き飛ばした建物の一室に居たのは同盟を結んだ「メイド」と「バトラー」の陣営だった。

純粋な戦闘能力でいえば「功夫」に劣るものの、それを補って余りある特殊技能を持った二人のいづく。

そんな彼らは、自身が奇襲を受けた（と思い込んでいる）事実から、それを引き起こした下手人に対して強い警戒心を抱く。

そう、「アンラッキー」の彼だ。

「おいマスター、生きてるか!? ……って、なんだなんだ？ 敵さんが増えてるじゃねえか」

「そ、そうしたくてやったわけじゃないんだよ！」

バーサーカーとの交戦をしながら殿をしていたランサーが合流するも、さらに悪くなっている状況に思わず呆れた顔をする。

敵からマスターを逃がすために戦っていたのに、合流してみればマスターが敵を呼び寄せているのだからそうもなる。

場には先ほどから対峙していた「功夫」。そして、即座に戦闘態勢に入った「メイド&バトラー」。

最後に「恋愛追跡」が追いついて、陣営が勢ぞろいしていた。

「追いかけてきてみれば邪魔者がたくさん……全部燃やしますー！」

「どんな相手だろうと、この拳で砕くのみ！」

「……サンタ・マリアの名に誓い、すべての不義に鉄槌を！」

「混戦？ 乱戦？ この程度、乗り越えられなくてどうします？」

それぞれの陣営がサーヴァントを引き連れ睨み合う。

その中でも最も警戒されているのが、この四つ巴に場を持ち込んだ（と思われている）「アンラッキー」。

4陣営から敵意を向けられた「アンラッキー」は大きいため息をついて嘆く。

「ハア……また不運か。仕方ない、少々飽きたけど付き合うしかないや」

そう言ってホルスターからテイザー銃を引き抜く。

彼の引き金を引いた音が戦闘開始の合図となった。

2. オンラインvs魔性

とあるオフィスビルの一部屋。

関係者以外立ち入り禁止のその部屋に、一組の妖艶な少女と女が足を踏み入れていた。

「さあ、もう逃げられないよ」

「おやおや、哀れな作家先生まで一緒にでしたか」

「魔性」の出久が従えるのは全てを快楽で溶かす『魔性菩薩』のサーヴァント。

そんな危険な二人に狙われたのは、「オンライン」の出久だ。

いづく戦争開始からずっと部屋に閉じこもったままだった彼の元へ、ビルのセキュリティを難なく超えてやってきたのだ。

「こいつは驚いた。まさかお前のようなどぶ川の毒婦のような人間がもう一人もいるとはな！」

「ずいぶんなおつしやりようですこと……三流サーヴァントのくせに」

部屋に入った途端、マスターを差し置いてサーヴァントどうしで睨み合いが発生する。

何か過去に因縁でもあったのだろうか？ と、両マスターは首を傾

げる中、二人の会話は続く。

「ハン！ 物書きに戦闘力など期待するな。肉体労働なんぞ断固拒否だ」

「ええ、そうでしょうね。だからこうして追い詰められているのでしょう？」

「色に狂って脳の中まで桃色になったらしいな、牛女」

生殺与奪を握ったつもりになっているアルターエゴをキャスターは馬鹿にしたように鼻で笑う。

そう。彼女たちは決定的に勘違いをしていた。

部屋まで追い込んだ？

否！ 彼女たちは敵の領域に足を踏み込んだのだ。

元来、キャスターというクラスは『陣地作成』のスキルを持っており、籠城戦に向いたクラスである。

その相手の拠点に不用意に足を踏み入れたのは慢心が過ぎると言えるだろう。

「陣地作成スキルですか？ フフツ、あなた程度の能力では私の脅威にはなりませんよ」

「同じことを言わせるな。物書きに何を期待してるのだ、おまえは」

だが、残念ながらこのキャスターの陣地作成スキルのランクはDランク。またその特性は敵を迎撃するような性質のものではない。

ならば何だ？ 彼の持つ手段は。

「物書きができることなど、一つしかあるまい」

「まさか!? そんな時間があるはずがありません！」

メルヒエン・マイネスレーベンス
貴方のための物語

キャスターの持つ宝具は、人物の理想の人生・在り方を一冊の本として書き上げることで発揮される自伝書の原稿だ。

対象を書かれた通りの姿にまで成長させることができるそれは、彼が原稿を進めるほど効果が高まり、完成すれば『最高の姿』にすらできる。

だが、執筆して最後まで書き上げるのは一朝一夕でできることではない。必然、多くの時間が必要となるはずだが……

そのことに思い当たったアルターエゴは、その点を指摘するもキャラクターに堪えた様子はなく。

むしろ皮肉気な笑みすら浮かべて悠々とのたまった。

「三日後の締め切りが三年後に延びる、作家にとつて天国地獄のような空間をこのマスターは用意してくれただけの話だ」

“オンライン”の出久が開発したVR空間での時間圧縮技術。

それを使えば、わずかな時間で膨大な量の執筆時間を確保することも可能なのだ。

リアルに精神と時の部屋を体感することになるとはな。

と、ぼやきながら目の前で最後の一節を書き上げるキヤスター。

瞬間、変化は劇的だった。

先ほどまで存在感のなかった“オンライン”の出久からの圧が強くなる。

生まれ変わるかのように存在が書き換えられ、その場を文字通り支配していく。

“オンライン”の出久の人生を一冊の本に書き上げたとして、その最高の姿とはいったいどんなものだろうか？

それは彼が生み出した世界の支配者・管理人に他ならないだろう。

彼を中心にその部屋概念が書ききされていく。

彼が創り出したもう一つの現実。彼の理想を叶える架空の現実。

ヴァーチャルリアリティの世界。

もはやこの部屋は彼の世界となった。

さあ、すべては自らの掌の上だと豪語する女よ。すでにおまえは彼の世界の、ただの住人の一人に過ぎない。

welcome to the world
彼の世界にようこそ！

「管理者権限、実行開始」

「そんな、私の存在が消されていく!?!」

「なんで? どうして? 僕の個性が効かない?」

“オンライン”の彼の一言でアルターエゴは存在を許されず消滅を待つのみ。“魔性”の彼女も個性を封じられてただの少女となった。

絶対権限を持つ彼の世界で、彼女たちは許されざる存在だ。
なぜなら……

「〃ヒロオン〃は全年齢ゲームなので、そういうのはちょっと……」
「おまえの存在自体がR18指定……だそうだ。まったく、健全な少年誌でやりすぎなんだ。貴様は」

「そんなの、そんなのってあんまりですわーっ!？」
敗因、存在自体が18禁だったから。
彼の作った世界は健全な世界なのであった。

3. ヒロインは？

——木椰子区ショッピングモールにて
「マスター、カツチャン。次はあっちに行ってみようよ」
「待ってってばライダー」

思いっきりショツピングを楽しんでいる〃ヒロイン〃陣営。
強引に連れていかれた〃ヒロイン〃時空の爆豪は……

「てめえら、こんな時にふざけんな！」
能天気な二人に胃を痛めていた。
もはや胃薬が主食である。

いづくDM（いづく功夫亜種）

人は生まれながらに平等ではない。

世界総人口の約8割が何らかの特異体質となった超人社会においては、その差異が顕著に表れるようになった。

“個性”と呼ばれる超常を持つ者と持たない者の間にはもちろん、個性を持つ者同士でも“没個性”や“強個性”といった格差が生まれている。

そう、個性とは多種多様。

それは時に本人ですら、扱いに困るモノも存在する。

緑谷出久もまた、そんな困った個性の持ち主であった。

“雄英高校 ヒーロー科”

手元の進路希望調査票に第一志望校を力強く書き込んだ爆豪は、そのまま第二志望校の欄を埋めることなくペンを置いた。

自他ともに認める才能の持ち主である爆豪にとって、自分の進路はここ以外考えられなかった。

周囲では学友たちがお互いの進路希望について相談というにはいささか騒がしく話し合っているが、唯我独尊を地で行く爆豪にとって自分以外の進路などどうでもいいことだ。

あとはさっさと担任に提出して終わりである。

たった一人、例外を除いて。

「うーん、どうしようか？　いろいろと将来のことを考えて行く高校を決めないよ。あと自分の学力に通うことを考えて場所。あと施設設備もチェックしないと。あ、オープンハイスクールの開催も調べておこう」

「おい、出久ア」

「あ、かっちゃん。どうしたの」

ブツブツと呟きながら進路志望先を悩んでいる幼馴染、緑谷出久の席に近づき声をかける。

爆豪が見れば出久の調査票は白紙のままであった。

「おい、てめえ何をぐだぐだと悩んでんだ？」

「え、でも、いろいろと選択肢はあるわけだし……」

「ああ？ てめえの行く高校なんざ一つだけだわ！」

「あ、ちよつと待って!？」

出久の手から調査票を奪い取った爆豪は、勝手に第一志望校の欄に乱暴に「雄英高校 ヒーロー科」と書き殴った。

そうして机に叩き付けるように返却。

書き込まれた内容を見て出久は引きつった笑みを浮かべるしかなかった。

「え、いやいや、無理だよ！」

「ふざけんなー！ どオいうつもりだ！」

弱気な発言をする出久を爆豪は睨みつけて威嚇する。

幼いころからなんでもできて、他者を寄せ付けないほどの才能を持っていた爆豪が認める数少ない人物が幼馴染の出久だ。

それゆえ自分と同じ土俵に立たせた上で、それを超えていくのが爆豪の望みなのである。

なのに、向こうがこちらを相手にしてくれないのでは話にならない。

「だって、僕の個性じゃヒーローは無理だよ」

「ああ!? なら、てめえの個性の詳細を教えろや！ じゃねえと納得できねえ！」

個性を理由に断る出久だが、爆豪は納得しない。できない。

なぜなら、爆豪は出久の個性の詳細を全く知らないのだ。

過去の出来事で強力な増強系の個性を持つていることは分かっている。しかし、逆を言えばそれ以外まったく分からなかった。

というのも、爆豪が出久が個性を使ったところを見たのはたったの一度だけだったのだから。

——爆豪、出久 5歳のころ

『まるで、オールマイトみてえだ』

恐怖からしりもちをついた情けない姿で、幼い爆豪は呆然と目の前の出来事をただ眺めていた。

遊びに行つたいつもの森で体調不良の出久の面倒を見るために友人たちを先に帰し一人残った時のことだ。

その時爆豪はとんでもない化物と遭遇した。

オオカミすら可愛く見えるような、熊のごとき巨体の化け犬。

それが自分の命を狙つてうなり声を上げながら迫ってくる姿を見たとき、爆豪は恐怖で動くことができなかつた。

いくら強力な個性を持つているとはいえいまだ幼児の域をでないのだから当然といえば当然だ。

そんな絶体絶命のピンチを救つたのは、幼馴染の出久だった。

顔は真っ赤で息は荒い。

そんな万全とは言えないコンディションで出久は化け犬と真正面からやり合つている。

「G a a a a !」

「たあああー!」

鋭い爪を弾き、迫りくる牙を砕く。

もちろんそこに技術などあるわけもなく、だからこそその力が際立っている。

個性によって強化された出久の力は圧倒的で、大ぶりのテレフォンパンチが直撃した化け犬はたやすく絶命してしまった。

自分では勝てないと思えるような相手を簡単に倒して見せる姿は、あこがれのヒーローであるオールマイトにも重なつて。

それ以来、爆豪は出久のことを一目置くようになったのだつた。

後日、いくらか年を重ねて当時であつた化け犬が、違法な実験で動物を強化する事件の逃げ出した一体だつたことがわかり、しかもそれはプロヒーローでも苦戦するものだつたと聞いた爆豪はより出久を認める気持ちが強くなつた。

にもかかわらず、それ以来出久は個性を使つたことはなく、ひたす

らに自分の個性を秘匿し続けたのだから爆豪としては納得がいかない。

何故、個性を使わないのか？

それとも使えない理由があるのか？

個性を使用するときには条件があるのか？

ひどいデメリットがあるのか？

e t c e t c ……

ことあるごとに問を投げかけても、出久は困ったように苦笑いをするだけで答えを言おうとしない。

たとえば他人から

「本当は無個性なのをぐまかしてるんだろ」

と、馬鹿にされても頑なに自分の個性の詳細を明かすことはなかった。

そのことは爆豪には耐え難いことなのだ。

|||||

そういうわけで今日も今日とて、個性について問い詰めるために出久が出かけて行った先に付きまとっていった爆豪。

訪れた地元のショッピングモールで不幸に巻き込まれることとなった。

具体的に言えば、ネームドヴィランとの遭遇である。

「ハッハッ！ ずいぶんと楽しませてくれたじゃねえか、クソガキ」
「ぐっ、クソガキ！」

強く体を打ち付けたせいでよく動けない体を奮い立たせる爆豪。

何とか立ち上がったものの足は震え、目もかすんでいる。

眼前に立つのは肥大化した異形の筋肉を持つネームドヴィラン。

過去にヒーローすらも殺害したことがある凶悪で危険で残酷なヴィランだ。

その名をマスクュラーという。

イラついたからという理由でチンピラを殺害し、そのまま暴れ始めたマスキュラーは駆けつけたヒーローたちすら戦闘不能にしてなお目立った傷もなく健在している。

いまだにヒーローたちの命があるのは、ひとえに爆豪の尽力によるものだった。

ヒーローが打倒され、まさに命を奪われんとしている場面を見て何もしないという選択肢は、ヒーローを強く志望する爆豪という人物にとって選ぶことができないことだ。

気が付けば勝手に体が動いていたといわんばかりに、自らの恵まれた個性と戦闘センスを使いこなしマスキュラーを翻弄すること15分。

なんの訓練もされていない一介の中学生が残した結果としては賞賛されてしかるべきことだろう。

しかし、そんな慰めは今の爆豪には何の価値もない。

このままでは殺されてしまう。

「おまえ！　かつちゃんから離れろ！」

爆豪がなかば覚悟した瞬間に、マスキュラーの腕に飛びつく人影があった。

普段は見せないような必死の形相でマスキュラーに掴みかかっている彼こそ、緑谷出久その人だ。

「あ？　邪魔すんじゃ、ねえよ！」

「うあああ!？」

出久の全力の妨害もマスキュラーにとっては煩わしいと思う程度のものでしかなく、あつけなく腕の一振りて宙を舞う。

空中では勢いを殺すことも出来ず、派手な音を立ててリカーシヨツプの棚にぶち当たった。

酒瓶の碎ける音がモールに響き渡った。

「い、出久！　おい、返事をしやがれ！」

「だ、大丈夫だよ。かつちゃん……大丈夫」

悲惨な様子に爆豪が思わず声を上げれば、ふらふらと立ち上がり返事をする出久の姿が目に入る。

割れたガラス瓶の破片で顔に切り傷を作ってはいるものの、一応は五体満足の様子。

が、安心はまだできない。

「ハツハツハツ！ 丈夫なガキだ。子供はそうでなくっちゃなあ」

「ツ！ てめ、どこへ行くこうとしてやがる！ 出久に手エ出すな！」

「やだよ。行くね、俄然」

まだ壊れていない出久おもちゃで遊ぼうと動きだすマスクュラー。

それに気が付いて注意を逸らそうとする爆豪だが、そう言われて素直に止まるような相手ではもちろんない。

徐々に近づいてくるマスクュラーの姿に、出久は迷いを振り払うように首を振る。

「最高のヒーローは、どんな凶悪なヴィランが相手でも笑顔で人を救けることができるヒーローなんだ」

「だからどうした？ てめえにそんな力はねえだろうが」

覚悟を決めるために自分に言い聞かせるように言葉を口にする出久。

そして落ちていた無事な酒瓶を拾い上げ封を切り、一気に飲み干した。

「うっ、ゲホ！ あゝあゝあゝあゝあゝ」

「あ？ 何やってんだこいつ」

「何やってんだ、馬鹿デク！」

アルコール度数の高い酒をそのまま一気飲みしたせいで喉が焼けるように感じて首元を押さええながら叫ぶ出久の常軌を逸した行動についてマスクュラーと爆豪の思考が一致する。

あんまりにも訳がわからなさすぎて、思わず出久をぶんなぐってしまったマスクュラーを誰が責められようか。

またもや派手にぶつ飛び、地面に倒れる出久。

足元をふらつかせながら立ち上がったものの、それはダメージからなのか、アルコールのせいなのか分からない。

「なんなんだ、このガキは。まあいいや、さっさと死ね」

もう出久の相手をするのが面倒くさくなったのだろう。マスクュ

ラーが拳を振り上げる。

強化された筋肉から放たれる一撃は出久を今度こそ殺して有り余る威力。

「ああー・やああああー！」

ソレを出久は腕ではじき返し、あまつさえ奇声を発しながら逆にマスキュラーを数発殴り返して見せたのだ。

「ぐああ、ふざけんなー！」

「うわああ」

マスキュラーもそのままサンドバッグになるわけもなく、反撃して出久を再び地面に転がす。

だが、その表情には先ほどまでの余裕は全くなかった。

『なんだこいつは。一撃一撃の重さがハンパじゃねえ。増強型の個性？ まさか!?!』

殴られた個所から感じる出久の強さ。

その力の元を瞬時に考察したマスキュラーはハッと出久へ顔を向けた。

出久が殴り飛ばされた先は先ほどのリカーショップのすぐそば。

そこには大量の酒瓶が転がっている。

「ははは、えっへっへっ」

「おまえ……まさか!?!」

前後に体を揺らしながら立つ出久。

アルコールで赤い顔をしながらへらへらと笑う彼の手には新しい瓶が握られていた。

蓋を開け、喉へ一気に酒を流し込んだ出久は——思いつき嘔吐した。

「オロロロ……うっぷ」

凶悪なヴィランの前で酒を一气飲みして吐く中学生。

言葉にすればカオスな状況に、マスキュラーは呆れを通り越して怒りが湧いてきた。

「こいつ、馬鹿にしてんのか。と。」

「さあ、いくぞー！」

「くっ！ ブツ殺してやる!!」

ニヤついた笑みが癩に障ると、本気で殴り掛かるマスキュラー。端的に言ってブチ切れていた彼は怒りのまま突進して、逆に出久にボコボコにされていた。

「やああああ！ やあやあやあ！」

「ぐっ、ぐあああ!」

気の抜けるような掛け声と共に繰り出される打撃は、マスキュラーの分厚い筋肉を貫いて体の芯までダメージを伝えてくる。

何度か殴り返すも、先ほどまで吹き飛んでいたのに今はわずかにのけぞるだけで怯む様子もない。

「てい！ へいや！」

「あああ!」

腕を掴まればその握力に骨が軋み悲鳴をあげさせられ。

「ちよわ、ちよわわー!」

「ガッ!? ふざけてんのか!」

足払いを躲したと思った瞬間にもらった低い位置からの頭突きで膝をつかされ、屈辱の声を洩らす。

「やああ、やあああああ!」

「う、ぎやあああ!」

酔っ払いの予測のつかない攻撃に翻弄され続けたマスキュラーは強力な一撃を受けついにノックダウン。

のちに駆けつけたヒーローと警察によってついにお縄になったのであった。

個性「ドラクママスター」

酔えば酔うほど強くなる増強型の個性。攻撃力・防御力ともにパワーアップされる強力な個性。

ただし、要アルコール。法律上、成人するまで個性が使えない。

アルコールの摂取量によって個性の強化が変動する。

お酒に強くなればなるほど強くなれるぞ!

そのため、個性強化訓練はひたすら酒を飲み続けるというヤバい絵面に……

気落ちした様子で警察署から出てくる出久。

それを出迎えた爆豪は、かける言葉が見つからなかった。

凶悪なヴィランを退治した事実は褒められたものの、危険な行為と個性の無断使用、そして未成年飲酒を叱られたのだ。（もちろん爆豪も未成年飲酒以外の事で叱られている。）

ヒーローも警察も自分たちの不甲斐なさが招いた事態でもあるのでそこまで強く叱ることもなかった——感謝しているし、誉めたい気持ちは強いものの建前上叱らざるをなかった——のだが、やはり落ち込まないわけもなく。

特に出久は自分の個性の問題点について改めて認識させられたのだ。

その事実を知った爆豪も何も言うことができない。

「ねえ、かつちゃん」

「……なんだよ」

帰路の途中で沈黙を破って出久が声をかける。

「お酒飲みながらでも、ヒーローになれるかな？」

「……………お、お酒は二十歳になってからだろうが」

無難な答えしか返せない爆豪であった。

最新話

いづくH/C

世界総人口の約八割が何らかの特異体質である超人社会。

かつては異能と呼ばれた超能力が「個性」と呼ばれ当たり前のも
のとなっている。

そんな千差万別、多種多様な個性が存在する社会においては、とき
おりどうしてこうなったのか分からないような個性が現れることも
あったり。

これは、世にも珍しい特性を持った個性を手に入れてしまった緑谷
出久の物語だ。

—— 雄英高校 グラウンド・β 屋内訓練用ビル

全国の数あるヒーロー科の頂点に位置する名門校に入学した出久
は、その最初の戦闘訓練でいきなり困難に直面していた。

「死ィねエ!!」

「うわああああ!!」

強烈な爆破に吹き飛ばされる出久。

戦闘訓練の相手は、幼馴染の爆豪勝己だ。

くじ引きによって決められた対戦カードだったが、出久にとっては
最悪の組み合わせになってしまっていた。

幼馴染だから手の内がバレているというのももちろんある。

だが、それ以上に——

「くっ、そォー！ フウー」

吹き飛ばされて体を打ち付けながらも、反撃とばかりに口から火を
吹く出久。

個性「炎熱放射」

口から炎や高温の吐息を出すことができる。

それが出久が父親の個性が深化して遺伝した結果発現した個性だ。

シンプルな炎熱系の個性だけに応用も利く良い個性なのだが、いかんせん相手が悪かった。

「ハッ！ そんなもン当たんねエよ！」
「ぐあっ」

狙いも定めずに放たれたおざなりな攻撃を容易く躲して出久に蹴りを入れる勝己。

強力な炎熱のプレスも、両手の爆破の個性を使った機動力で当たらなければどうということもない。

その事実には、出久は歯噛みしていた。

『やっぱりかっちゃんも僕の個性じゃ相性が悪い！』

勝己の個性「爆破」は掌の汗腺からニトロのような物質を爆破させるというもの。

その性質上、汗をかけばかくほど強力な爆破を行えるようになっていく。

つまり、出久が炎熱を吐き出せば吐き出すほど、勝己は発汗しやすくなり戦いやすくなっていくのだ。

このように相性の悪い個性を相手に出久がまだ戦えているのは、ひとえに勝己が出久をいたぶるような戦い方をしていることが大きい。

これは有利な状況ゆえの余裕の表れがないわけではないが、実のところ、彼個人の私怨によるものだったりする。

「火い吹くだけの没個性のクソナードが、俺の将来設計をズタボロにしてくれやがって……この落とし前はつけさせてもらうからなア！」

母校初の雄英高校進学者となること。

それが勝己の完璧な人生設計の一部になっていたらしいのだが、出久が同時に入学したことで早くも崩れ去ってしまっていた。

完璧主義者の勝己にとってこれは許しがたいことであり、その原因となった出久を戦闘訓練の場にかこつけて怒りをぶつけているのである。

人はこれを八つ当たりという。

「勝手なことと言わないでよ、かっちゃん！」

勝己の理不尽さに思わず文句が口に出るも、このままではジリ貧の

出久。

ここから逆転勝利を掴むためには、それなりの何かが必要だった。『やっぱり強いなかつちゃん！ 出し惜しみして勝てる相手じゃないのは分かってただろ……でも、できれば使いたくはないよ』
状況を一変させる切り札はあるものの、出久はその使用を躊躇していた。

それは使用すれば勝己の爆破を攻略することが可能となるものであったが、同時に出久に大事なものを失う覚悟を強いるものでもあった。

思い悩むも決断する時間はあまりない。どうする、出久？

『僕は……それでも勝ちたい！ かつちゃんは僕にとつて一番身近な凄いやつだ！ だから、勝つて超えてやりたいんだ!!』

勝利を願う一心で覚悟を決める。

彼は身に宿したもう一つの能力を使った。

「うっ、ぐううううー！」

「あ？ 何してやがる？」

勝己が攻勢に出ようと身を乗り出したとき、出久が突然身をよじり、声を上げて身悶えしはじめた。

様子のおかしさに足を止め、状況を観察することを決めた勝己だったが、次の瞬間に目の前で起きたことに驚愕することとなる。

「んっ、あっ、ああんー！」

艶めかしい嬌声をあげる出久。

いままで封印していた能力を使用したことで彼の肉体の変化引き起こされていた。

豊かに膨らんだ胸をはじめとした全体的に丸みを帯びた体つきに、繊細な印象を与える顔のパーツ。
体にフィットしているジャンプスーツによってはつきりとわかる女性の身体であった。

出久、女の子に大・変・身！

「……………は？」

その一部始終を目撃してしまった勝己は、あまりの現実に理解が追いつかず混乱して動きが止まってしまっていた。

まあ、幼馴染が目の前で女の子になったらそうもなろうというものの。むしろ、動揺してなかったらヤバいかもしれない。

理由はともあれ、勝己の動きが止まったこの瞬間こそ、出久にとって反撃のチャンス到来だ。

「スウー」

出久が大きく深呼吸をする。

炎熱を吐き出すときと同じ予備動作？

いいや、違う。予備動作などではなくすでに個性はその効果を発揮していた。

「寒イ!？」

急激に温度が低下し、驚きの声を漏らす勝己。

この現象は相対している幼馴染が自分の知らない能力を使って引き起こしたことに違いなく、持ち前の戦闘センスがそのままではマズいと警鐘を鳴らしている。

即座に退避の選択をするも、先ほどの驚愕で思考停止していたわずかな時間がすでに致命的な隙になってしまっていた。

「フウーッッ！」

大きく吸い込んだ息を吐き出す出久。

しかし、吐き出されたのは炎熱ではなく触れたものを凍てつかせる輝く吐息だった。

「クッ、ソがア!!」

爆破の個性で抵抗しようとする勝己だったが、急激に下げられた気温と強力な冷気のせいでも発汗量が減り、威力が激減。

出久の攻撃を防ぎきれずに直撃を受けてしまったのだった。

苛立たしげに悪態をつく勝己の手足には氷がまとわりついており、個性の使用も移動も阻害されてしまっている。

形勢逆転。一気に追い込まれた勝己。

当然、彼の才能と実力を知る出久はこの絶好の機会を逃さずに仕留

めにかかった。

走り寄って距離を詰めた出久は、その勢いのまま勝己に組み付き、その首筋に唇を落とす。

「なっ、てめ……エ」

予想外の出久の行動に怒声をあげようとした勝己だったが、見る見るうちに青ざめて何も言えなくなってしまった。

血の気の引いた顔に唇は紫色に変わっている。

手先の感覚がなくなり、身震いが止まらない。

明らかに低体温症の症状がみられた。

これが出久の個性のもう一つの側面、「熱吸収」の効果だった。

口を介して熱を吸収し体内に溜めておくことのできる個性で、周囲の気温を下げ、勝己の体温を奪ったのだ。

彼——今は彼女——が普段使っていた「炎熱放射」の個性はため込んだ熱を使っていたりする。

つまり、出久の個性の本質は「周囲の熱を自在にコントロールできる」個性だったというわけだ。

何はともあれ、男の子として大事な何かを失いながらも勝己に勝利した出久。

この戦闘訓練自体も建物全体を氷漬けにするという大技を使って見事勝って見せたのであった。

「デクくん、女の子になっとなる!?!」

「緑谷くん、君は女の子だったのか!?!」

「あ、ごめんね。すぐに元に戻るから……あつ、んっ!」

「「ええーっ!?!」」

氷漬けにした建物は男に戻った出久が責任を持って全部とこしました。

個性「炎熱放射／熱吸収」

口から熱を放出・吸収する個性。

吸収した熱は体内に溜めこんでおくことが可能だが、許容量を超え

ると体温が上昇し始めて危険な状態になってしまう。

逆に炎熱放射で熱を放出し続けても体温が下がって命の危険になる。

なお、熱の放出時は男に、吸収時は女に性別が変わる。

どちらの性別でも熱の放出・吸収は可能だが、極めて効率が悪くてほとんど使い物にならない。

個性の切り替えと性別の切り替えがリンクしているのか原因は不明。ホント、なんでだろうね？

口を介して個性を使うため、基本的に呼吸で熱の放出／吸収をコントロールするわけだが、直接口を接触させることで対象を温めたり冷やしたりすることが可能。

女の時の冷気を吐き出す技は実は応用技で、吸い込んだ空気の熱を体内で吸収してから吐き出すことで結果的に低温の吐息となっている。

個性の性質上、仲間として戦うなら男の時は勝己と相性がいい。逆に女の時は敵味方のどちらの立場でも相性が悪い。

その日の放課後。

初の個性を使った対人戦闘訓練の興奮が冷めやらず、教室で反省会をする流れになった。

各々、言いたいことや聞きたいことは多々あるわけだが、やはり気になっているのは出久の個性について。

世の中にはいろいろな個性があるわけだが、性別が入れ替わるというのはレア中のレアな珍しい個性だ。

誰もがその詳細を知りたがっているものの、問題は誰がその話題を持ちかけるのかということだ。

個性による性転換など、本人の性自認だとかコンプレックスだとかのセンシティブな部分に触れるかもしれないと考えると、怖くて質問しづらいわけで。

そういったものをまるっと無視して問いかけることができる人物

はこのクラスには一人しかいない。

「おい、クソデク！ てめえの個性はどうなってやがる!？」

『単刀直入きたああああ!!』

なんの前置きもなくいきなり本題に触れる勝己。

幼馴染ゆえの気兼ねのなさで自分にずつと秘密を隠していたという怒りもあつて、投げかける言葉は必然的にとげとげしいものになってしまった。

「俺に隠し事とはいい度胸だなア、デクウ……？」

「ひ、秘密にしたのはごめん。でも……」

謝罪の言葉を口にする出久だが、勝己の苛立ちはその程度でおさまるはずもなく。

「俺を騙して、さぞいい気分だったんだろうなア！ アアン!？」

「そ、そんなつもりじゃないよ！ 騙そうだなんて……」

「じゃあ、なんで個性のこと黙っていやがった!？」

自分に嘘の個性を教えて、手玉に取っていたのかと責める勝己。
度重なる詰問に出久もついにキレた。

「い、言えるわけないだろ、バカヤロー!!」

勝己にも負けない大声で怒鳴る出久。

そこからはもう怒涛の勢いだった。

「個性使おうとしたら女の子になるとか、僕が一番困惑してるよ! というか、仮に打ち明けてたとしてもかっちゃんに困るヤツじゃないか！ 急に男の幼馴染が女の子になるとか知らされてもどうしようもないだろ!! それで変な反応返されたら僕はどうすればいいんだよ!？」 僕のお母さんですら困惑して一時期家の中が大変だったんだよ? それを幼馴染とはいえ他人のかっちゃんに打ち明けるとかできるわけないよ! 打ち明けるにしたってどのタイミングでどういう風に言えばよかったのか分からなかったし!! そもそも自分の性自認もなんかよくわからなくなりそうでヤバかったんだからね? 下手に相談してたらかっちゃんの一言で僕の性別決まってた可能性だってあるんだよ!？」 そうなったらもうかっちゃんやんちの責任重大だよねエ! こんなことだから秘密にしておくしかなかったんじゃない

か!! ねえ、かつちゃん、僕、どうすれば良かったってんだよ!!」
出久、魂の叫びであった。

苦労したんだねえ。うん。

勝己どころかクラスメイト全員「何も言えねえ……」状態になったのであった。

『緑谷のやつ、そんな悩みを抱えてたのに冷やす個性を使うことを決めたのか……』

なお、似たような個性を持つ轟焦凍が興味を持ち始めたようです。

この先、どうなっていくんだ……

【いづくHeat／Cold】